

新時代の教育

第一篇 方針論

第一章 時代の要求と教育の方針

有史以來、稀有の飛躍をなしたる明治の聖世は、諒闇の中に一轉して、茲に大正の新時代は來りぬ。

明治の維新は、社會的第一維新なり、須く更に第二維新を精神上に遂げて、以て歴史は舊く、國命は新なる日東帝國の發興を全うせざるべからず。是れ吾人が夙に世の識者と共に唱道せし所なりしが、今や其の時は方に來れるなり。精神を集め心血を注ぎ各方面より改善濟美の努力を致し、其効を一にして以て之を國家に捧ぐるは、蓋し上 明治天皇の宏謨を繼戴し、今上陛下の聖明に答へ奉り、下國民の理想を實現し、維新の大業を完成し、以て國利民福を無窮に開く所以に外ならざるなり。

惟るに過去四十五年間の進歩は世界歴史上洵に稀有の成績なりと雖も、之を歐米諸國の現狀に比するに、尙未だ及ばざるもの少からず。加ふるに、明治の進歩は、主として知識上物質上政治上軍事上に屬し、未だ以て國民生活の全般に徹底し周匝して、其の精神的眞價を發揮し盡したるものとなす能はず。眞に國家を理想的に進め、其の固有の使命を果し、以て世界の文明に空前特異の新貢獻を致し、人類向上の一大段階を造るの任は、實に國民今後の努力に俟たざるべからず。此の意味に於て、明治時代は青年日本の準備學習時代なりきといふべく、壯年英氣眞に爲すあるの日は、之を大正の時代に期せざるべからず。九十里の道は百里に半ばす。而も明治時代の大飛躍も、未だ以て九十里にだに達せりと爲すを得ず。如何にして百里の道を行き盡して、帝國の眞價を完全に發揚すべきか、將た如何にして畜

に文明の大勢に後れざるのみならず、更に獨特の文化を世界に提供すべきか、其の大策を決定するは方に今日にあり。此の新時代の第一歩を誤らば、恐くは光輝ある明治の功業を一實に虧き、又永く日本帝國の使命に負き、進運を沮むの結果を見るに至らんも亦未だ知るべからず。果して然らば、今日は是れ帝國將來の隆替に關する大機にして、極言すれば、今方に將來の國命を決する危機に臨めるものといふべきなり。國民たるもの豈に儆醒發奮せざるべけんや。

新時代を導きて能く其の意義を發揮せしめ、新日本の使命を實現する所以の方策たる多々あらん。政治に、經濟に、宗教に、學術に、文藝美術に、考究し實行すべきもの限りなかるべしと雖も、中に就いて國民活動の根基を爲し精神を爲すものは、他なし、教育是れなり。蓋し教育は一國文化の源泉にして、思想を啓發し、人物を養成する根本事業なり。明治の進歩も、初めに先づ教育を振興したるに本づく。乃ち大正の第二維新も、亦等しく教育よりして其の端を開かざるべからず。吾人が自ら揣らず、精神的維新の本旨を尋ねて、茲に教育改善の計劃を立つる理由は實に是處に存す。

教育の改善を計劃するに當り、第一に攻究を要するものは、刻下の事情と將來の進運とに應ずる教育の方針是れなり。教育の目的は教育勅語既に之を普く闡國に諭して、炳乎日星の如しと雖も、是れ國民當行の軌範、教育の道德的典謨たり。時代の進轉に應じて、其の精神を實にし、其の意義を發揮し、以て事効を適切ならしむる所以に至りては、當事者常に其の攻究を新たにし、努力の目標を時々に定めざるべからず。是の故に、吾人は先づ教育者の立脚地より、國家の地位世界の趨勢に鑑み、今後の趨向を指導すべき教育の方針如何を尋ねんと欲す。

第二章 國家の體制上より見たる教育の方針

第一節 一般的見地

第一 國家的見地

凡そ獨立せる活動團體は、常に二方面の理想を有す、一は其の體制上の理想にして、一は其の活動上の理想是れなり。體制上の理想は完全なる統一的發達、有機的進化を遂げ、理想的體制を備ふる活動體となるにあり。活動上の理想は人道の究極に向つて最大有効なる活動を爲し、特殊團體としての使命を完うするにあり。但し此二者は考究の便宜上、一箇の事實を存在と活動との兩面より觀察したる差別にして、其内容實質に於て、相分つべからざるは、猶ほ團體其の物の一にして、二ならざるが如し。

完全なる統一的發達、有機的進化の極致とする所は、其の組織の細微に至るまで、徹底せる自覺的中心意識の統制を有して、脉絡貫通し、首尾照應し、組織の各員各機關總て相乖戾する所なく、相睽離する所なく、一箇の緊密なる精神的融合體を形つくり、各部の要求する所は即ち同時に中心の欲望する所たり、中心の欲望する所は、即ち各部の欣求する所にして、潑瀨たる自發的意志活動を包んで、渾然融和するもの即ち是れなり。國家は獨立せる活動團體として、最高の地位を占む。其の體制の、是の如き完全状態に達するを以て理想とするや、論を俟たざる所にして、國體乃至歴史の異同如何に關せざるなり。而して意識の統制を有する、自發的意志活動體は、即ち人格に外ならず。故に國家の體制上の普遍的理想は進化の極致に於て、完全なる人格體となるに在りといふべし。國家の理想の一面が既に完全なる人格體を具ふるに在りとすれば従つて、國家は此の理想を實現するが爲めに、各般の努力を盡さざるべからず。國家が國民に對して施行する教育は、即ち此の努力の根本手段たり。蓋し國家の實質は、單純なる地理的區劃に

もあらず、又無意義なる群衆にもあらずして、精神的に組織せられたる國民團體なり。國民各個の胸中國家意識とも名くべき共通の精神あり、全體を擧げて是に歸向して後、始めて權力と民衆と國土とは一に統べられ、茲に、完全なる國家の構成を見るべし。國家は固より獨立の存在なりと雖も、國民各個の精神を外にして、別處に孤立するもの非ず、従つて國家の完全なる進歩は、國民精神の完全なる發達に俟たざるべからず。されば國家の施行する教育事業は、此の國民精神の發達を援助し指導する所の方法を以て本旨と爲す。是れ實に一般的且つ窮極的なる國家教育永遠の目的たり。

是の故に、國家が國民に施行する教育事業の要素としては、第一、國家自ら柄乎たる至高理想に向つて精進し、全體をして、總て其精神に同化融合せしむる態度なかるべからず。第二、國民各箇をして、此の國家終極の理想精神を認識し、之を確信せしむる方法なかるべからず。第三、國民各箇の性格能力を涵養し、此の理想精神の實現に適合せしむる手段なかるべからず。第四、國家の各機關各個人をして、此の理想精神の實現に適當なる關係地位に立たしむる政策なかるべからず。中に就て、第一の要素は、主として國家の施政、行動の方針乃至態度に繋り、教育事業を包んで、之を温保する雰圍氣を作る。又第四の要素は主として、政治法制上の機務に繋り、教育の結果を有効に發揮せしむべき處理となす。共に重大なる價值を有する、缺くべからざる教育的要素なりと雖も、直接の教育事業には非ず。純粹教育事業として、教育者の直接に關與すべきものは、即ち第二、及第三の要素なりとす。

第二 個人的見地

國家は獨立せる一箇の生活體にして、従つて教育上に於ても其の獨自の位置を有せりと雖も、國家を組成する實質分子は各個人なるが故に、國家の完全なる存立發達を計るや、必ず之が組成分子たる各個國民に就いて顧慮し來ら

ざるべからず。即ち是故に國家教育と雖も、其の實際に於ては、個人教育の一要件たるに過ぎざることゝなるなり。

然り而して、國家が獨立の活動體なるが如く、個人も亦自己の生命を有し、判斷意志を有し、機關肢體を有し、云爲行動の自由を有する獨立の人格體たり。この人格體を完全に發達せしむることは、人格體其の者の必然の要求なり。されば此の要求を満足せしむることを以て、教育の重大なる要件となさざるべからず。個人にして、自ら十分に發達せんが爲に其の手段を行ふの自由なからんか、是れ既に獨立の人格たる趣旨を失ふものなり。即ち教育の自由といふことは、個人が生存の意義に伴ふ必然の權利なりといふも亦妨げず。更に個人が生活の狀態を考ふるに、個人は國家に依存して生活するを現在普通の狀態とすれど、之と同時に又國家以内にも、別箇の社會生活あり、家庭生活あり、國家以外に於ても、亦世界の一人類として、宇宙の一存在として、特殊の意義趣旨を有せざるに非ず。即ち一面國家生活を營むと共に、亦他面に於て、幾多別様の生活的意義なきに非ず。此等諸種の生活方面悉く相綜合して、以て茲に一個人の完全なる生活を爲し、性格を作る。是の故に、此等の生活の各方面に對し、各相等の準備的教育なかるべからず。若し其の一に偏して他を缺かば、恐らくは個人の圓滿完全なる發達を庶幾すること能はざるべし。

個人の發達は、他面に於て、實地の社會に於ける生活活動を豫想す。十分なる發達を要求するは、即ち實地に十分なる活動を爲さんが爲にして、又十分なる發達は十分なる活動によつて始めて之を見ることを得べし。然るに實地の活動に於ては、個人は各其の天賦の性能に従つて一定の傾向を有し、特殊の目的と態度様式とを有し、各自の適する所に於て、相異なる事業を營み、相異なる功績を擧ぐ。是の如く、各個人が其の天賦性能に向つて活動努力し、各特得の功績を擧ぐるは、個人としての独自の價値を發揮すると同時に、社會に新貢獻を爲し、文明を進むる一要素たることを得る所以にして、最も有効に人格力を發揮する方法なり。各個人若し各自の個性特色を發揮することなく、萬人一樣の範型を踏襲するに止まらば、人格は機械と一般なるものとなりて、社會文明は忽ち單調となり、遂に固定して一歩

も進むことなかるべきなり。

是に於て、個人的見地よりする教育の内容を概括すれば、第一に、獨立の人格としての完全なる發達を促すの趣旨なかるべからず。第二に、人類としての個人生活の各方面に應ずべき、あらゆる準備的要件を具へざるべからず。第三、各個人の要求を重んじ、自由に其の個性を發揮せしむる努力なかるべからず。第四、各個人をして、十分に特殊の才能を伸展せしめ、特色ある事効を實地に成就せしむる社會的準備なかるべからず。

人格の發達といひ特殊の事効といふは、是れ皆必然に社會國家を豫想するものにして、社會國家を離れては殆ど其の意を爲す能はず、其の價値を現はす能はず。此の點に於て、個人の教育は社會國家と密接不離の關係を有し來る。

第三 教育上の見地

暫く國家の藩籬を離れ、又個人の要求を別にし、教育事業其の物の全般よりして之を觀察すれば、國家的教育は教育の最も重要な部分には相違なきも、部分は即ち部分にして、其の全部に非ず。個人の要求に應ずる教育も亦然り。國家が國家として独自の價値を有するが如く、個人も亦個人として独自の生命を有し、而して且つ互に包容し、依存して生活す。従つて教育は國家をして最善の發達を爲さしむると共に、亦各個人をして最善の發達を爲さしむることを要す。而して各個人の最善の發達は、同時に又國家の爲に必要なり。蓋し、其の人格の發達不完全なる人民によりて成る國家は、其の制度組織にして如何に完備すとも、到底眞平健全偉大なる國家たるを得べからず。是の故に、教育事業は、國家教育以外に、更に個人の正當なる要求を満足せしむるに足る施設を備へ、各個人をして其の自然的發達を遂げしむるを要す。是れ豈に各個人のために必要なるのみならず、國家自體が其の健全なる發達を遂ぐるが爲めに必要なる手段なりとす。然るに國家教育は絶大なる權力の上に於て行はるゝがために、較もすれば、則ち教

育全部を國家的に偏傾せしめ、方法上にも過度の統一を強ひ、國民各個の發達をして不自由不十分なるに至らしむる弊なきに非ず。其の結果は、教育の内容平板單調となり、狭小貧弱となり、或は人心をして萎靡せしむるか、或は之に不平なるものをして、却て矯激ならしむるか、孰れにしても、其の中正健全なる發達を害するに至る。是れ實に社會をして不安ならしめ、個人をして不幸ならしめ、文明教化をして墮落頹廢せしむる原因の重大なるものゝ一にして、教育に於て、國家の要求と共に、特に常に個人的見地の顧慮を忘るべからざる所以なり。

要するに、統一と分化とは進歩の二大柱脚たり、兩者其の一を缺かば、文明は遂に壞廢すべし。即ち國家としての統一教育は、最も重要にして、人類生活の進歩、社會文明の發達と共に、將來益々其の價値を増加し來るものなるが故に、皮相より根本に遡り、形式より精神に入り、更に徹底的に之を行ふ事を要す。同時に國家的方面以外、各個人に要求に應じて、教育の各方面、各要素を複雑に且つ自由に開擴し、以て適切なる教育を受け、萬種の個性能力を十分に發達せしむる機會を均等に與へて、各個人をして、中正健全なる發達を遂げしむるの用意なかるべからず。

第二節 特殊の見地

第一 教育と我が國情國民性

國家の完全なる人格的進化は、體制上究竟の理想にして、孰れの國家にも通じて、普遍的に價値を有す。而も理想の内容實質の様式に至りては、國家を異にするに従つて、皆各々相異なるものあるべく、又此の理想に到達する進歩發展の方針に於ても、國情國民性を異にするに従つて、千差萬別なるべし。即ち國家の進歩は固有の國情國民性を超越して其の外に飛躍すべきに非ずして、固有の國情國民性の發達を通じてなさるべきもの、國情國民性の長所美點を明

にし、益々其の精髓を發揮し、更に之を醇化し、理想化し、以て終に究竟的完全の域に達せしむべきものなり。故に我が帝國の理想的進歩を計るに當りては、亦先づ國情國民性の特質を明にして、其の美點を助長し、缺點を除去し、且つ不足を補充し、以て漸次完全の状態に達せしむるの方法を求むるを要す。

我が帝國は日神以來連綿たる萬世一系の皇統を奉戴する家族的國家にして、皇祖の教旨に肇まり、皇宗列聖の威風と徳風とにより成就し、爾來二千五百有餘年、宇内に冠絶せる一大歴史を展開して、遂に今日聖代の隆昌を致せり。帝國に在りては、天皇は國家の元首たると同時に、民族宗家の族長家長たる地位に立たせ給ひ、天下の蒼生を單に國民としてのみならず、眞に族類子孫として撫育し給へば、萬民亦、天皇を民族の榮譽と幸福との源泉たる現身神として尊崇視附し奉り、時勢に隆替はありきと雖も、此の君臣相由相依の大道義に至りては、建國以來一日も渝らず。君臣の關係の是の如き特殊の信念と情誼とによりて極て緊密に結合融和したるによりて、其の間に疑問を挟み、批評を容るゝ寸毫の餘隙だも生じたるが如きは、未だ曾て之れ有らざる所なり。是れ他の國家が或は民衆の自由意志に基きて共和的に成立し、或は然らざるも、私意の爲に國家を顧みざる元首あり、輿論を起して容易く元首を代ふる民衆あると、全く其の比儔を異にする殊絶の特長と爲す。

我が建國の體制の是の如くなると共に、社會の組織も亦之に伴ひ、古より今に至り、個人を以て社會の單位とせずして、家を單位とし、而して其の「家」なる觀念は一種特別の重要なる意義を有せり。即ち家は家族たる各個人の自由意志によりて結合し建設したる團體に非ずして、祖先の意志によりて創始せられ、支持せらるゝ永遠の存續機關なり。單に家族各個人が道德的共同生活を營む機關に非ずして、之を祖先に承け、更に子孫に傳ふところの、斷つべからざる生活系統なり。家は永遠に祖先の靈魂の宿る所なるが故に、家をして斷絶せしめ、或は汚辱を被らしむるは最大の惡徳たり。家は主にして永遠のものなり。家族は從にして一時のものなり、故に家は其存續の爲に能く家族を

左右するを得れども、家族の生活の爲に家を左右することを得ず。社會に對して權利義務榮譽批判の責任主體となるものは即ち家にして、家族は此の家を構成し支持する要素たるに過ぎざるの地位に立てり。而して此の家の名義權能を代表し、祖先の意志を執行する人格は即ち家長是れなり。故に家長は家に於て獨裁の君主にして、内に在つては他の家族を保護養育する義務を有し、外に對しては家族に關する一切の責任を負擔す。是の如き家族制は、我が國家古來の體制と略々其の軌を同するものにして、我が國家の社會的基礎を成せり。

我が國體と家族制とが前述の如くなりしに従ひ、國民道德としては、忠君愛國の觀念に特殊の意義價值を有し、且つ他に比類なき高度の發達を爲し、社會道德としては、祖先を尊び骨肉緣類總て同一體の觀を爲して、相互に相倚り、相扶け、以て愛養慈育の道義心を發達せしめ、殊に子の德たる孝と婦の德なる貞とを以て、最大の道德と爲すに至れり。而して此の孝貞の德と忠君愛國の觀念と結合して、特に武士間に養はれたるを、所謂武士道の精神と爲す。此等の國民道德の特質を一言にして掩へば、則ち依地的犧牲的なりといふべく、封建制の發達と共に、此の一面の團體的道德も亦著しく發達するに至れり。

更に少しく帝國の地理的境遇を考ふるに、大陸に近く、群島洋中に基布し、土地狹小なるに、山嶽峻峭にして縱橫羅列し、河川概ね激湍急流にして、平野甚だ少し。然れども海岸線は長くして港灣多く、溫帶圈の中部に位するが故に、氣候溫和濕潤にして、草木善く繁茂し、果穀蔬菜豊に、生活安易なるを得たり。外國とは直接に境を連ねず、唯一の強大隣邦支那と雖も、海洋及び朝鮮を以て中間の緩衝帶となせる觀あるを以て、外力の壓迫擾亂を受けたること殆ど之れなく、國難と稱せる元寇すら、未だ我が本土に上陸せざるに先ちて覆没せり。諸種の文明は概ね皆外國より輸入せられたるものに繋れども、此れとても、國民の要求選擇の以上に出で、過度に流入したるが如きことなく、而も必要に應じて隨時之を輸入するの便を缺かず。殊に徳川時代に至りては、支那との交通は既に絶え、又漸く繁か

らんとせし西洋との交通をも斷絶して、只管内治に意を用ひたれば、封建の政治組織と共に、固有の國民文化は俄に發達し、獨立文明國の體面を爲すに至れり。是に依つて之を觀れば、外に向つて發展膨脹し、或は強烈著大なる刺撃影響を他に與へしこと少きと共に、又國家的艱難困苦を経験せざること我が國家の如きは稀なりといふべく、是の如き過去の境遇が、建國の當初に在せし國家の體制、社會の風習、國民の氣象の發達をして、平坦順正純粹健實ならしむるに適せしや、又言を要せざるなり。

前述の如き國民生活を實現し、又斯る境遇事情の下に養はれたる我が國民の素質と習性とは、略々之を推すことを得べし。今諸家の論ずる所を假り、吾人の見る所を加へて、其の特質を列舉するに、大要左の如きものあるに似たり。

第一、樂天的にして、現在的且つ實際的なり。第二、快活にして進取の氣象に富む。第三、仁俠にして義に勇む。第四、敵愾心に富み、攻撃に銳し。第五、潔白にして名譽を重んず。第六、敏慧にして、順應性に富む。第七、器用にして、改造脫化の才に富む。第八、洒脫にして、執著心少し。第九、上品にして、優しき情感を持つ。第十、君父縁類を愛すること厚し。第十一、恩義に感激し易し。第十二、趣味を愛し、特に天然に美感を有す。第十三、人格及び權利の觀念に乏し。第十四、責任の觀念に乏しく、信用を重んぜず。第十五、寛容ならず、共同一致に短なり。第十六、公衆道德を重んぜず、社交に短なり。第十七、依頼心多く獨立自治に短なり。第十八、合理的思索、冷靜なる打算に短なり。第十九、雄大深刻、強靱堅確の趣きに乏し。第二十、感情に動き、熱し易く、又冷め易し。

右の中、第一より第十二までは、之を長所として數ふべく、以下は短所として見るべきものなり。而して之を概括するに、多血質感情性にして、沒我的献身を理想とし、習慣による系統的團體生活を營み、現在實地の事に就き、短小急激に事功を成すを喜ぶ傾向あり。活動の主要動機が感情と實効との二者に在るは人類一般の通則なりと雖も、我

が國民に在りては、其の内容に宗教的哲學的社會的理想の要素を含むこと比較的に少きが如く、而して國民全體よりいへば、活動の様式は總て家族的集權的にして、公衆的共和的に非ず。一時に膨脹するよりも、永く連續するを欲し、他を征服するよりも、他に侵されざるを誇りとし、自由に飛躍するよりも、堅實にして罅隙を生ぜざるを喜ぶ趣きなきに非ず。

思ふに、前述の如き國民の風格は、過去の境遇に應じて、純粹なる統一的發達、有機的進化を爲すに最も適當なりしものにして、完美なる歴史と隆昌なる現狀とは、之を實證するものといふべく、國民亦是を以て誇りとなしつゝあるなり。然れども、今や時勢は著しく變化せり。我が國民的境遇亦決して昔日と同じからず。人口の増殖著しく、生存競争は日に劇烈に赴くと共に、知識普及の結果、個人意識は極て明瞭となり、大工業の勃興は漸次家庭生活の方式に變更を與へ、而して且つ世界の精神的物質的文明は潮の如く四方より流入し、國際交渉は年を逐ふて複雑に赴き、國家の活動は全然世界的となり來れり。是の如きの事象たる、我が國民の要求と選擇との所在如何に關せず、到底回避すべからざる世界的潮流にして、我が國家の將來は唯この世界的潮流に超乘して以て進むに在るのみ。退いて武陵桃源の昔夢を繰り返へすが如きは、大勢上到底許されざるの事に屬す。

是の如き時勢に應じ、國家將來の發展を計り、更に國家の進化をして完善完美の域に達せしめんと欲せば、唯其の自然の發達に放任するのみに止まるを得ず。必ずや國民自ら其の修養及び活動の方針を確立し、努力を是に集中せざるべからず。而して國民教育の方策を案配すべき根本の目標亦是にあるべきなり。

第二 帝國教育の原則

帝國の歴史が世界に於て特殊の淵源を有し、清瑠素練を展べたるが如き長流を爲すこと二千五百年にして、始て浩

蕩たる世界的海洋に注げり。明治時代は即ち其の江波海濤交錯の時代にして、古來養ひ來れる國民文化と精神とは、歐米の文明と相觸れて、忽ち茲に燦然たる光輝を發し、以て、彼の世界の民族をして、瞠目震駭せしめたる國民的大飛躍を爲し遂げぬ。是の如く、外に於ては、帝國をして渾一的世界史の一部たらしめたと同時に、又内に在りては、自覺ある全國民的國家たらしめたる點に於て、明治の聖世は實に帝國歷史上未曾有の一大新时期たるはいふまでもなく、其の一大新时期を畫したる記念的一線は即ち明治の初年にして、此の歲たるや、營に新时期の初頭として記憶すべきのみならず、此の新时代を經營する根本綱領たると共に、又帝國將來の活動努力を指導すべき大方針の高く掲揚せられたる事實によりて、永く國民の懷に忘れらるゝことなかるべし。根本の綱領、將來の大方針とは、即ち維新の箴言ともいふべき五條の御誓文にして、此の御誓文たる、實に 皇祖以來の聖旨に基き、三千年來涵養せられたる國民精神が、偶々世界的潮流に觸發せられ、國家的自覺に打開せられ、乃ち茲に燦然たる經綸の理想となして現はれたるものに外ならず。御誓文に曰く

一 廣く會議を興し萬機公論に決すべし。

一 上下心を一にし盛に經綸を行ふべし。

一 官武一途庶民に至るまで各其志を遂げ人心をして倦まざらしめん事を要す。

一 舊來の陋習を破り天地の公道に基くべし。

一 知識を世界に求め大に皇基を振起すべし。

と。素と是れ國家の經綸、國民活動の大方針なるが故に、従つて又國家教育に關する方策の出發點たるべきは言を俟たず。憲法の制定、自治制の採用、議會の開設、教育の振興、國際修交等、一に皆此の御誓文の理想を實現したるものに外ならず。

此の根本方針の宣布せられしより二十三年、其の主旨の略實現の緒に就きたるの時に當り、國民道德萬世の原典たるべき教育勅語の煥發を見たり。教育勅語に宣はする所は、實に我が歴史に實現せられたる國民性の美點の凝り結べる道德的精髓にして、各人當行の倫常たり、將た又將來國民性涵養の標準たるべきもの、時勢轉換の際に經過すべき必然の結果たる思想の混亂に襲はれ、紛々として適從するに惑ひし學校教育は、茲に始て其の歸趨たる大眼目を發見し、以て全國民教化の内容的統一を確實にするを得たり。

五條の御誓文に宣はする所は之れ我が國家經綸の方針なりと雖も、其の趣意を擴めて之を考ふるに、恐くは孰れの國家と雖も拒まざる理想なりといふべく、殊に天地の公道に基くといひ、庶民に至るまで各々其の志を遂げしむといふが如きは、是れ直に宇宙的將た人類の大公準を示すものにして、萬世に涉り、世界に通じて、不滅の價値を有す。教育勅語に示されたる道德の要旨も亦壹に我が日本國民のみならず、凡そ國民たる以上は、民族民情の如何を問はず、悉く奉行して悖る所なかるべき倫常となす。

帝國は既に此の國家の一般的究竟理想と一致する理想精神を有し、民衆の性格能力を涵養して眞に國民的たらしむる所以の標準を有し、更に又億兆心を一にして、世々厥の美を濟し來れる歴史を有す。眞に是れ國體の精華、帝國の教育者に對する特異の恩寵、無比の天賚といはざるべからず。此の民族的特色、歴史的傾向の上に立脚して、各個人を教養し、益々此の國家本來の理想實現に努力奮進し、以て帝國をして、完善完美なる人格的進化を遂げしむるは、實に帝國教育者の負荷せる大使命たらずんばあらず。

第三 大正教育の任務

明治の教育は此の國家的教育を閑却したるものに非ず。否其旨意に於て、形式に於て、寧ろ國家的教育に偏傾する

ものありしと同時に、其の内容乃至方法に於ては、當面の急務に迫はるゝが爲めに、順序上、知識的物質的教育に忙しく、未だ根本的精神方面に及ぶに違あらずして、時代は早く轉換したり。明治の教育は國家的見地よりして之を評するも、未だ以て完全と爲すべからず、況や之を個人的見地教育的見地よりするに於てをや。其の明治教育の及ぶ能はざりし處は、是れ即ち大正の教育の當に努力すべき所。明治教育は國家的教育を創め、能く舊來の陋習を破れり。更に人格教育を興し、天地の公道を積極的に國家に體現する事業に至りては、實に大正教育の任務とす。天地の公道とは根本生命の由つて以て發現する內的自律にして、完全なる人格は其の發現の型式なり。即ち箇體の體制に適用實現せらるゝ天地の公道は、完全なる人格的發達を遂ぐる事に外ならざるなり。國家も國民も共に活物なり、生生進化一刻も停滯すべからず。宇宙の眞相然り、世界の現狀然り、進歩にあらざれば、即ち退歩なり、沈淪なり、衰頹なり。故に我が皇の垂示に、舊來の陋習を破ると言ひ、人心をして倦まざらしむることを要すとあり。蓋し國家も個人も進歩已むことなかるべきを誨へ給へるものにして、帝國の教育は當に常に此の大趣旨に據るべきなり。

以上の旨意により、大正の新時代に於て、特に努力することを要する教育の主題を分ちて、重要なものを列擧せば、凡そ左の數項に歸すべし。

(イ) 人格主義の教育の振興

人格の觀念は一切の人的行動の歸著點にして、又一切の生活に價値を生ずる源泉たり。殊に道德は此の觀念の、直に行動云爲の態度に發露したるものに外ならず。故に道德を盛にし、生活を醇化し、人生社會を高尚に進めんと欲せば、先づ人格の觀念を明にし、其の深奥なる内容意義を體得せしめ、行動の根本たる最高信念を作らしむるより急るはなし。

吾人々類は實に天地の生命、宇宙の靈性の分化結成して生じたるものにして、其の精神は直に根本の生命に連な

る。人の尊貴なるは、實に此の無限の大生命の一顯現たるが爲なり。此の意義たる、覺識の有無を超えて、一切の生物に通じて普遍なるものなれども、人は自ら此の意義を識認し、更に意志を用ひて、特に之を明徴にし、其の價値を發揮せんと力むる點に於て、萬物中殊絶の地位を占む。是れ蓋し人類の人類たる所以の第一資格にして、此の資格を完備することは、之れ吾人が終生を通ずる修養の目標たる所、教育最後の歸著點たるべき所と爲す。

是の故に人格的教育の要點は、人類としての最高理想を尋ね、之を一切生活の上に體現するにあり。又之を逆に言へば、人の性格生活の全體を綜合し、渾一し、醇化して、以て至高理想、根本生命に歸向せしむるに在り。此の主義たる、實に個人の教化に於てのみならず、凡そ人格的意義を有する一切の社會團體の教化に於て、其の價値を保有すべきなり。

纏つて我が國風を顧るに、忠君愛國孝悌貞操の如き道德を重んずること極て厚きものあるにも關せず、之が根本たる人格の觀念に至つては、寧ろ薄弱なりといふべきが如し。人命よりも家名を重しと爲し、が如き、當事者の精意志如何よりも、家風家例を重しとして、容易く離婚を執行せしが如き、女子を以て男子の從屬物視する傾きありしが如き、權利義務責任等に對する獨立的判斷主張に乏しきが如き、概ね皆人格的觀念の薄弱なるに由來する所多し。是の如きは、將來の精神文明の進歩發達に對し、決して讚美すべきに非ず。今後に於て、特に人格的教育に努力を要する所以なりとす。

(口) 個人の發達に力むる事

個人の十分なる發達は實に個人其の人の爲に必要なのみならず、社會國家の進歩は個人の十分なる發達に依らずして之を庶幾する能はずとは既に述べたる所なり。各個人に何等の意義なく、價値なく、恰も木石の如く、機械的に生産したるものと考ふるは、人の到底満足する能はざる所にして、必ずや各自皆固有の使命職能を負ひて、而して生

を天地に享けたるものと解せざるを得ず。若し果して斯く解すべしとせば、其の各自固有の使命天職を遺憾なく盡すことを以て、個人が生活の第一義と爲さざるべからず、従つて教育も亦此の生活の第一義を實現せしむることを以て主要問題と爲さざるべからざるや明かなり。若し個人にして其の独自の使命職能を盡さず、無上の生を天地に享けながら、其の價値を發揮することなくんば、是れ個人たる自己の面目を没却し、生存の理由を無視するものにして、客觀的に之を批評すれば、至上至貴の天物を暴殄するものと言はざるべからず、天下の浪費、豈に此より大なるものあらんや。

又之を社會の實用上より考ふるに、今日の文明を致せる物質力機械力の價値は絶大なりと雖も、其の能く物質機械に價値を生ぜしめ、文明の要素たらしめたる所以の原力に至りては、是れ皆人の力より出でざるはなし。近世文明に於ける科學の影響も亦強大なりと雖も、其の科學は總て皆人の精神力の化成のみ。其の他軍備、政治、經濟、藝術、宗教等に關する一切の價値は悉く人によりて生れたるなり。概言すれば、文化といひ、富力といふ社會一切の價値の根元は、一に人力に歸す。人力の効果たる、又偉大なりと言はざるべからず。人力は實に汲めども涸ることなき無限の水源なり、採れども竭くることなき無盡の寶庫なり。是故に社會文明の諸要素諸原力を増加せんと欲すれば、教育によりて人物を培養し開發し、且つ此に良境遇を與へて、その活動を十分ならしむるに若くはなし。我が國の如き、土地狭く、物産乏しく、資本薄く、而して世界の舞臺に立ちて、富國強兵の先進諸國と發展を競はざるべからざる運命を有する國に於ては、殊に一に人力を啓發培養し、其の効果を偉大にして、以て他の缺乏を補ふの急務なるを見る。而して人力の効果を増大する方針は、第一に各人の精神を統一するに足る大目的大理想の下に衆力を綜合して、之を散亂せしめざるを必要とし、更に其の根本に於て、各個人の發達を自由に十分にし、而して之をして正當の道に進ましめ、其の人格力を浪費せしめざるにあり。教育上、各個人の品格及び特能の啓發を第一とする要點は是處

に存す。

我が國民が、或は摸倣に長じて、獨創的發明に短なるが如き、或は外人をして、國民としては讚美すべきも、個人としては信賴すべからずと評せしむるものあるが如きは、從來の教育が境遇と習慣とに順應することを主とし、個人獨自の發達の比較的輕視せられたるに依るもの少しと爲さず。此の將來の生存競争に緊切ならざる國民性の缺點を矯正し、獨立の文明を有する精神的獨立國民たる面目を掲揚せんには、殊に力を各個人の發達に傾注せざるべからざるなり。

(八) 自治的國民の養成

自治制は各個人と全體、或は個人主義と國家主義とを調和し、圓滿なる社會生活を營む最良の方法にして、各人をして各其の志を遂げしめ、上下心を一にして盛に經綸を行ふの道は、自治制の運用を健全巧妙ならしむるより急なるは無し。

我が國に憲法の制定せられ、地方の自治を以て政治の基本となし、より既に二十五年、其の間幾多の試練を経て、今や相當の成績を擧げつゝあるが如しと雖も、未だ以て完美と爲すべからざるのみならず、遺憾の點猶頗る多きは、識者の常に痛嘆せる所なり。是れ蓋し國民の多數が未だ自治の意義を解せず、其の方法の修練を缺けるが爲めにして、憲政自治の成績の不十分なるは、寧ろ當然の事に屬し、而して國民に對し、自治的教育を與ふるの急務なる所以は、即ち是處に存す。

且つ夫れ自治的訓練の必要なるは、獨り政治上に於てのみに非ず。國民の自治的觀念に乏しきが爲に、百般の事、一に唯官府の力を待ちて之を成さんとする依頼心あり。殊に最も民間の自立自動を要する實業の如きすら、只管政府の保護を受けんと欲し、成功せる大實業家と稱するもの、多くは何等か政府に關係を有し、陰に陽に其の庇蔭を受け

ざるなし。是の如くにして、如何んぞ眞に國民的勃興を望むことを得んや。

自治制の運用を健全巧妙ならしむるが爲には、之を組織する國民各個をして、憲政の精神、自治の意義方法を理解せしめ、之に習熟せしむると同時に、又自ら計量し、自ら判断し、自ら實行する自動的性格を備へしむるを要す。故に又自治的教育は、人格の尊嚴を認め、個性の價値を認むることを以て其の出發點と爲す。

明治の國民教育は大に普及したりといふと雖も、國民として須要の資格たる此の自治的識見能力を具備せしむる用意に至りては、決して十分なりと言ふべからず。是れ大正の教育に於て、特に努力を要する所以なり。

(二) 實業教育を盛にする事

經濟は生存活動の第一要件なるが故に、國家社會の盛衰興亡も、國際間の活劇も、其の遠因近因の多くは是に基く。殊に近世に至りては、政治的軍事的帝國主義より、經濟的帝國主義に變遷する傾向あり。科學の進歩機械の發明、資本の潤澤、人口の増殖等は、世界の經濟的活動を刺戟して停止する所なからしめんとす。從來經濟力の薄弱なること我が國の如きを以てして、此の間に立ちて相角逐せんとするは、固より容易の業に非ざるに、啻に世界の一等國として、文明上特殊の使命天職を行はざるべからざるのみならず、又東洋の先達として、優秀なる實力を具備せざるべからざる境遇に立てり。然るに目下我が經濟的發達を以て、他の列強に比するときは、甚微弱にして殆どいふに足らず、是れ國民の非常なる奮發を要する所以なり。而して經濟的發達を促すが爲めに、各種の方面より國家政策を是處に集中するを要すれども、殊に其の最も必要なる基礎要件は、實業教育を盛にして、多數國民の興味志向勞力を實業に傾注せしめ、以て經濟力の諸要素諸資料を充實する方法を講ずるに在り。獨逸の目覺ましき勃興は其の商工業の發達に依ること多く、而して其の商工業の發達は實業教育の獎勵に依ること多き、以て鑑とすべきなり。

但し實業教育に於て注意を要するは、實業を以て道義人情に顧慮せず、唯利を之れ射るの法と爲す傾向を矯めざる

べからざること是れなり。蓋し從來國民が甚しく實業を輕視したる結果は、一面嘆美すべき武士道の發達を見たる反面に於て、甚しく實業道德の墮落を助けたるものあり。日本商人にして歐米人支那人と競争する者の往々劣敗を見るは、其の技能に短なるよりも、寧ろ責任信用を重んぜざるに基くもの多きが如し。故に實業教育に於ても、實業の趣味と技能とを授くるの外に、更に實業道德を涵養するに非れば、遂に能く効果を生ずるを得ざるべし。

(木) 女子教育を興す事

人格の尊嚴、個性の價値を認め、其の涵養開達を計るの必要なる以上は、男女の性を異にするによりて、其の間に甲乙を附すべからざるや論を俟たざるなり。其の意志を伸べ、其の能力を發揮し、以て其の人格的價値の充實に力むるの、若し人類當然の進路なりとせば、男には則ち可なり、女には則ち不可なりといふ理由は存すべからず。従つて、男女によりて教育の制限を二にせざるは、人類道德上當然の事なりといはざるべからず。蓋し性の相違は價値の相違に非ればなり。

女子は男子と其の資質を異にするが故に、教育の方法に於ても、亦相異なる所なきを得ず。然れども、教育に差別を要する點より言はゞ、各個人皆其の個性を異にするが故に、之に應じて各別箇の教育を要すべし、是れ實に差別的教育の根本義なり。乃ち知る、男女によりて教育の差別を要するは、大體の事にして、又同時に枝葉の點に在ることを。而も是れ方法上の事なり、分量程度に至りては、強ひて男女によりて、差別を附するを要せざるなり。

理論は暫く之を措くとも、社會の一半は女子を以て之を充たす以上は、女子の品格能力の發達の十分なると否との、社會の進運に關すること頗る重且つ大なるものあるは言を俟たず。男子の一方のみ自由に發達進歩し、女子の一方は永へに保守退嬰に甘んずとせば、是の如き社會は、直に跛足的狀態を現出すべく、調和を破り、平衡を失し、到底健全なる進歩を爲す能はざるべきなり。之を家庭生活より觀察し、之を教化風紀上より觀察し、之を社交上より觀

察し來るに、其の何れの方面より之を觀るも、男女の知識品性に大なる間隔あるを以て便と爲すべき理由あるを知らず。

且つ夫れ、女子の品格能力の十分なると否とは、社會の進運と、女子個人の運命に關すること多大なるのみに非ず、次代の國民たる少年子弟の品性能力に影響すること殊に大なるものあり。此の點に於て、男子とても固より無關係なるに非ずと雖も、家庭經理と育児との職責が、主として女子に屬する以上は、女子の影響の男子よりも更に多大なるものあるべきは、推すに難からず。古來の歴史傳記亦其の事實を語る。此の一方よりしていふときは、女子の教育は、男子の教育に比して、一層の重きを爲すといふべし。

帝國の女子教育は近來大に發達普及し來れりと雖も、之を男子の教育に比すれば、未だ甚だ微々たる状態にあるは言を俟たず。是の故に、大正の新時代を興す教育方策の一としては、大に女子教育を盛にし、以て帝國婦人の十分に於て且つ中正健全なる發達を庶幾せざるべからざるなり。

(ハ) 科學教育の普及

近代文明の進歩は科學の勃興に依るの多きは多言するを要せず。科學勃興の弊害の少からざる一方には、其の利益の測るべからざるものあり、而して其の利益たる、將來決して減少せざるのみならず、益々増加すべきなり。人格主義精神主義の教育を盛にし、以て科學的物質的文明の弊を防ぐと共に、科學の研究と普及とに對して、今後更に一層の努力を要す。

然るに從來の國民に科學趣味乏しく、從つて思想界に科學的討究なく、文明に科學的發明なく、精神界の全般を通じて、又更に生活の全體を通じて、合理的秩序統制なく、且つ内容の貧弱なるものあるは、何人も之を辯護する能はざる所。我が國文明の歐米に對しては遜色ある、將た又學術に於て、産業に於て、彼が後塵を拜せざる可らざる、主と

して此の科學の發達の不十分なるにありとすれば、今後我が國家の進歩を謀る方策の一として、大に科學の研究を獎勵せざるべからざるや明かなりといふべし。

科學の進歩普及は、社會上經濟上學術上甚だ必要なるのみならず、國民性格の缺點を矯正する上に於て、又多大なる價值を有す。蓋し科學は純粹智的活動を要し、之が爲に獨創的發明工夫の興味を養ふのみならず、人の理性を發達せしめ、その判斷力を明にし、獨斷を以て、妄に或は他を排斥し、或は苟合することなく、徐に考究思索を加へ、確實なる根據の上に云爲行動を爲すの風を養ひ、次第に我が國民の短處を補ふを得るに至るべきなり。是他を理解し、之と協同する上に於て、又自治的生活を營爲するに於て、甚だ重要なる効果ありとす。

(ト) 美術教育の普及

美術及び美術工藝品は我が文明的產物の最も重要なるものにして、我が帝國を世界に紹介したるものは、戦争と美術となりといふも過言に非ず。乃ち美術教育の獎勵は是れ我が國粹を保存し、特色を發揮する基礎方法にして、殊に産業上重要なる輸出品たるべき美術工藝品の發達を刺戟するが爲めに、國家の教育政策上甚だ重要なり。

一般に、美的教育の人格教育上重要なる地位を占むるは言を俟たず。性情を圓滿にし、趣味を高尚にし、品格を端雅ならしむるは、美的教育の功に依らざるべからず。更に之を社會文明上より考察すれば、科學過度の弊を緩和し、物質功利の害を防禦し、文化の品質を精美ならしむること亦美的教育の普及に依らざる可らず。

美的事物の最も重大なる文明的使命は、各個人の美的欲求を満足せしむる外に、各個人民族間の同情融和を助くる効果の多大なるに在り。藝術に領域なし。人一度美なる物に對すれば、怡和の氣象自ら胸中に溢れて、一切の塵事を忘却し、不知不識の間に、萬人悉く同一情調の快感に酔ふ。是れ各個人間の隔壁を撤去し、互に同情同感せしむる最大の鍵鑰に非ずや。宗教は元來博愛を主義となし、人々相和して互に他を救濟すべきこと、人種民族を以て限るべきも

のに非るに拘はらず、宗派に附隨せる習慣的感情は、人をして自ら主我的ならしめ、宗教あるが爲めに、異人種異宗教互に相融和せずして、却つて激烈なる争闘を惹起したる例多し。藝術の如き、之に比すれば異人種異國民の融和を助けたるの効、寧ろ大なるものあるを見る。

是の故に、美術的教育を盛にし、國民の人格を高尙圓滿ならしむると同時に、又人をして欽仰せしむるに足るが如き優秀なる美術の産出を刺戟することは、各個人を調和し、各國民を調和し、各人種を調和するために、極めて重要な事といふべく、殊に美術を以て世界に知られたる我が帝國教育の一使命なりといふべし。

第三節 結論

國家の體制上より見たる教育の目的は、國家をして完全なる人格體たらしむるが爲めに、國民各個をして完全なる人格を具へしむるにあり。是が爲めには、一面完全なる國家教育を行ふと同時に、一面個人の自由なる發達の要求に應ずべき教育を興すことを要す。而して我帝國の理想精神と國情國民性とは、此が善美なる發達の可能性を有するを以て、飽くまで、其の眞意義を採り、新價値を闡きて、教育の目標を常に此處に置き而して之に基いて適切なる方法を設定し、以て我が國體の精華をして、永遠に燦爛たらしめざるべからず。

要するに、國民性本來の美點を涵養して、無限に向上精進せしめ、且つ個人の活動功率を至大至強ならしむるを期して、以て國家教育を、更に其の根本精神に進め、個人教育の方法を更に自由に擴張すべしといふこと、是れ國家體制上より見たる大正時代の教育方針と爲す。

第三章 國家の活動上より見たる教育の方針

第一節 日本の使命

國家として最善の活動を爲す所以の要點は、人類の究竟理想に關し、世界に於ける自家の使命を自覺し、全力を以て之を果すこと即ち是なり。然らば我が帝國の使命は如何。其の發現に二つの方面あり、一は永久的獨立的方面にして、我が特種の國民性と歴史とに基く獨特の文明の發展なり。二は時代的關係的方面にして、特殊の地位境遇に應ずる臨機的活動なり。以下其の大意を縷述すべし。

第二節 獨得の文明の發展

過去に於ける帝國文明の特色は第一、特種の團體的實踐道德の發展、第二特色ある美術工藝の發展、第三あらゆる外國の文物宗教を受容して、調和的發達を遂げしめたる事等を以て其の主要なるものと爲すべし。此等の點は他の各國それ〴〵之なきに非ずと雖も、帝國に於ては特殊の形質と多大の分量とを以て醇熟醞釀し來りたる點に於て、世界の文明に特殊の貢獻を爲すに足るものあり。將來に於ては、之を以て足れりとせざるも、然れども此の三特質は永く保持せざるべからず。是を基礎として、益々之を發達進化せしむると同時に、其の足らざる處を補充して、圓滿なる文明を作り出し、世界の人類生活に一新境地を提示することを要す。

(第一) 帝國固有の道德の發達

帝國固有の團體的道德、即ち感情を基礎としたる沒我的、家庭的、献身道德は共同生活營爲の爲めには極めて、貴重なる道德にして、帝國の隆盛は主として此に基く。將來益々之れを發達せしむるには、其の實質的感情を益々濃厚ならしめ、其形式を愈々善美ならしむると共に、其の理論的内容には、更に哲學的理想、科學的知識を加へて、合理的に組織し、其の適用の範圍をば、民族的より人類的に、國家的より世界的に擴張し得る準備なかるべからず。是の如く、我が民族性に基く特殊の道德を發達せしめて、其の内容を合理的に充實し、普遍的價値を増大するは、世界に處する日本の天職を明にし、他國民をして日本國民精神を理解せしめ、日本文明の價値を認識せしめ、以て一面に其の特殊の位置を列國民族文明間に確保すると同時に、一面に世界文明の一部として、調和的發展を爲すに必要ななりとす。蓋し全然特殊的にして、普遍的價値を得ること能はず、永く一隅に孤立して、世界精神と交通する所なきものは、到底十分なる發展を遂ぐる能はざるのみならず、次第に排斥疎外せらるゝを免れざるべし。當に、そのみならず、將來止むことなき知識の進歩は、國民をして益々合理的ならしむべきが故に、道德も亦之に應じて合理的に進歩するに非ずんば、舊來の如き權威を維持し、光輝ある國民性の健全を確保する能はざるに至らん。即ち國民道德的發達を合理的に指導することは、國家の内に對し、又外に對して、並び應酬するが爲に、極めて必要なりとす。

(第二) 特色ある美術工藝の發達

世界文明史上より觀察するに、他に類例少なき、特色を有する我が生産物は、主として美術工藝品なりといふべし。蓋し我が社會組織の家族的なると、性格の輕快敏捷なると、相俟つて、特殊の能力型式を發達せしめ、規律ある大組織による機械的作業よりも、自由多き小組織、寧ろ箇人的の手指作業に適するに至らしめたり。故に農業も家族的の小農組織にして、其方法は、團藝的なり。米國に於ける本邦人の成功が、主として機械的大作業に依る能はざる蔬菜果實の栽培に在るが如き、或は比較的規律にして、最も機敏なる運動を要する漁業に在るが如き、以て能力の型

式を察するに足るべし。此の能力たる、當に特殊なるのみならず、又重要なものなるが故に、將來益々之を發達せしむるを要す。而して其能力の成果の中心たるものは、美術工藝品なりとす。我が國の産業的基礎は從來農業なりしかども、將來國家の經濟的發展は大に商工業に俟たざるべからず。従つて、之が爲めには我が國民性格の短所を矯めて、規律ある大組織の産業經營を興さざるべからざるは勿論なりと雖も、然れども、從來の能力と其の成果との長所を發達せしむることは、文明上經濟上共に必要にして、且つ有利なり。是の故に、美術工藝を中心とし、其の他、自由に個性的趣味を發揮しつゝ、微妙なる手指の加工を要する製作を獎勵し、輕快敏捷、且つ急調の勤勞を利とする諸種の産業を盛にすることを以て、基礎方針と爲すを妥當なりとすべし。

(第三) 文物宗教の調和的發達

國民の寛容明敏にして、順應性に富める結果は、外國の文物宗教を受容して之を日本化し、内容複雑なる一種の精神的文明を作り出せり。殊に儒教、佛教の如きは渡來の日既に久しくして、能く我が國風國俗と調和したるのみならず、其の本國にありても見るべからざる發達を遂げたり。其の他東洋文明の文明として之を世に問ひ得べき程のものは、殆ど皆、我が國の攝取する處となり、近代に至りて輸入せられたる西洋文明も、亦一として拒絶せられたるものなく、悉く國民性の根幹を養ふの肥料となり、且つ同時に各自本然の發達を遂げ、蔚然として其の華を競ふの域に達せんとす。是の如く、各民族文明の綜合せられ、其の長所美點相融和して渾然として完き新文明の產出せらるゝに至らんことは、蓋し世界の希望にして、従つて又帝國民が是の如き寛容なる理解力を有することは、帝國民をして世界的發展を遂げしむるに足る所の重要な一特質たらずんばあらず。

但し我が國が外國文明を移植して調和的發達を遂げしめたる美點の著しきものあれど、固有獨特の學術宗教の、以て積極的に之を世界各國民の前に提供して、其の欽仰を恣にするに足るものに至りては、則ち未だ多しと爲す能は

ず。殊に科學的研究發明に至りては、殆んど見るに足るものなしといふも、敢て過言にあらざるなり。是れ蓋し現實的にして調和性に富めると同時に、他方に於て、獨創的發明力、根元に徹底せざれば止まざる執著力に乏しき國民性の短所より生ずる本邦文明の缺點にして、止む事を得ざるものありと雖も、亦健實なる文明の發展上、甚だ遺憾なりとせざるべからず。是の故に、從來の長所美點をば、益々之を養ひて、十分に發達せしむると同時に、他方に短所を補ひ、缺點を充たし、眞に我が國民の價値を發揮し、世界に新貢獻を爲すに足るべき、深邃雄偉なる學術思想の醇熟醞釀に努むるは、蓋し將來教育の負擔せざるべからざる任務とす。

之を要するに、沒我的團體道德、優雅なる美術工藝、及びあらゆる外國文明、殊に精神的東洋文明の調和的發達は日本文化の三大特色にして、世界に特殊の地位を占むるに足るものなり。將來益々之を涵養して、或は更に根本的に、或は更に應用的、或は更に世界的に發達せしむることを要す。即ち國民道德を更に合理的人類的に、美術工藝を更に高尚に複雑に、東洋文明を更に精神的に徹底的に闡明發揮し、以て之を世界に提供することを要す。而して是と同時に、從來本邦に不足したる科學的研究を盛ならしめ、更に本邦獨特の新精神文明を醸成して、以て之を世界文明に貢獻することを要す。之が爲めには、自國並に東洋の學術道德宗教に對し、更に徹底的研究を試むると同時に、盛に歐米の文化を輸入し、且つ教育法を改良して、從來文化の短所を補はざるべからず。是れ蓋し外國との關係的地位の如何に關せず、帝國自家の發展の爲に執るべき國是にして、教育は常に此の國是に従つて進むことを要す。

第二節 東西文明の調和

世界に特殊の境遇を有する我が帝國の文明上の使命の最も重大なるは、東西兩洋文明の調和是れなり。

抑々文明の發達は分化を必要とす。分化的活動の止みたるときは即ち文明の進歩止みたるの時にして、分化的活動

を止むるは、是れ即ち文明の進歩を止めんとするもの、文明の進歩發達の必要なる限り、其の内容形式の分化も亦止むべからざるなり。然りと雖も、分化の一方に偏するの弊は、各部の乖離を極端にし、無用の重複と矛盾とを惹き起し、遂に文明の浪費を爲すのみならず、互に其の價値を相殺することあり。是れ一面に於て、文明の整理統一の必要なる所以なり。

更に之を人類生活の理想上より考ふるに、孤立獨行は止むことを得ざる一時の變態にして、永遠の道理にあらず、人情の自然と、道德の眞義とは、共に其の對象の範圍を局限して、内外を分ち、階級を畫することを否む。唯各民族國家は、各地方に割據して、長日月間、特殊の發達を爲し來りたるを以て、一面其の固有の特色を發揮すると共に、一面其の生活思想の上に固定したる習慣的型式を作り、遂に彼此全く相調和する能はざる状態をなすに至りたるのみ。是れ止むを得ざる文明上の缺點といふべく、決して人類衷心の希望にあらず。故に年と共に此の地方的割據の状態は打破せらるゝ傾向あり、萬國的會合、協同的事業の次第に増加して行くは、蓋し偶然に非ずして、人情の自然なり、道德の當然なり、事功上の必然と謂ふべし。各民族各國家は、各其の特色を以て獨立するは固より必要なるも、同時に、互に友情を以て相交通し、道理を以て相協同し、交々補充して、以て、人類生活の向上を謀ることも亦必要なりとす。而して世界的交通協同を謀るが爲めには、各他の特色を尊敬すると共に、相互に其の歴史文明を理解し、異同を詳にし、共通の理想精神を其の間に發見して、こゝに調和の基礎を求むるを要す。

夫れ世界文明の源流は多し、然れども現狀に於て之を大別すれば、東洋文明と西洋文明との二となる。此の二大文明潮流は、太古より現今に至り、互に相影響し、相交錯したる所少からずと雖も、幾千年の永き歴史は異りたる民族の心理及び境遇と結合して、遂に各特殊の形式を具へ、別箇の潮流を爲し來れり。然も世界文明を完璧となし、人類生活を廣胖ならしめんが爲には、此の二大潮流の調和は缺くべからざるものなるが故に、世界の識者の、夙に此の點

に盡力しつゝあるもの少なからずと雖も、本來特殊の形質を有せる文明の真相に徹して他の精神を會得し、分化すべき所に相分化し、統一すべき所に相統一し、以て渾一的の一大文明を開展することに至りては、實に容易の業に非ず、是れ其の未だ緒に就くを得ざる所以なり。

然るに我が國たる、幸に文明地圖上の好地位を占め、東洋の極端に位して、其の文明を代表し、以て遙に西洋の極端と相對せり。東洋の文明は次第に東漸し、悉く朝宗して我が國に湊まり、而してこゝに西洋文明と接觸し、西洋の文明は次第に西漸し、頻りに奔騰して米國に流注し、而して是處に東洋文明と相對峙す。然も我が國は古來外國文明を攝取して、其の調和的發達を遂げしむる特長を有し、既に支那印度の學藝宗教を移植培養して、鬱然繁茂せしめ、近世に至りて、更に銳意西洋文明を輸入して、之が理解應用に努むる熱心は實に驚嘆するに足るものあり。是を以て文化の内容の複雑なる、世界中我が國の如きものなく、一切の文明は悉く注いで我が國を浸し、一大瀕溜を爲すといふも過言にあらざるなり。是れ兩文明を合せ研究し、其の調節を謀る最適地は我が國に在りといふ所以にして、此を以て帝國使命の存する處となす、何の不可あらん。吾人は此の帝國の文明史的特殊任務を盡し以て一大貢獻を世界に致すことを以て、一の精神的國是と爲し、教育の方針亦之に則りて按配せざるべからざるを信するなり。

第四節 平和的發展の主張

抑も國運開張の方策に二大別あり、曰く平和的曰く武斷的是れなり。帝國が世界に地歩を占めて、其の使命を行はんと欲するに當り、果して孰の方策に依るべきか、言ふ迄もなく平和的方策に依らざるべからず。蓋し帝國の使命は世界の文化に一大貢獻を致し、精神的醇化の功をなすことにあり。帝國將來の事業は戰爭主義侵略主義によりて、成就すべきにあらずして、更に高尚にして博大なる見地に立つを要するなり。同胞中、武斷的帝國主義を唱へ、侵略主

義によりて人口増殖の處分を爲すべしといふ者、問々之れ無きに非ず。然れども是の如きは徒に國家の形骸的膨脹を喜びて、貴ぶべき文明史的使命を忘れたるもの、將た國家究竟の目的が機械的腕力の世界より進化して、人格的精神を體現するにあることを思はざるもの、吾人は國民教育の根本的見地よりして、人道的平和主義を採り、武斷的腕力主義を排斥せんと欲するものなり。友邦の人士中にも、往々日本民族に對して疑惑を挾むものなきに非ず。曰く、日本は古來尙武の國、其の民族は勇敢にして戰爭を好み、既に日清、日露の二大戦役を開きて、領土を擴張したり、今後更に勢に乗じて侵略主義を採るべき危険なる國民なりと。然れども、是の如きは固より皮相の僻見にして、決して眞相を得たるものに非ず。今少しく彼等の疑惑の由て來る所を考ふるに、右の三點を以て、主要の原因と爲すもの、如し。

(イ) 日本魂は戰爭主義なりといふ誤解

日本魂の發達して軌範的形式を成したるものは、即ち武士道にして、武士道は其の名の示すが如く、主として古の武士階級の間で發達し、従つて多く戰陣の間に精華を發揮したりと雖も、然れども其の本意たる決して戰爭を目的として、之を獎勵期待する者に非ず。日本魂の本意は、要するに、忠孝を重んじ、義勇公に奉じて、一身の私を顧みざるにあり。是れ即ち犠牲の精神、奉仕の精神にして、沒我的道德の眞髓なり。犠牲献身の精神は實に普遍にして人類のなる性質を有す。日本人が此の精神を發揮するは、決して戰爭主義の鼓吹となることなきのみならず、却て私利の主張に基く事多き戰爭主義を撲滅し、排他的競爭主義を緩和し、世界人類の道德生活を向上せしむる一大勢力となるに足るべきなり。帝國が日清、日露の二大戦を開き、驚嘆すべき勇氣を現はして、大敵を撃破したるを見て、元來好戦性の習慣を有すと謂ふ者あり。然れども、日清、日露の兩戦共に、帝國より強ひて挑發したる侵略戦に非るは、何人も熟知する所にして、更に之を歴史に徴するに、豊太閤が雄心勃勃、武を朝鮮に試みたる外は、神功皇后の三韓征伐といひ、元寇といひ、自衛上止むことを得ざる防禦戦に非るなし。之を現今世界に雄視する諸強國民の行跡に比する

に、我が國民を以て特に好戰國民と爲すべき證左は毫末も存せずといはざるべからず。

(口) 人口過剰の結果、止むことを得ず侵略主義を採るに至るべしといふ杞憂

日本人口の密度と、其の増殖率とは、共に、列國中第三位に在り、今後數十年ならずして人口の過剰に苦しむに至らん。外國を侵略して、領土を擴張し、殖民地を求めんとするは、勇敢にして、戰勝の經驗に富める國民の當に採るべき方針ならざるべからずとは、一部外國人の觀察なり。此の觀察たる、決して理由なきに非ず。若し現在の如くにして自然の推移に委せんか、其人口過剰に苦しむに至らんこと、洵に論者の見る所の如けん。然れども人口過剰と武斷的侵略主義との間には、必然的因果の關係ある者に非ず、相特立する二箇の事實なり。之を實例に徴するに、現今白耳義は世界最小國の一にして、又最大密度の人口を有する國なり、而して未だ白耳義が侵略主義の政策を採りたるを聞かず。之に反し、嘗て亞細亞、亞弗利加等の諸大陸を侵略して、廣大なる屬領地を獲得せる、歐洲の諸強國は、必ずしも人口過剰に苦みたるものゝみにあらざりき。乃ち、侵略主義は人口過剰ならざるも行はれ、人口過剰なるも、侵略主義は必ずしも行はれず、人口過剰と侵略主義との間に、必然的關係を有せざること、推して知るべきなり。況や日本人は元來侵略に興味を抱きたること之なきに於てをや。且つ夫れ、現今の如く國際關係緊密となり、軍備の擴張せられたるに際し、單獨なる一國の力を以て他國を屈服せしめ、其の領土を奪略するが如きは容易になし得べきにあらず。たとへ爲し得たりとするも、其の勞を償ふに足る効果を獲得するは至難なり。戰爭の苦き經驗は、日露戦後の日本國民實に之を嘗め盡せり。何處に於ても發見せらるゝ一、二異論者を除きて、侵略主義を夢みる者なきことは、深く帝國の現状を察知せる外國の識者も夙に證言しつゝある所なりとす。

但し日本民族にして如何に平和を好むも、其の生長に對する同情を缺き、發達に對し均等の機會を與へず、正當なる活動發展を妨げて止まざる暴力あらば、自衛上黙して止むべきに非ず、力或は及ばざるを知るも、敢然として起ち

て存亡を最後の手段に決すべきこと、彼の日清日露兩役の如きものあらん。然れども是の如きは眞に止むことを得ざる窮策にして、斷じて平生の積極主義となすべきものに非ず。且つ今日の状態は、是の如き忌むべき場合を豫想せしむるものあるなし。假令豫想せしむるものありとするも、之に對しては別に應急の策あるべし。之が爲めに永遠の根本主義を動搖せしむる必要を見ざるなり。若し夫れ、今日の勢を以て、推して遠く五十年、百年の後を思料せんか、人口の過剩に苦むもの、豈に獨り我が一國のみならんや、是れ實に全世界の問題なり、全人類の共同問題なり。是の故に、吾人は信ず、人口過剩問題の如きは、人類的理想の啓發と、友好的同情の力と、經濟的方法によりて、解決する餘地あるべく、又解決の道を是處に求むるを正當とすと。

(ハ) 帝國民の性格に對する偏見

日本人は特種の性格と歴史とを有し、風俗習慣宗教道德思想等に於て、到底歐米國民に同化し得ず。假令皮相を摸倣し得るも、實質の理解は望み難し。此の意味に於て、單に異教徒的なるのみならず、劣等國民といはざるべからず。是の如き國民をして自由なる膨脹發展を遂げしむるは、歐米の高尙なる文明の發達に障害を及ぼすべし。之に加ふるに、日本が強國露西亞と戦ひて、白人に勝ちてより、從來歐洲人の勢力下に雌伏したる亞細亞人は自尊心を發揮し來り、白人に對し復讐的態度に出でんとするものなきに非ず。將來日本の強大となるに從ひ、黃色人種が敵愾心は益々盛となるべく、日本人亦其の強大の自覺と、同色人種の囑望とに煽られて、大に覇心を發せずと限られず。是れ白人に對し危險にして、且つ従つて世界の平和を攪亂するものなりと。所謂、黃禍論なるものは是れなり。然れども、我が國民の如く順應性に富める國民は比類少なかるべきこと、既に前に述べたるが如く、能力の決して劣等なるものに非ざること、亦多言を要せざるべし。然も我が國民は自家の文明の及ばざるを自覺し、今猶汲々として歐米に學びつゝあり、焉ぞ俄に反抗的態度を取らんや。他の亞細亞人が日露戰役後、自己の運命に對して希望を持ち始めたるは

事實なりとするも、それは日本國民の關與するを要せざる所なり。且つ夫れ、各民族悉く前途の光明を信じ、自己の天職使命を覺り、奮起して世界の文明運動に参加し來らんことは、當に忌避すべき理由なきのみならず、蓋し人類教化の大理想ならざるべからず。東洋民族若し自覺し來らば、宜しく之を利導して正當なる發達を遂げしむべし。是れ東洋の爲に望ましく、西洋の爲にも亦有利なる結果を得ん。

元來各民族は皆一種の自尊心を有せり。我が國民の如き、支那國民の如き殊に顯著なる自尊心を有す。自尊心は當然の事にして、又必要なるものなれども、較もすれば則ち是が爲に判斷の正鵠を失し、獨り自ら尊貴にして、他を輕蔑するの弊に陥る。一部歐米人中間にも、亦此の人種的自尊心に基ける、重大なる偏見を抱けるものあり。歐米民族史即ち世界史にして、世界の文明とは歐米民族文明の謂なりといふ獨斷是れなり。黃禍論の如きも、實際遠く此の人種的主我思想、先天的白人優勝論に其の源流を發せり。西洋民族と東洋民族との現状を比較すれば、彼等をして、是の如き人種的偏見を抱かしむるに至る所因なきに非ずと雖も、而も歐米以外に世界的民族なく、文明なしといふは當らず。或は過去に溯り、或は將來を推し、更に又高大なる人類理想より看來れば、世界の勢力と文明とを白人の獨占私有とするの正當ならざるを知るべく、而して一度是處に著意せば、異人種の勃興を危險視するが如き、偏見を免るを得べきなり。

外國人の誤解の如きは、彼等本來の偏見と、帝國の真相を詳かにせざるとの結果にして、敢て深く意とするに足るものに非ず、又敢て意とせずして邁進するを當然となすべしと雖も、然れども、解き得べきの誤解は之を解き、避け得べきの障害は之を避くるの途に出るは、是れ亦平和的進展の一手段ならずとせず。且つ亦誤解の由つて以て生ずる所を窮め、何等かの不備缺點を發見して、以て將來を規するの資に供するは、大なる使命を負へる帝國國民の當に執るべき修養法となす。彼の武士道發達の徑路の如き、人口の稠密なるが如き、歐米人と相異なる習慣氣質を有するが如

き、殊に感情激越、氣宇狹小、較もすれば則ち外部の刺戟に動かされ易く、而かも勇敢にして攻撃に長ずる一種の性格を有するが如き、皮相の觀察者流をして、漫に警戒の意を發せしむる所因決して之なしといふべからず。列國と折衝して一步も退避せざる氣力と止むべからざる場合に於て、敢然として、起ちて前敵を擊破する用意と之なかるべからざるは勿論、殊に目的に向つて邁進止まざる勇猛なる意志は、常に最も必要なりと雖も、漫りに他の反感を挑發し、理由なく疑懼警戒せしむる態度を爲すが如きは、人類交際上當に避くべき事にして、又帝國今後の發展上甚だ有害なるが故に、此の邊の事に對し、國民の注意すべきもの絶無とはいふべからざるなり。而して外國の偏見者流をして、非難の口實を失はしめ、我が前路の障害を少くする方策は他なし、唯正義に則り、平和主義を採り、誠實に之を實行することに歸著すべく、同時に、教育に於ても、常にこの國家發展の根本方針に顧みて子弟を教育し、殊に尙武と好戦と、愛國と排外と、發展と侵略とを混同一視せざらしむることに注意し、絶えず高尚なる人類理想を鼓吹して、濶大雄偉の精神、雍容怡和の氣風を涵養せんことを要す。

第五節 物質的文明の弊害に對する救濟運動

近世に於ける世界文明の特徴は科學應用の盛なるにあり。然るに科學は一切の存在を物質視し、之に對して機械的檢覈を加ふ。故に近世文明は即ち物質的文明なりとす。物質的文明が人類世活に貢獻せる所は實に多大にして、殆ど計量すべからざるものあるは、是處に言説するを要せず。然れども、亦物質的文明は一の非常なる利器たり、劇藥たるが故に、他面に於て、人生社會に損傷を與へたることも、決して少しと爲すべからず。社會を縦斷して、少數の資本家或は富豪と、多數の勞働者乃至貧民となし、人力を以て、資本の下に附屬せしめ、或は之と競争せしめ、富の爲めに富を作り、企業の爲に企業を興して、一面奢侈を誘ひ、軍備の擴張を促すと共に、一面に於て、生活難を増加

し、非秩序的思想を發生せしめ、經濟は社會の主要動力の地位を占めて、政治も道德も其の下に支配せられ、教化は偏智的となり、生活は機械的となり、人の感情靈性を枯渴せしめ、敦厚敬虔なる宗教的氣分を減削して、忌むべき絶望的頹廢的氣分を養成したるが如き、要するに物質的文明が現實生活の價値を發揮し、充實したる一面に於て、永遠の靈的生命を空虚にし、生活の手段たる物質的勢力を過重して、目的たる人格の權威を輕視し産業の爲めに人の心身を犠牲に供せるとするに至りたることは看過すべからざる大弊なりといはざるべからず。是れ即ち價値の顛倒なり、目的の錯誤なり。是の如く、物質は便利なる利器効力強烈なる劇薬にして、人生に對し必要缺くべからざるものなるが故に決して排斥し、撲滅すべきものにあらず、人格に従屬して其の發展を助くべき器械たる正當の地位に在りて、而して其の性能効果を十分に發揮せしめば、則ち可なり。物質文明に對する矯弊とは、要するに、人生々活の目的を確立し、而して物質をして、其の位置に於て正當の價値を發揮せしむるにあり。

物質的文明の弊は歐米識者夙に注意せる所にして、之に就て考慮せるもの少なからず、人格的精神的思想は漸く其の頭を擡げんとしつゝあり。吾人は之に步調を合せ、東西相呼應して文明の完璧を見るに努力することを要す。然るに一方東洋を顧るに、其の古來の文明の特徴は精神的なるにあり、而して我が國は東洋文明を代表して歐米に對し、此と親密なる關係を結びつゝあり。故に物質的文明の弊に精神主義を唱へ、救済の運動を起さんとす、世界各國の識者に應援し、彼等と相提携して、世界的精神運動たらしむるは、刻下の急務なり、又帝國の立脚地より見て、適當なる方針なるべしと信ず。

第六節 世界の經濟的勢力の均衡に對する帝國の任務

世界の平和的進歩が、各國民の道義心の發達に依るの多きは勿論なれども、亦各種勢力の均衡により、重心の著し

く一方に偏傾せざることにも依存す。各種の勢力とは何ぞ、曰く軍備、曰く經濟。

各國間に於ける文化の程度に著しき差異あるときは、互に相理解し、相同情し、相交通することを得ずして、遂に衝突を惹き起し、孰れか一方の敗滅するに至りて止む。而して古來の歴史に於ては文明國が野蠻國を併合したる例の多きと共に、又野蠻國が文明國を蹂躪したる例の少なからざることを示しつつあり。孰れにしても、文化の程度の差異著しき兩者間に、國際關係の圓滿を庶幾し難きは一なりとす。故に世界の平和の爲めには、汎く文明を普及し、文化の程度を平均せしめ、相互の理解同情を可能ならしむるを要す。

軍備の強弱不平均なるも、亦平和を破り易し。道義の低度なるも、亦文明の差異多きも、若し軍備の強弱にして大差なき時に於ては、其の平衡の力によりて、衝突抗爭を避くるを得べし。現今世界列國間の平和は此の軍備の平衡に依るもの最も多しと爲す。是の故に、將來永遠の理想論は兎に角、現在の如く各國が軍備を有する以上は、或る一國のみ特に優勝なる軍備を有するのは、平和の爲に危険にして、少くも、國際問題に獨立の發言權を有する諸強國に在りては、略々相平衡せる軍備を有するを要す。

然り而して、各種の國家勢力中、最も重大なる地位に在るものを經濟的勢力となす。經濟は生活の物質的基礎を爲すものにして、軍備も又此の經濟力によりて支持せらる。しかのみならず、近時軍備の目的として聲言せらるゝ所は、消極的には平和の保障たり、積極的には經濟的發展の保護たることは是れなり。強兵は富國にして始めて能くする所にして、又富國ならんが爲めに強兵を要すとは、蓋し近時の輿論なり。英國の大海軍は地球上到る處に散在せる殖民地を保護すると同時に、本國の商業、寧ろ日々の生活を保護するに必要な勢力たり。獨逸の急劇なる海軍擴張は、一は英國に拮抗して政治的地位を確保せんが爲なれど、對外産業の發展を保護する必要に供ふと宣言せらる。各國間の趨勢たる帝國主義的傾向は、決して政治的空名虛榮の野心に出づるものに非ずして、實に間接には民族の生活

膨脹、直接には産業經濟上の發展を以て、其の實際的理由となす。是の如くにして、今や經濟は一切の社會的要素の基本たり、中心たる狀勢を呈せり。其の勢力の均衡の、世界の平和に關係するの深きや、亦多言することを要せざるなり。

今、世界に於ける經濟的勢力の分布を大觀するに、中世以後の世界經濟力は、勿論歐洲に集り、其の中心は處々に轉遷したりと雖も、歐洲以外に出づることなく、其の消長と共に、各國の盛衰興亡を來しつゝ、然も全世界を其の勢力下に支配して近世に至れり。然るに嘗て歐洲の資本によりて支配せられたる亞米利加新大陸に、忽然として一大經濟力は出現し、旭日冲天の勢を以て、富を生産し、歐洲大陸と拮抗して相降ることなきに至り、茲に二個の經濟中心を生じ、其の均衡に依りて、平和的競争は盛に行はれ、著しく社會文明の進歩發達を促せり。

嘗て昔時に在りて、總ての勢力の劣弱なりしが爲めに歐米の計算に上らざりし亞細亞大陸は、近時に至り、漸くにして世界の市場とならんとし、其の活動の地に渴せる歐洲の經濟力は西よりし、米の經濟力は東よりして、此の最大陸に向つて奔注し來り、是處に一大旋渦を作りて空湧せんとす。若し現狀に委して久しく經過せんか、優秀なる經濟力のために壓倒せられて、亞細亞の産業は永く歐米の支配を受け、東洋古來の文明も、之に従ひて西洋文明の潮流の爲に洗ひ去られ、民族の發興、人種の融和亦到底望み難きに至らんとす。是れ東洋の爲に憂ふべきのみならず、又我が帝國の爲めに患ふべきのみならず、實に世界文明の完備の爲めに、人類全體の渾一的進歩の爲めに慮らざるべからざるなり。是に於てか、東洋に於て、歐米の經濟力と相拮抗して、之と均衡を保ち、諸種の勢力を結合して、共に平和的進歩を相濟すべき經濟中心を東洋に設定するの急務なるを見る。

然り而して、東洋に於ける經濟活動の中心となり、以て歐米と相對峙すべき任務は、何れの國が之を負ふべきか。支那及印度は古來東洋の寶庫と稱せらる。然れども、印度は全く英國の支配下にあれば、假令如何に發達するも、東

洋の勢力たることを得ず。支那の將來恐るべき世界的經濟國たるなきを保せざるも、其の紛亂を極めつゝある政治の秩序の全く回復せられ、國民の統一的努力が産業の上に集中せられて、組織的大經濟活動を興すは、尙ほ幾多の年月を要すべし。是に於て、東洋の經濟中心となり、起ちて東洋の經濟力を結束し、以て東西經濟の力の均衡を維持すべき勢力組織の急務に應ずることを得るものは、我が帝國を措きて他に之なきが如し、帝國の經濟的地位たる、實に重大なりといふべし。是れ營に經濟上重大なるのみならず、帝國の精神的文明上の使命を維持し、遂行するが爲めに必須業務なりとす。

然るに、我が國たる、土地狭く、物産乏しく、資本薄く、加ふるに産業上の能力必ずしも優秀なりといふを得ず、唯數ふるに足るものは知識と勞力と是れのみ。乃ち非常なる勉勵努力を加ふるに非れば、到底此の任務を果し難からん。是れ獨り我實業界の問題なるのみに非ず、實に國の重大問題なり。國民の教育亦此處に顧慮して、周到なる按配を爲さざるべからざるや勿論なりとす。

第七節 東洋開發の任務

(イ) 東洋民族開發の必要

我が帝國を除き、自餘の東洋各國を以て、之を歐米各國に比較するに、其の國家組織に於て、社會の文化に於て、民族の能力知識品格に於て、概して低位にあるは多言を要せず。若し從來の如くにして、自然の推移に委せんか、歐米各國民族に後るゝこと益々甚しく、全く世界の落伍者となり、永く劣敗者の境遇に沈淪するに至らんとす。東洋人果して元來能力なきか。古代に於て、現時の西洋各國の猶未だ暗黒の裡に彷徨しつゝあるに方り、東洋は早く既に開化の域に達し、其の學藝に於て、其の事業に於て、今日の西洋文明と相對するに足るべき、幾多の偉績を遺せり。

即ち東洋民族は元來無能なるに非ず、唯種々の社會的事情に妨げられて、其の發達を中途に停止したるに過ぎざるなり。過去の東洋文明は西洋文明と其の性質を異にし、主として精神的方面、道義文學方面の事に屬し、宗教あり、哲學あり、倫理あり、人生の解釋に於て廣大深刻なるものなきに非ず、燦然たる文物典章は西洋文明の足らざる處を補ふて、之を完璧ならしむるに足るものあり。此の文明を以て埋没に委するは世界文明の一大損失といふべく又過去勞作の暴殄といふべく、此の民族をして永く劣敗者の境遇に停滯せしむるは、生々發展の人類の希望に反す。

是の故に、東洋各國民を開發して、之をして今日の新文明を理解應用せしめ之によりて更に固有の能力と過去文明の眞價とを發揮し、歐米と相平衡し、相協調して進むを得る域に至らしむることは、獨り東洋民族の爲に必要といふべきのみならず、實に世界全般の爲めに必要なりといはざるべからず。然り而して、其の奮起の先頭に立ち東洋の主人たる責任を負ふべきものは、我が帝國の外に之なきなり。地理的及び歴史的關係より、人種及び文明の關係より、又現在進歩の状態より之を觀るに、東洋開發は、我が帝國が自然に負へる重大なる使命の一なりと斷言せざる能はず。果して然らば我が教育界の如き、亦此處に意を注いで、研究計畫する所なかるべからざるを信するなり。

(ロ) 開發の手段として婦人教化の急務

東洋開發の任務の繫りて帝國の雙肩上に存すること、前述せる所の如し。開發の事業は政治に經濟に、其の方面多岐なるべしと雖も、其の最も根本的にして、且つ急要なるものを教化の開發となす。智能の啓發品格の改善、生活の向上等に力むる即ち是にして、主として精神上に繫り、即ち廣義の教育問題たり。然るに教育は主として將來を豫期する事業なるを以て、其の目標は少年子弟にあり。殊に品格の改善、生活の向上に關することに至りては、女子の力の中心たり、基礎たり。蓋し女子の品格勢力たる、假令表面に於て其の成績の特に指點すべきものなき場合に於ても、社會の裏面に於て、隱然として實地生活を左右し、男子を感化し、風俗を維持す。社會の基礎たる家庭を經營

し、國家將來の成分たる青年子女を養護する大事業に至りては、時處の如何を問はず、主として女子の才徳に依頼せざるべからざるや、又多言するを要せざるなり。此の故に、社會改善の事業を根柢より興さんと欲するものは、必ず兒童及び婦人に著眼し、次代の組織者運營者たる兒童、又其の兒童の保育者、家庭の經營者たる婦人を教養して、以て其の源流を作る。

今教化興發の見地より東洋の状態を顧るに、文明の進歩、生活の向上の停滞して動かざること日既に久しく、智能竭涸し、感情荒類し、意氣銷沈し、病弊の深く膏肓に入れるものあり、此の民族を開發して、歐米と比肩するに至らしめ、東西歩調を一にし、相提携して、世界文明の完備渾全を成さんとするや、其の手段、其の努力、決して尋常一様のものなるべからざるを感ぜざんばならず。其の思想、意氣、生活を根柢より改造するが爲には、婦人と兒童との教育問題よりして先づ解決するの、事に迂なるが如くにして、實は至當且つ必至の順序なるを信ずるなり。

東洋に於ける教育問題として、女子教育は更に又特に重大なる意義を有するを見る。東洋の婦人を以て、之を西洋の婦人に比するに、其の主觀的見地に於ける幸福安逸の程度は、或は必ずしも劣れりと爲すべからざらんも、客觀的見地よりせる智能品格地位事業等に至りては、到底比較すべからざる低位にあり。一般の社會及び男子の開化、既に西洋に比して大に劣等の地位に在るに、婦人と男子との間隔は、之を西洋の男女間に比して、又更に大なり。是に於てか、東洋の婦人は、社會の重要な任務の負擔者として、遺憾極めて多きものと爲さざるを得ず。婦人の地位品質學識の男子に比して劣等なるは獨り女子其の人の爲めに不幸なるのみならず、男子にとりても不便にして、亦子女の爲めに不利益なり。要するに社會全體よりして甚だ不祥なり。其の兩脚をなせる男女の開化の差異の大なる跛足的社會は決して直立して濶歩することを得ず、健實剛強なる發展を遂ぐるに堪へざるは言を俟たず。東洋民族が概して萎靡して振はざる原因の一は、半身たる婦人を輕視し、其の正當の教養啓發を怠れるに在りといふも過言に非るべし。

即ち東洋開發の爲めには、女子の教育の極めて急務なるを見るなり。

東洋も素より女子の教育を有せざるに非ず。支那の女子教育に關する理想の如き、訂正補充を要する幾多の缺點を有せりとはいへ、現在に採用して參考となすべき美點も亦少なからざるものあり。殊に固有の品性に支那の理想を加味して以て教養せられたる、我が帝國の女徳の一面甚だ優秀なるものあるは、歐米識者も亦之を認むる所、其の民族本來の精神を發揮し、且つ其社會組織に適應せるものたるは、吾人の忘るべからざる所とす。此の美點は益々之を發達せしむると共に、歐米の長所と其の研究とを借りて、其の足らざる處を補ひ、將來日進月歩の文明社會に適應すべき完美なる、女子教育法を建設して、以て之を東洋全體の女子界に普及し、人類として、將た東洋婦人として、適當なる發達を遂げしめ、女子自身救濟せらるゝと共に、之に依りて家庭を改善し、少年を教養し、進みて社會の矯風改善の任務を盡し、以て東洋民族の運命を興起せしめざるべからず。而して之が指導者、計畫者、發案者の任に當るものは、文化境域の接近して且つ既に教育事業に於て優秀なる成績を擧げ得たる日本帝國の教育者を措いて他に之なきを信ずるなり。

第八節 思想交通を簡便ならしむべき萬國的機關發達の促進

思想交通の主要なる手段は、言ふまでもなく言語文字なるが、各國民族其の言語文字を異にするが爲めに、一方には、民族固有の思想精神を、各獨立的に發達せしめ得たる効果あると同時に、他方に於て、相互の交通了解を妨げ、平和を害し、文明の進歩を沮みたる弊害決して鮮少にあらず。然も、各國民の交通は益々廣く且つ繁劇となり、從つて他國語を學習するの必要は愈々増加し、教育作業の中に於て、其の多大の時間と勞力とを之が爲めに費しつゝあり、抑も言語文字は思想發表、意志疏通の器具たるに過ぎず。之が習得の爲に多大の時間勞力を費すことは、假令其

の副産的效果の少なからざるものあるにもせよ、教育上決して歓迎すべきに非ず、人類の能力經濟上より見るも亦有利となすべからず。是に於てか、簡便なる萬國共通的言語文字を採用することは、教育上、文明上、人類融和上の急務なるを見る。

(イ) 萬國共通語制定の提議

國語を異にする不便は古より感ぜられたるが故に、共通語考案の歴史は決して短からず、然れども、容易に完全なるものを得がたくして今日に及べり。 에스ペラントは最も近く案出せられたる共通語にして、一部に使用せらるれども、素と歐洲國語のみを基礎として編制せられたるものにして、少くも東洋人にとりては、決して簡便なりといふべからず。此の頃米國の語學者によりて考案せられつゝあるものは、主として英語を基礎とせるものにして、 에스ペラントに比し更に便利なるものなりと傳へらるれど、未だ發表せられず。兎に角言語文字上の困難は、歐米よりも東洋に於て多大なるに、此れ迄の工夫は皆歐洲語を基礎となせるものにして、未だ東洋語に及ばず、是れ東洋人にとりて、特に不便なる結果を生ずるのみならず、直に世界的共通語といふ能はざるなり。且つ亦是等は皆私人任意の研究にして、社會的乃至國際的共同事業ならざるが爲めに、其の研究力も、亦其の普及力も共に微弱にして、効果を擧げ難かりし憾みなきに非ず。是を以て、此の際共通語の制定を國際的共同事業となし、廣く東西の主要國語を研究し、最も簡便なる共通語を考案する機關を設くる必要ありといふべし。而して此の事たる、世界的文明事業中主要なる事項なるが故に、東西文明の調和を謀り、世界の平和的精神的進歩を促進する任務を行はんとする帝國より、之を列國に提議すること至當の順序なるを信ず。

(ロ) 共通文字の採用及び共通的術語事務語制定の提議

共通語の制定は世界文明の普及統一上、將た人種民族の融和上極めて急務なり。然れども、之が制定は甚だ困難な

るべく、其の使用に至つては更に困難なるものあるべし。而して假に共通語成立し、實用に供せられたりとするも、各國語を廢して、之に代ふるに共通語を以てするが如きは、到底望み難かるべく、又必ずしも、必須或は有益なりと爲す能はざるべし。是に於て一は、永遠の緩和的意味に於て、更に別箇の發案を試むる必要あるを見る。別箇の發案とは、一、各國成るべく共通の文字を用ふる事。二、學術上の専門語、事務用語、新語等には成るべく世界的言語を採用する事之れなり。

文字に缺くべからざる要素は、形狀簡單にして學習、記憶、書寫、印刷に便なる事、廣く世界の各人に通用せらるゝ事、記音細緻にして、精確に言語を寫し得ること、姿態婉曲にして、美觀を有する事等にあり。現用の文字にして、此の條件に適合するものを求めば、恐くはローマ字を以て第一に推さざるを得ざるべし。故に吾人は各國成るべく、ローマ字を採用することを提議せんと欲す。

國語を共通にせずして、文字のみを共通とするも、其困難と弊害とを償ふに足る效果を得難からんといふ非難あらん。然れども、文字共通なる時は、相互に他國語を學習し易く、且つ各民族間の親善の感を生じ、世界の平和的進歩精神的融和を促す効果は、決して少なからざるものあるべし。或は又文字を變更せば、國粹を失ひ、固有の民族精神を減すに至るべし、殊に従來ローマ字を用ひ來りし國民の爲めに精神的征服を受くる結果を呈すべきが故に非なりと言ふものあらん。現に國字問題に惑ふこと日既に久しく、然も何人も比較的便利なるを拒まざるローマの採用を決する能はざるは、主として此の理由に基く。然れども、是の如き、消極的理由は、他の種々の積極的利益を以て補償して餘りあるべく、且つ一の符號に過ぎざる文字の變更に依りて、容易に國民性を傷くることなかるべきは、軍器其の他種々の文明的利器を他國より輸入假用するも、毫も固有の精神を害したる形跡なきによりて類推するを得べし。假りに數歩を譲りて、ローマ字採用の爲めに、著しく歐米文化の影響を被ることあるべしとするも、過去に於て獨り漢

字を借用したるのみならず、支那の制度文物の一切を模倣したるが爲に被れる影響以上の弊害を受くことあるべしとは、吾人の豫期し難き所なり。國民は今日既に著しく合理的批評的となり來れり、而して將來の進歩豈に今日に止まらんや。吾人は吾が國民性と及びその將來の發達に對して、論者の如き危惧を抱かずして、信用を置かんとす。更に又假名文字は我が國に於て發明せられたる固有の文字にして、利便多く、且つ千餘年の歴史を有するものなるが故に、之を棄つべからずといふ主張も少からざるが如し。然れども、假名は初め漢字より脱化したるものなるが上に、漢字の補助字として用ひ來れる習慣なるが故に、漢字を除外し、假名のみを獨立的に用ふる不便は甚しきものあり。此れまで假名のみを以て文章を綴る試みをなしたる人往々ありきと雖も、殆ど成功せざりき。今日の狀態に於ては、假名を用ふる以上、到底漢字を排除する能はざるなり。従つて、又毫も現在の不便を緩和すること能はざるなり。且つローマ字に改むといふも、全く假名乃至漢字を廢滅に歸せしむるの謂に非ず。唯普通日用文字としてローマ字を用ふべしといふのみ。孰れの民族たるを問はず、其の今後の發展が鎖國保守に非ずして世界的活動に存する以上は、實用文字として不便なる特種の文字を固定するの利益ならざるや、亦多言するを要せざるなり。

學術語、事務用語等の特種の語辭は、精確にして共通的なるを要し、特に民族的感情に關すること、最も少なきものなるが故に、之を各國語に翻譯し、又は特に之を新造せずして、成るべく廣く現用せらるゝ國語を借用するを便とすべし。此れ又國際間に於て、意義の精確を保ち、事務を簡捷にし、交通を容易にする効果多大なるべしと信ず。但し事務的用語と共に、實際の制度を改めて、世界的の一式とする必要あるもの少なからず、例せば度量衡貨幣制度の如き是れにして、此等諸制度の國別的なるが爲に被る交通商業及教育上の不便の甚しきものあるは是れ亦多言を要せず。此等も世界各國民の交通融和、文明の統一的促進、乃至個人の精神經濟の見地より國際協同問題として、共通に改定する提議を爲す事を要す。

第九節 結論

活動上より見たる我が國家教育の目的は、之を一言にして掩へば、世界に於ける帝國の使命を自覺して、之を遂行し、以て帝國の世界的發展を全うするに足る國民を養成する事に歸著す。而して帝國の世界的發展の途は、之を分てば、大體に於て二方面となる。一は自家固有獨特の文明を發達せしめ、之を世界に提供して、文明史上に一新境地を開拓し、人類進歩の必須の一與件たらしむる事是れ。一は世界に於ける特殊の關係的地位に應じ、其の爲し得べき範圍に於て、精神的醇化の努力を致し、世界の平和的進歩を助くる事是れ。前項は比較的永遠の方針にして、後項は時代の趨勢に應じ、其の急務とする處に従ふべきもの、更に此の後項に於て刻下の急務たるは、一、東西文明の調和に力むべき事、二、平和的進歩主義を主張する事、三、物質的文明の弊害に對する救濟運動を興す事、四、世界の經濟的勢力の均衡の爲に努力すべき事、五、東洋の開發に努力し、特に婦人の教化を急務とする事、六、萬國交通を簡便ならしむべき諸機關の發達を促進する事に存すべし。乃ち大正の教育は此等の國家的急務に顧み、之に適應する經營施設を興すを以て方針と爲さざるべからずと信するなり。

第四章 總括

吾人が上來の陳述は、敢て異見新説を唱へんとしたるものに非ず、唯國家永遠の理想と、帝國特異の使命とに基きて、斯民を進めんが爲めに、時勢の變遷に鑑み、將來の趨向に察し、之に適應する刻下急要の教育方策を定めんと欲して、其出發點乃至標準を求めたるのみ。蓋し嘗て日本の日本たるに過ぎざりし洋上の一小島帝國は、日清戰爭によ

りて東洋の日本となり、更に日露戦争によりて世界の日本となり、三轉して、第二維新の完成を要する大正の新時代に際會せる今日に於て、國家の發展を十分にし、世界に於ける使命を果さんと欲せば、大に國民の覺醒を促し、理想を養ひ、一方に於ては、皮相の習慣的機械的國家思想を開發醇化して、更に精神的根本的ならしむると共に、一方に於ては、從來東海の一隅に踞躡して只管祖先の遺澤に依頼したる保守退嬰の氣風を去り、追隨受動の態度を改め、自ら信ずる所に依り、積極的に進出して、世界的運動に参加し、人類文明史上に一新境地を開拓する方針に出でざるべからず。之が爲めに、列國と競争して一步も退かざる氣力を有すべきは固より言を俟たず、更に亦世界を舉げて著しく文明的精神的となり、主我私利の一方に偏せる低級帝國主義、淺狹なる武力主義の如き物質的機械的方法を以てしては、到底國家の眞發展を庶幾し難きに至れる現今の狀勢に顧み、人類全體の福祉を慮り、世界全般の進歩を考へ、列國と協同和衷、互に進歩を爲す間に於て、帝國獨特の面目を發揮し、以て國運を永遠に開き、更に進みては、世界に對し、精神的改善救済の貢獻を到す方針に出づることを要す。

此の見地よりする吾人が大正の新教育は、從來の國家教育の内容を更に深く精神的に進めて、其の眞義に徹底せしめ、更に之を個人的に擴充し、又世界的に開張し、更に實地社會生活上に其効果を發揮せざるべからず。此の四方面に向つて改善の効を全くせば、帝國の教育は、庶幾くば、渾然として完備するを得んか。而して其全體を包攝し、中心を貫通する所の樞軸は、即ち個人國家世界の一切を舉げて之を人格化し、生命の理想的顯現を結果せんと欲する根本主義にして、之を吾人が一切の計畫の出發點たり、又一切の努力の歸著點とす。

第二篇 方法論

第一章 教育過度説の可否

第一節 吾人が教育改善の趣意

吾人は既に第一篇に於て、國家教育の原義、帝國教育の根基、及び時勢に伴ふ帝國の使命を尋ね、以て今後適切なる教育の方針方策を定むる出發點を明かにしたり。

次には、此の出發點に立ちて、教育を行ひ、其の効果を實地に現はすに足るべき教育の制度方法に關し、吾人の所見を略述せんと欲す。但し吾人の新方案は、必ずしも從來の教育を全廢し、根本的に別箇の系統を作らんとするものに非ず、過去教育が時勢に相應して、偉大なる功績を收め得たる長所を看取し、其將來に對して適切を缺くに至れる所を削り、不足とする所を補ひ、漸次改善して、以て終に完璧の域に達せしめんとす、蓋し是れ効果を得る最良の方法なり。

但し是處に一言を附すべきは、世に教育改善を唱ふるもの頗る多しと雖も、其の間往々にして、過去の教育は過度なりとし、改善は教育の縮小を意味するものとして、努力と資金とを輕減するを本旨と爲すものあること是れなり。然るに吾人の提起せんと欲する所の教育改善案は之に反す。吾人は教育の縮小を欲せず、或る意味に於ては、寧ろ却つて教育の擴張を欲す。即ち教育法を改善することによりて、其の効を倍徒するの道を發見せんと欲す。故に吾人の

改善案は消極的に非ずして、積極的なり。吾人は信ず、目下に於ける世界の趨勢に於て、帝國の使命境遇に於て、又我が教育の程度狀況に於て、妄に經費節約、程度低下を唱ふるが如きは、頗る時務に迂なるものに非れば、則ち國民に對して不親切なるものなりと。今次に少しく教育縮小を唱ふる所謂消極的改良論者の所論を検して其の必ずしも正鵠を射たるものに非るを指摘し、之に就きて、吾人の所見を開陳せんとす。

第二節 教育費の問題

方今の教育改善論者中、我が國の教育費は、國力に比し過多なるが故に、更に節約せざるべからずといふ者あり。然れども我教育費は果して過多なるか否か。我が教育の機關設備は、孰れとして過度に膨脹したりと見るべきもの之れなきのみならず、必要を充たすに足るものすら之れなきに非ずや。高等學校専門學校等は年々多數の入學志望者を拒絶し、然らざるも、一校に過多の學生を收容し、教育諸器具の設備常に整はずして、教授上不便を告げ、教員の待遇は不十分に於て、良材を網羅し難き嘆あること、既に人の知る所なり。即ち教育費の過大といふが如きは寧ろ教育費の必要を解せず、或は教育の現狀を察せざる皮相の議論たるを免れず。且つ之を諸文明國の狀況に比較するに、

英國（一九二二年） 歳出總計

一八一、二八四、〇〇〇磅（二〇〇）

教育費

一八、七二八、七四四磅（二〇・三）

獨逸（一九〇八年） 歳出總計

二、三七六、六〇五、〇〇〇馬（二〇〇）

教育費

三二七、七七九、〇〇〇馬（一三・三）

佛國（一九二二年） 歳出總計

四、五〇三、八一七、五八七法（二〇〇）

教育費

二九七、九四四、五九九法（六・六）

米國（一九一二年） 歳出總計

六五五、七七五、〇〇〇弗（二〇〇）

教育費（目ナシ）

但し一九〇九—一〇年度公立小學校
及中學校費四二六、二五〇、四三四弗

日本（大正元年豫算） 歳出總計

五七八、一五〇、〇〇〇圓（二〇〇）

文部省費

一〇、五一〇、〇〇〇圓（二・八）

同（明治四十二年度決算）

國庫、道廳、府縣、市町村歳出全計

八〇五、三〇〇、〇〇〇圓（二〇〇）

教育費全計

八七、二三〇、〇〇〇圓（二〇・八）

にして、我國を以て之を英獨佛等に比するに、政府より教育費に支出する金額の少きこと帝國の如きはなく、然も且、差額の大なる實に異常なるを見るべく、其の中、教育費額の最も少き佛國に比するも、我が全歳出に對する教育費の割合は僅かに其の三分の一に足らず。而して又更に政府歳出中軍事費に對する教育費の割合を見るに陸海軍費合計額に對する教育費は英に於ては三・五對一強、獨に於ては三・四對一強、而して我が國に於ては實に一・八對一なり。（我が國の分は經常部、臨時部を合算せり）その對比率の大なる甚しといふべきなり。唯我が中央及び地方政費全體に對する教育費總額（農商務省、逓信省、陸海軍省に屬する諸學校費を除く）の割合を見るに、殊に著しく増加し、一〇〇に對する一〇・八に達す。是れ決して甚しき少額には非れども、地方事務に至りては、教育の外土木、衛生、勸業等の諸事業あるに過ぎざるが故に、政費の一割強を教育に費すを以て、過大と爲すべからざるのみならず、猶少しと言ふを適當とすべし。唯町村費のみを以てすれば、教育費は全歳出の五割強を占めたるが故に、過大と稱すべからざるに非れども、猶、之を國家全體に於て計算すれば則ち右の如し。況や英米に於ては、私立學校の頗る盛んなると共に、學校以外の各種補助的教育機關及び施設も亦盛大にして、此等に對して投ぜらるる公費及び、私人の寄附金

額の莫大なるものあるに於てをや。我國の教育に對する經濟的努力は、之を諸文明國に比し、絶對的比較に於て少量なるのみならず、その政費との割合に於て、頗る少額なりといはざる可からず。是れに依て之れを觀れば教育費は更に益々之を増加するを要するも、決して節減すべきに非るなり。唯研究を要することは、現に用ゐつゝある教育費中、果して冗費なきか、徒費なきか否かにあり。教育費の不足は自然に冗費徒費を生ずる機會を減少すべしと雖も、研究工夫の足らざる所に於て、猶比較的閑事に屬する費額、又は、切實なる効果なき方法に關する費額之なしといふ可らず。是れ吾人の今日の問題として、費用を節約する工夫よりも、之を有効にする工夫を以て急務となす所以なり。

第三節 教育過度説は皮相の見

此の説は、主として高等教育に關するものにして、我が目下の教育を以て、社會の必要以上に擴張せられたりと爲し、幾多の教育ある遊民を輩出せしめ、到る處に就職難の聲を聞くは、是れ其の証なりと爲すものあり。然れども吾人の見る所に從へば教育とは個人を發達せしめ、社會生活の状態を良好ならしむるを目的とする事業なるが故に、教育如何に盛なるも、決して教育の過度と稱すべき状態を現出すべきものに非ず。若し教育にして非難を受くべき結果を生じたりとすれば、それは決して教育の擴張普及の爲に非ずして、社會及び個人に對し不適切にして、効果を擧げ難きが爲めならざるべからず。所謂高等遊民なるものを出すが如き、或は就職難の嘆あるが如きは、則ち決して教育の過ぎたる結果に非ずして、教育の目的方法を誤り、其の良効果を生ぜざるものに外ならず。詳言すれば、教育は決して勞作を輕減する方法に非ずして、唯勞作の効率を増す方法を授くるに過ぎざることを解せず、國民が教育を以て勞作せずして生活する方法を教ふるものとなし、或は直に好地位を得、多額の俸給を得る捷徑となして、獨立獨創自ら

其の教育を活用せんとする者少きに因るに外ならず。是の如きは、決して教育が過度に行はれたる結果と爲すべからざるなり。

之を外國の狀況に比較するも我が國の高等教育が必ずしも過度ならざるを推すに足るものあり。

◎各國人口に對する學生數及び大學生數の割合

一、英國 人口 四千五百三十七萬人（一九一一年）

學生數 八百七十四萬六千人

大學生數 二萬六千八百人

人口十萬につき 學生 一萬六千七百四十人

同 大學生 五十一人強

全學生一萬に對し 大學生 三十一人弱

二、獨國 人口 六千四百九十三萬人（一九一〇年）

學生總數 一千百二萬三千三百人（一九一一年）

大學生 五萬六千四百人

人口十萬につき 學生 一萬八千五百人

同 大學生 八十八人強

學生一萬に付 大學生五十一人強

三、米國 人口 九千九百九十七萬人（一九一〇年）

學生總數 二千〇五十二萬七千四百人

大學及專門學校生徒數 十八萬四千七百八

人口十萬に付 學生數 一萬九千五百六十四人

同 大學及專門學生 二百二十一人弱

學生一萬に付 大學及專門學生 九十人弱

(專門學校とはカレッヂを指す)

四、佛國 人口 三千九百六十萬人(一九一一年)

學生總數(インフアノトス) 六百四十五萬二千人

高等學生數 四萬一千二百人

人口十萬に付 學生 一萬六千二百九十人

同 高等學生 百〇四人

學生一萬に付 高等學生 六十四人

五、日本 人口 五千〇二十六萬人(明治四十二年 樺太臺灣を除く)

學生總數 七百五十八萬八千八百人

帝國大學生 七千三百人

私立大學及各種專門學生 五萬六千人

人口十萬に付 學生 一萬五千九十九人

同 帝國大學生 十四人六分

同 私立大學及專門學生 百十二人弱

學生一萬に付 帝國大學生 九人三分

同 私立大學及專門學生 七十三人七分弱

右の表に於て、人口に對する全學生數の割合は何れの國よりも低位にあり。而して英獨の大學と我が帝國大學と略同程度のものとして比較するに、我が大學生數の全人口に對する割合、及び全學生數に對する割合は、共に著しく低位に在りて、彼と比較するに足らず。更に公私專門學校以上の學生を合算せるものゝ割合に至りては、之を佛國に比すれば上位にあり、米合衆國に比すれば甚しく低位にあるを見る、然り而して歐米諸國に於ては、未だ曾て教育過度の聲あるを聞かず。若し帝國の文化にして、永遠に此等諸強國の下風に立つを理想とせば則ち止む、苟も彼等と相比肩し、更に優勝の地位を占めんと欲する以上は、焉ぞ今日の狀態を以て教育の過度と稱すべけんや。前述したる如く、教育の普及は過度なるに非ず、猶未だ不足なると共に、教育の功率を生ずることの甚だ不足なるを見るなり。

第四節 年限短縮論の是非

第三に、我が國の教育程度は社會の要求、個人の活動の上より見て、高きに過ぎ、從つて卒業年齢長きに過ぐといふ非難あり。此の説は卒業後直に實務的職業に就く者の見地より、及び歐米大學卒業年齢との比較より、帝國大學に對して下せる批評にして、此の點に於ては決して理由なきに非ず。單に實務上職業上よりのみ觀察すれば、帝國大學を卒業して後之に就かざるべからざる勞作は、比較的少なく、其の高尙なるものと雖も、大部分は現在の高等專門學校程度の知識技能を以て足れりと爲すべきが如し。然れども今之を文明の發達、學術の進歩の上より觀察すれば、教育の程度の高きに過ぐといふべき限界あることなく、爲し得る限り高尙深遠なるを可とすべし。我が文化の程度を顧るに、非常に進歩したりとはいふと雖も、之を歐米諸國に比すれば、各般の事に於て猶遜色あることを免れず、殊に

學藝の研究に於ては、殆ど世界に對して一の權威を樹立するに足るものなく、留學と翻譯とによりて、辛うじて必要を充しつゝあるなり。是の故に、一部に於ては國民生活の實狀を顧み、教育をして更に實地の要求に適應せしめんが爲に、其の程度を低下するの必要あるべしと雖も、一部分に於ては、現在よりも更に高尚ならしむる必要あるものといふべきなり。

更に又年齢如何を考ふるに、我が帝國大學卒業年齢を歐米諸國の學生に比すれば長きに過ぐといふは事實なり。歐米諸國に於ける大學卒業年齢は二十二年なるを普通とするに我が帝國大學卒業年齢は少くも滿二十三年乃至二十四年數ヶ月を降ること能はず。然も高等學校入學の困難なるが爲に、一二年以上を延長する者を多しとす。之を歐米人に比すれば早熟早老にして、活動期の短きを相當と爲すべきが如くなるに、彼よりも却つて長き年月を學窓に費すは、決して賢明なる方針なりと爲すべからず。殊に帝國として活動努力を要すること明治の時代に倍すべき大正の時代に於ては、青年の元氣に俟つこと多大なるものあり。此の時に際し、彼等を長く學窓に留めて、其の旺盛なる活力を生産的準備作業の間に消耗せしむるは、之を以て一種の浪費と稱するも不可ならず。是の故に年限短縮論は、之を外國との比較に見るも、我が社會狀態より見るも、亦教育上より見るも、相當の理由あるものといふべきなり。

然れども、是れ亦實務上職業上の見地よりせる議論にして、此の見地に於ては、修業年限短縮は確に社會の要求に適應するものなるべしと雖も、教育は單に實務上職業上の見地よりのみ論ずべきものに非ず。一個人としての人格的自由修養の要求、學者研究家の養成の必要も亦顧み來らざるべからず。若し此等の要求を顧み來る時は、一概に修業年限を短縮するの必要にあらざるのみならず、又不利益なることあるべし。學術上の修養を十分にし、學者研究家として進まんが爲には、種々の基礎的學習を爲す必要多く、而も我が國語の困難なるが如き、知識の大部分を外國より借り來らざるべからざるが如き、我が國民の歐米國語を學ぶの困難なるは到底歐米國民相互に他の國語を學ぶの比に

非るが如き、種々の障害あり、歐米人に比し、修業年限の多少伸長するは、又止むことを得ざるものなきに非ず。

是の如く、大學の程度低下、修業年限短縮の議論には一部に於て相當の理由あると共に、一概に是を以て全部を律すべからざるものあり。實務家たるべき多數者の爲には、程度を低くし、年限を短縮すること適當なるべく、深く研究修養を要求する者の爲には、更に課程を高尚にし、修業年限の如き、必ずしも之を論ぜずして可なり。

要するに、程度及び修業年限の如きは、教育の目的如何、効果如何の問題に繋りて存す。目的に對して適切ならず、其の効果の實地に十分ならざる教育は、一年にして終るも猶長きに過ぐるものといふべく、目的高大に、効果の偉大なるものならば、十年にして終らざるも亦之を長きに過ぐといふべからず。故に唯機械的に程度低下を叫び數理的に修業年限の長短を論ずるは無意義にして、寧ろ其の實質内容上の効果如何を検し來り、之によつて自然に程度年限を決定せしむるの適切なるに若かず。且つ夫れ、個人が修養上の要求より言はゞ、教育は其の生涯に涉りて廢すべからざるものにして、學校の卒業を以て之を限るべきに非ず。従つて學校の程度年限の如きは、必ずしも重要な問題に非ず、時處事情の如何に依つて、適宜之を改定するを可とすべきなり。

第五節 總括

之を要するに、吾人の改善策は徒に教育費を減じ、程度を低くし、年限を短縮し、以て教育の縮小を謀らんとするに非ずして、現在よりも更に更に教育の功率を増加する方法を講ぜんとするに在り。年限、費額を現在と等うするも、其の功率を二倍し三倍するの道を發見せんとするに在り。此の意味に於て、吾人の立脚地は教育縮小に非ざるのみならず、却つて教育擴張に在るものなり。

抑も教育の功率を増加する方法の反面は浪費を減ずるに在り。而して教育の浪費の由來する所は制度、機關、方法

等の衝突、孤立、重複、過不足の爲に、勞力の徒費相殺を爲すに在るが故に、浪費を減せんと欲せば、此等の諸缺點を矯正し、各部十分に其の價値を發揮すると共に、能く實地に適切にして、且つ互に圓滿なる調和を有し、全體を通じて一貫せる目的によりて統一せられざるべからず。是れ吾人が教育制度改善の要點なりとす。

歐米諸國に於ては、浪費を減じて功率を増加する工夫は先づ商工業に現はれ、之が爲に物質的文明をして今日の盛況に達せしむるを得たり。而して其の餘勢は更に精神的事業に影響し、人格的諸能力諸活動の功率を全うして、一の徒費徒勞なからしむる工夫に力むるに至れり。是れ實に歐米文明に一轉機を與ふべき重要な著眼點なりとす。帝國の前途は必ずしも歐米の爲す所を摸倣し之に追隨するを要せずとするも、少くも歐米と相匹敵對立するに足る發達進歩を爲すことを要す。我が文化と國力とにして、若し常に諸外國の後塵を拜するに止らば、使命の負荷如何に重大なるも、歴史の精華如何に善美なるも、到底之を世界に發揚するの餘地なかるべきなり。歐米に後るゝこと數歩の後に在る帝國現在の文化と國力を以てして、歐米に匹敵し、更に其の上に出づるに足る發達を遂げんと欲せば、實に能力發達の功率をして、過去に數倍し、又彼に數倍せしむるの用意努力之れなかるべからず。是れ實に國家の運命に關係する重大問題にして政治、經濟、學術等、各方面の事業に於て、之が考究を忽にすべからず。吾人が先づ教育に於て其の解決を求めんと欲するも、亦その見地よりするものに外ならず。

更に一步を進めて考ふるに、教育の効果如何は、之を社會に現はれたる實績に徴せざるべからずと雖も、教育直接の干渉する所は即ち人に在り。教育の効果は人の發達、人物の生成如何に於て之を見るべく、其の社會に於ける實績も亦各個人の活動の成果によりて擧げらる。是の故に、吾人が教育の制度機關方法は吾人が既述せる國家教育の理想に鑑み、且つ社會の實生活に密着するを期すと雖も、其の直接目的とする所は各個人の教養に在り、各個人をして各完全なる發達を遂げしめ、其の能力を十分に發揮せしめば、其の社會に於ける功績は自ら充實するに至るべきなり。

又之を經濟上より考ふるも、國家の實力の所在は決して機械物質に非ず。此の機械物質を生産し、之を使用し、之をして價值を生ぜしむる所の人其の者に在り。即ち國力とは國民たる各個人の裏に含蓄せらるゝ所の能力に外ならずして、個人の人格力は、即ち國力社會力となりて各種の活動及び事實に現はれ來るべき無限の潛勢力なりとす。此の故に教育は此の年限の潛勢力を培養し、發揮し、以て文明的諸勢力たらしめんが爲に、個人の人格を發達せしむる努力に外ならず。吾人の教育方策が總て此の人格的能力を遺憾なく開展發揮せしむることを直接目標として計畫せらるゝは、蓋し之が爲めのみ。

第二章 教育上の浪費

第一節 教育上の功率と浪費

教育の目的方案の如何に善美なるも、若し此が効果を實地に擧ぐるを得る所以の處理法にして、適切妥當ならざらんか、其の努力は無用に歸し、或は却つて弊害を遺し、精力の浪費となり終るべきなり。故に吾人は先づ教育上浪費を生ずる主要の事項を觀察して、之を矯正する方法を講究し、之に依て適當なる教育方案を工夫せんと欲す。

近世事業經營上事務處理に關する工夫の中心問題は、實に如何にして費されたる力に對し、其の成果の割合を増加するを得べきかに在り。分業法の工夫の如き、機械の發明の如き、總て人力資本時間等を節約し、而して却つて生産の量を倍增し、其の質を精巧にする結果を生ずるものに非るはなし。殊に近年科學の發達著きに伴ひ、功率増加の方法も亦科學的に研究せられ、事務上分化と統一との按配の益々精緻緊密に行はるゝことゝなりたると同時に、或は物

理上の研究によりて、無用の活動を省き、或は筋肉運動の研究によりて用具を改良し、或は疲労に關する研究によりて、勞作の規律を改善し、或は個性能力に關する觀察に基きて、適材を適處に排置し、神經作用に關する研究によりて仕事の順序配合を變更する等、局部に於ける各種の功率増加に關する工夫は、極て合理的精緻の域に進まんとしつゝあり。

從來教育上に於て科學的工夫の加へられたるは、主として教授法の上に存し、先づ社會生活上必要なる學科を設定して、如何にして最も容易に此の所定の知識を授け終るべきかを工夫するに在りき。然るに科學殊に心理學の進歩の結果、單に教授訓練上の効果を收むる方法のみならず、教育法の基礎を兒童の要求に置き、而して其の個性特能の發達を十分ならしむる要件如何を研究し、更に進みて、學校制度及び其の運用の上に、科學的事務處理法を應用し、以て教育的功率を増加せんと努むるに至れり。即ち教育上の功率増加の要件は、分れて二部となる。一は兒童の個性特能を十分に發達せしむる方法、一は教育に費さるゝ各種の力の効果を十分ならしむる方法是れなり。然れども、共に教權的獨斷を離れ、科學的考察によりて得たる原則を應用するに至りては一にして、相合して一箇有効の教育法を編成す。

社會の進歩益々迅速にして、生存競争の劇烈日に倍加すること今日の如きに當りては、一般に人の活動努力の功率を増加する工夫は極て切要なるのみならず、國力猶未だ強大なりと爲すを得ずして、而も蓋に歐米諸國と比肩して進まざるべからざるのみならず、今後政治經濟上、世界的に中心たるべき東洋の要地を占め、精神的に物質的に幾多の難關を突破して、固有の使命を行はざるべからず、従つて歐米に倍する進歩發達を爲さざるべからざる境遇にあること帝國の如きに於ては、此の功率増加の工夫の最も切要なるを感ず。教育の如き、國力培養の根本たる業にして、其の效果の期待せらるゝこと極て急切なるものに關しては殊に然り。

吾人は先づ教育の理想的奏功を妨げ、功率を増大する代りに、却て人力と學費と時間とを無益の消耗損失に歸せしめ、或は寧ろ有害の結果を生ずるが如き、原因の孰れにあるかを指摘し、而して後徐に是が改善法を講究せんと欲す。蓋し効果を増大せんと欲する時は、先づ其の努力をして徒費徒勞に終らしむべき、弊所缺點を明にするを必要とすればなり。

第二節 各種の衝突矛盾より來る浪費

思想、方針、機關、方法の間に統一なく、互に孤立して衝突矛盾する結果は、甚しき努力浪費を惹起す。たとへ其の各部分皆正善且つ完全なるも、其の關係にして圓滿を缺き調和を有せざるときは、各其の價値を發揮すること能はざるのみならず、交々其の活動を妨害し、其の効果を相殺することを免れず。此の遺憾は國家の内外に於て、又各社會個人に於て、到る處に發見せらる。假令ば、國家間の衝突は、其の兩國民のみならず、周圍の諸國民をして、物質的に將た精神的に往々絶大の損害を被らしむ。戰爭の爲に活氣を添へ、従つて文明の發達を刺戟するが如く見ゆる場合も少からずと雖も、得る所の總計は到底費す所の總計に當るに足らざるは、日露戰役後に於ける日本の狀態に徴して之を察すべし。國家以内に在りても、或は産業の方針と貿易の方針と矛盾するが如き、國防の方針と外交の方針と扞格するが如き、殊に國是と教育方針との調和なきが如き、此等皆其の努力は徒に國民の努力浪費に歸し、國家の發達を害する結果を生ず。今思想上及び實務上に於て、教育上有害なる衝突矛盾の主なるものを列舉すれば、概ね左の諸項に歸すべし。

第一 新舊思想の衝突

舊物は新物を生みて之を育成し、新物は舊物の中に其の根據を養ひ、基礎を堅くし、茲に始めて事物の健全なる發達は成る。新時代の發展を許さざる舊時代は即ち死滅の豫定にして、舊時代に其の基礎を有せざる新時代は即ち空中樓閣のみ。新と舊とは其の轉換の間に密接不離の關係を有し、兩々相援けて以て社會の進歩發達を健全ならしむべき任務を負へるものといふべきなり。

然るに新舊の二思想は往々にして相衝突す。新思想は舊思想を以て無用の廢物となし、有害なる形體となし、一に唯之を破壊し棄却するを以て能事とし、舊思想は新思想を以て異端邪説となし、危険なる破壊力と爲し、一に唯之を抑壓束縛するを以て能事とし、互に相闘ぎて、遂に兩々相傷害し、遂に延いて國家社會の大事を逸するに至る。

特に舊思想は從來の情勢を有し、現狀を維持せんと欲する人情に投じ、一個の習慣的形式を固定するを以て、強大なる勢力を伴ひ、將來の發展の爲めに其の基礎を爲すの使命以上に出でて、所謂頑冥固陋なる保守主義を生み、總て新思想新事物を排斥し、必要にして止むべからざる進歩改善をすら、之を抑壓せんとするに至る傾向あり。其の傾向の教育上に現はれたるものに至りては、學制、學則、諸機關の組織運用の方法等が時勢の進歩に伴はず、その缺點の明かなるにも拘はらず、從來有効なりしを以て、永く完全無缺なるものとして、之が改善を沮むが如き、子弟の思想態度の、父老先輩と同一ならざるを以て、直ちに之を邪道視し、危険視し、之を指導せんとせずして、徒に束縛せんとするが如き、人をして只管過去にのみ執着して時勢の變化、世界の進運に注意せず、現狀の維持、無事泰平を冀ひて、將來の事を慮らず、長く惰眠を貪らんとする一種の固癖を成さしむるの弊少しとせざるなり。

由來本邦人は理性的的研究的國民に非ず。何等か問題の起る毎に、十分の同情と誠實とを以て、徹底的に事件の眞相意義精神を理解し、冷靜に批判評價し、而して後賛否を決定する用意に乏くして、各自己の憶測と獨斷とを基礎とし以て、外面より或は阿附雷同し或は非難排撃を試むる傾向あり。是を以て學問上の爭議に於ても、互に討究したる結

果、相發明し、相理解して、最後の眞理に到着する結果を生ぜず、問題の本旨と多く相關係せざる嘲謔漫罵に終ると少しとせず。是の如き氣風は合理的社會生活を營むに不便なるは、勿論理由を問はずして、其の觸るゝ所、辯ずる所に執し、或は漫に舊思想を讀し、或は漫に新思想を喜ぶ輕薄なる態度を示し易く、學術の進歩、文化の發達上甚有害なるが故に、必ず改善するを要す。

第二 國家主義と個人主義との衝突

國家主義と個人主義とは必ずしも衝突せざるべからざるものに非ず。國家の實質は即ち國民たる個人にして、各國民の十分なる發達によりて、國家は始て強大なることを得べく、各個人が生活を保護する勢力は即ち國家にして、國家の威力の強大なるによりて、各個人は始て、安全に發達を遂ぐることを得べし。國家は個人に依存し、個人は國家に依存す。則ち兩者は互に相調和せざるべからず、且つ調和することによりて、共に健全なる發達を爲すを得るなり。従つて國家を主として國家主義といひ、個人を主として個人主義といふも、決して相孤立し、又は相背反すべきものに非ず、兩者共に存立し、而して相一致協同する所に中正なる社會の進歩を見る。

然るに、國家主義又は個人主義にして、各其の自家相當の領域を脱し、他の領域に侵入して干涉を試るに至り、衝突は即ち是處に起る。國家主義は、其の實現に急にして、統一を重んずるに過ぎ、個人を以て全然其の奴隸とし、手段とし、毫も其の自由なる發達活動を許さざらんとするに至れば、個人は其の束縛壓迫に堪へず、遂に起つて之に反抗し、更に激情の迸る處、唯之れ破壊を喜ぶに至る。個人主義亦其の發展に急にして、國家の權威を無視し、社會生活の原則を破らんとするに至れば、國家社會は自家の健全なる存立を維持せんが爲に、遂に個人を壓抑束縛し、自由活動するの餘地を與へざらんとし、其の惰力の累積する所、往々極端なる專制主義となり、却つて國家の衰亡、社

會の解體の因を作るもの、歴史上枚擧に遑あらざるなり。

吾人に個人の生命あり、又國家の活動ある以上は、教育に於て個人主義を採用し、同時に國家主義を採用するの當然なるは言を俟たず。唯其の各主とする所に執して、極端に走り、一方に偏し、一部の眞理を以て全體を束縛せんとするに至りては弊害の生ずるを免れざるなり。殊に國家主義は常に國家の勢力を結合し、必然に絶大なる權力を伴ひ來るを以て、個人主義を壓倒して、過當に國家主義を強ふること多く、之が爲に個人をして萎靡せしめ、或は不反抗を起さしむるに至る。是れ實に個人の爲に不幸なる結果を齎らすのみならず、國家社會の爲めに、無用有害なる浪費に終るものといふべきなり。我が教育が畫一に過ぎ、規則的に偏し、人格の自由なる活動を許さざるが如き、蓋し又國家主義過重の一弊ならずとせざるなり。

第三 帝國主義と萬國主義との衝突

近世個人的自覺の益々著明となり來れるとともに、國民的發展の要求も亦愈々強大となり、勢の赴くところ、文明諸國をして悉く帝國主義を採用せしめ、彼の理想的共和主義、人道的民衆主義を以て世界に誇れる米國人をすら、同一趨勢の下に驅り入るゝに至れり。之に加ふるに、經濟産業の發達は其の活動の市場を汎く世界に求め、資本の勢力によりて國家を動かし、等しく亦帝國主義を探らざるを得ざらしむ。而も亦各相孤立して互に抗争を事とするの、人類的生活上、文明進歩上不利を醸すること少からざる者あると共に、精神的文明の發達は、物質文明の基礎の上に立てる帝國主義の缺點を發見し、他を無視して、獨り自我を主張し、威力を以て優勝の地位を占めんとする帝國主義のみによつて國民的發展を圓滿にする能はざるを覺り、四海同胞の見地より、人道的理想を原則として、萬國互に相協和し、相救濟し、自己と共に他を立て、全體の中に己れを立てんとする萬國主義の發現を促しぬ。此の兩主義の究

竟目的とする所、即ち一は國家独自の活動發展を爲し、一は萬國協同して人類の幸福を増加するの兩面は、今日の社會に於て、共に缺くべからざる原則と爲す。

然るに二主義の出發點を異にして、且つ其の進化の十分ならざるがために、又人類の識見及び感情の發達の不十分なるがために、兩者往々相衝突し、互に敵視するに至ること少からず。世界の趨勢は著しく萬國的となり、四海人類の精神的融和を求むる聲を聞くこと多く、従つて國民の之に動かされて新見地を開拓せるものあるに至れるにも拘はらず、往々偏狹なる物質的、武力的、帝國主義を強ひ、之を以て民衆の全思想を統一し、全性格を鍊成せんとするが如き場合あり。彼の學校教育に對して、妄に尙武主義を強ひ、趣味の教養を排し、過去の野蠻生活を強ひて、文明的理想を排するが如き、時勢に適應すること十分ならざる教育は是處に生じ、思想の混亂を導き、人類生活上の一大浪費を來すに至る。此の弊は從來未だ甚だ著大ならざりしが如きも、思想の益々世界的となり來るべき今後に於ては、十分考究を要すべき問題の一なるべしと信ず。

第四 社會と家庭と學校との衝突

教育は人の生涯を通じ、生活の全部面に互りて行はるゝものなるが故に、其の生涯を通じ、生活の全部に涉りて境遇を作る所の社會と家庭と學校とは、同一の終局的理想の下に統一的活動を爲し、一貫したる教育的影響を與ふることを要す。然らざれば、人の性格は健全なる發達を遂ぐる能はざるなり。

然るに現今に於ては、社會と家庭と學校との、相互の間に教育的連絡之れ無きのみならず、往々にして相反せんとする者あり。學校に於ては理想を教へ、道徳を教へ、正義人道忠君愛國を以て生活の主義と爲すべしと教ふるに、社會に於ては唯事務の才能、物質的成功を賞讃し、家庭に在りては、習慣的の人情と地位財産上の優勝とを獎勵す

るが如き、或は方法上に於ても、學校は學生の將來永遠の發達を豫想し、學理的秩序的方法により、其の人格の基礎的教育を施さんとするに對し、社會は卒業後直に實務に就いて成績を擧げ得る如き、目前速成の教育を要求し、家庭は唯父母の意に従ひ、甘んじて家族の犠牲となり、古來の習慣風俗に適合する教育を要求するが如き、其の例に乏しからざるなり。

是の如く、教育の目的方法等に於て相衝突矛盾すること少からざる此の三種の境遇は、今日國民たる以上必ず通過せざるべからざるが故に、少年は其の適從する所を發見するを得ず、思想感情の混亂涵濁を來し、健全なる統一的性格を作るに違あらずして、營々として徒に機械的生活を終るに至る。殊に教育機關としての學校の職能上よりして之を見れば、學校は其の教育の基礎を家庭に求むることを得ず、又其の他の結果を社會によりて實現するを得ず、斯くて、各々相裨補し難きのみならず、互に相妨害する場合多し。是れ實に甚しき社會的浪費なりといはざるべからず。

第五 宗教と教育との衝突

宗教と教育とは人類教化の二大機關にして、個人の生活に於ても、亦社會の文明に於ても、共に二者相關聯する處と頗る緊密なるものあり。然るに不幸にして、宗教と教育と相調和せずして、却て相衝突する場合少からざるは、教化上甚だ遺憾なりといふべし。蓋し、宗教は堅固なる信仰を根柢とするが爲に、固定沈滯し易く、又特殊の教條戒律儀禮等を有するが爲に、一方に偏傾し易き弊あり。是の故に常識道德に準據し、時勢と共に進歩するを要する教育よりして之を見れば、往々にして障害を爲すことあるを免れず。然るに、教育は又常識に従ひ、通俗を主とするを以て、屢々淺薄なる實利主義に囚はれ、輕浮雜駁なる末技の傳授に陥り、高尚なる精神品格を養ふ能はざることあり、之が爲に、超凡脫俗、唯其の信ずる所の至上善の犠牲と爲るを念とする宗教家の要求に背戻することなきに非ず。是

の如くにして、宗教と教育とは、須く相一致すべくして而して相一致せず、却つて扞格齟齬する結果、子弟の教養上屢々困難を生ぜり。是を以て、近世に於ては文明諸國は多く宗教と教育とを分離せしむる方針に傾けり。

但し吾人の見る所に依れば、從來の宗教と教育とは屢々扞格矛盾せりと雖も、之れ必しも宗教及び教育の絶對的性質より來るものに非ず。宗教も教育も共に人の衷心深き處より發する要求に其の立脚地を有する以上は、絶對に兩者をして分離せしめざるべからざる謂はれなし。現今宗教と教育との分離せるは、蓋し兩者に附隨する弊所缺點に甚く混亂を避くるが爲に採る所の消極的方法たるに過ぎず。此の重要な二大教化機關をして全然無交渉たらしむるが如きは、蓋し人生社會の一大浪費なりといはざるべからず。

第六 教育機關の組織運用上の衝突

(イ) 學制の不完全

學制學則の制定不完全、且つ固定的にして、各部の變化、及び聯絡の圓滑自在なるを得ざる時は、教授學習、經營等、諸種の重複衝突より、幾多の徒勞を惹起す。例へば、帝國大學を卒業すれば、職業上種々の利便を享有するが故に、其の入學志望者は甚だ多數なるにも關せず、其の豫備校たる高等學校豫科に入學するを得るものは、志望者の二割餘に過ぎず、之が爲に多數の學生は僥倖を庶幾する試験勉學を爲すを強ひられ、到底健全なる學習修養に専心するに遑あらず。而して試験を通過するを得ざりし者は、更に一年同一課程の復習に費し、然らざれば、自暴自棄して、怠惰放逸に流るゝに至る、其の浪費と害毒と、蓋し尠少に非るなり。且つ又帝國大學に入學するものは、必ず高等學校の卒業試験を経ざるべからず、而して大學院に入學するものは帝國大學本科卒業者ならざるべからざるが故に、志ある者にして、必要な或る問題に就て研究せんと欲するも、其の機會を有せざることとなり、才能を埋没するに終

る遺憾なきに非ず。又女子にして高等教育を受けんとするも、其の機關に乏しきが如きも一缺點たり。私立大學にして帝國大學と全然同様の組織を有する者に非れば、大學とは認めず、専門學校よりも寧ろ帝國大學に接近せる私立大學あるにも拘はらず、總て之を専門學校とするが如き、或は單科大學の設立を許さざるが如き、相當の理由にあるべしと雖も、形式上の整備の爲に、實地の要求と多數者が學習の機會とを沮害するの結果を免れず。或る學科目の間に教授時間を増減し、或は教授年度を變更したるが爲に、其の學力、教育の效果に差異を生ぜざるにも拘はらず、某種類學校として政府に認めらるゝを得ず、従つて某種類學校の享有すべき特典を享有するを得ざるが如き、亦社會の事情と、當時者の判斷識見とを無視し、形式の爲に無用の徒勞を強ふる結果を生ずるものといふべきなり。

(口) 學則上の不完全

諸種の學則を以て基本的標準とせずして、限定的の規律とし、一も違ふこと能はざるものとするが爲に、之が運用の適切を失し、教育機關の價値を十分發揮する能はざらしむる場合少からず。

同種程度の學校は悉く一樣に定められたる全學科を教授せざるべからず、又一學校の生徒は同じく一樣に全學科を學習せざるべからずといふが如きは、社會の實狀と、個人の要求とに應じて學校の教育的効果を發揮する所以に非ず。實業學校或は専門學校に於ては勿論の事なりと雖も、普通教育に於ても一切の學術を一樣に注入するを以て即ち完全なる教育なりと解するが如きは、機械主義の甚しきものにして、之がために學生の精神を散漫ならしめ、才能と趣味との發達を沮害する恐れ少からざるものあり。

殊に、中學校高等女學校等にありては、或る一二學科に對し、俊秀なる才能を有するも、全學科に於て規定の點數を得るに非れば進級せしめず、學校を通過せしめず、而も高等の専門學校は中等學校卒業に非れば入學せしめざるを以て、此等特能ある少年は遂に其の特能を展ぶるを得ざるか、或は資格を備ふるがために多大の年月を空費せしめざ

るべからず。是の如きは能力經濟上甚だ不利益なる方法なりといふべし。

一般に、普通教育に於て、あらゆる能力を開發し、性格の完全なる涵養を計るを本旨と爲すべきは勿論の事なりと雖も、然れども、學生の天賦傾向、特能特長の發達に不注意なるは、教育の實効上よりいふも、學生の能力經濟上よりいふも、不利益なるを免れず。

規定せられたる必須學科目過多にして、學校として、事情の宜きに應じて増減し按配し得る範圍極て狭小にして、適切なる効果を擧げ難き憾みあると共に、教授時間數も亦た過多にして、學生が自動的に豫習、研究、實驗、復習する時間なく、從つて唯教授せられたるものを誦記し、試験に臨んでは好成绩を表はすことにのみ腐心するに至り、自發的獨立研究の能力萎縮するの結果を呈するは、之れ亦徒費徒勞の甚しきものといはざるべからず。

(ハ) 教授上の統一を缺く事

今日の教育の効果を減殺する一の重大なる原因は、各科目の教授上に連絡統一を缺く事に存す。各科が同一原則の下に有機的に組織せられて、渾一的知識の各部を爲し、以て互に相援助し、相補充するが如き方法を缺き、各科獨立して、別箇の主張と價値とを以て、其の最大限の要求を學生に提出するを以て、各學生の受くる所は、或は相重複し、或は相減殺し、且つ過重負擔となり、其の結果は精神能力の有機的發達を害し、雜然として散亂せる多種類の知識を記憶するに過ぎざることゝなる。

各科の教授法に於ても、發生的研究的方法により、學生をして自己の力を用ひて、其の知識と共に之を收得する方法をも學習せしむる態度を缺き、教師の既に研究し置きたる結果を報告して聴取せしむる方法に出づるに止まるを以て、教授は注入的となり、學習は記憶主義となり、知識追求の興味と方法とを養ふ能はざる憾みあり。從つて又教科書を用ふる場合には學生をして、唯之を理解し記憶せしむるに止まり、此の教科書を基礎とし、參考として、自ら更

に系統的に實驗研究的知識を整理組織せしむる主要の仕事等を等閑に附する事多きが如し。是れ學生の能力開發習練上大なる缺點なりとす。

第七 學問と實地研究と應用との隔離

本邦に於ては、學問と實地と調和せず、學問は唯學問として孤立し、實地に其の効果を生ぜざる遺憾多し。是れ一は實地家が往々學術を蔑視し、其の價値を認知せざるにも因れど、又學術の研究が、唯理論の構成にのみ走り、實地應用の方面に疎懶なるに依るもの少からず。而して其の根本は、教育が一般に形式主義にして、實効を重んぜず、注入的にして發明工夫の能力を開發せざるに存す。教育の功率を増加し、經濟と教育とを調和せんが爲には、改善せざるべからざる缺點となす。

第八 人格教育と職業教育との分離

人格教育と職業教育とは常に相伴はざるべからず。然るに本邦教育に於ては、人格教育と職業教育と全く相隔離せる觀あり。普通教育に於ては道德主義を主とし、品性を養成せざるべからずとして、實地の事功を顧みざる風あり。之に反して、専門教育に於ては、知識技能の發達のみを主とし、人物品格の事は措いて問はざるの風あり。是の故に、或は知識あるも、實社會に立ちて活動するに迂遠なるものを出し、然らざれば、則ち功利主義の一邊に走りて利益の爲に人生の一切を犠牲にして顧みざるものを出す。社會を組織する活動者をして、此の如くに相偏僻し、相隔離せしむるは、甚しき人物浪費と謂はざるべからず。

本邦教育に於て、一般に理想を養はず、品性を養ふといふも、唯習慣的道德の項目を教授するに過ぎざるは、生活

改善の任務を有する教育の一缺點なりといふべし。實地家中には、思想を啓發すれば、徒に空想に走り、實地の労働に勉めざる氣風を作るとして、なるべく強ひて、子弟を壓抑して眼を高處に着けざらしめんとするものなきに非ず。眼高手低は美事に非ずと雖も、而も教育の職能は着眼を高からしめて、且つ着手をも高からしむるに在り。思想なくして唯効果のみを生ずるは、即ち死せる機械のみ。如何に教育の實効を重んずるも、人物を以て死せる機械たらしむべきに非ず。思想を啓發せるが爲に實地の労働を厭ふといふは、決して教育の必然的結果に非ずして、誤れる教育の結果たるに外ならざるなり。

第九 全體の調和的發達を缺ける爲に生ずる浪費

凡そ教育は社會全體の諸要素諸勢力を以て個人の全性格、全生活を涵養するに非れば、其の完全を期し難し。故に政治も實業も宗教も藝術も、共に教育の理想に向つて協力することを要す。否啻に一國內のみならず、今日の如き交通の頻繁なる時代に在りては、恐くは世界全體の協力に依るに非れば、十分なる教育の効果を庶期し難きものあるべし。殊に況や教育に關する諸施設諸機關に於てをや、其の調和協力、同一の步調を以て事に従ふの必要なるや論を俟たず。然るに從來の教育は此の點に於て遺憾を感ずるもの少からざるを見る。官立と私立との學校關係の如き、上級學校と下級學校との關係の如き、同程度、同種類の學校個々の關係の如き、更に又降つては、一校内に於ける教育の各方法、材料、教員間に於ける關係の如き、必ずしも緊密なる調和を、保てりと爲すべからざるものあり。従つて又之を學生各個人よりして見るも、其の心身諸能力諸活動の全部に對して、其の調和的發達に努むるものと爲すを得ざるもの多し。此等の點に對しては、更に研究を加へ、機關方法の各方面をして、全體の關係の中に適當なる位地を占めしめ、各特色を發揮せしむるの工夫を爲すは、將來の教育に於て、最も切要なるべしと信ず。

第三節 壓迫抑制より來る浪費

第一 鑄型主義的教育

古來の教育は多くは習慣的思想によりて、一種の人物型式を定め、個人をして之に適合せしむることを方針と爲せり。恰も盆栽家が山谷廣野に在りて、自由に生長すべき草木を採り來りて、根を鉢に限りて、小さく回旋蹠屈せしめ、芽を摘み、枝を撓めて、伸長を遮り、徒に屈曲縱横ならしめ、以て趣致を生ぜりとして賞美すると等しく、各自の本性稟賦を自由に發達せしめ、將來無限の進歩を豫期するに非ずして、一定の品格行狀を具へ、圓滑に周圍に適合し、太平無事にして一生を終らしむることを強ひたるなり。是が爲に各個人が自由なる發達進歩は沮止せられ、發見發明新工夫の興味起らず、元氣も亦萎靡沮喪するを免るゝ能はずして、遂に社會生活の内容をして單調貧弱ならしむるのみならず、各個人の精神をして満足せしめざるが故に、或は無精神なる奴隸的機械的人間となり、或は不平を起し、反抗的思想を懷くに至らしむ。是の如き教育は、社會にとり、又各個人にとりて、非常なる徒費徒勞にして、寧ろ天物暴殄と稱すべきもの、全く一新せざるべからざるものなりとす。

第二 受動主義的教育

鑄型主義教育を學生より見れば、則ち受動的他動的教育となる。鑄型主義的教育を行はんと欲すれば、勢萬事を外部より注入せざるを得ず、各自の個性を認めず、又其の自動を要せず、寧ろ各自の志向性能の自由なる伸展を許すことを不便とし、其の取扱は一齊的にして、一定の規則を用ゐて、全體を一樣に律するを必要とし、又之を捷徑とす。

教師と、規則と、教科書とは、常に絶大の權威を占め、生徒と、精神と、研究とは、常に壓迫せらるゝを免れず。

學生は自己の意志を以て進出することを要せず、唯導かるゝがまゝに追隨すれば可なり。學生は自己の知識を用ひて研究し思索し實驗し實行することを要せず、教へらるゝがまゝに記憶すれば可なり。學生は自己の感情の動くがまゝに喜悲し歌舞することを要せず、示されたる形に従つて態度を爲せば可なり。之を能くする者は即ち優秀にして善良なる學生にして、苟も記憶と摸倣とに長せず、他律に柔順ならざるものは、一概に劣悪なる者として排斥せらる。是の如きは即ち受動主義教育の特質にして、その結果は、獨立自營、勇往邁進の氣風を缺き、摸倣と服従とを生命とする、事大主義の國民を輩出せしむるに至る。多數の學生を集めて一時に速成的教育を施し、或は人物陶冶と稱して一種の訓練を行ふを方針とせる我が教育界の一部に於ては、往々此の受動主義教育の行はるゝを見る。蓋し將來必ず改善を要する者の一なり。

第三 手段主義の教育

我が從來の國民思想の一特質として、各人獨自の人格を尊敬するよりも、寧ろ他の團體乃至機關に従屬せる者として、始て其の價値を認識する傾向あり。即ち第一に、個人は國家の從屬物にして、國家の手段となりてのみ生存活動を許さるべく、國家の犠牲となるの外に意義を有せずとする見解あり。次には個人は家なるものゝ從屬物にして、個人は必ず家門の爲に犠牲者たらざるべからずとする見解あり。殊に女子は家庭の從屬物たる外に、男子の從屬物にして、結婚して夫たる者の支配下に其の一身を委ぬるに至り、始て其の生存の意義を認むべしとする見解あり。此等の見解に基く教育は、個人を發達せしむるよりも、其の周囲の事情に順應せしむること、人格の權威を樹立せしむるよりも他の權威に服従せしむること、現在の生活々動其の者の價値を發揮するよりも、過去の歴史習慣の形式に適合

せしむることを方針と爲す。而して又教育の方法上に於て、學校を以て學生の爲の機關とせず、學生を以て學校の爲に存するものとして取り扱ふが如き、學生時代は唯大人の準備時代として存するものと見るが如き、學校間に在りても、下級の學校は唯上級學校の豫備的任務を盡すを主とするが如き教授は學生自己の積極的研究を重んぜずして、既に存せる一定の材料を注入するを主とするが如き、即ち皆此の見解方針より來れるものに外ならず。

是の如く、個人の人格を中心とせず、其の生活を他者の手段視し、方便視する教育は、自己の良心、自己の判斷により、自ら責任を負うて、自己の任務を處理する自治獨立の人物を養成するに適せず、今後の國家社會の要求に對し、頗る間隔を有すといふべきなり。

第四 局部偏重主義の教育

一は根本より全體に着眼することの不十分なるが爲に、一は各個人各部の價値を認識することの不十分なるが爲に、或る一局部のみを偏重して、他の部分を忽諸に附し、従つて、全體より之を見れば、到底不健全なる跛足的進歩を免れざる結果を生ず。今日其の弊の現れたるものと見做すべきを、第一に

女子教育の輕視

と爲す。本邦に於ては、一般國民が女子の教育に不熱心なるのみならず、國家亦之を輕視せり。社會の教育に關する論議多くは男子の教育にして、政府の女子教育に關する施設も亦殆ど見るべきものなし。現在高等女學校數は略中學校數に匹敵し、其生徒數は中學生の四分の三に達したるも、僅に近き兩三年間の進歩のみ。文部省直轄の高等教育機關にしては男子の爲にするものは四十箇に達するに對し、女子の爲にするものは二箇の高等師範學校と、及び音樂學校に女子の入學を許すのみ、而して高等師範學校は、必らずしも女子に高等なる修養を與ふるを期するものに非ず。

教育に關する從業者を養成する爲めの機關たるに過ぎず。今年東北帝國大學に初て三名の女子の入學を見たるを以て、世間は一の論題となせる程なり。國家の女子教育を輕視する亦甚しといふべし。

局部偏重主義の第二に數ふべきは

中位の能力を標準として教授し、高能及び低能の學生を犠牲とする事

是れなり。一齊教授を主とする學級教授に於て、中位の能力者を標準とするは、止むことを得ざる方法なれども、而も現時の學級編制の範圍内に於ても、更に一層個別教授に接近する方法絶無なりと爲すべからず。其の個別教授の方法を講じ、各人の天賦能力をして、平等に開發の機會を得せしめざるは、方法なきが爲に非ずして、一齊教授を方針として、個別教授の價値を輕視するが爲めならずんば非ず。學校教育全體に於て、各個の自動と其の特能に對する待遇法の講ぜられざるは之を證するものといふべきなり。

中位の能力者、又は平均能力を標準として一齊教授を行ふ結果は、常に高能及び低能の子弟を犠牲とするのみならず、各個人をして、總て適切なる特得の發達の機會を逸せしむ。是れ實に甚しき能力の浪費にして、從つて教育上の浪費なりと謂はざるべからず。

次に又局部偏重主義の結果として數ふべきは

我が教育に關する討究は、常に帝國大學を卒業する少數者に對する問題を主とし、他の大多數者に對する教育問題の等閑に附せらるゝ傾向のある事

是れなりとす。我が尋常小學校卒業生は年々約百萬を數ふ。然るに、帝國大學入學者は年々約二千のみ。小學校以上の諸學校に入學する者を悉く合算するも約二十萬左右のみ。即ち國民の大多數は小學校卒業を以て其の學業を終るものにして、更に修學の途に上るものは全體の五分の一に過ぎず、帝國大學に進む者に至つては五百人にして一人を拾

ふのみ。帝國大學に進む人員を以て、小學校卒業に止むる者に比すれば、實に數ふるに足らざる少數者といふべきなり。帝國大學の教育は固より重要なりと雖も、然れども、國家の存立發展の上よりいへば、小學校卒業にして止むる多數國民の能力及び品性の修養に關する功率は、其の百分の一に當る大學修學者に比して、決して劣等なりと爲すべからざるのみならず、更に大に勝るものなること明かなり。是の如く、國民の極少數の教育のみを之れ重んじて、他の大多數の修養を之が爲に犠牲にする觀あるは、是れ亦國家教育上の一大浪費といはざるべからず。

第四節 境遇の不良なるより來る浪費

人の生活環象中、一刻と雖も、其の周圍を離れず、又一刻も離るゝこと能はざるものは、即ち光線と空氣となり。吾人の生活に要する物質的材料中、實に光線と空氣との如く、吾人に親密にして、且つ必要なるものは他に之れあらず。然るに文明の進歩は、吾人の生活をして餘りに自然に遠かりて人爲的ならしめ、之が爲に却つて人の健康を害するに至れり。而して其の最たるものを、屋内生活を營むこと多くして、純良なる空氣と光線とを遮斷せること之れなりとす。彼の文明的設備の最もよく整へる大都會に疾病死亡率の最も多き事實と、及び近時病弱兒及び不良兒に施して大効を擧げつゝある林間學校或は開放教室學校又は勞働學校の成績とは、兩面よりして之を證明するものといふべし。

然れども、物質的環象の缺陷は猶發見し易く、改善し易し。空氣光線の如くに、四時吾人を圍繞して、無意識の中に絶えず吾人を刺戟しつゝある精神的環象の弊害に至りては、人の之を見ること難くして、而も教育の効果を沮害すること更に甚しきものあるなり。今此の境遇の精神的方面をして不良ならしむる事項にして、教育の効果を減殺する勢力を擧ぐれば、略左の如くなるべし。

第一 時勢に伴はざる習慣制度の壓迫

我が國の家族制たる、特殊の意義價值を有し、重要な民族的特色を示すものなりと雖も、然れども近世に至り、個人意識の發達し來りたると共に、生存競争の劇烈なるに會しては、其の間幾多の不便ありて、到底昔日の態を維持する能はず、個人の思想と、社會の趨勢とは共に次第に家なるもの、意義價值を變じつゝあり。我が民法亦此の狀態に従ひ、形式上に家なる名稱をば存すれども、殆んど古來の精神を認めず、家族たる各個人を以て、概して平等の權利義務の主體となせり。其の是非は暫く措き、蓋し止むべからざる時勢の變化なりといふべし。然り而して、我が家族制度は我が社會の特色にして、且つ善美なる國民道德の培養に對し、最も有効なりしと同時に、其弊害の醸されたるものも之れなきに非ず。子弟が業を變へ、家を去るを以て不孝となし、徒らに父祖の遺産に依頼して、獨立心なく、進取勇往の氣象乏しきが如き、思想上に於ても傳習と摸倣とに安んじて、獨創的研究發明を重んぜざるが如き、權利義務責任の觀念甚だ薄弱にして、從つて規律を要し、秩序を要する社會公衆的共同動作に拙劣なるが如き、殊に人格の觀念なく、意志と特能とを尊重せざるの風あるは、其の最も重大なるものなりとす。此等は必ずしも我が習慣的家族主義の產物のみとなすべからず、又假に之を其の產物なりとするも、果して必然的のものなりや否やは更に考察を要する問題なりと雖も、少くとも家族制度の之を助長したるものあるは疑ふべからず。明治開國の結果、西洋文明の輸入、新教育の普及に伴ひ、個人的自覺及び批判力發達し、且つ生存競争の壓迫も亦加はり來り、内外より個人を刺戟して、又舊窠に晏居せしめざらんとするに至り、是處に新舊思想の衝突なる現象は起れり。然れども因襲の久しき、牢乎たる惰性を成せる舊慣の力は、往々にして子弟の進歩的なる自由の行動思想を掣肘し、只管巧みに世波に浮泛して、早く身家の計を爲さしめんとすること多く、帝國大學の如き、此の便宜主義の青年を以て充たされ、

學術研究の府に非ずして、官吏養成所なりとの批評を被れる時代ありき。

舊家族主義の弊を被ること最も多きものを女子と爲す。女子は男子の從屬者の如く見做されたと共に、又家庭の機關たるに過ぎざるの觀あり。女子を小人に比せる支那思想、女子は三界に家なしといへる印度思想の感化もありて、殆ど獨立したる女子の人格を認めず。結婚は當時者の要求に基き、其自由意志によつて裁定するに非ず、家系を繼がんとするための手段として、男女双方の兩親間に約束せらるゝ受與たり。個人と個人との結合に非ずして、家と家との結合たるを本義とす。是故に兩親の命によつて、相知らざる男女は機械的に結婚し、家の都合の爲には、相憎惡嫌忌する男女と雖も結婚せざるべからず。亦家風に合はず、或は兩親と相合はずとの理由は、夫婦の意志如何に關せず、容易く離婚を決定するに足る。新教育が父老の爲に屢々非難せらるゝは、蓋し教育によりて判斷力の發達せる子女が、是の如き没人格的舊慣に従順なる能はざるに基くこと少からず。女子の人格、個性、意志を輕視する此の舊慣は、他の各種の方面に現はれ、教育、職業等に對しても、時勢に伴はざる機械的制限を加ふるを以て當然の事と爲し、力めて女子の理想、才能を局限せんとしつゝあり。是れ實に甚しき社會的文明的損失に非ずして何ぞや。吾人は長き歴史と幾多の美點とを有する我が家族制度、及び此に伴ふ習慣を根本的に改廢すべしといふものに非ずと雖も、其の時勢と逆行し、國民の進歩的發展を妨げ、教育の効果を埋没するが如き惡弊は、必ず之を改善せざるべからざるものなりと信ず。

第二 劣惡なる風俗の感化

風俗習慣は人の日常生活に伴ひ、須臾も離るゝことなく、而も稀有の新事物の如く、人の耳目を惹くことなくして無意識の間に多大の感化影響を與ふ。故に風俗習慣の良否は直接間接に子弟の教養の効果を増減すること多し。殊に

修養猶淺く判斷克己の力未だ發達せざる少年子女にありては、皮相の外形に動かされ、之を摸倣せんとする傾向強きが故に、社會の風俗の薰化を被ること極て大にして、今日の學校の薄弱なる教育力を以てしては、之に對抗して惡風の感化に打ち勝ち、以て子弟の健全なる發達を庶幾すること、殆ど望み難からんとす。然るに家庭に於て其の子弟の保護教育に注意せず、惡風劣俗に接觸するに任せ、社會亦少年子女に對する風俗上の施設なくして、混雜無秩序の狀態に任せば、到底健全なる品格の涵養を子弟に望むこと能はざるなり。我が國の現状は果して此の恐れなきか。

第三 不健全なる思想藝術の暗示誘惑

思想及び藝術の健全を絶對的に、且つ具體的に決定するは難しと雖も、要するに、人をして之が爲に向上進歩せしむるものを以て健全なるものと稱すべく、之に反して墮落頹廢の傾向に趨かしむるものを不健全なるものと稱すべし。年齢性格知識等は思想藝術の影響を受くる性質及び深淺に對し、制限を附するはいふまでもなし。

人の思想は自由となり、生活は複雑となり、海外との交通頻繁となり、知識の發達普及出版事業の進歩等は種々の刺戟的思想藝術を發生せしむるに加へて、生存競争の壓迫は困難なる社會問題を惹起するの因となり、之が爲に又往矯激なる思潮を生じ、此等皆相混流して社會の表裏を浸し、感受力鋭敏にして、好奇心に富める青年子弟の知識慾、娛樂慾を煽り、乃ち是處に健全なる性格の建造を妨ぐるが如き惡影響を與ふるに至る。

思ふに思想藝術は精神の糧にして、人類社會に之れなかるべからざるものなりと雖も、恰かも生理上缺くべからざる穀肉膏臍も年齢體質の如何によりて其の利害の効果を異にするが如く、知識の發達程度、趣味性向等によりて、適不適の加減を加ふるに非れば、往々にして弊害を醸し易し。我が國の現状を見るに、此等の點に對し、用意の未だ十分ならざるもの少からざるが如し。社會と家庭と學校と、及び著者讀者共に注意を加ふることを要する所以なり。

第四 不良なる校風の薫化

凡そ一校の校風は、常に其の學校の教育主義の確立せる象徴なるが故に重要なるに止まらず、直接に學校を包容する所の雰圍氣にして、教育的環象中最も重大なる要素たるが故なり。我が教育界の状況を見るに、或は優良なる教師の多數なるを以て誇るあり、或は設備の整へるを以て誇るあり、或は程度の高尙なるを以て誇るあり、或は學生數の多きを以て誇るあり。其他種々の特長を以て誇るものありと雖も、唯日々學生を溫保して、不信不語の間に其の徳性を涵養し、其の個性を誘掖し、怡々として學習に力めて、向上進歩已む能はざる氣象を鼓舞する所の良校風の確立に至りては、之を賭るを得ること、猶甚だ少しと爲すべきが如し。是の如き溫暖醇粹なる教育的校風なくして、徒に講説を盛にし、設備を壯大にするは、恰も卵を孵化せんとするに、之を溫保することを外にして、其の容器を壯麗ならしむると等しく、到底其の効果を全うすることを得ざるべきなり。

校風は常に學生を感化薰陶するが爲に重要なるのみに止まらず、教師の活動を有効ならしむるが爲にも亦重要なる。蓋し寒冷にして溷濁せる校風の中に在りては、教師の優秀なる薫風も自ら凍化して學生の上に感化の効を生ずる能はず、其の元氣も何時しか萎縮銷沈するに至るべく、之に反して、溫暖にして且つ清純なる校風の中に在らば、教師の徳性は其の効を倍加して、感化を學生の上に及ぼすを得べく、更に又教師は不知不識の間に鼓舞獎勵を受けて、其の教育的活動力を旺盛ならしむるに至るべし。是故に醇良なる校風の缺乏は、直接に學生に悪影響を及ぼすのみならず、間接にも亦悪影響を及ぼすものにして、實に二重の損失を醸すものといふべきなり。

第五 教師及諸設備の不十分なるが爲の障害

無意識の裡に學生を温保存養する所の校風の充溢は固より必要なり。然り而して、其の校風を具體的事象と爲して、之を學生に傳ふるものを、教師及び學校の諸設備と爲す。

殊に教師は校風の發生繼續成達の中心的所縁たる人格者にして、且つ直接に教授熏陶の事業を運営する能力なるが故に、其の人の適否は直に學校其の物の價值を左右し、學生の學習力の効果を増減す。若し教師にして不適當ならんか、優秀なる學生の能力も、無益に徒消せられ、貴重なる徳性も亦十分なる涵養を得ずして、其の一生を損すること多大なるものあるべし。我が國の學徒が徒に誦誦をのみ之れ努むるもの多く、自ら實驗研究する態度に乏しきは、諸多の原因之れ有るべしと雖も、然れども亦教師其の指導の誤れるに出づるもの少からざらん。是れ最も憂ふべしと爲す。

學校の諸設備の適否も亦甚だ重大なり。教師の教授力、學生の學習力の如何に強大なるものあるも、若し圖書機械の諸設備にして不適當、不十分なるものならんか教授及學習力をして活動せしむること能はず、教授學習の方法を實行して、其の効果を發揮せしむること能はず、勤勉努力の多大なるに従つて、益々損失を重ねるに過ぎざる結果を呈せん。是故に適切にして十分なる設備を調ふることなくして、徒に努力を強うるは教師及び學生をして、其の教授學習の力を無益に濫費せしむる恐れあるものといふべきなり。

第六 困難なる文字の障害

我が現用文字は學習記憶使用上頗る不便多く、文明の促進、知識の普及、及び勞力經濟の爲に之を改善して、簡便なる音標文字を採用するを利とする理由は、既に第一篇に於て、略之を述べたり。而して學校教育に於て、文字の困難なるがために、教授力學習力を徒費すること多く、而も讀書作文力の進歩比較的遅々たるは人の既に説き盡した

る所にして、之が爲に緩和法の工夫せられざるに非るも、瑣末枝葉の彌縫策に止まり、多く不便を除くに足らず。しかのみならず、朝令暮改、一定の方針の確定せざるが故に、改善は却つて徒に煩累となりたる、場合も之れなきに非ず。

抑も現用文字の困難は主として漢字學習の困難に存す。各字に就いて音訓兩讀を記憶せざるべからざること、各字概して獨立に音訓を記憶するを要すること、字畫繁多にして書記に不便なること、辭書使用上不便なること等は、其の主たる難點なるべく、之に加へて、機械書記たる活版、タイプライター等の利用上の不便を數ふるときは、日用文字として簡便なる者に非ることを推すに足らん。此等の如き難點は必ずしも漢字のみに限るものに非ずと雖も、ローマ字、假名等に比して學習上困難の度多きは、是處に説くを要せざる所なり。其の困難なるの度にして假に甚だ輕微ならしむるも、二六時中、萬人悉く之を使用して措かざる努力の積集を以て之を量れば、其の結果に現はる、精力浪費の額たる、決して尠少ならざるべし。其過分の努力の幾何なるかを分量的に決定するが如きは、科學的方法により、心理的生理的實驗研究を爲すを要するが故に、容易に之を知るを得ずと雖も、今譬へば、小學校に於て、文字に依る學習を爲すこと一日平均三時間なりとせよ。而して漢字交り文に依る學習の時間は、ローマ字によりて同成績を擧げ得る時間に比し、一日三十分を多く要すとせよ。然るときは、

二日にして一時間を損し、一週間にして一日(六時間)を損し、一年(學校授業日二百四十日として)にして四十日を損し、六年にして一年を損す。

即ち六年間の學習に於て一年間を損すとせば、其の損失たる餘りに大なるに非ずや。勿論、以上の計算は確實なる根據なき想像に過ぎずと雖も、日々の積集を以て之を生涯の成績に徴せば、或は右の比例と相似たる結果を呈するとなしとすべからず。況や之に實用上の機械的書記に關する多大なる損失を加算するに於てをや。我國にして、現今

の如く漢字交り文を用ふる限り、外國に於て普ねく使用せられて事務上必須の具となれるタイプライターを用ふる能はざるのみならず、活版の植字に多大の勞力と時間とを投ずるのみならず、彼のリノタイプの如き機械、又タイプニュースの如き施設も、亦絶對に使用すること能はざるべし。此のリノタイプを備ふれば、現在に比し、印刷上の勞力は四分の一、其の時間は六分の一に、減縮するを得べしと計算せらる。タイプニュースは電信機とタイプライターとを連結したるが如き設備になり、特約新聞社より送り來る報告は、自ら直に普通の文章を爲して、紙上に印刷せられ、一の小新聞となりて現はるゝものにして、外國の名ある旅館の如きは、其の到達に一分の遲速を争ひ、繁劇なる時務に關係せる者、殊に商業家等の便益言ふべからざるものあり。是の如き便利捷速を極むる機械の續々として工夫せられ、盛に歐米人に使用せらるゝにも拘はらず、徒に袖手傍觀し、依然として舊套を守らざるべからざる損失は、國家の隆盛を思ふ者の、到底勝ふる所に非るなり。

我が國に新教育制度の布かれてより日猶淺きにも拘はらず、官民相共に勵精して、小學校教育の如きは、異數の進歩を遂げ、今日の盛況を見るに至れり。若し文字にして右の如き困難不便なかりせば、教育學術普及の成績たる、或は今に倍したる好況を見るを得たりしやを知るべからざるを思ひ、又將來の得失幾何なるを思へば、切に文字に對し工夫を加ふるの急務なるを感じずんばあらざるなり。

第五節 總括

以上は現時の我が社會に在りて、精神上物質上、乃至個人に就き、社會に就き、諸能力の浪費を醸しつゝあり、又醸すの恐れありて、其の惡影響の直接間接に教育に及ぶべき事項の主要なるものを列舉せり。此の中、或は遽に現代文明に際會せる我が國民性當然の結果なるものあり。或は世界的潮流に遭遇せる古來の歴史的傾向と、目下の事情と

の、止むを得ざるに出づるものあり。或は外勢の壓迫と、國力民力の不足との、如何ともすべからざるが如きものあり。或は國民の理想品性習慣の缺陷より來ると認むべきものあり。或は社會的過渡期に於ける一時の混亂、不整頓より來るものあり。或は着眼識見判斷の不十分なるに基くものあり。或は方法研究の不徹底、實行の怯懦、乃至技能手腕の不足に基くものあり。或は活動努力を盡して責任を果す態度を缺けるに出づるものあり。

凡そ此等の事、或は止むことを得ざるに出づるものあり、又止むことを得るも、力めざるに由ると爲すべきものあり。其の止むことを得べきものに對しては、更に努力を加へて、其の効果を新にするの必要なるは論を俟たず。其の止むことを得ずと認めらるゝものも、果して眞に止むことを得ざるか否か、百尺竿頭一步を進めて、更に研究考察を盡し、計畫工夫を盡し、以て幾分の浪費を節する用意は之れなかるべからず。是れ吾人が次に功率増加の方法を講じ、以て速に教育の目的を達せんとする所以の要點なり。

第二章 教育の功率

第一節 基本的諸要素の調和統一

第一 功率と協同

凡そ如何なる事業たるを問はず、其の成果の偉大なるを得る所以は、事業の爲に活動する諸要素、諸能力各個の適切有効にして、價值の大なるものと同時に、又其の各個の散亂することなくして、善く綜合集約せられ、矛盾并

格することなくして、善く調和統一せらるゝに存せざるなし。

近世に於ける文明中、商工業の發達は最も著大なりとす。而して此の商工業の發達は、人智と機械との進歩したる一面に於て、資本の合同、分業的組織の統一、學理と技術、人力と機械との調和等により、企業に關する諸要素の集中を成就したるに原けり。又日露戰爭に於て、世界批評家の豫期に反し、弱小なる帝國が強大なる露國に勝利を得たるは、主として、我に舉國一致の努力あり、彼に國論の統一調和を缺けるの相違あるに基けり。今や世界に於て費さるゝ軍備費の年額總計は七十億圓と稱す。而して此の七十億圓は蓋に全然生産的に使用せらるゝのみならず、之が爲に往々他の教化及び産業の發達を沮害するものも之れなきに非ず。是れ實に世界の各國家間に調和一致を缺き、互に孤立して相牽制するが爲に生ずる、一種の大浪費たるに外ならざるなり。又之を個人の生理に觀るも、不健康は多く諸機關諸機能の作用の不調和、新陳代謝勞逸交代の不均衡より來るものにして、其の結果たる疾病は、實に生活力浪費の現象なり。

調和融合一致協力の活動は、其の主體の健全なる状態となりて外に現はる。之を道德的に看れば、正義と仁愛との流行して凝滯する所なき状態なり。之を心理的社會的に見れば、幸福悅樂の充實して、不足なき状態なり。之を事業上に看れば、豫定の計畫の着々進行して、毫も沮格する所なき状態なり。而して其の結果は即ち活動の功率の最大に到達せることを示すべし。

是故に吾人が教育を畫策するに當りて、最も意を致すべきは、適切なる目的を立し、強力なる各要素を準備すると共に、如何にすれば、則ち此等要素をして相調和せしめ、如何にして、教育の目的により完全なる統一を得しめ、以て最大なる功率を實地の成績に現はし得べきかに在り。

以下、吾人は吾人の適當と信ずる教育の方法を研究するに先ち、教育事業をして、其の安定を得しめ、十分の活動

を爲さしめ、其の本業の成績を挙げしむべき所以の、諸種の外的、乃至基本的要件に就いて考察せんとす。

第二 教育の効率をして大ならしむべき基本的要件

教育事業は、單に學校に於ける教授訓練のみを以て盡くるものに非ず、人の全生活全生涯に互る修養にして、其の資料要件は社會の全體に關し、其の效果成績も亦社會全體の進歩發達に現はる。従つて、教育の効率を確保せんと欲せば、適切にして且つ十分なる教育機關を整備し、而して此が完全なる統一的活動を促さざるべからざると共に、更に又此の教育機關を包容し、其の活動の境遇場地を形成する所の、社會的諸要件を整理統一して、其の調和融合を計り、以て教育事業を助けて、其の活動を圓滑ならしめ、其の奏効を確實ならしめざるべからず。

吾人は先に教育上の努力をして無用、或は有害なる浪費に歸せしむべき事項を挙げ、其の弊を論ぜり。故に今此に對して、其浪費を轉じて効率増大の因と爲すべき方法を尋ね、以て教育改善の方針と爲すの、至當の順序なるを信ず。

(イ) 人格教育と職業教育との調和

人格教育と職業教育との相乖離する傾向あるが爲に、一方には懶惰にして、徒に空虚なる形式に拘泥する口舌上の道學先生を作らんとし、一方には、物質的幸福以外に人生の眞義を解せず、射利を之れ事として、道義人情を顧みざる頑冥なる唯利主義者を出す弊あることは、前に之を指摘したり。

今後の教育に於ては、特に此の點を矯正することを要す。普通教育に於ては、人格の完全なる涵養を計ると同時に、其の人格の價値を社會の實務の上に現はし、以て道德生活の實證的價値を發揮せしむるに力むべく、又専門實業の教育に於ては、實地の事業上に偉大なる成績を擧ぐべき、優秀なる智識技能を授けると同時に、此を以て徒に射利

の具、私慾を遂ぐるの手段と爲さしむるが如きことなく、人格的價値を發揮し、社會人生に對する何等かの貢獻を爲すの覺悟を體せしむるに力むることを要すべし。之が爲には、普通教育は人格教育にして、専門教育は職業教育のみとする、誤れる分業觀を一掃し、普通教育學校に於ては更に實地生活の要求を顧慮するに力め、實業諸學校に於ては、人格優秀なる教師を選任し、學生の人格を涵養すべき各種の方法を講ずべく、社會に於ても、亦人格の如何に關せず、射利にのみ之れ巧みなる青年を歡迎する態度を改むることを要す。此の方針に依らば、恐くは正義によりて事業を成就し、私利と公益とをして能く一致せしめ、社會に於ける實効によりて人格的價値を發揮する所の、眞國民を養成するを得べし。

(口) 新舊思想の調和

新舊諸事象の屢々相衝突矛盾するが如く見ゆるは、事象其の者の性質に基く必然の結果たるよりも、寧ろ此等諸問題を取り扱ふ所の各人の智識の不十分にして、其の理解徹底せず、而して各其の局部的或は皮相的理解を以て全般の眞理と爲し、之を固信し、偏執するに基くことを多しと爲す。是れ決して治療するを得ざる社會の疾病に非ずして、人の用意態度によりて、直ちに改善するを得べき、一時的過失なり。

是の故に、苟も國民の教化事業に關係する先覺者たる者は、宜しく其の著眼を高くし、觀察を廣くし、研究討尋を精緻正確にして、互に同情を以て異見を理解し、其の根本肝要の所に就き、集大成して以て國民文化を培養するに力めざるべからず。是くの如くなれば、舊思想は以て新生活を維持するに缺くべからざる基礎となるべく、新思想は又舊經驗を活かすに缺くべからざる様式を與へん。是れ子弟の教育上最も必要なる方針なりとす。

(ハ) 宗教と教育との調和

宗教と教育とは實に文化の二大中心にして、共に人心の深き奥底より出で來る根本要求の上に成立したる點に於て

相一致す。共に社會人生に於て、感化救済改善の功を擧ぐる點に於て相一致す。共に精神的人格的事業にして、物質機械と其の價値性能を異にする點に於て相一致す。共に世俗的功名利達の上に超脱して、献身犧牲の誠意を盡さざるべからざる點に於て相一致す。宗教と教育とは實に是の如き一致點を、其の根據に有するが故に、兩々必ず相調和すべく、又調和して社會に作動するを必要となすなり。然るに實際に於ては、兩者必ずしも調和せず、屢々矛盾扞格を惹起し、爲に多大なる精神的浪費を醸すことあるは既に前章に述べたるが如し。此の兩者の矛盾扞格たる、決して其の必然的性質より來るものに非ずして、之に附隨せる局部的乃至一時的習慣傾向より來るものたるに過ぎず。兩者の一、又は兩者共に、或は一部の見解を以て全部の眞理と爲し、或は一時の効果を以て、永遠の價値と爲し、或は一方の習慣風俗を以て全體の規矩準繩と爲し、或は自己の見所を以て唯一至善と爲し、他の見る所を輕蔑する等の如き、徹底せる理解と廣汎なる同情とを缺けるに出づるもの、即ち是なり。是の如きは社會的生活の根本要素たる、相互の理解と同情とを深くすることによりて、又兩者の動機目的、價値性質を明にし、人生々活の向上に對し、熱烈なる希望期待を共にすることによりて、互に其の調和の道を發見するを得べく、從つて、兩者の協力によりて、社會改善の功を倍進する方法を立つることを得べきなり。

宗教と教育とは相一致し得べき性質を有すと雖も、兩者の同一物に非るは論ずるを要せず。從つて、全然一致混同すべからざるは、之れ又論ずるを要せず。兩者各特立して、互にその守るべき所を守り、而して且つ協同を要するの所に於て相協同するの道に出づるは、是れ蓋し分業と協同の妙用の存在する所にして、社會の各事業、各機關は蓋し皆此の原則に依ることを要す。宗教と教育とも、亦此の分業と協同の原則に依り、一は國民養成事業の分野より、一は社會救済事業の分野より、兩々相補充して、以て人生の向上開進の効を全うすべきなり。

(二) 官民の調和

官は民の爲に存し、民は官に依つて立つ。官とは國民が國家的生活を營むに必須の組織なる以上は、官民の乖離といふは固より有るべき謂なし。唯一部一時の當事者の見解思想の、或は統一に偏し、或は自由に偏するところに衝突を生ずることであると、官民の事業の分立したる必然的結果として、各特異の發達をなし、その組織形式上に固定せる習慣傾向等に相一致し難き相違點を生ずるとあるのみ。故に官民の衝突といふも、實は双方當事者の偏見の衝突、止み難き事情の不一致に外ならずして、他の諸種の分業間に共通なる過誤と異るものに非ず。

是の如きの衝突不一致たる、亦他の場合と等しく當事者各人の偏見を去り、互に同情を以て相理解し、事業の方式に伴ふ無用の痼疾的習慣を去らば、衝突不一致を一掃して、以て相調和共同すべき管鑰を握るに難からざるべし。國民に對する教育事業の如き、其の國家社會を進むる大目的に於て一致し、人格を涵養し、生活を改善する終局の效果に於て一致する以上は、其の創始者、經營者の、官私何れにあるを問はず、是れ皆等しく重要なる國民的事業なり。宜く總て相協力して、以て國家の發達、社會改善の大任務を盡さざるべからず。

官府が全體の統一に力むるは、固より至當の事、又必要の事なりと雖も、然れども、少數當局者の所見必ずしも完全無缺なるものに非ず、或は力の及ばざる所、或は勢の過ぎたる所あるは寧ろ當然の事なりとすべく、私學を獎勵するは此の自家の缺點を補充するが爲に甚だ必要なり。且つ夫れ、教育殊に職業的教育の如きは、社會の實際生活上より來る要求に應じて之が施設を起すを可とす。此の社會の要求に密着して、適切且つ便利なるを得る點に於ては、私學は官學に優ること遠きものあり。即ち社會に對し、直接に教育の實効を擧げんが爲に、國家は須く私學の發達を獎勵すべきなり。

而して又一面に於て、私學の猥りに官府に依頼せず、官學を摸倣せず、獨立自持、以て只管社會に對する實効を期し、自家教育の理想を實現するは可なれども、之と同時に、或は國家終局の目的を忘れ、必要なる政治的統制を離脱

せんとするが如き、或は當局一時の過誤を非難攻撃して、徒に自家の識見を掲揚せんとするが如き態度に出づるは不可なり。須く衷情を披瀝して、國家の爲に缺點を補ひ、不足を充たすの態度に出でざるべからず。若し夫れ唯汲々として官府に攀養し、其の庇蔭に依りて私意を成さんとすること、彼の似而非實業家の如きに至りては、固より論外にして共に教育を語るべきに非ず。

官私教育は互に相規正補充すると共に、大體に於て兩者努力の分野を劃し、各其の長所を以て、國家教育の別方面を負擔するが如きは、國家の勞力經濟上極て有利なるべし。即ち國民の全體乃至大多數に共通にして、特に統一的教育を必要とする者、大施設を要し、従つて大費額を要するもの、社會的職業に直接有効ならずして、而も學術の發達、文明の進歩に重要な價値を有するもの、慈善救濟等の業を兼ね行ふべきもの、等に對しては、國家自ら之に當るを便なりと爲すべく、而して、局部的要求に應ずるもの、施設經營の容易なるもの、職業的價値を主とするもの等に關しては、國家の力を節約し、私學を保護して、以て之に當らしむるを便なりと爲すべし。是の如くにして、官私を合して以て渾然將た整然たる一大國家教育系統を組織し、力を集めて以て國家の教養に當らば、其の効果たる、蓋し意想の外に出づるものあるべきなり。

(木) 社會と家庭と學校との調和

社會と家庭と學校とは、箇々孤立し、甚しきはその意志希望遠く相隔離して、左支右吾の狀態を呈する弊は、既に論じたる所なり。社會と家庭と學校とは、各異る組織を有する團體なるが故に、その職とする所に相違あるは當然の事なり。従つて各其の主とする所に向つて努力を集中し、各自の價値をして十全ならしめんとするも亦當然なり。唯三者は各其の主とし、職とする所に於て、十分の努力活動を爲しつゝ、同時に、其の特色長所を合せて一體系を形成し、以て人の發達の境遇と爲すの用意これなかるべからず。家庭は骨肉自然の恩愛と、芳醇にして濃厚なる家

風によりて、子弟の品格心情に對し、基礎的培養を加ふべく、學校は研究工夫の結果を集めて組織したる科學的合理的方法により、學生が思想、識見、智慧、能力、趣味、體力に對して、正確にして遺漏なき發達を計るべく、而して社會は正義によりて指導せられたる活動勤勞の材料地位を備へ、且つ博愛に充てる風俗規律を整へ、學校教育を終りたる少青年をして、十分に其の教育の効果を發揮し、且つ其の品性の發達を繼續せしめ、更に又家庭と學校とを溫保して、其の努力を援助し、其の教育的能力の發揮を獎勵することを要す。

是が爲には、從來の如く、三者交々相睽離し、他の缺點を指摘し、非難譏刺を恣にして而して止みたる態度を改め、互に同情を以て相親昵し、教育の目的によりて相理解し、調和融合せる友好的關係の中に、次代國民の人格と生活とを包容して、彼をして理想的發達を爲さしむる方針を採るべきなり。是れ實に子弟の一身上に重大なる効果を生ずる根本方針たるのみならず、社會に於て教育事業の浪費を減じ、その功率をして偉大ならしむる所以の、最要の方策なりとす。

(へ) 教育家と實務家との調和

社會と學校との調和の必要なるは、前述の如くなる中に就いて、現在子弟の教養に當る所の教育家と、教育を受けたる子弟を指導して、彼をして其の受けたる教育の効果を實現せしむべき地位に在る實務家との一致は殊に最も必要なり。教育家と實務家とは、子弟の發達に關して須く常に友人關係を持し、教育家は實務家の經驗と要求とを聽取することを怠らず、又實務家は教育家の理想と方法とを理會することを疎にせず、各自家の必要とする所、不満とする所を以て互に相忠告し、相協議し、其の間に扞格凝滯することなからんことに注意せば、或は子弟をして、實務に用なき、迂遠なる教科の爲に、青春の血を涸渇せしめ、或は理想的教育を受け、十分の人格を具へたる青年をして、悲運に沈淪せしむるが如き、社會的浪費を避くることを得べし。教育は教育家の私事に非ず、子弟の生涯の爲に、社會

に於ける實務の爲に、將た國家の進運の爲に行ふものなり。此の點に於て、教育家と實務家とは、更に一致協力して、以て教育の効果を増大する方策を講ずるを要す。彼の教育家は妄に實務家の無理想を嗤ひ、實務家は徒に教育家の迂闊を嘲り、教育の無効を揚言して而して止むが如きは、決して事に忠なる者の態度に非るなり。

(ト) 男子と女子との調和

男子と女子とは、其の自然の性情に於ても、亦社會的職責よりしても、互に補足充實の關係に於て、一致調和するを要し、人生社會は、是によりて、始て全きを得るものなるは多言するを要せず。然れども、現在の状態を見るに、家庭に於ても、將た社會に於ても、果して對等の人格者として、眞に相同情し、理解し、長短相援くるの態度を執りつゝあるか否か、甚だ疑問とすべき所なるが如し。

男子には男子として固有の要求あり、事業あると同時に、女子には女子として固有の要求あり、又事業あり。故に男子と女子とは、交々其の要求を提出して、互に相理解し、互に其の要求を一致せしむべき點、補足せしむべき方途を發見し、且つ其の各適當とする事業に就いては、友好的協議の上に、適當なる按配法を講じ、以て互に相妨げざるのみならず、相援助し、相規正し、以て人生々活を圓滿完美ならしむるを要す。現今男女の相協力する道を講ずるの急務なるを見るは、家庭を措きては、社會諸事業と、及び教育となり。

社會に現存しつゝある各種の事業中には、男性的活動に依るの缺くべからざるものと同時に、又女性的性情手腕に俟つの有利なるもの少からず。此等の點に就いては、或は女子をして其の協議に與からしめ、又女子をして直接擔當從事せしむるの方法を設くるを要す。近時女子にして、家庭以外の諸事業に従ふもの、漸く増加し來たりと雖も、此等は個人的に男子間に入り込みたるものゝみにして、未だ女子として、男子と協力的態度に出でたるものに非ず。しかのみならず、往々男子と競争的傾向を馴致し、或は社會の非議を醸すもの少からず、將來は是の如き關係を

一變し、適當とする範圍に於て、男女相協力して以て社會進歩の効果を増大するの途に出でざるべからず。假令全然男性的事業なりとすべきものに於ても、その經營處置の方針が、家庭及び婦人に對する影響の毫もなきはなかるべく、從つて全然女子の關心を抑塞拒絶するの妥當ならざるものあるべきなり。

教育が少年子弟を取扱ふ事業たる以上、其の男子の學校たると女子の學校たるとを問はず、子弟の母姉たる所の女子の關心を要求するは當然のことならざるべからず。女子たる者は、常に家庭に於て其の子女の教育に苦心するのみに止めず、一般女子として、更に進んで教育家と協議し、共に子女の發達を完全にする方策を講ずるの責任を有す。又學校教育家としても、男教師と女教師とは、等しく子弟の教育者として、更に研究協議を共にし、男女教師交々相補足するの道を講ずると共に、男學校と女學校と亦互に益々其の特色を明にし、且つ缺點を相補ふの方法を發見するを可とすべし。

男女の共同は自然の性情なりと雖も、その方法範圍等に至りては、男女共同の合理的研究によりて、秩序あり系統ある組織を施し、是處に調和一致の要點を確定するを要す。是れ今後の文明社會に於て男女性の特色を發揮し、其の關係的活動の功率を増大するが爲に必須の方法なりとす。

(チ) 國家主義と個人主義との調和

國家主義と個人主義とは、元來相衝突すべきものに非ず、却て相調和するを要すものなるにも拘はらず、往々相衝突する勢を呈するの弊は、既に論ぜり。今教育上に於て此の衝突の弊を去るの道如何。之を國家の側より言へば、國家の發達上、個人の活動を十分に有効ならしめ、遺憾なく其の價値を發揮せしむるの重要必須なるを看取し、國家の大體の統一を害せざる範圍に於て、個人の要求を満足せしめ、個性の自由を許容し人心を倦まざらしむるに在り。之を個人の側より言へば、各人能く國家の職能使命及び體制境遇を理解し、人格の尊嚴を傷けざる事業によりて、其の

善美なる成果を公に献じ、以て國家社會の進運を裨補するに在り。

此の旨意によつて、學制の如きは、國家は其の大綱を統べ、大方針を示し、其の範圍に於ては、各機關の獨立自治に任じ、以て人格活動の自由を與ふるを要す。一言にしていへば、教育上に於ても、亦等しく立憲自治の主義を徹底的に施行すること、是れ即ち國家主義と個人主義とをして相調和せしむる根本の方針なるべきなり。

之を大觀するに、國體統制の堅固完美なること我帝國の如きは、世界に比儔を見ず。我が國に於ては、統一的方法に多大の努力を加ふるよりも、寧ろ個人の價値を増大し、以て國家の内容を充實するの、頗る國情に適應せる急務なるを信ずるなり。

(リ) 帝國主義と萬國主義との調和

帝國主義と萬國主義とは、共に現代須要の原則なりとすれば、此の二主義をして乖離せしめず、相調和して、以て國民の教育をして健全ならしむる方法を求めざるべからず。其の方法の主要なるものは、第一、現在及び將來に於ける文明の進歩、大勢の趨向を看取し、又世界に於ける帝國の關係的地位之に伴ふ特殊の使命を理會し、國家自ら發展すると共に、又人類全體を顧み、大勢の趨向に従ふとともに、獨得の文明を産出し、以て世界と共に進むの態度を教育上に採用するにあり。第二、學生に教授する學科に於て、右の態度を周知せしむべき説明を忘れざるに在り。第三、道德教育に於て、愛國心を養ふと同時に、人道博愛の眞義を理解せしめ、世界同胞の觀念を養ふにあり。第四、現在日米間に行はれつつある交換教授の如き制度を、國家事業として、廣く各國間に行ふにあり。第五、朝野の教育者の多數をして、外國視察旅行を爲さしむる方法を設くるにあり。第六、なるべく萬國的會合に参加し、適當なるものは、帝國之が主催者となる方針を立つるにあり。第七、外國との交通をして、なるべく簡便容易ならしむる方法を講ずるに在り。第八、國際事涉はなるべく平和友好の間に解決する手段を盡すにあり。

凡そ是の如きの方法は、啻に教育上好影響を庶期し得るが爲に必要なのみならず、國家社會をして、無益の浪費を避け、文明の進歩を助け、人類の福祉を増加するが爲に重要なは言を俟たず。

(又) 全體の調和

思ふに、各種の衝突矛盾は、事物の本然の性質より來るもの少く、多くは、之に關係する従事者の、偏見我執に基く。彼の新舊二思想の不調和の如き、官民の不調和の如き、宗教と教育との不調和の如き、其の他に類するものは、總て皆全體の關係、終局の目的効果を忘れ、自己の見る所の一部、自己の従事する一局處を以て、絶對至上の權威價值あるものと爲し、其他の者を以て無價值有害なるものと爲し、一に自我を立して、他を排斥せんとするに發せざるなし。

是の故に各種の矛盾不調和を去り、總力を集めて、協同一致以て終局の大成を期するの道は、各部各機關、乃至各個人、各階級皆虚心坦懷、互に同情を以て相理解すると共に、總て皆全體と終局とに着眼し、全體の關係内に於ける自家の地位を發見し、終局の目的に對する現在の價值を定め、然る後、中正健全なる自家進達の方針を樹立するに在り。全體の關係に於て之を觀、終局の目的よりして之を察し來れば、各事各物、何等か意義あらざるなく、何等か價值あらざるなく、一も絶對的權威を有すと見るべきものなきと共に、又相對的價值もなしと見るべきなし。分化と統一の法則の必ず自然の進化及び文明の發達に伴ふが如く、人爲の事業も亦分業と協同との方法を巧に行ふによりて、其の成績を増大することを得べく、排他孤立は、假令一時の強を致すを得とも、遂に永遠の繁榮を望むべからず。教育事業は社會諸事業中最も根本的なるものなるが故に、之が従事者は特に此の要點に注意し、以て功率の偉大なるを期すると共に、子弟を導いて、中正健全誤るなき進路を指示することを要す。若し此の着眼を忘れ、我執によりて、一部一時の局處を偏重し、之を以て子弟教養の標準を定めば、恐くは、教育事業其の者の善美なる成功を期し難かる

べきのみならず、子弟を誤るの悪果を結ぶなきを保すべからず。是れ實に潛心以て工夫努力を要する所と爲す。

少しく眼を放つて大觀するに、教育の關係する活動の系統、影響の來る範圍は極て廣し。小なるは、各個人之の精神より、大なるは、宇宙各般の現象に涉り、其の間無數の事象機關綿々連續して、斷たんと欲するも到底斷つべからざる有機的關係を有す。此等無數の事象機關は、悉く教育活動の資料となり、規矩となり、要素となり、動力と爲らざるなく、日星の運行、氣象の變化、山川の錯綜よりして、國家の興亡歴史の起伏、宗教、哲學、科學、風俗、習慣に至り、更に又各個人之の筋肉諸機關、思想感情の微を穿ちて、其の内面的因果關係を檢覈すれば、一として之を除外して可なるものなし。蓋し此等萬般の諸事象は、縱令表面相隔離し、孤立して、互に何等の關係を有せざるが如く見ゆるも、其の内面に於ては、隱然として緊密なる有機的關係を以て結合せる渾一體を爲し、脈々たる一道の生命活氣は全體を貫きて、其の間に流通す。即ち宇宙を擧げて渾然たる一箇完璧の生活を爲せるなり。吾人人類は此の間に在りて其の生を享け、宇宙なる大生活體の一細胞たる地位を占む。微小なること針頭の如き一局處に膠着し、此の一局處を以て絶對至上の權威を樹て、價值を定め、而して以て教育を行はんとするが如き、到底健全完美の結果を得る能はざるを知るべきなり。

故に、教育事業に於ては、一面個人の價值職責使命を認めて、深く其の衷心の奥底より出で來る眞要求を探ぐり、且つ其の生活の全面を知ると共に、一面宇宙の無限なる活動進化を大觀し、その法則を明にし、生命を觸感し、更に其の中間に於ては、國家社會の生活、歴史、文明、理想を尋ね、其の眞義を詳にし、而して後此等諸要求を斟酌按配して、以て完全なる渾一的系統的教育法を興さざるべからず。是れ實に全體の調和的運動の中に、中正且つ健全なる教育の効果を確保する所以の根本的用意なり。

第二節 境遇の完備

第一 教育上境遇の必要

教育の境遇として教師の人格即ち信念、實行、識見、學術、技能等の主要なるは言を俟たずと雖も、而も學生に刺戟を與へ、影響を及ぼすものは、獨り教師のみに非ず、學生が呼吸し、寢食し、行住坐臥俯仰願望する所の四圍の境遇は、實は極めて重大なる教育的與件を爲す。教師は長きも一日數時間接觸するに過ぎずと雖も、人爲的及び自然的事象よりなる境遇は、其の見ゆると見えざると、意識すると意識せざるとに論なく、一瞬も彼等を離るゝことなくして、晝夜絶えず圍繞し、抱懷す。其の影響の累積して成る結果の重大なること推して以て知るべきなり。

教師の人格力の非常に偉大なる場合に於ては、此を以て他の一切の與件を掩ひ、思ふがまゝに學生の意識を統一し、その人格を感化することを得べしと雖も、是の如きは稀に有るべくして、常に望み難きのみならず、現今の如く、學術の進歩著しく、其の研究の方法益々精緻を加ふるに至り、且つ宏大にして複雑なる組織により、多數の教師及び學生の相集りて學校なる一團體的機關を形成する場合に在りては、教育力の人格的集中は勢ひ稀薄とならざるを得ず。従つて、學生を包容して生活せしむる所の境遇に就いて考究し、人爲的及び自然的各種の事象を精選して、其の配合によりて善美なる教育的境遇を形成し、以て學習力感受力を最も有効に活動せしむることは、教育上極めて緊要なることに屬す。

學生の境遇に就いて考究すべき要素は複雑なり。然れども、之を其の性質によりて大別すれば、精神的及び物質的、或は人事的及び自然的の二となるべく、關係の遠近によりて次第すれば、學校及び家庭社會の二となるべし。

第二 學校

學校は、學生の居る所の境遇として、最も直接なるものにして、學生の品性に感化影響すること殊に大なり。故に學校は十分なる科學的研究により、教育的價値をして最大ならしむべき計畫を定め、之に對し、有力にして適當なる要素を精選して、以て優秀なる一箇の機關を組織せざるべからず。而して教育的境遇としての學校を組織する要素は、之を精神的及び物質的兩方面より觀察することを得べし。精神的方面を概括して言へば、則ち校風にして、物質的方面は即ち校舍諸設備なり。而して、此の兩者を統一し、其の中心となりて活動するものを人格とし、教職員之を代表す。

(イ) 校風

校風は學校の教育的活動に伴ふ精神的傾向にして、常に學校の内部に充ち全體を包容し、無意識的に薰化の力を發揮しつゝあるところの雰圍氣なり。無意識的なりとは雖も、香氣となり、色彩となりて、一切の物の上に何等か其の痕跡を現はし、學校に入り來る者をして、一種特殊の感覺を得しむるものあり、髮髻として、隱微の間に、學校の主義精神を識認せしむ。凡そ是の如き校風たる、學校にして存在する以上は、自ら何等か其處に發生せざるはなけれど、恰も空氣の如く、光線の如く、常に學生を包容浸漬して、無形の中に之を滋養するものなるが故に、特に意を用ゐて善美なる校風を樹立し、高貴なる精神を充溢せしむることは、教育上第一の喫緊事と爲す。

善美なる校風の要素たる、多種あるべし。其の中に就いて殊に重んずべき精神的内容を擧ぐれば、蓋し左の數項に在らんか。

第一に之れなかるべからざるは、人格尊重の態度にして、宇宙の微妙なる實在に發源せる、至高の靈的生命を以て

其心核と爲し、各個人に人たる風格を附與する所の人格の、天地間最も神聖なる活物なることを解し、而して己れ此の神聖なる人格を有すると共に、他の萬人亦皆悉く之を具ふることを解し、自ら尊ぶと共に、他を尊び、自ら愛すると共に他を愛し、自ら養ふと共に他を養ふを念とするもの、即ち是れなり。夫れ萬人は此の人格に於て、悉く皆至貴にして且つ平等なり。故に自他を問はず、又地位、職業、學藝、才能、財産、年齢の高下多少を問はず、苟も人たる者に對しては、敬虔嚴肅にして、而も切々愛々たらざるべからず。是れ仁義禮讓の由來する所、愼獨自省の道念の發する所、犧牲奉仕の精神の湧き出づる所、共同生活の原義の存する所、修養といひ、教育といふは、究竟するに、此の人格的の涵養と發現とに力むることに外ならず。是故に、人格尊重の觀念は、校風の中心として、必ず缺くべからざるなり。

第二に必要なは、向上的精神に充つることにして、神聖にして微妙なる靈的生命を信じ、之が顯現に努力して止まざる態度、自由にして純粹なる人格的活動を充たせる眞生活を追求して、精進止まざるの態度、更に之を一言にして掩へば、自己が生活の理想と認むる最後の目的に向つて、改善進歩止むことなき氣風は、實に教育精神の本義にして、是の向上精神の發動なくんば、如何なる教育も、其効を生ずること能はざるなり。此の向上的精神たる、知識的に現はれては、即ち眞理に對し倦むことなき實驗的研究の態度、徹底せざれば止む能はざる思索推理となり、感情的に現はれては、即ち善且つ美なる事象に對する、狐疑逡巡なき同情同感欽仰嘆美となり、意志的に現はれては、即ち主義理想に對して力を盡し、萬難を冒して屈せず撓まず、到達成就せざんば止まざる勤勉勞作となる。是の如きは實に教育によりて養成すべき性格の理想にして、潑瀾たる向上的精神は之が基本たり。

第三に必要なは、自己の人格靈性を尊重し、之に對する自己の責任を自覺して、自ら決心し、自ら進み、自ら爲す、自學自習自動自活の精神なり。學生にして若し自己の責任は自ら之を處理し、自己の爲すべき事は自ら進みて

之を爲すの覺悟なからんか、教授は注入的となり、訓練は他律的となり、生活は總て機械的となりて、内容的價値の充實せる校風の樹立亦到底望み難からんとす。

第四に數ふべきは、各學生の個性的生長を認容するところの自由寛大の精神なり。彼の一個の習慣的鑄型を造り、獨斷を以て學生をして是に適應せしめんとする教育は、外觀齋整にして、且つ見るべき結果を擧げ易しと雖も、之れ遂に人格開達、能力發揮の教育に非ず。且つ、之を以て各人の總て履行すべき常道とは爲すべからず。況や狹隘なる黨同伐異の弊風を導き易き恐れも亦多きに於てをや。各個人の意志を認め、特長を認め、天賦を認め、使命を認め、其爲し得る限りの成達を許容し、幫助する自由寛容の精神は、實に個人の價値を無限に増大せしむる根本にして、眞教育を行はんとする學校の校風として、缺くべからざる要素と言はざるべからず。

第五に數ふべきは、苟も他の善なるもの、美なるものを見ては、その地位關係を問はず、缺點弱點をも忘れて、之に同情同感し、又我を忘れて之を讚美し、激勵するに躊躇せざる虚心坦懷、公明溫暖の態度、及び更に進みては、我を棄て、之を援護し扶助し、人生の暗黒を淘汰し去りて、光明の世界を現出せしめ、以て自由なる人格的生命的發露を庶幾せんとする積善濟美、犧牲奉仕の氣風にして、此の態度氣風は實に交友共學の眞義、社會共同生活の要諦たり。學校に此の道德的互助の深切温情なくんば以て教育的團體生活の實質を成すこと能はざるなり。

第六に、事の眞理に達し、物の實相に徹せずんば止まざる研究的精神、自家の實驗實證に徹して後始て其の確否を認定し、自家の判斷力を働かして後始て論の是非を決する科學的良心は、向上心にして強盛なる以上、必ず知力活動の上に現はれ來るべきことなれども、目的を成就し、實地に成績を現はして後始て止む、奮闘努力の實行的態度と共に、特に涵養することを要する學風なりとす。

第七、殊に必要なるは、終極の大理想の下には、小異を棄て、容易く一致協同し、衆力を綜合して、以て全體の日

的を成就せんとする調和の精神なり。調和の精神は、全體終局の目的に對する的確なる理解と、及び高大なる生命實現の爲に、容易く我意を棄る犠牲的態度より出づるものにして、團體生活は此の精神を根本とするによりて、始めて發進歩の統一活動を爲すことを得べく、小欲望を淘汰して眞目的に集中する、個人の人格修養も、亦是の如き空氣の中に於て、始て行はるゝを得べし。而して此の調和の精神は、又同時に、社會國家の生活に於て殊に須要とする所なるが故に、將來の準備としても、亦之に努力するの價値多大なるものありといふべきなり。

第八、時間事務等の萬事に關し、嚴肅なる規律秩序ありて、混亂駁雜、矛盾錯謬の爲に無益の徒勞徒費を爲さざるは、共同團體に於て甚だ必要あり。又是と同時に、怡和煖悅、明快潤達の氣象充溢して、人の精神元氣をして鬱屈萎縮せしめざるも、亦青年學生の教養上極めて必要なり。但し規律秩序は、事理の理解、責任の自覺、自治の精神より、自然に内發するものたるべく、外部より機械的強制を施す習慣を養ふべからず。又怡和潤達といふも、皮相の放逸遊樂と混すべからずして、私心なく、隱惡權略なく、公明、希望、健康、親睦、満足より、自發して、遂に外に現はるゝものなるを要す。

之を要するに、校風は學校の萬事を掩ひ、萬行の間に磅礴する一種の生活的情調、精神的雰圍氣にして、無意識の間に不斷の感化力を振ひ、各個學生をして、其の個人的人格を完成せしむると同時に、全校を融合して、一個の人格的團體に發展せしむる原動力たるべき者なり。故に一度其の校風に接し、其の雰圍氣中に投ずるものをして、公明溫煖怡和敬虔の感に包容せられ、自ら生長充實の感に堪へざるものならしむべく、又躍々たる活氣横溢し、觸るゝものをして奮發興起して、努力勦勵止む能はざる氣象を自得せしむるを要す。而して是の如きは實に人生々活の眞義に徹せんと欲し、人格の眞髓たる根本的生命を思慕憧憬し、之に向つて、欣求精進するの他做なき、眞摯嚴肅の態度に發す。是れ即ち向上的精神の發動するところにして、其の至純至粹の極致は自ら一種の宗教的生活に入る。故に善美な

る校風の精粹には必ず敬虔なる宗教的氣分の充溢するものあり、以て一切の教育活動の基調を爲さざるべからずと信ずるなり。

(口) 教職員

校風の完備は學校を組織する一切の人格及び設備の與かるところなれども、之が發動の中心となるところのものは、學校の設立者、經營者、教職員の人格主義態度にありて存す。設立の動機目的の眞に人格愛養、生命開展の欣求熱望に出づるものあり。平生經營の態度も亦日々教授薰陶の方針に於ても、常に此の根本に一致して背戻するものなきに於て、始て全校の空氣情調をして純粹なる向上的傾向を帶ばしむるを得べし。今日の教育制度に於ては、學校全體を以て一箇教育の責任を負ふものにして、教職員各個の人格は直に之に當るものに非ずと雖も、然れども、教職員は學校の主腦部として、學校内部に人格的精神空氣を充たしむる源泉たり、學校の教育的良心意志智能の體現者として、日々學生に接觸し、之に積極的感化影響を與ふる人格たり。學校をして生命あらしむるも、亦無からしむるも、學校の主義計畫をして實効を奏せしむるも、奏せざらしむるも、校舍設備をして其の價値を發揮せしむるも、せしめざるも、將又學生の感受力發動力をして有効に活動せしむるも、濫費又は萎縮せしむるも、一に教師の用意如何にありて存す。是故に、學校に在りて、教師の職責は殊に重大なり。

今理想的教育團體としての學校に於て、吾人の希望するが如き教育を行ふに足る所の、優良なる教師の資格を擧ぐれば、左の數項を以てその主要なるものとすべし。

第一、人生の歸趣、生活の眞義を了得して、常に之が實現に力め、少くも之を追求して止まざる眞摯敬虔なる向上的精神を有する事。

第二、自己の學識に對しては、常に其の蘊奥を窮め、眞理に到達せずんば止まざる研究的興味を有する事。

第三、教育の全體を理解すると共に、之によつて自己の職責、學科の價値を明にし、教授指導上適當の用意を怠らざる事。

第四、自己の天職を樂み、快活、熱心、忠實、勤勉にして、學生の向上心を鼓舞するに足る事。

第五、豊醇なる趣味を有し、殊に高尚純潔なる情操の修養に怠らざる事。

第六、學生に對しては常に其の人格を尊重する態度を持し、人としての價値を自覺せしめ、殊に其の自發的活動性を涵養するに力むる事。

第七、學生の個性を重んじて、獨創發展を保護し、殊に其の天賦の傾向能力を發見して、使命天職の自覺を促し、之に對する適當の境遇指導援助を與ふるに怠らざる事。

第八、自己が目前の功績を善くするよりも、學生の全生涯を顧慮し、其の永遠の發達を庶幾する用意ある事。

第九、學校全體を顧慮し、其の改善進歩に力め、且つ一致協同、以て善美なる校風を作る用意ある事。

第十、常に社會實地の狀態に對する觀察を怠らず、校内に於ける學生の指導校外に於ける効果の發揮に於て、迂濶ならざる事。

其の他、若し必要の資格を一々列擧せば、更に多々あるべしと雖も、要するに眞摯純潔にして、高く信念理想を把持し、學識深遠にして、學生各個人の人格使命を尊重し、其の發達を愛すること深厚なるを、其の根本と爲す。

優良なる教師を得んと欲せば、學校として、又之が爲に必要な用意を盡さざるべからず。即ち其の主義方針を高尚にし、經營處務を公明にし、教師をして、心服せしむるが如き、教師を尊敬し、猥りに機械的束縛強制を施さざるが如き、適當なる待遇法を講じて、安んじて其の職に盡力せしむるが如き、相當の設備を爲し、其の學識修養の便を與ふるが如き、各人間の意志精神を疏通せしめ、全體の調和融合を計るに怠らざるが如きは是れなり。

優良なる教師を得るの道は、固より之を傭聘する學校のみの能くする所に非ず、社會の待遇、養成の方法にして妥當なるものを得ずんば、到底十分に其の希望を達する能はざるなり。然れども是の事たる、今俄に之を庶幾すべからず。従つて學校にして若し眞に自家の望む所の良教職員を得んと欲せば、自ら之を養成する方法に出でざるべからず。即ち待遇設備其の手段に注意し、教職員の修養を促し、漸次大成せしむるの道を探る事を要す。是の如く、唯教職員を使役して、其の事務に従はしむるに止めず、之を助けて進歩發達せしむることは、常に優良なる教職員を得んが爲めのみならず、其の教育的精神を徹底せしめ、教育的空氣を充溢せしむるが爲の手段として、極めて重要な事項にして、且つ學校に於ける教職員待遇法として、最も價値ある方法なるべしと信ず。

(八) 設備

學校の校地校舍其の他の諸設備は、教師及び學生の教育活動を助けて、其効果を發揮せしめ、且つ日々彼等の感覺に觸れて、其の心情を左右し、又衛生状態に關係し、不知不識の間に影響を與ふるものにして、直接教授上にも、亦校風充實の上にも甚だ重要なものなるが故に、學校としては、之に對して固より十分の注意を要す。

第一に注意を要するは、學校を圍繞する自然及び社會の状態なり。風景の人を感化する事實は、古より人の之を知る所にして、山水秀麗の地偉人を生ずる語あり。殊に空氣の清濁如何は直接に學生の心身に影響するが故に、學校の建設に際しては、先づ此の點に注意を要す。校園の廣狹、造作花卉、木石の排置も亦固より注意を要する所にして、學生をして戶外運動を爲さしむるに足る廣さを有し、且つ蕪雜醜穢の狀を避けて、高尚閑雅の趣きあらしめ、學生の美感を養ふと共に、逍遙散步の興味を誘ふものたらしむべし。

學校所在地附近の社會は種々の刺戟を送りて、校風に影響し、學生の心情を薰化すること多し。靜肅にし喧騒ならず、風俗氣習の良好なる場所を擇ぶべきは勿論なり。學校の種類により、若し爲し得べくんば、風景清麗なる田園を

擇んで校地を定むるを可とすと雖も、是の如きは、總ての學校に望むべからざるのみならず、商工業に關する諸種の學校の如きは、教育及び通學の便宜上都會熱鬧の地を擇ぶを要することあり。此等の場合に於ては、可及的の注意を爲し、若し能くすべくんば、進んで學校附近の社會を改良する舉に出づるが如きも、亦必要なるべし。外國に於て學校所在地の町村をして酒類販賣を禁止せしむるもの少からざるが如き、學生が貧民窟に入りて大學殖民を試るものあるが如き、即ち此の一例なり。

第二、校舎の建築様式、其の配置、及び材料色彩等の如きも亦學生の心情に影響するところ多し。或は莊重なるもの、或は閑雅なるもの、或は清麗なるもの、或は質素簡潔なるもの、皆各特殊の感を與へ、校風に影響す。故に學校の種類、其の教育の目的方針、學生の程度生活、其の他教育法上各種の要求より打算し、以て堅實なる校風を作り、教育的効果をして多大ならしむるの用意を要すべし。

第三、教室の設備は精神の明快を保ち、注意の散漫に陥るを防ぎ、教授と學習とに便なるを主とし、殊に向學心の發達を促すべきに足るものたるべく、且つ採光、換氣、採暖の施設十分にして、清潔を保ち易く、塵埃の飛揚なからしむる等、衛生上の用意深切なるを要す。而して教育上衛生上差支なき限りは、繪畫、彫刻、刺繡、花卉等を以て、適宜高尚閑雅なる裝飾を施し、常に學生の趣味を養ふに資すべし。我國の學校の教室は、學生の自發研究心を刺戟し、其の自學自習の風を養ふの設備を缺けると共に學生の審美的情操を發達せしむる用意乏しきもの多きが如し。是れ將來殊に注意を要する所なるべし。

學生々活及び各教室の統一中心となる所の、一箇の大講堂を有することは、必要にして、且つ便利なり。此の講堂は全校を綜合して、其の團體意識を開發し、學校の主義理想を發表し、各學科の基礎的出發點、はた統合的結論を與へ、全體的精神情調を作る處にして、校風の發興を促す中心地になるが故に、其の設備は殊に此が爲に注意を拂ひ、

莊重端雅嚴肅高朗の感あり、之に臨むものをして、知らず識らず、眞摯敬虔なる向上心を起さしむるが如きを要す。

若し經濟の許す場合に於ては、特殊の材料設備を要する學科の教室は總て之を一定し、此處に入る者をして、自ら其の學科に對する學習研究の興味を惹起せしむるが如き準備を爲すを可とす。例せば、圖畫教室には幾多の美しき美術品四方に陳列せられありて、見るものをして、知らず識らず、早く是の如き美術品を作らんとの希望を起さしむべく、地理歴史の教室に入れば、種々の物産或は摸型、標本、或は各時代を代表する器具美術等ありて、其の産出の地方、由來、時代的變遷等を知らんと欲するの念に堪へざらしむるが如きは是れなり。而して學生が研究の希望を起すと同時に、彼等をして、教師の指導の下に自ら直に研究して、其の成績を挙げしむることを得るに足る所の、十分なる準備を有するは固より必要なり。

同一の趣意は自然物質技術に關する學科の爲に、十分なる實驗室の設備を爲すことを要求す。從來普通教育學校にも概ね理科科學實驗室ありて、實驗を爲したれども、多くは唯教科書説明の一助として、教師一人實驗し、學生をして之を傍觀せしむるのみ。是の如きは理科に關する諸學科の研究法としては、極て不完全なるものにして、眞の理科學習法に非るなり。物理、化學、動植物等の、實體を有する事象に於ては、學生各自が實驗して、之を直觀することに於て、始めて確實なる理會を得、科學的精神を養ふに至るべし。故に此等學科に對しては、十分に實驗室を設備し、學生各自が實物を用ゐて爲せる實驗を基礎として教授を行ふに適せしむべきなり。

第四、更に又同一の趣意によりて、學校は十分なる圖書館、參考品陳列館の設備を必要とす。學校の高下大小によりて、圖書館の種類大小の差違あるべしと雖も、圖書館の設備の學校に必要なは言を俟たず。學校圖書館として其の要件の主なるものを擧ぐれば、第一、學生の自學自習を助くるに必要な圖書を備ふる事、第二、教師の參考に必要な圖書を備ふる事、第三、其の他、學校の教育計畫經營上必要な參考書を備ふる事、第四、一般文明の状態を

知るに足る圖書を備ふる事、第五、圖書を精撰し、總て教育的價值あるものを備ふる事、第六、觀覽に便にして、なるべく繁雜なる手数を要せず、無用の時間を費さざらしむる事、第七、整頓に便なる事等なるべし。必要なる参考書を備へざるべからざるは勿論のことなれども、更に進みて、學生の讀書の興味を誘起する注意も必要なるべく、其の取扱方等の上に於て、學生の心情に好感を與ふる注意も必要なりとす。一箇の大圖書館以外に、地理歴史教室、理科教室、參考品陳列館等には、又その材料の簡易なる説明を記載せる少許の圖書を備ふるの便利なる場合あるべし。文部省は宜しく諸學校が如何に圖書を活用しつゝあるかを調査し、且つ教員をして圖書利用の法を研究するの策を講ずべきなり。

參考品陳列館は、學生の自習と直觀的知識を重んずる學校に於ては、缺くべからざる設備なり。直觀材料を不要とする學科は、少許の純抽象學科の外殆ど之れ無く、殊に普通教育學校に於ける教科の如きに至つては、全部直觀材料を必要とすといふも過言に非ず。而して此等直觀材料の、特殊の教授に直接必要なるものは、各其の特殊の教室に備へ付けざるべからずと雖も、然れども、猶其の關係材料、變遷材料の詳細なるものに至つては、教室内にのみ備へ付くる能はざるべく、此等特殊諸學科の理論を總合して成れる基礎的諸材料、其の關係的組織を示すべき成績材料に至つては、一定の總合的陳列室を要すべし。更に之を擴大して、地理歴史經濟實業等其の他に關する材料により、横に現在世界狀態の大觀を示し、縦に其進化發達の形蹟を示し、以て簡易に人類生活の概觀を得しむるが如き設備は最も必要なるものにして、特に生活に關し、總合知識を與ふるを主とする普通教育學校に於ては、此の種の材料陳列を缺くことを得ざるなり。

但し、各種の學校に於て、初より大規模の陳列館を設くるが如きは、到底望むべからざることなるが故に、直接必要とする材料に就き、蒐集し易きものを選び、漸次完成を期する方針に出づべきなり。數箇の學校相聯合して一箇の

陳列所を有し、必要に應じ、各校に巡回陳列を爲すも可なるべく、又相協議して、分業的に、各特殊の材料を蒐集陳列し、其の中の必要なるものをば、時々交換する方法に出づるも可なるべし。遠隔の地にある學校が互に其の地方の物産其の他を交換するが如きは殊に便法なりとす。

文部省其他監督官廳は、なるべく此の陳列館の設置を奨励し、之に對して便宜を與ふるを要す。

第五、校舍校庭を成るべく教育的に利用する工夫は、本邦の如き教育費に乏しく、十分の設備を爲し難き場合に於りて殊に必要なり。例せば、參考館等を特に設置するを得ざる場合に於て、廊下を利用するが如き、校庭校舍等を利用して、方位、距離、高低、面積、體積の觀念を與ふるが如き、進んでは風位計、風力計、雨量計を設置し、又た寒暖計、晴雨計等を懸け、理科の知識を助けしめ、殊に觀察を數量的にし、經驗を確實にする習慣を養はしむるが如き、花園菜園等を設けて植物に關する知識を補ふと共に、園藝の興味を養ふが如き之れなり。本邦小學校などにては、注意の散漫を防ぐと稱して、教室に一物の裝飾を加へざるところ少からず、之れ一理あることなれども、斯る場合に於て、教授上に直接關係なき廊下等を利用して、以て其の缺を補ふの方法を講ずるもの少きは、其の何故なるを知らず。廊下の如き、通行の外、一定の系統的專業の目的を有せざる場所には、或は繪畫、寫眞を掲げ、或は統計表等を貼布し、其の他種々の裝飾を加へ、趣味と實益とを兼ね與ふる一種の娛樂的特別室とするは、勞少くして効多き校舍利用、補助的教育の一法なり。

學校の全部を悉く教育的に利用し、寸隙の閑却を許さざるは、是れ經濟法の徹底にして教育上浪費なからしむる所以、又學生に經濟、利用、整頓、注意、工夫等の觀念を與ふる實物教授の方法なり。而して其の利用の方針は、盡く學生の知識趣味を補ふといふに止まらず、其の學習の興味を誘發し、自學自習の努力に對して満足を與ふるの用意に出でざるべからず。是れ蓋し一切の設備の原則なりとす。

(二) 寄宿舎

寄宿舎の利害に就いては、種々の議論あり、皆相當の理由を有し、俄に決定し難しと雖も、理論上に於ては、家庭に於て見るべからざる特長を有し、従つて他に換ふべからざる教育的價値を有す。學生をして下宿屋より通學せしめざるべからざるが如き學校に於ては勿論、たとへ家庭より通學する學生と雖も、或る時期に於ては、必ず學生を寄宿舎に收容し、其の特殊の生活を味ひ、修養を経しむるを可とすべし。家庭にして、其の子女の教育に不便なるものあるが如き場合に於ては殊に然り。

若し夫れ寄宿舎を單に學校の訓育上より觀る時は、殊に重要な意義を有す。寄宿舎は教室と異り、學生の全生活を包容する處なるを以て、各種の指導を實地上に與へ、生活の主義理想を實行し、以て學生各個を感化し、其の融和統一を計り、校風を樹立するが爲に、最も緊要適切なる機關たり。是故に人格修養に重きを置く學校に於ては、必ず寄宿舎を設けて學生を收容し、之を以て教化の中心と爲すを可とす。

寄宿舎の特色は如何なる點に存するか。抑も寄宿舎は利害を同うする數人以上の人、一家屋内に寢食を共にし、精神的共同生活を營むの團體たるは家庭と同様なれども、其の成立には異性を雜へず、長幼の差少く、皆同一の目的事業を有し、舎監の教育意志の下に、對等の關係を以て、任意的に相集まり、人員は稍多數なり。故に其の結合には多少の知解と努力とを要し、従つて其の精神的要素は比較的意識的、合理的、意志的にして、多大の自由性を有す。是れ男女長幼保護被保護者の關係を以て、骨肉自然の感情の上に成立する家庭と、其の意義と組織とを異にする重大なる點にして、或る意味に於て、家庭より社會生活に移行する中間に位すと認むるを得るものあり。

是の故に、寄宿舎生活に於ては、各人皆

イ、同一様式の下に規律的生活を營み易し。

ロ、同一の理想精神を實現し易し。

ハ、個人の意義價値の認識を得易し。

ニ、對等の個人相理解し、相信愛する友愛の情を養ひ易し。

ホ、協同の精神を養ひ易し。

へ、全體の目的を顧慮し、之により自己を處置し、又自己の努力を貢獻して、以て全體を改善せんとする、團體生活の原則を會得し易し。

ト、自治生活を練習し、責任心を養ひ易し。

チ、合理的組織生活を經驗し易し。

リ、各自の自由意志と努力とによる全體の諧調的生活の快感を經驗し、社會生活の根本的興味を會得し易し。

ヌ、家庭の經營設備改善の實驗を試むる自由あり。

而して其の醸し易かるべき主要の缺點は

イ、動もすれば感情的要素缺乏し、怡和の氣象を失ひ易し。

ロ、個人的となり、生活の表面のみ様式を同うして、精神的には融和統一を缺くに至り易し。

ハ、従つて規律は外面的となり自發活動性を妨げ易し。

ニ、全體の爲に個人を壓迫し易し、或は之に反して個人の放恣を増長せしめ易し。

ホ、個人特殊の勉學或は趣味の養成に不便なり。

へ、表面隱忍して、内心不平を蓄ふるが如き忌むべき心性を養ふことあり。

ト、批評心を發達せしめ、強て寮友の缺點を拾ふが如き弊を醸し易し。

寄宿舎の特徴には、右の如き利害あるを以て、なるべく其の缺點を除去し、其の價値を發揮する方法を講ぜざるべからず。而して其の要點は

イ、善美なる校風の要素たる理想精神をして、生活に徹底せしめ、一個の渾然たる精神團體を形成する努力を怠るべからず。

ロ、舎監其の人を得ることを要す。舎監の主要なる資格としては、(一)眞摯誠實にして、公明正大、一切の責任を負擔し、實行の勇氣あり、犠牲の精神に充つることを要す。(二)人生々活に關する理想識見を有し、學生的的生活の保護に任ずるのみならず、その内生活に同情し相當の指導を與ふるを得るを要す。(三)青年心理に通じ、年齢に應ずる特殊の思想感情を理解することを要す。(四)個性の意義を解し、特殊の才能趣味に對して同情を有することを要す。(五)溫煖にし快活なる感情を有し、且つ趣味を解することを要す。(六)明確なる批評力と、周密なる思慮注意を有するを要す。(七)健康にして勤勞を厭はず、殊に研究勉學の經驗を有するを要す。以上を約言すれば、舎監たる者は、教育者として必要な資格を總て具備するを要するが故に、其の困難なるは、一科の教授の比に非ず。従つて常に理想的の人を得るは容易ならず。先づ、誠實にして深切公平にして思慮周密なる人を得ば、則ち大過を生ぜざるを得ん。

ハ、舎生をして總て寄宿舎の意義價値を理解せしめ、意識的に自己の意志を以て、協力せしむるを要す。
ニ、なるべく自治制とし舎監は其の大體を監督せしむる方針に出づるを要す。

ホ、組織の大小、様式、區分方法等は學校により、學生の種類程度に應じ、適宜に工夫せざるべからず。

ヘ、女子寄宿舎にありては、特に感情の涵養と、家庭生活の實習とに力むるを要するを以て、家庭的要素を、なるべく多く加味する工夫を要す。然れども、唯外面的に家庭の摸倣に走り寄宿舎生活の特得の價値を忘るゝは無意

義なり。寄宿舎に於ては、到底善良なる家庭生活と同様の成績を挙げ、以て之に代はること難きものあり。然れども寄宿舎の特長を以て家庭の足らざる所を補ひ、進んで家庭の能くし得ざる修養を與ふるを得べきなり。

ト、寄宿舎は精神修養勉學の場所たると同時に、生活法の實驗研究の場所たらしむるを要す。故に従つて、家庭的要素、其の他、經濟、自治協同の方法に就いて實習することを要す。

チ、寄宿舎は娛樂、慰安、休息の場所たり、趣味養成の場所たるを要す。

リ、設備及び生活法に於て、衛生に注意し、殊に健康の維持増進法を實驗せしむるを要す。

ヌ、舍生の選擇、其の組み合わせ方等に注意を要す。

ル、家庭との連絡、社會との接觸に就いて、周密なる注意を要す。

(木) 卒業生に對する處置

學校の良否は、其の校風、教職員方法設備等に繫りて存すと雖も、然れども社會の評價は、主として、其の卒業生の實績の如何により定まる。恰も果樹の良否の其の果實によりて定まるが如し。故に卒業生の社會に於ける實績如何は、學校にとりて、重大なる關係を有す。且つ夫れ學校教育の目的は、學生をして學校に於ける生活期間を理想的に送らしめ、理想的發達を爲さしむると共に、其の成績を社會の實地生活に於て發表し、又等しく理想的に勤勞せしめ、理想的に事業を営ましめ、永遠に向上進歩の活動を繼續せしむるに在り。學校の一面の目的は、社會の改善進歩を計るに在り。而して社會の改善進歩を計るの道は種々あるべしと雖も、其卒業生を通じ、卒業生の實績によりて之を爲すものを以て、最も緊切重要なものと爲す。全體の標準としては、是の如き重大なる關係を學校に存するを以て、學校は常に校内に於て理想的教育を施すのみに止めず、其の卒業後に於ても、亦彼等の境遇を善くし、其の實績をして増大せしむるの方法を講ずる責任あり。卒業生亦特に努力を費して、學校に於ける教育精神を社會に普及する

責任ありといふべし。

之を以て學校は、其學生の卒業後、方向を定め、地位職業を求むる等の事に對して、深切なる指導助力を與ふべく、又緊密に連絡を保ち、絶えず刺戟を與へ、進歩向上の氣力を失はざらしむるが爲に、種々の方法を取ることが要す。

而して又卒業生としては、一の精神的團體を組織し、其の友情を永遠に保ち、相互に修養を刺戟すると共に、散在せる各卒業生を結合して、學校に連絡せしめ、且つ學校の事業を助け、其の理想精神を社會に實現するが爲に、種々の方法を工夫するを要す。此の團體は社會に對しては、一の模範的團體たるべく、有力なる教化機關たるべく、學校と社會との連絡機關たるべく、又學校に對しては其の教化補助機關たるべく、進んでは、其の教化事業の一として、母校の維持經營を爲し、改善發展を助け得るに至らば、特に最も可なるべし。

(ハ) 社會に對する教化運動及び學校間の關係

學校にして善美なる理想精神を有し、眞に健全なる教育を行ふを目的とせば學校内に於て學生を教育するのみに止まらず、必ずや先づ良學生を得、又良卒業生を有せざるべからず。従つて學生の入學以前の境遇、及び卒業後の境遇に就いて顧慮を拂ひ、餘力のある限り、其の弊害を除き、其の美點を長ずる、一種の社會改善運動を起さざるを得ず。若し社會に惡弊あらば、學生は必ず入學以前既に何等か惡感化を被り來るべく、在學中種々の惡刺戟を被るべく、卒業後に於て、又再び惡弊に浸らざるを得ざるべし。是の如きは、實に學校の教育力をして浪費せしむるの重大なるものといふべきなり。是れ學校が社會に對して黙止するを得ざる所以なり。

戰略に於て、單に防禦を欲する場合に在りても、猶攻勢を取るに非れば遂に守勢をも維持する能はざると同じく、教育に在りても、亦社會の惡弊より學生を救はんとするや、唯學校に閉居孤立するのみにては、元氣萎縮し、精神沮

喪し、遂に教育の効果頗る不確實となるを免れざるべし。故に、校内の向上的精神、進歩の氣力を旺盛にし、教育力をして活潑ならしむるが爲に、學校適宜の方面と手段とにより、何等か對社會改善運動を爲すの要あらん。且つ夫れ、學校は學生の養成を主とすべきは勿論なれども、亦教化機關として、學生の養成以外にも、其の教化力を發揮するの極て有理なるに於てをや。

其の對社會運動の方法に至りては、學校の種類程度組織規模等の異なるに従ひ種々あるべし。其の主要なる事項を舉ぐれば家庭父兄と連絡を密にし、學校の主義精神を理解せしめ、子弟教育上要求忠告を呈出する方法を設くること。聽講制度講習制度等を設け、父兄母姉其の他一般志望者に、知識補習、校風接觸の機會を與ふること。校内講演、地方講演、通信講演等の方法を設くること。殊に下級社會に對し改善救済の方法を取る事。食料品、文藝興行物等を研究し、教育的批評を加へ、家庭社會に注意を與ふる事。特に小中學その他の學校は、適宜地方の社會生活の中心となり、地方改善發展の源泉とならざるべからざる等にして、其の他、社會各種の事象一般生活法に就いて、教化機關として關心するに足るもの多々あるべし。

此等は固より學校の主要事業たる學生教養に對して妨害を生せず、教師をして濫りに疲勞せしめざる範圍に於てするを要することなれども、然れども、其の機會、餘力たる、決して絶無に非ず。適當なる方法によりて、學生をして之に参加せしむるも、亦妨げざるべし。現に歐米各國の學校の如き、盛に社會の矯風改善の運動に従事するを見るなり。

學校と學校との連絡も、亦學生の境遇を健全に維持し、全體の教化力を有効に使用するが爲に必要なり。上下に連絡關係ある學校の互に相理會し、相協議し、學生の境遇變遷をして圓滿ならしめ、相互に於て其の教育の効果を確實にする方法を取るの必要なるは勿論、同種同程度の學校亦常に連絡し、各其の特色を以て互に相研究し、相規正し、

其の間に完全なる教育法を發見する方法を設くるを要す。

第三 家庭

(イ) 教育的境遇としての家庭

家庭は教育的境遇として、極て重大なる價値を有す。抑も家庭は幼者が唯一の世界にして、人の現在に於ける生活の始まる所なり。家庭は人の生活上の諸要素の備はる所にして、其の心身に對する交渉は甚だ複雑なり。又家庭は其の各人間の關係極て緊切にして、其の感情最も濃厚なり。故に家庭に在りては、敢て特に意識を挾まず、意志を用ゐざるも自然の間に、甚だ有力深刻なる共同生活を爲し、從つて甚だ有力深刻なる影響を各家族に與ふ。況や未だ曾て、自然及び人爲の何等印象をも受けたることなく、其の心身の新鮮透明にして純粹柔軟なること、恰も凝固せざる寶玉の如き初生兒にして、其の第一呼吸を此の間に營むに於てをや。其の家庭の幼兒に與ふる精神的感動、物質的刺戟の効果の強烈なるものあるべきこと、密に之を想像する者をして、轉た戰慄の感に堪へざらしむ。特に意を用ゐて、兒童教養の爲に善美なる要素を具備し、其の發達をして自由に、且つ十分ならしむるの切要なるは、敢て多言を待たずして明かなりといふべし。

家庭は家庭の性質上、兒童教養の爲に努力する必要あるのみならず、又學校教育の準備及び補充を爲す所として、教育に對し、努力するを要す。蓋し學校教育は家庭教育の基礎の上に行はれ、又家庭の協同補助を得て始めて其の効果を全くするを得るものにして、家庭と無關係なる學校教育は、全然無効なりと爲すべからざるも、其の効果は甚しく減殺せられざるを得ず。尙に幼者に對する家庭の影響の強烈なるのみならず、學校に在りて其の教育を受くる時間は、一日の中數時間に過ぎず。又一生の中數年間に過ぎず。其の他は多く家庭の中に生活す。且つ學校に在りて學ぶ所を

實行實踐し、之を已に體驗して以て確實なる精神内容ならしむる機會に至りては、家庭の之を提供すること最も多しと爲す。是れ學校教育の家庭の協力を得ずして、到底其の全きを庶幾する能はざる所以なり。

家庭は又社會に對して、兒童教養の責任を有す。家庭は實に社會國家組織の基礎にして、且つ社會國家の成員たる各個人は、實に家庭の供給する所、又家庭の養護する所に繋る。故に社會國家の健全なる發達進歩を爲すと否とは、家庭に於ける教養の適切を得ると否とに基けり。家庭にして兒童教養の努力注意を十分に爲さざるものは、實に社會國家の進運を沮害するものといふべきなり。

家庭は固より家庭として独自の任務を有し、價値を有す。家庭は決して、兒童の教育のみを以て、主と爲すべきに非ず、教育に全力を用ゐざれば、則ち家庭の價値を失ふものと斷言すべからず。又教育を行ふとしても、家庭の教育には自ら獨特の天地あり、必ずしも學校の補助として、又社會の準備としてのみ、其の價値を有すと爲すべきに非なり。然れども、如何なる社會團體と雖も、其の人を包容して、之をして呼吸し、行動せしむるものたる以上は、必ず何分の教育的趣旨なきはなし。況や家庭の生活の各人に對して有する關係の緊密なること前述の如きものあるに於てをや。教育上に於ても、家庭は家庭として、其の特殊の長所を用ゐ、特殊の効果を擧げざるべからざるは勿論なりと雖も、家庭は孤立して存するものに非ず。他の諸機關及び社會全體と緊密なる關係を有す。其の學校及び社會と教育上に於て、相協力し、相補充するに努むるは、實に教育を完備にし、其の效果をして偉大ならしむるが爲に、家庭必須の任務なりといふべきなり。

然るに、世の家庭を見るに、單に家庭を以て寢食休息の場所として、不規律、不秩序、毫も教育的注意を加へざるものあり。兒女の進歩發達を思ふも、或は全然學校に放任して、家庭に於ける教育の責任を顧ざるものあり。或は徒に學校の不注意を罵るのみにして、進んで之を矯正せんとせざるものあり。是の如きは、決して其の兒女の教育に深刻

なるものといふべからざるなり。更に又其の周圍の社會の如何に惡影響を與ふるも、之に對して何等の注意を加へざるものあり。之に反して、兒女を愛撫し、社會の惡影響を怖るゝの餘り兒女を家庭内に閉居せしめ、毫も實社會に接觸せしめずして、策を得たりと爲すものあり。是等も亦兒女の教育に就いて、其の爲すべき所を知れりといふ能はざるなり。

(ロ) 家庭の教育的要素

家庭の教育的要素は、精神的、人格的、歴史的の數項に分ちて觀察することを便とすべし。

第一、精神的要素。家庭に於ける精神的要素は即ち家風にして、學校に校風あるが如く、家庭には各家庭に特有なる一種の精神的空氣ありて、常に其の家庭に充ち、家族を包容し、無意識の間に影響感化を與へつゝあり。此の家風は家族の家に在る限り、一秒の間隙なく絶えず、一樣の刺戟を與ふるものなるが故に、其の隱微の間に、累積する成績の重大なるを知り、家風をして善美ならしむるに力めざるべからず。

教育的價值ある家風の特質は、善美なる校風の要素と略同一なるべく、唯家庭に於ては、學校に比し、智的分子少く、感情的綜合的方面の要求多きを異なれりとすべし。即ち家庭は骨肉自然の愛情を以て、精神的基礎として成立する者なるを以て、家風の主要なる内容は、理智に走り、規則に傾くよりも、寧ろ怡和、溫暖、深切、明快なる感情を濃密にし、以て幼者の心情をして、柔和に、溫順に、自由に、純粹に暢達せしむることを庶幾すべし。是の如きは將來永く進歩發達すべき性格の基礎的要素なり。又我を忘れて他に同情し、努力苦痛の感なく、喜んで、他の犠牲となり、意を用みずして、自ら共同互助、各人一體の觀念を得ること家庭に於けるが如きは、他に是れなき所、而して是れ等は社會生活の根本道德なるが故に、此の點は家風の特長として、最も其の充實に力むることを要す。

生活には一定の規律秩序、禮儀作法なかるべからざることを學び、殊に長上の權威に服して、容易に批判せず、其

の命令を遵奉して、遲疑することなく實行し、叱責せらるゝも悔いず、罰せらるゝも怨まざるが如きは、實に國家生活上緊要なる氣風にして、是れ亦家庭に於て最も善く養成せらる。而して家庭に於ける此等學習は、文字口舌に依つて解析講義せず、又必ずしも外力を用ゐて強制せず、同情同感に依つて導かるゝ直感的知識と、及び坐臥寢食談笑の間にて、知らず識らず養はるゝ習慣とによるものにして、之を概言すれば、則ち家庭に於ける學習は、總て實行的態度を有す。是れ將來の修養に於て、最も貴重なることなるが、家庭に於ては、此の本來の特長を發達せしむることを要す。

更に又家庭に於て、比較的にも容易く養成せらるべく、且つ同時に家風及人格の要素として缺くべからざる感情は、敬虔、嚴肅、感謝、謙虛の宗教的氣分と爲す。此の宗教的氣分は、常に親昵愛狎に過ぎて、動もすれば則ち不規律荒怠に流れんとする家風を振肅して、其の内容的統制力となり、而して又將來人をして、進んで、生活の原義、人生の歸趨に關する確乎たる信念を形成せしめ、向上精進の標的、道德實行の原動力を與ふべきものなるを以て、此が培養には必ず常に留意するを要す。是れ亦唯家庭のみの要求に非ずと雖も、其の文字口舌に依つて講説するよりも、日常坐臥の間に於て、無意識裡に養成せらるべきものなるを以て、特に教育上家庭に重きを置くを要するなり。

家風に就ては、猶論すべきもの多し。然れども、今は其の主要なる精神内容を擧ぐるに止む。又家風を作る要素は、家族の人格、家の歴史、家憲、職業、周囲の社會より家庭庭園の構造、土地氣候等に至るまで多種あり。此等諸要素を悉く綜合して、其の上に理想的家風を作るは決して容易なる事に非ず。家庭を爲す責任人格者の負担は實に重大なり。

第二、人格的要素。家庭の人格的要素は即ち家族にして、必らずしも法律上の家族に限らず、又一家屋内に在りて、日夕寢食を共にし、他の外界社會に對して、全く特立せる共同團體を爲すもの是れなり。此の家族は相合して一

の家風を作り、又相互に相感化し、殊に幼者に對しては、多大の影響を與ふるものなるを以て、各自ら警めて、修養を深くし、奴婢の如きも、意を用ゐて選擇し、且つ之が教育を怠らざるを要す。

家族間の道徳は、之を一言にして覆へば則ち愛なり。溫暖純粹なる愛に於て同心一體たるもの、之を内容的に見たる理想の家族と爲す。然れども、家庭に於ける愛は、自宅の衝動に發する本能的愛情に止まるべからず、必ず至善の信念に趨向する合理的愛情にして、人格の尊貴に對して發動する精神的道徳ならざるべからず。故に家族各自の精神も前述の善美なる家風の内容と一致するものたらざるを得ず。

幼者に對する教育的要求よりして言へば、家族の共同一致して、其の間に矛盾扞格なき事と、及び向上進歩止まざる活氣ある事とは、特に最も必要なり。然るに此の共同一致は、家族皆其他の人格の尊貴なることを信じて之を愛護し、而して相共に至善なる理想信念を追求し精進止まざる態度を一にするよりして、自らに生ずるものを尊しと爲す。彼の本能的愛に任せて相親狎するに止まり、或は利害の打算により、僅に相妥協するに止まるが如きは、唯一時外觀の共同にして、到底永遠のものに非ず。従つて決して良好なる感化を幼者に與ふること能はざるべし。又彼の主宰者の地位に居るものにして、自是自滿、獨り自ら尊貴にして、總て他をして、威服せしめ、以て家族間の統一を固くせんとするが如きも、亦一時外觀の共同を求め得るに過ぎず。他の家族は之に對して、反撥睽離するか、然らざれば無精神なる奴隸となるかの二路に分るべく、到底教育的家風を作ること能はざるなり。教育的家族の覺悟は、老幼男女、總て皆悉く同一修養の行路に於て、同行の道友なりと解し、等しく皆謙遜に等しく皆柔和に、互に相扶助誘掖して進むべく、唯多少の先進後進の差あるによりて、或は智徳善美の先づ達せる處に於て指導し、或は目的方法の、未だ知らざる處に於て、指導を受くるに過ぎざるものなるを知るを要することに存す。此の根本に於ては、學校に於ける教育精神と全く共通なり。而して家庭と學校とが兒童の教育に就いて相連絡し、相協力すべき所以の内容的基礎は、此

の共通の根本的教育精神に在りて存す。

家庭に於ける人格的要素の中心として、殊に教育上の責任を負へるものは父母なり。父母の幼児教養上重大なる地位に居るは、理論上多言するを要せず。彼の感化院等に收容せらるゝ不良兒中、父母共に現存するものは少く、其の過半は、父母共に存せず、又は父母の一方なきか、繼父母を有するかなるを見れば、反面より父母の感化の重大なるを知るべし。而して又唯父母の有無すら、兒童の性格に多大なる影響を與ふるの事實によりて、其の人格の感化、教育的注意の有無、適否の効果如何を推知するに足るべきなり。

教育的境遇としての家庭を主宰し、幼者教養の事に當る所の父母は、人生々活に就いて確乎たる理想信念を有し、能く家庭の教育的任務を理解し、且つ身體健全、心情圓滿にして、光明溫暖なる家風の源泉たるべきは勿論精神及び身體發達の理論方法に關する知識を有する事、生理衛生、住居、食物、衣服に關する知識を有する事、殊に幼兒の心理及び生理に關する知識を有する事を要す。而して兩親中家庭に在りて子女の教養に當るものは母なるを普通とするが故に、母たる者は最も教養衛生上の知識を有するを必要とするなり。

然れども亦家庭教育に於て、知識に偏し、學理を重んずるに過ぎて、幼兒の取扱方の機械的に流るるは、其の最も忌む所と爲す。是の如きは家庭本來の性能と相容れざることにして、其の結果、兒童の元氣を萎縮せしめ、其の感情を冷却せしめ、陰鬱執拗の性格を養ふに至る恐れあり。彼の教育者の子女の必ずしも善良ならざることあるを傳へらるゝが如き、其の方法を工夫するに偏して、兒童本然の發達を妨げたるに基くものなしとすべからず。

之に反して、兒童の自發活動を重んずるに過ぎ、其の本然の性能の發展の自由を重んずるに過ぎて、全然之を放任に附し徒に自恣放逸、不規律秩序の生活を爲さしむるも、亦教育上良好の結果を得る所以に非ず。兒童の稟賦には、心身上種々の先天的缺陷なきに非ず、又後天的に種々の惡習に染み、惡癖を長ずることなきに非ず。此等は兒童各個

の性質に應じ、適當なる時期に於て、適當なる矯正法を講ぜざれば、遂に頑固なる習慣となり、長ずるに従つて矯正の困難を増し、自他共に之が爲に苦むに至るべし。

家庭に於て最も誤られ易き幼兒教育法の一は、其の知識に關する方面に在り。兒童を愛して、早く其の發達を見んとする父母祖父母等は兒童の要求如何に關せず、唯己れの好む所に從ひて、心身發達の程度に適當せざる事項を注入し、只管其の諧記を強ひ、之が爲に兒童が心身の調和的發育を害し、且つ却つて學問の興味を失し、將來の禍根を遺すものあり。一面に於て兒童の視聽に入る外界の事々物々は、總て新鮮新奇ならざるはなく、痛く其の好奇心を動かし、絶えず、何等かの疑問を發せしむ。是れ知識慾の發動にして、此の知識慾の發動を適當に處理し、追求研究の興味を養ひ、且つ其の方法を知らしめて、以て漸次獨立的に觀察思考する力を與ふることは、將來の爲に極て重大なるにも拘はらず、多數の父母長上は、煩累を厭ひて之を放任し、然らざれば、則ち其の無邪氣なる滑稽の態あるを喜び、徒に諧謔戲言を以て之に酬い、嚴肅なる教育的注意を以て取り扱はざるものあり。是の如きは、實に兒童の爲に悲むべき不幸と言はざるべからず。

特に本邦の家庭教育上等閑視せられつゝある事項は、自治獨立の氣象を養ふこと、即ち是れなり。此の自治獨立の氣象を有することは、今後の國民生活上極て必要なるにも拘はらず國民全體に互る缺點にして、之が養成は、容易の業に非ず。是れ家庭に於て早くより努力を要する所にして、日常生活上の萬事に於て、自己の事は、なるべく自ら爲し、自ら責を負ひ、止むことを得る事に關して、猥に他に依頼するを以て恥辱とするの風を養ふことを要す。自治的氣風の缺乏と共に存する他の重大なる缺點は、規律秩序の缺乏なり。本邦の家庭に於ては、一般社會の風習と等く、長上を尊敬し、其の分を越ゆるを許さざる一點に於て、甚だ嚴肅なるものもあるも、生活の一般に就いては、毫も規律秩序なく、起臥、飲食、執務、休息、訪問等、殆ど一定の標準なきを常とし、假令之を規定するも些々たる情實の爲

に容易く之を破棄して顧まず。學校に於て、規則的生活を教ふるも、之を學校のみの特殊の方式として、家庭は無關心なる状態に放擲するを普通とす。是れ兒童の心身をして不健全ならしむる重大なる一因にして、且つ其の結果、社會生活上種々の不便不都合を惹起しつゝあり。益々繁忙となるべき今後の社會に於ては殊に然りとすべし。而して規律秩序等は生活上の實行的條項にして、平生の習慣によりて養はるゝものなるが故に、家庭に於て之を勵行し、幼兒をして早くより之に慣れしむるを要するなり。

家庭教育上、更に努力を要することは、其の學校との協力、及び社會に對する注意なり。方今多くの家庭を見るに、善く其の子女の教育を重んずるものと雖も、一度之を學校に託したる後は、其の教育の大部分を學校に委任し、唯學校の成績の優等ならんことを望むのみにして、子女其の人の完全圓滿なる發達進歩如何に就いては、殆ど留意するもの少きが如し。學校は固より専門の教育機關なりと雖も、子女が性格の形成發達よりして之を見れば、唯其の一部の與件たるに過ぎず。學校の方法設備にして如何に完全の域に達するも、家庭社會自然の一切より來る所の、複雑限りなき影響を整理し、此をして悉く皆善美なる教育的要素たらしめ得べきに非ず。又各個の兒童に就き一々其の個性を研究して、心身上の長所短所、遺傳習癖を知悉し、適當愷切なる教育法を施して、遺憾なきを得るものに非ず。今日の如く、教育費乏しく、過少の設備と不十分なる教員を以て、過多の學生に速成教育を施さざるべからざる時には殊に然り。是れ家庭に於て、特に努力を要する所にして、一面善く學校の教育法を理會し、其の徹底を家庭に於て助くると共に、其の過不及の點に就いては、或は學校に忠告し、或は教員に注意し、殊に兒童の個性習癖等は、詳細に學校に報告して、其の特殊の注意を促し、絶えず協同して、以て兒童の教育的境遇を完備することを要す。是の如き注意は不十分なる學校教育をして、其の効果を偉大ならしめ、兒童の發達をして十分ならしむるが爲に、避くべからざる父母の責任なりと言ふべし。

對社會の注意に於ても、亦多くの家庭の不十分なるを見る。兒童をして觀覽せしむるに適當なるか否かの研究なく、漫然子女をして、各種の興行物を觀覽せしむるが如き、其の内容を検せずして、出版物を與ふるが如き、教育上避くべき人物をして、猥りに家庭に出入せしむるが如き、その他、子女の爲に有害なる影響を與ふべき風俗習慣に對し、何等の注意なく、子女の之に接觸するに任ずるが如き、家庭の責任者として、又其の子女を愛する父母として、決して其の宜きに適せりといふべからず。社會の惡影響を恐れ、徒に子女をして家庭内にのみ閉居せしめ、成るべく其の視聽を遮らんとするが如きは、固より不可なりと雖も、外界刺戟の影響に就いては、精密なる注意を拂ひて、其の善美なるものを選択し更に進みては、子女教育の爲に、社會改善の努力を爲すに至る程の、教育改良心と氣力とを要す。

子女教育の目的は、其の善美なる發達を庶幾するに在り。然るに、子女の心身の先天的性質にして、劣惡なるものあらんか、到底教育の効果を擧ぐるを得ず。假に種々の方法によりて、先天的缺陷を矯正治療することを得べしとするも、其の事たる頗る困難にして、決して尋常普通の教育の比に非ず。是故に子女に對して善美なる教育を與ふるに先ち、善美なる素質を有する子女を得るの工夫を爲すは、必然父母及び教育者の希望にして、且つ又社會國家の要求ならざるべからず。而して善美なる素質を有する子女を擧ぐるに必要な注意としては、第一、胎教に注意することにして、更に進みては、結婚に注意することゝす。

胎教は古より重んぜられたる所なるが、今日に於ては、衛生上の注意は大に進歩したれども、精神上の注意に至りては、却つて古に劣れるの感あり。母の思想感情行爲等が胎兒に及ぼす影響に就いては、今日の科學上、確實に其の因果關係を證明する能はずと雖も、少くも一般的に何等かの影響あるは到底否定し難き所なり。故に古人が常識を以て設定したる胎教の如きも、今日に於ては猶多大の價值あり。而して胎教の基礎は、母たる者の平生の精神修養と身體

の健康法とにあるは論を俟たず。次には咄嗟の事象に遭遇するも周章狼狽せず靜に之が處理法を考ふるに足る堅固なる信念、明敏なる判斷力、生活上の知識を有するを要し、更に又特に妊娠時に必要なる、心理及び衛生上の知識を準備するを要すべし。他面、其の境遇として、家庭の和樂溫暖なるを要し、妊娠の意義過程を解して、之に對して同情と尊敬とを拂ふ所の家族を要し、更に其の住居の快適、周囲の社會及び自然の靜穩にして閑雅なるを要す。

心身健全なる能力の子女を得んと欲すれば、更に遺傳の善惡を顧みざるべからず。遺傳に關する研究は、今日未だ十分の域に達せりと爲すべからざるも、遺傳の事實を認むるは勿論、其の遺傳の諸法則も、殆ど確實なるものとして假定せらるゝに至れり。之によれば、人の個性才能體質の如きは、皆遺傳によりて決定せらるゝものにして、其の父母の選擇、配合の如何は、遺傳する或る特質の發現を、或は増大し、或は減少す。父母特殊の經驗習慣の直に其の子に遺傳するか否かの決定は、未だ確實ならざるも、遺傳の事實を認むる以上は、何等かの程度及び様式に於て遺傳するものと解するを妥當とすべし。殊に其の遺傳の事實の著しきは、父母の中、精神病に罹りたる者ある時は、其の子孫に精神病に罹り易き性質を遺傳する事、梅毒、酒毒に犯されたる者の子に、著しく心身の缺陷を示す者の多き事、結核性諸病に罹りたる者の子には、同じく結核病に罹り易き素質を遺傳する事にして、此等は歴々として眼前に其の事實を指摘することを得べし。

故に正常健全なる子女を得んとするものは、結婚に際して、當事者相互に、其の心身の特質、性癖等に就いて研究し、其健全正常なる者を選抜すべきは勿論、更に遡つて其家系に及ばざるべからず。我が國俗、結婚に際して、相互の家系を重んずるは、唯門閥の意義に於てのみならず、教育上極て意義あるものといふべきなり。心的缺損性ある者に關し、遺傳の研究より導かれたる、人種改良の爲の結婚法則は、

- 一、心的に正常ならざるものは、正常なる家系に屬する正常の者と結婚し、其の子の正常なる者、復他の正常の

家系に屬する正常なる者と結婚すれば、心的缺損性は現はるゝことなし。

二、心的缺損性ある家系の正常の者、正常なる家系の正常なる者と結婚すれば可なり。但し同體質の者の結婚を避くべし。

といふに在りて、心的缺損性ある家系の者、必ずしも缺損性を發現するものに非ず、結婚によりて、遂に缺損性を埋没し、正常健全なる子孫を擧ぐるに至るべきも、而も常に正常健全なる家系に生れたる、正常健全の者相婚し、以て益々其の健全性を増加するに若かざるなり。

家庭經營の重大にして且つ複雑なる事業たる所以、又子女教養の、最も高尚なる品格と、極て精確なる知識とを要する任務たる所以を解せば、必然、之に對する準備の、決して淺薄疎忽なるべからざるを思はざるを得ず。此の準備たる、家庭を成す所の人格たる、男女共に必要なり。然れども、多く家庭に在りて、直接に其の衝に當る者は女子なるが故に、女子の教育は實に重大なり。現今女子教育に於て、良妻賢母の養成を標榜せざるはなしと雖も、其の實際を見るに、特に家庭生活の準備たるべき教育は家事の一科なり。然るに家事科に於て教ふる所は、極て淺薄なる衛生經濟衣食住に關する概説にして、時間數も甚だ少く、寧ろ裁縫料理等に多大の時間を費しつゝあり。是の如くにして、果して將來帝國の進運に適應する家庭經營、子女教育の準備たるを得るや、否や、頗る疑ひなきを得ず。吾人は少くも中流以上の家庭を經營し、國家の中堅たるべき國民を教養する任を負ふ所の女子に對しては、更に其の教育の程度を高むると共に、其の教育法を改良し、其の重任を果すことに於て、今日に倍する成績を擧げしめざるべからざるを信ずるなり。

第三、歴史的要素。國家に特殊の體制を有し、其の建國の歴史極めて舊く、且つ國礎に何等の動搖を見ることなくして、連綿今日に至れること、我が帝國の如きに在りては、家庭にも亦許多の歴史的要素ありて、重要なる背景を爲

せり。祖先以來傳承する所の家風家例の如き、家憲の如き、系統の如き、はた家族制の如き、是れなり。

家を以て祖先の靈魂の宿る處と爲し、家族は皆祖先の意志を實現する義務を負へる者と爲す古來の信條は、家庭の意義をして神聖嚴肅ならしめ、敬虔眞摯莊重の氣風を養ふ上に、偉大なる効果ありし、は疑ふべからず。而して家風家例家憲等は、祖先の理想を實現する要件にして、且つ其の家庭をして特殊の風格を帶ばしめ、延いて家族たる各個人の品格を養ふ所の一要素たるが故に、之を尊重し、遵奉するは、教育上の効益少からざるなり。然れども此等の祖先以來の風格規定には、往々にして時處位の變態に該當せざるに至れるものあり。進歩したる道德上の解釋より見て、不合理と爲さざるを得ざるものあり。是の如きは、正理の示す所に従つて、適宜改善するは、固より當然の事なりとす。道理上爲すべからず、時勢上行ふ能はざるにも拘はらず、形式的に之を墨守し、而して道理當に斷行すべく、時勢上極に適切なる新理想、新信仰の發展を沮止するが如きは、寧ろ是れ祖先の意志實現の本旨に背くものといふべきなり。唯之が改廢を輕々にするは、歴史的權威を破壊し、其の教育的効果を減少する所以なるが故に、十分なる熟慮を経て、嚴肅なる態度を以て之を爲すの用意を要す。一種の成文律を爲せる家憲の如きは、殊に此の用意を必要と爲す。

我が古來の家族制が家を主として人を従とし、而して家族が生存上の全責任を、家長たる一人に委して、他は總て此に依頼して生活するを常道と爲せるが爲に、人格の觀念をして發達せしめず、個人の自治獨立心をして銷磨せしめたるものあるの弊、及び今後に於ては、人格尊重の觀念と、自治獨立心との養成せざるべからざる理由は、既に之を論ぜり。夫れ家の重んずべきは祖先なる人格を重んずるが爲なり。又、家の尊貴なる所以を實にする者も、等しく人格たる現在の家族なり。果して然らば、家の本質は人格に始まりて、人格に終るものにして、家の基本は即ち人格なりといふべし。故に人格を重んずるの風を養成し、之によりて家庭をして、益々有意義、有價值ならしむることは、

家を重んずる我が國俗と一致し、其の本意を實現するものといふべきなり。

祖先に權威を置き、子孫永く傳承するを本意と爲せる、我が國の家庭成立の樞軸は即ち父子關係なり。従つて、子たる者は、結婚と共に別に新家庭を構へず、殊に長子は必ず其の家に在つて、相續繼承の責を果さざるべからず。此の點西洋の概して夫婦關係を以て家庭の基礎とし、結婚すれば、則ち同時に新家庭を興すの風あると同じからず。故に我が國の家族組織は概ね複雑にして、父母祖父父母兄弟の夫婦に至るまで一家内に寢食を共にすること多し。是れ蓋し家の意志と、個人の要求と、又家族相互間の思想感情の衝突により、家庭内に屢々紛紜を生じ、離婚等の類々として行はるゝ一原因なり。殊に近來新思想普及し個人的自覺の生ずると共に、生活上、新舊思想感情の衝突は到る處に起り、乃ち父子別居主義を唱ふるものを生じ、且つ之を實行する者、次第に増加する傾向を呈せり。

我が國從來の家族組織の内容が、是の如く複雑なるは、更に祖先と、家の慣例と及び家長の權威とを重んずる勢を馴致せり。即ち複雑なる組織を統一するが爲には、此等の要素によりて、他律的に束縛を加ふるを便利としたればなり。斯くて外形上に結束を固くせる内實に於て、精神上の調和融合を缺き、統一的發達を妨げたる場合に於ては、常に家族各個の自治獨立の氣象を妨げ、依頼心を養成したるのみに止まらず、猜疑、嫉妬、警戒心、祕密心等を養ひ、公明率直自由闊達の氣風を害し、殊に個性の發達、自發活動性の發展を遮止したるの弊少からざるものありしが如し。是の如きは、善美なる共同生活の理想と全く相反せる弊害にして、教育上斷じて許すべからざる惡毒たるは言を待たず。縱令弊害の是の如く甚しきに至らざらしむるも、家庭に於ける精神上の統一を缺き、思想感情の調和なきは、子女の教育上極て好ましからざることなるが故に、別居獨立主義の起るの、蓋し止むことを得ざる場合あることを認めざるべからず。

然れども、個人關係の複雑なるは、寧ろ社會の常狀なりといふべく、老あり、幼あり、男女あり、父子夫婦其の生

活を共にするは、子女に社會的共同生活の精神と方式とを教ふる上に於て、甚だ便利なる組織なるを見る。殊に複雑なる家族が同胞骨肉の親密なる自然關係に於て、内容的に相融合調和し、其の間に毫も間隙を許さざるは、教育上一種の理想的要件なり。而して我が家族制は國體に相應せる歴史的古制にして、教育上有効なる幾多の美點を有せると前述の如くなるが故に、今後の生活に於ては、根本的に之を改廢するの必要なく、又改廢すべきものに非ず。唯其の眞意義を尋ね、新時代新思想の適應に依つて、其の價値を發揮する方法を講ずべきのみ。其の方法とは、即ち人格の尊貴なる所以を認め、個性の自由を許し、人々相互の愛情と、理解とによる、道德的結合を以て家庭の内容とするに在り。個人的自覺の益々明瞭となるべき今後の社會に於ては、單なる祖先の名目、又は古來の習慣等のみを以て、統一の原則となして、各人をして満足せしむることを得ざるべく、必ずや現在の思想に適合し、發展的生活の原動力となるが如き、合理的根據を有せざるを得ざるべし。

日本の家族制は動もすれば、人格輕視の弊に陥れること、既に説ける所の如し。又而も其の根柢に於ては、到底人格に歸着すべきものなることも、既に説ける所の如し。思ふに、祖先の靈魂に信賴し、其の意志の遵奉を重んずるは、即ち生命の永遠性、人格の繼續性に對する憧憬、欣求を示すものにして、此の生命人格を以て根本とすることに於ては、個人の新發展を庶幾すること深き今日の思想と、全く一致せるものといふべく、又此の兩面の思想を缺かば、吾人が生活の意義は忽ちにして空虚とならん。故に生命の意義を悟り、人格の尊貴を知り、此を以て生活の出發點とすることは、即ち我が古來の家族制の眞義を今日の時代に發揮する所以の要諦たるを見るなり。

(ハ) 新組織の家庭

之を社會的に言へば、生命人格の永遠の實現を原義とし、之を現はすに父子相承の關係を以てし、之を中心とせるは、即ち我が從來の家族制なり。又個性の自由に依れる調和、獨創的新發展を原義とし、之を現はすに夫婦一致の關

係を以てし、之を中心として成立せるは、即ち西洋の家族制なり。此の兩家族制を打つて一丸となし、生命人格の觀念に於て、之を統一し、各人間の理解と愛情とを以て、之を結束するもの、是れ即ち今後の家族制の原理たるべく、而して是の如きは、即ち吾人が社會生活の出發點として、價值あると同時に、教育の原理と一致する所の方針なりといふべし。

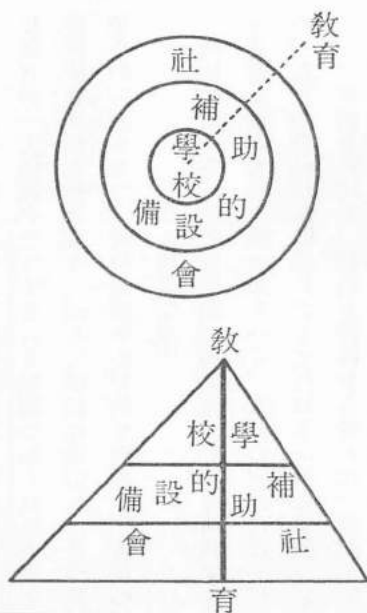
故に教育に於ては、是の如き家族制、家庭生活を標準として、以て家庭生活の準備を與ふべく、各個人亦之を方針として、自己修養に力むべし。教育的境遇として完全なる家庭は、之によりて成立するに至るべきなり。而して其の完備に至る過程としては、或は暫く舊形式を踏襲して、之に依つて却つて教育の効果を擧ぐる場合あるべく、或は別居制を取りて、以て家庭精神の統一を保つて止むを得ざることあらん。其の他、中間に於て、許多の段階あるべし。要は、其の時處位の宜きに適する所により、根本精神の實現に便なる形式を選択すれば、則ち可なるべし。

第四 社會

(イ) 教育的境遇としての社會

學生が家庭を出で、學校を出でたる後に於ては、唯社會に在りて、生長發展するものなるが故に、教育的境遇の重大なる一部として社會の考察を怠るべからざるなり。

一面より言はゞ、教育は社會の要求に應じて行はるゝ、事業なるが故に、社會の實地に密着するを要すると同時に、社會又常に教育を監督し、保護し、補助し、聲援し、以て其の社會的效果の最大ならんことに努力せざるべからず。之を詳言すれば、第一に社會は時勢の進轉に應じ、絶えず其の要求を教育に向つて提出し、之に對する準備を求め、以て適切なる教育機關を有することを要すべし。第二に、教育機關を保護し、其の活動をして十分ならしめ、其の力



の不足とする所を補充するの用意を要すべし。第三、社會自家の組織及び風習を教育的にし、學校の卒業生及び其の他の青年を受領して、其の發達進歩を連續せしめ、且つ教育の効果を實地に發揮せしむることを要す。

本邦の狀態を顧るに、社會は教育の事業を學校及び教員にのみ委任し、社會自家の組織風習を改良して、適に學校教育の趣旨と一致調和するの努力を爲し、且つ又學校教育の力の足らざる所を補充すべき各種の方法を設けて、以て教育の遺漏なからしむる用意に至りては、頗る迂濶なるもの、如し。之を歐米諸國が、常に學校其の物に對して多大の費用を投じ、種々の援助を與ふるのみならず、更に又學校教育以外、雜多の教育的機關を設け、又矯風改善に努め、以て教育に對し、全體的協力の實を示すに比すれば、其の間に甚しき軒輊あり。之を以て、我が學校に在りては、教育費の不足なるが上に、更に社會的勢力は全く孤立の狀態に在り、從つて、其の效果は甚だ薄弱なるものとならざるを得ざるなり。社會にして教育を要せずんば則ち止む。苟も既に教育を要すとして、學校を設立維持する以上は、更に之に對して協力し、以て其の效果の十分なることに努めざるべからざるなり。

要するに、社會は、學校をして社會に同化せしめ、遂に學校を社會化し、以て實地に適切有効なる教育を行はしむると共に、他面、社會は自ら進んで學校に協力し、各種の補助的事業を起し、更に社會全體を擧げて學校化教育化し、以て社會自ら教育を要求する所以の本旨を徹底せしむべきなり。即ち教育を以て、全然一の學校のみの専有物とせず。中央に學校あり、之を圍繞して、各種補助的設備あり。其の外廓を繞りて、社會全體あり。此の三者を貫通連結する

に教育の一大樞軸を以てすること右圖の如くなるを要す。教育は是の如くにして、始て能く社會に其の十全の價値を發揮するに至るべきなり。而して學校に協力し、且つ其の補助的設備を爲すは、即ち社會的教育的任務の直接的乃至積極的方面にして、社會自家を教育的に整理し、青年の修養を保護するは、即ち其の間接的乃至消極的方面なり。

(口) 直接的方面

積極的乃至直接的教育補助の事業は、學校を補助するもの、教員を優待するもの、種々の設備を整へ、學校の足らざる所を補ふもの等種々あるべく、又其の方法には一個人として爲すもの、特に團體を興し、其の力によりて爲すもの、在來の公私機關團體によりて行はるゝもの等種々あるべし。

一、學校を補助し、教員を優待する者とは、農商工等の實業家が自家の取り扱へる製品を參考品として、寄附するが如き、藝術家が其の作品を寄贈するが如き寄與も其の一法なり。書畫器什の珍藏者が、時に學校に貸與し、若くは、自家に學生教師を招きて、之を展覽せしむるも其の一法なり。都會地に在りて、廣大なる庭園を有する者が、時々學生の爲に之を開放し、殊に日曜日にて、兒童の散歩場に貸與するが如きも、其の一法なり。工場所有者が附近の學生又は教師をして、特に見學せしむるが如きも、其の一法なり。

殊に精神的に有効なるは、個人として時々學校を訪問することなるべく、大多數の人は、父兄保護者の位地に立つ機會を有するが故に、此の機會に於て、關係學校を訪問して、學校の意見を聴取し、實地に觀察し、之に對する批評、自己の所見を陳ぶるが如きは、學校と社會と相理解し、且つ自ら教育の趣味を解すると共に、學校當事者を獎勵すること少からざるものあるべし。我が普通教育學校に於ては、毎年一二回父兄を學校に招待して、父兄會を開き、以て學校と家庭との連絡を計りつゝあり。今此の父兄會の趣意を擴張し、社會的積極的意義を帶ぶる、一箇の學校後援會と爲すが如きは甚だ切要なり。即ち一學校に同じく子女を送りつゝある父兄姉等が、學校の父兄招待會等の時

機を利用して、一の父兄のみの會合を催し、子女の教育に就いて、互に談話し、その結果の緊要なるものは、學校に對する注意、參考として教師に提出するが如き、時に父兄會より教師を招待して、歡談を共にするが如き方法を探ること之れなり。若し是の如き會合にして常設せらるれば、社會、家庭、學校の三者を通じ、便宜を得ること多大なるものあるべし。

又醫師の學校に助力すべき範圍は、現今よりも、更に擴大せられざるべからず。現今の如く、體格を檢查し、眼疾、齶齒等を治療し、傳染病に注意し、或は學生の無料診察を爲す等の、疾病治療方面の外に、課業に對し、圓滿なる進歩を示さず、或は熱心を缺き、或は疲勞し易き等の兒童、其の他、多少尋常健全ならざる状態を示す兒童に就き、其の生理的原因を發見して、適當の矯正法を指導するが如き、更に進んでは、各兒童の心身の特質偏向等を生理上より觀察して、教員父兄に作業、休養、其の他一般生活上の注意を與ふるが如き、學校全體の生活法に就いて、衛生上の忠告を與ふるが如き、極て緊要なる事項にして、醫師の手を待つべきもの、決して少からざるなり。

本邦の社會各方面に就いて見るに、教育に熱心なること、軍事當局者を以て最なるものとすべし。戰利品を全國の學校に寄贈し、毎年の記念日には、諸學校に人を派して講話を爲さしめ、又地方駐在の司令官が時々中學校等に臨みて講話するが如き、此等は皆必ずしも大事業に非ず、且つ特に軍事思想を養ふが爲にするものなれども、他の政治經濟等に關する方面に於ては、絶えて是の如き努力を爲すものあるを見ず。政治經濟等の方面に於ては、學生の常識を補ひ、趣味を養ひ、又教師が教授材料として參考に供すべき事項、果して之れなきか、吾人は其の決して然らざるを信ずるなり。殊に少くも、殖民、貿易、産業、其の他の事項につき、其の國の内外に於ける變遷進歩の状況を知るに足るべき、報告統計等を時々學校に送り、教授の活材料たらしむるが如きは、勞少くして、功は極めて多き方法なるべし。

教育をして實地に適切に、社會に有効ならしめんと欲すれば、其の教員をして、活知識を有せしむるより善きはな

し。故に社會はなるべく教員を刺戟し、其の見學補習に便宜を與へ、教授材料を供給せざるべからず。殊に小學教員の如きは、其の一人の教授する所、社會萬般の事に互り、悉く其の概要を知らざるべからざるに、一人孤立して、遺憾なく其の知識を補習し、絶えず教授の新資料を準備するが如きは、容易に爲し得べきに非ず。是の如き事情にある教師に對しては、社會はなるべく協力し、以て教育をして時勢に適切ならしめ、其の効果を増加すると同時に、教員優待の一事と爲す工夫を要すべし。本邦の教員が屢々早く老朽し易しとの非難を聞くが如き、若し果して信ならば、教師自己の不勉強に依るの多きは勿論なるべけれど、亦社會の之を放任して、何等の刺戟を與へざるに依るものなしといふべからず。

二、學校以外に、種々の設備を整へ、學校教育の及ばざるものを補助するものとは、例せば多數の圖書館を設け、學生の課外の讀物、參考書を備へ、又卒業者の修養に便するが如き、博物館、物産陳列館、動物園、植物園、美術館等を設け、其の排置説明の方法等に工夫を施して、觀者をして、一見直に其の大體の知識を收得せしむるが如き、講演會を開き、幻燈、活動寫眞、音楽等によりて、知識と趣味との補習を計り、同時に他の不潔なる娛樂に耽る機會を減少するが如き、殊に母たる者に對して家事及び教育上の知識を與ふる方法を設くるが如き、都會に於ては市内處々に小公園を設け、兒童をしてなるべく日光浴、空氣浴を爲さしむると共に、道路に嬉戲する危険と不便とを避けしむるが如き、郊外に運動場、病弱兒休養所を設くるが如き、其の他、之に類する者を擧ぐれば、更に多々あるべし。要するに此の補助施設は、學校の生徒の知識と趣味を補習し、健康を保護すると同時に、悪影響を被るべき機會を少からしめ、學校と内外相應じて教育を全うせしむるを其の一面の目的とし、更に學校卒業後、其の自修を助け、又學校に於て十分なる教育を受くる能はずして、實務に就ける少青年をして、業務の傍、學藝を補習し、強ひて學校に入りて苦學せざるも、相當の知識を具ふるを得しめ進んで一般民衆の知識趣味を開發することを以て、他の一面の目的

とするものとす。

此等の補助的教育乃至社會的教育事業の必要は、本邦に於ても夙に唱へられたる所に於て、既に實行の緒に就ける者も少からず。然れども猶甚だ幼稚にして、多く見るべきものなきが如し。且つ多くは官府公共の事業にして、私人の事業に至りては、慈善的意味を有するもの、外、積極的教育事業に關するものに至りては甚だ少し。貧病者に對する慈善事業も亦緊要なりと雖も、一般多數の健全なる少年青年をして、其の心身其の發達進歩を十分ならしめ、其の精力を浪費せしむることなく社會有用の材たらしむるは、其の價値更に重大なり。吾人は本邦特志家の、是處に著眼せんことを切望す。

歐米諸強國に在りては、此等社會事業頗る盛にして、其の學校教育の十分なると相俟ちて、教育普及、民衆教化の方法の行き渡れる様、人をして嘆稱せしむるに足るものあり。ニューヨークの一市のみにても、學校教育補助を目的とする私設團體二百に餘り、其の之が爲に費す所の金額は、年百萬弗を超ゆといふ。歐米、殊に米國に在りて注目すべきは、此の種の事業に婦人の關係せることの甚だ多きことなりとす。是れ子女の教育に對する責任上、蓋し當然のこととなるべし。

本邦に在りては、古來の風習上、社會精神の發達幼稚なるが故に、個人私設の社會事業の發達は、容易に望み難きものあらんか。此の點に於ては、特に自治團體當事者の顧慮を煩はざるを得ざる所なり。即ち自ら種々の學校事業を興す外に、學校と社會個人との仲介者となり、社會個人をして學校に對し種々の便宜を與へしむる方法を講ずるに力められんことは是れなりとす。

(ハ) 間接的方面

間接的乃至消極的方面とは、専門教育事業と、直接に相關係せず、積極的に之を補助するに非ずして、社會の各方

面に於て、教育の障害となり、學生青年に惡感化を與ふべき事象を除去し、彼等の善美なる發達を助くべき要素を増加し、以て漸次社會全體を教育的に改善する用意を指す。吾人は其の主なる條項及び方面に就き、所見の主要を陳述せんとす。

一、文字

本邦現用文字は困難にして、學習上多大の勞力を費すのみならず、社會の實用上に於ても、時間及び勞力の不經濟なること多大なるものあり、従つて此が改良の急務なるは、既に屢々陳述せり。此の社會生活上、文明發達上、又教化普及上の最大利器にして、一日も缺くべからざる文字に就いて考究し、社會自家の精神的浪費を減ずる工夫を爲すと共に、學童の負擔を減じ、其の學習力の効果を増大するは、實に社會に於ける教育的努力の一大要項なりといふべし。

其の改善方法の第一は、社會に於て現用しつゝある漢字の數を減じ且つなるべく困難稀有の文字を避けて通俗熟知の文字を用ふる工夫をなすに在り。各個人先づ努めて之に注意し、次に同志の間に申合せをなし、漸次輿論を惹起するに至らしむべく、此に關する研究會を設くるが如きも必要なるべし。新聞の如き、雜誌の如き、將た又官文書の如き、汎く一般民衆を對手とする文書を取り扱ふ者に於ては、特に此の注意を必要とす。彼の一般民衆に周知せしむるを必須とする官公文書にして、往々普通教育を終りたる者も、猶讀下を難しとするが如き文字文章を用ふることあるは、意義の精確を保つが爲に止むを得ざるものあるべしとはいへ、又形式の爲に實効を忘れたる不深切の嫌ひなきに非ず。教育者としては、此等は特になるべく平易通俗の文字文章を用ゐられんことを要求せざるを得ざるなり。

第二には學者は學術の新熟語等を要求するに當り、なるべく平易なるものを選択するに注意し、外國語あるものは、寧ろ原音のまゝ之を使用することなり。學術語の如き、元來俗間に難解にして必ず註釋を要するものは、強ひて

翻譯するの要なかるべく殊に片假名にて書記すれば、幼兒も讀み得べき歐米諸種の名詞に、強ひて難讀の漢字を充つるが如きは、甚しき惡戯とも稱すべし。

第三には、ローマ字採用の機關を促進するに在り。ローマ字の便利なることは、最早之を疑ふものなきにも拘はらず、其の容易に採用せられざるは固より幾多の理由あれども、主としては、常用の文字の轉移變更上の困難にして、其間に於ける混雜を防ぐ方法を得ざるに在り。故に識者はなるべく自ら之を試用し、且つ之を容易に一般に採用せしむべき方法を講ずるを要す。機會ある毎に鼓吹に力め、國論を造るが如き、在來の新聞雜誌等にローマ字欄を設くるが如き、ローマ字にて書せる通俗讀物新聞雜誌を發行するが如き、電話番号簿各種の案内書等漸次外國人に交渉を加へ、萬國的の性質を帯び來るべき實務に關するものは、ローマ字に假名を附して彼我の便利を圖るが如きは、其の有力なる一法なるべし。然れども、社會私人の運動は其の奏功固より容易に非ず。殊に日本の如き國情に於ては國家事業として、官府の努力に依るを最も捷徑なりとす。ローマ字にして、既に最も便利にして文明的世界的活動上缺くべからず。殊に全然ローマ字を採用したる曉に於ては、學生の修學年限を短縮すること三年以上なるも、猶今日の成績を擧げ得るの見込ある以上は之を國家事業として、其の普及を計畫する價値十分なりといふべし。之を國家事業として、如何なる方法を設くべきか。思ふに、左の諸項の如きは、最も行ひ易く、且つ緊切なる方法ならんか。

一、標準的ローマ字綴を以て、完全なる日本歴史を編み、以てローマ字に依る國體及び固有道徳の典據を示す事。

一、右の日本歴史を基本とし、ローマ字辭書を編み、之を以てローマ字綴の標準とする事。

一、翻譯局を設け、ローマ字に翻譯せる和漢用諸種の書籍を出版する事。

一、學校教科書の中、差支なきものにローマ字文を用ふる事。

例せば西洋數字を横書するを要する數學教科書の如き、簿記法にローマ字を用ふるが如き、またローマ字國語讀本を作り、一部に試用を許すが如きは是れなり。

(二) 風俗習慣

風俗習慣は、日常生活と相伴ひ、行住坐臥の間に纏綿して絶えず人を刺戟するものなるが故に、其の教育的影響の及ぶ所、善惡共に頗る大なり。故に教育的境遇としての社會は、或は政府の力に依り、或は輿論の制裁に依り、或は特志者の運動に依りて、惡風僻習を矯正改善し、以て青年の品格を純潔溫雅に保ち、其の心志をして自ら快暢ならしむるを要す。

社會には、何となき一種の精神的空氣ありて、其の社會特得の風韻を爲し、色彩を爲す。此の精神的空氣は、無形にして捕捉し難しと雖も、實は社會に於ける精神的基調にして、人の情調を動かし、其の精神的活動に影響する所深大なるものあり。故に社會及び其社會の各個人をして、健全に且つ進歩的ならしめんと欲せば、其の動力の外的要素たる此の精神的基調をして、光明溫煖の感に充たしむることを要す。而して此の基調を作るものは、實は社會を爲す各個人の精神的態度に存するが故に、各人皆是處に留意し、行藏の間、少くも社會の空氣を汚瀆せざるの態度を爲すべく、殊に社會の上流に在り、衆目の標的となる所の紳士淑女の如きは、其の在朝者たると否とを問はず、一種の社會的公人として、其の品格行動を慎まざるべからざるなり。其の行動の外形に於ては、必ずしも一定の規矩に合せしむべきに非ず、唯其の心術に至つては、俯仰天地に恥ぢざるの誠意を存せんことを望まざるを得ず、是れ實に精神的空氣をして、光明溫煖ならしむる、根本の唯一原由なればなり。

地位階級の社會の上流に昇るを得たる者は、是れ其の最も正しき生活を營みたる結果にして、又一般民衆に對し、正しき生活の標的を示す者、之を導いて正しき生活の道を教ふる者ならざるべからず。他に拔んでて富を成せる者

は、社會に最善なる活動を爲せる報酬にして、而して且つ其の富力を用ゐて、社會に最善の活動を爲し、民衆を救済するの任を負へるものと言はざるべからず。然るに地位を上流に得たるに乘じ、此を以て他の民衆に傲り、或は巨富を積み得たる勢を驅りて、此を以て他の民衆を虐せば、是れ即ち地位と富力とを以て、善を爲し、生命を展ぶるの具とせず、反つて道理を壞り人を傷くるの具と爲すものにして、陰然として社會の風教を瀆すこと、是れより甚きはなし。社會に若し是の如きの流俗あらば、學校の德育の如きは、其の効果を現はすこと能はざるなり。學校に於ける德育の無能無力を指摘する者は、更に讎つて、白日十字街頭に、學校の德育の、無用虚偽を教ふるものに過ぎざること證明しつゝある、所謂「成功者」の果して是れ無きや否や、を顧み來ることを要す。

一般の風潮にして、青年を毒するの大なるものゝ一は、其の人を問はず、其の心術を問はず、又其の手段を問はずして、唯其の外形の成功を推稱するもの是れなり。是れ即ち外形的成功の爲には、他の何物を犠牲にするも可なることを教ふるものにして、青年が獨立自活、自發獨創、道理を踏み、理想を行ふの元氣を銷磨せしめ、而して此に代へて、依頼心、憍倖心、權變主義、機械主義を誘發する力最も大なり。此の風潮亦必ず改められざるべからず。

本邦に於ける蓄妾の風の如きは、人格の尊嚴を認めず、肉の外に、精神の價値を認めざるものにして、且つ家庭を亂し、子女の教育を妨ぐることに甚きものなるが故に、斷じて之を排斥せざるべからず。人或は血統を重んずる國風止むことを得ずと辯護する者あり。是れ亦人格の意義、精神的生命の意義を認めずして、唯だ血肉の形式をのみ是れ見るものなり。其の誤謬たること多言するを要せず。

公娼制度も亦之を人格的、精神的意義より批評すれば、其の殘虐にして汚穢なること之に過ぎたるものなし。教育の根本義と全く相容れざるものなるが故に、必ず廢止せざるべからず。公娼制度に對する辯護は、密娼の増加を防ぎ、風俗上及び花柳病豫防上有効なりといふに在り。然れども、是れ亦功利の爲に人格を犠牲にし、肉體の爲に精神

を忘るゝものにして、旨意に於て斷じて不可なり。風俗及び花柳病に對しては、他の方法によつて極力之を防禦すべく、此の防禦の手段として、國家が賣淫を營業として承認する不面目を敢てするは、餘りに不廉なる交換なりといふべし。且つ夫れ此の公娼制度を非認せずして、社會は如何にして、女子に貞操を強ひんとするか、是れ實に疑問ならざるべからず。

飲酒過度の風は、不攝生不規律の一現象にして、其の趣意に於ては、前諸項と同列に論ずべきものに非ず。然れども、亦實際に於ては教育上、風俗上、經濟上、將た健康上、遺傳上、種々の甚しき惡結果を呈するものなるが故に、嚴に之を取り締り、殊に學校教育に於て、知識及び道德上より、之に關する克己自制の必要を知らしむるを要す。賭博の如き、亦如何なる方面より之を見るも有害なる惡戯なるが故に、之を禁絶せざるべからず。

(ホ) 人種の改善救濟

不良少年の如き、更に進んでは悖德狂者の如き者は、一人是れ有るが爲に、其の此に接觸する周圍の數人數十人に對し、心身上幾多の惡影響を與へ、風俗を亂し、暗澹の氣分を作り、人の元氣を萎縮せしめ、殊に教育を妨ぐること甚きものなるが故に、力めて此の輩の發生を防ぐ方法を講ずることを要す。此等不良者の中には、元來心身の健全なる者にして、唯其の境遇、殊に家庭の不完全なりしが爲に、其の惡陶冶を受けて、遂に惡德を以て常習と爲すに至れるもの少からず。此等に對しては、家庭主として責任を負はざるべからず。然れども、既に不良者となりて社會に現はれ、種々の惡行を爲すに至りては、是れ社會問題にして、且つ多くの場合に於ては、其の家庭の之を救濟する力を有せざるなり。殊に先天的に心身の缺損を有し、其の結果悖德常習者となる者に至りては、全然社會問題として取り扱ひ、一面彼等の救濟を計ると共に、一面彼等を社會に有用なる他の健全分子と混在せしめず、遂に是の如き不健全分子を絶滅する方法を講ぜざるべからず。是れ營に教育を保護するのみに止まらず、社會自ら其健全を保護するが爲

に、缺くべからざる手段なり。今後生存競争の益々劇烈となり、民族發展の努力を要すること益々大なる時代に於て、殊に然りとす。

此の問題は、國家社會將來の重大問題なるが故に、朝野共に擧つて之が研究に努力し、適當なる政策を決定するを急務とす。而して此の政策の目的は分れて二となるべし。一は心身の缺損性を絶滅する事、一は健全分子を保護し其の存續を計る事是れなり。又其の方法も大別して二となすべし。一は教育により、各人の理解と良心とに訴へ、此の方針の實行に協同せしめ、且つ遂に一の輿論たらしむべき事、一は社會政策により、必要な方法を實行する事是れなり。

不良不健全の社會分子を作らざる爲の教育は、男女共に必要なれども、女子に對しては特に必要なり。而して其の方法は、單に舊來の個人道德により、貞操或は家庭教育の必要を説くに止めず、社會の組織目的等により、社會學的に説明し、更に科學、殊に近來の遺傳學說、之に基ける人種改善學 (Eugenics) の知識を授けざるべからず。歐米に於ては既に之が實行に着手し、ロンドンの人種改良的教育會の如きは、其の成績良好なりといふ。此の會の目的は、公衆殊に女子をして胎教の必要を知らしめ、之に關する知識を得しむる事、學校家庭等に於て、胎教に關する教育を行ふ事、及び人種改良に關係ある遺傳の學說を公衆に普及する事等にあり。思ふに、此等の事項は本邦に在りても亦必要な知識なるべし。

社會政策的方法の一は、飲酒徵毒等の如き、心身缺陷者を生じ易き原因を除去する事なり。酒精中毒者、及び徵毒患者の子孫に心身缺陷者の多きは、事實の證明する所にして、更に説くことを要せず。飲酒を絶対に禁止するが如きは、到底不可能にして、且つ其の必要あるを見ず。唯、一は飲酒に對し、規律攝生を守らしむべき道德的及び知識的教育を行ひ、其の習慣を養ふと、一は、酒類の販賣、飲酒の場所、時間等に制限を加へ、酩酊者を罰する等の如き方法

により、規律を保たしむる政策を執り、之によりて漸次其の害毒を除くを妥當とすべし。

梅毒等の花柳病を除く方法も、亦一は道德教育と生理衛生教育とによりて各人に自制力を養ふと同時に、一は社會的政策により、賣淫をして困難ならしむる方法、及び之を要求せざらしむる方法を講ぜざるべからず。

社會政策的方法の他の一は、低能者、酒癖者、怠惰者、色情狂、常習犯罪者等に對しては、其の結婚に制限を加へ、之と相類似する者、其の從兄弟、又は神經系に故障ある者とは、結婚することなからしめ、癲癩病者、生殖器病者、結核病者に對しても、亦醫學上適當なる結婚制限を加ふるが如き方法を採用することは是れなり。更に進んでは、不良兒感化院、精神病院の如き組織を擴張し、右に擧げたるが如き病者の甚しき者を隔離するも亦必要なるべし。

米國に於ては、是の如き政策既に實行せられ、法律を以て右の如き病者の結婚を禁じ、又は制限を附し、或は白哲人と有色人の結婚を禁ずる州數多あり。蓋し此れ民族の優秀ならんことを欲する以上早晚文明各國の必要なる政策となるは明白なり。

右の如く、國民の心身をして、荒廢墮落せしむるが如き、不良不健全の要素に對しては、嚴密精到なる絶滅法を講ずると同時に、他の一面に於ては、優良健全なる分子を保護し、其の生活を安全和樂にし、正當なる結婚、家庭構成を容易にする方法を講じ、以て其の存續繁殖を計らざるべからず。是れ實に教育以外の社會的基礎問題にして、教育の浪費を去り、功率を倍徙するを得る所以の根本なり。若し健全優秀の國民をして、不當なる競争壓迫の爲に漸次荒頽に赴かしめ、而も他面不良不健全分子をして社會に跋扈せしめば、社會改善法としての教育の効果は、到底之を見る能はざるべし。

(一) 政治經濟

政治と經濟とは社會の二大勢力にして、其の結果の民心に影響すること極て深く且つ廣し。帝國の如き、官權を崇

拜し、又經濟力の貧弱なる民俗の間に在りては殊に然りとなす。従つて、政治及び經濟の活動が教育の趣意と一致し、更に進んで教育事業を助くると然らざると、及び政治家實業家が教育家を尊重し、之に協力する態度を採ると然らざるとは、帝國教育の隆替に大なる關係を有す。殊に教育を受けたる青年の活動する天地は、政治と經濟とに關すること最も多きが故に、政治界經濟界の風潮と、及び此の兩社會の先輩の心術態度とは、教育の効果に對し、活殺の權を握るものといふも不可なきなり。

是故に特に政治界に對しては、正義人道を原則とし、公正仁愛、人の人格を尊重し、個人の自治獨立を獎勵し、健全にして優良なる人物を保護して、安定和樂の生活を營ましめ、一面光明溫煖なる精神的空氣を社會に造ると共に、一面教育終局の目的を成就せしむるの顧慮を、政治全般の上に費すことを望まざるを得ず。在上者の方針の是處に在るべきは勿論なるも、殊に下層多數の民衆に接すること最も多き、警吏收稅吏其他の吏員は、民衆に對しては、一種偉大なる教育的勢力を有することを覺悟し、其の公明深切なる態度を以て、民衆の純直なる良心と、溫和なる感情とを培養するに注意せば、善良なる社會の風潮を作るの功蓋し意想外に大なるものあるべきを信す。

經濟活動は、素と人生須要の物質的資料、精神に培ひ、生命を養ふに缺くべからざる要素を準備する事業にして、即ち物質を人格化する手段たり。實業は此の意味に於て、高尚偉大なる價值を有す。然るに、其の事業の物質に關係せるが爲に、其の精神的意義は次第に遺忘に附せられ、殆ど全く無目的なる射利の具たるが如くに解せらるゝに至れり。其の結果、往々にして、實業と一般道徳とは相背馳し、經濟の爲に向上的精神を犠牲にし、人を發達進歩せしめずして、却つて荒蕪墮落せしめ、物質を人格化する代りに、却つて人格を物質化せんとする趣なきに非ず。是れ教育の目的と全く矛盾する傾向にして、又人生の要求と矛盾せり。實業界に於ける此の傾向を一掃し、其の本然の意義を恢復することは、教育上必ず望まざるべからざる所とす。

此の趣意に於て、教育上より、實業家に希望すべきは、第一、利の爲には飽くまで人を剋し、人を虐し、道義を壞り精神を無視して顧みざる一部の時弊を矯正するに努力せんことは是れなり。蓋し是の如き時弊たる、正當なる教育を受け高尚なる精神品格を有する青年をして、實業に従事する能はざらしむるものにして、人物の浪費、又實業界の損失たるのみならず、遂に社會を化して冷々たる木石の堆積となし、默的鬭争を現出せしむる徑路を爲すものなればなり。第二、積み得たる利益を以て奢侈驕傲の手段と爲さず、これを以て高尚なる理想を行ひ、人を養ひ、社會を救ふの資料と爲すの風を興さんことは是れなり。第三、實業營爲の方法を公正摯實にし、青年をして、徒に射利憍倖に走り、遂に人格を傷け、社會を害ふの弊に陥らざらしむる用意を普及せんことは是れなり。第四、教育學術の成果を尊重し、之が利用の方法を講ずるに躊躇せざらんことは是れなり。是れ蓋し教育學術の發達を奨勵する重要な刺戟なればなり。凡そ是の如き用意は從來一部に是れなきに非ざれども、一般の風潮に在りは然らず。是れ特に實業界の先輩を囑望せざるべからざる所なりとす。

彼の暗裡種々の術策を弄して巨富を積み、宏壯なる第宅を構へ、幾多の別莊を營み、日常酒池肉林を築き、而して、或は教育者の貧弱を笑ひ、或は學生の香油リボンを用ふるを咎むる者あるが如きに至つては、其の教育の効果を減ぼすこと幾何なるを知らず。又彼の猥に誇大なる廣告法を用ゐ、或は過度に艶美なる陳列を爲し、以て青年子女の弱點に投じ、其の欲望を煽るが如きも、健全なる品性の爲に極て害あり。此等に對しては、社會及び教育政策上適當なる制限を講ずるの要あるべし。

(ト) 學問藝術

學問藝術は宇宙の生命の眞善美なる意義を闡明し、人の思想感情を養ひ、文明を開拓する事業にして、教育と密接なる關係を有す。固と是れ社會現在の理想及び趣味の表現たるに外ならざれども、亦儼つて民衆の理想趣味に多大な

る影響を與ふるものなるが故に、社會に於ける教育的與件として、考察せざるべからず。

學術の研究は飽くまで其の根本に徹底し、究竟眞理の闡明せらるゝを期せざるべからず。蓋し是れ實に、人の健全なる知識的欲求にして、且つ文明進歩の源泉を爲すものなればなり。同時に又、學術上の理論は爲し得る限り、何等か實地生活上に應用せられ、其の具體的効果を生ずることを要す。蓋し學術も亦人の生命發現に資すべきものにして、又實地に効果を生ずるは、醸つて學術の研究を助くる所以となればなり。

學者は飽くまで、其の専門とする學術の研究に忠實にして、之が爲には他の一切の事を犠牲にし、如何なる困難障害をも突破する覺悟なかるべからず。然れども、亦其の研究を社會に發表するに當りては、確乎たる根據を有するものたるを要し、後進をして、無益の迷誤に徒勞せしむるが如き遺漏なからんことを要す。蓋し學者と雖も亦社會の一員にして、其の健全なる發達に對する責任を負擔せるものなればなり。

是故に、教育上の見地より學術界に向つて希望する所は、一面に於ては、眞理に向つて徹底的に研究して中止することなきものあると同時に、一面に於ては、既に確定したる眞理を解析して、或は之を實地事業に應用する工夫を指導し、或は此を以て後進の蒙を啓き、以て民衆の謬想を正し、合理的にして且つ便利なる生活々動の方法を知らしむべく、又青年をして知識を採求する方法、眞理を追究する興味を知らしむるに力むること是れなりとす。但し學術の範圍以外に走り、知識の價値を尊ぶに偏して之が爲に猥りに他の信念を破壊し、或は感情趣味を蔑視するの態度を探るが如きは、往々有害なる結果を生ずべく、特に注意を望む所とす。

藝術は深き感情より發するものにして、人の精神に影響し、民衆を動かすこと亦學術よりも、更に深く且つ汎きことあり。故に敬虔玄微なる人の宗教的感情を煽り、以て信仰を誘起せんとする宗教は古來常に各種の美術音楽を假用せり。且つ又東西幾多の文學が人の理想を養ひ、精神を啓發し、感情を慰めたるの功幾何なるを知らず。英のシエー

クスピア、獨のゲーテは、其の國民千古の誇りにして、又世界人類の永へに欽仰する所たる固より故あるなり。

文學藝術の價値たる、夫れ是の如くなるを以て、吾人は益々其の發達進歩し、高尚偉大なる文學藝術の產出せんとを望まざるべからず。思想趣味の混亂と共に、生存競争と、物質的壓迫との爲に、善美なる人の趣味感情の漸く荒廢に赴く傾向ある今日に於ては殊に然りとす。従つて之が爲に、教育も政治も經濟も、援助の勞を吝まざるを要す。

唯藝術家が其の藝術に忠實熱心なる餘り、公然他の社會の後輩青年を毒して顧みざる生活法を採り、或は一般民衆の趣味を墮落せしむるが如き作品を發表するが如きに至りては、俄に賛すべからず。思ふに是の如きは、適當なる規律秩序を立て、接觸鑑賞の範圍を制限し、以て理解の十分ならず、趣味の健全ならざる後輩民衆をして迷惑せしむることを避くるの用意を要すべし。教育行政上の判斷と意志とは、之に對して相當の忠告を爲し、協議に與かるの必要なること亦是れなきに非るべし。

但し、即今本邦の文學藝術界を見るに、一面に、眞に世界的價値を有する日本の藝術なるものは是れなき他面に於て、能く趣味淺薄なる民衆を啓發し、又少年兒童の趣味を養ふが如き製作も亦甚だ乏きに似たり。此の方面の開拓にして若し功を成せば、其の教育の缺陷を助くること、蓋し大なるものあらん。是れ特に文學藝術界に望む所とす。蓋し、藝術家にして、若し自家本心の要求を捨て、社會民衆の嗜好に迎合せば、藝術は立ちに墮落すべし。而も亦社會民衆の趣味の啓發を怠り、其の荒廢に任せば、高尚なる藝術も遂に敗滅に歸すべし。此の兩面の用意は、共に藝術界に向つて望むべき社會の二大要求ならざるべからず。

(子) 宗教

宗教は人生の歸趣を教へ、生活の根本動力を養ふを本旨とするものにして、其の精神より見れば、教育の根基を爲すものといふも不可なし。又之を教育より見れば、學校以外に在りて、社會を救濟し、其の健全なる風潮空氣を作

り、以て遙に教育を援くるものといふべく、精神的にも亦手段上にも、兩々相提携するを要する、密接なる關係あり。

今教育上より、宗教の社會的任務を考察すれば、第一、各人に純眞なる信仰を與へ、以て健全なる統一的生活を營ましむるに在り。第二、此の信仰を以て各個人を統一し、以て健全なる精神的社會を現出するに在り。

然るに、是の如きは即ち教育最終の根本目的とする所にして、此の點に於ては、教育も宗教も異なる處なし。而して其の異なる處は、即ち主として左の點に在るべし。第一、教育は主として學校に入り來る少年青年に對し、其の生活全般の方法を教ふる間に於て、自發的に、含蓄的に信念を養はしむ。然るに、宗教家は、主として社會一般の人に對し、信念のみを分離して養はんとし、至上唯一と確信せらるゝ一定の眞理を鼓吹するに在り。故に事業の内容精神より言へば、教育家の爲す所は甚だ廣く、宗教家の爲す所は甚だ狭し。而も之を外界關係より言へば、教育家の對象とする範圍には限界あり、宗教家の對象とする範圍には限界なし。第二、事業の性質より言へば、教育は主として社會實地の要求により行はるゝものなるが故に、常識的功利的に傾く。然るに宗教は一箇の信念乃至人格に由りて宣布せらるゝものなるが故に、超越的理想的に傾く。第三、手段より言へば、教育は知識技能を主とし、一定の形式なし。宗教に於て感化鼓吹を主とし、一定の儀禮を伴ふ。是故に教育は比較的自由にして、時代と共に、進歩するの利あると共に動搖不定にして、往々目前の功利主義に捉はれ、最後の目的たる信念を養成する能はずして止む場合多し。然るに宗教に於ては、卑俗なる功利主義を脱し、確固たる信念を與ふるを得ると同時に、固定的習慣を強ひ、自發活動性の發動を抑塞するに至ること多し。即ち其の利とする所に於ては、共に人生社會の重大なる要求を満足せしむるを得べく、其の弊とする所に於ては、共に等しく人格的生命的開發を見る能はざるの憾みあり。

教育と宗教と、是の如き異同あり、長短あるが故に、各其の異なるべき處に於て相分化し、同じかるべき處に於て、

相協同し、内外相應じ、長短相補ひ、以て共に社會教化の任務を全うし、人生の幸福を現出する方法を講ずるを要す。之が爲に、宗教界に希望すべき所は左の諸點に在らんか。

一、根本の目的は、人の信念を養ひ、人格的生命の發現を助くるに在ることを明にし、一定の獨斷的觀念を注入するを強ひざる事。

二、諸種の儀禮等は敬虔嚴肅なる宗教的感情の發露にして、又之を養ふものに過ぎざることを明にし、必要以上に之を固執せざる事。

三、諸種の教條戒律等には時代的及び地方的要求に出でたるもの多きことを明にし、現代の要求、各人の理解に適せざる條項を固執せざる事。

四、各人の信念は人格の内發的要求の結果たることを明にし、他の信仰の自由を尊敬する事。

五、人格的生命の發動を共同の目的とし、之が破壊を共同の敵とする一切の宗教家は、悉く一致協同すべきものなる事を明にし、社會生活の模範を示す事。

六、人格的生命の涵養は全く精神的實行に依るものなることを明にし、自他に對する實行に於て之を示すべき事。

七、人格的生命の涵養は先きにして、信仰の説明は後なることを明にし、社會の實際的救済に努力すべき事。

列舉し來らば猶多からん。唯其の教育と共に、社會の二大教化事業たる本質上より、相共に協力し得るに至るべき着眼の概要を陳述したるのみ。若し夫れ、之が爲に宗教家の採るべき實際的方法手段に至りては、無數なるべし。唯右の方針に依り、宜きに從つて施行せば、宗教は現代社會と調和し、且つ教育と調和し、其の効果を全うするを得んか。

社會に敬虔眞摯なる氣風を作らんが爲には、民衆をして壯嚴なる宗教の信仰及び儀禮に接觸せしむるを以て、最も

捷徑と爲す。是に故政府はなるべく宗教尊重の風を社會に普及せしめんことを力め、殊に教育界に此の風を興すべし。從來教育界に於ては、學校教育法の中に宗教を混入せざる趣意を誤解し、徹頭徹尾宗教を敵視するが如き態度を爲したるもの往々是れあり。或る特種の宗教を信ずる教員を迫害して、他に轉任或は辭職せしめたるが如き、又學童を侮辱して其の退學を餘儀なくせしめたるが如き事實は、現今に於ても是れなきに非ずと聞く。是の如きは、實に不道理を極むるのみならず、個人の自由を奪ふものといふべきなり。政府は一面宗教家をして高潔なる信仰を持せしめ、且つ合理的思考、自由討究の精神を害するが如き教條儀禮、普通の知識と相容れざる迷信を取り締る方法を設けると共に、教育家をして、宗教的信仰に對し、尊敬と同情とを拂ひ、必要なる方法に就いては、宗教家と相協力し、以て教化の發達を計らしむるの工夫を爲すべきなり。

第三節 自學自動主義

第一 教育の目的と自學自動主義

一方より言へば、教育の目的とする所は、之を大にしては、世界人類の文明の進歩、國家社會の發達に存すれども、他方より言へば、其の直接に對象とするものは即ち個人にして、實に自己を善美に實現し、其社會國家に有用なる生活を營む所の高尚有爲なる人物を養成するに在りといふべし。然るに高尚有爲なる人物とは、先天の靈性たる人格的生命の自ら個性的に發動實現して、優秀なる品性を成し、充實せる活力を具へたる者にして、而して自己の使命天職とする所に於て、偉大なる獨創の功業を社會に成就し、以て自ら立ち、且つ人を救ひ、世を濟ふ者即ち是れにして、人の能力品質の大小高下如何に拘はらず、教育の目的とする人物養成には、悉く此の趣旨なかるべからず。

更に言へば、凡そ人たる者には、悉く先天の貴重なる生命たる自發的動力あり、其の發現する所優秀なる人格となり、特異の個性才能となり獨創の功業となり、而して其の結果の、積みては、國家社會の勢力となり、集まりては世界の文明教化となる。此の、自發的動力は、即ち人の生長發達し、活動進歩し得る所以の根本動力たり、故に教育的努力の根本は、此の先天の自發的動力を開發培養するより大なるはなし。若し青少年にして、此の自發的動力を涵養し、以て進みて止むこと能はざる生活の興味となし、自ら學び自ら習ひて飽くことを知らざる欲求努力となすことなくば、優良なる教師も、完備せる學制も、又如何ともする能はざるなり。之に反して、學生にして自ら學び自ら習ふの欲求と努力とだに有らば、一の教師なく、一の學校なきも、宇宙の森羅萬象は悉く彼が師たるべく、社會國家萬般の事物は直に彼が學校たるべく、乃ち彼は到る所に教育を發見して、以て自己の品性能力を培養することを得べし。是故に學生の自發的動力を開發培養することは、實に教育の功率をして最大ならしむる方法の根本ならざるべからず。

各人の自發的動力を開發培養するを目的とする、其の同一の趣旨は、直ちに又教育の方法の原則となる。學校に於ける教育法は、學校内に在りて、既に完成せる所の人物を社會に出すを原則とせず。自ら完成する力を有し、且つ其の方法を知れる所の人物を社會に出すことを以て原則と爲す。人の進むべき前途は無限に廣く、無窮に大なり。學校の如きは、僅に其の途中の一小階段たるに過ぎず。又人の知るべき物、爲すべき事は無數に多く、無量に饒くして、一二人の教師の識力の如きは、僅に其の一小部分たるに過ぎず。學校は唯其の進ましむべき一小階段を進ましむると同時に、學生をして無限無窮の前途に向つて前進を續けしむべき動力を養ふを以て目的と爲すべく、教師は其の知らしむべく、爲さしむべき一小部分を知らしめ、且つ爲さしむると同時に、學生をして、他の無數無量の未知界を闡明し、未墾地を開拓すべき方法を自得せしむるを以て目的となすべし。是れ實に學校教育の根本原則なり。

如何にして生き、如何にして學び、如何にして爲し、且つ如何にして其の精力を保ち、如何にして其身體を健かにすべきかを明知し、而して之を努力實行して止まざるものは、其の品質才能の高下大小如何に拘はらず、既に十分なる教育を受けたるの人なり。是の如きの學生を輩出せしめ得たる學校と教師とは、能く其の使命天職を盡したるものなり。是の如きの人を以て充たせる國家社會と文明教化とは、進歩發達して止むこと無かるべきなり。近時往々師道の頹廢を憂ふるの聲を聞く。師道は重んぜざるべからず。然れども、師道の重んぜざるべからざるは正當にして、十分なる教育の貴重なるが爲のみ。吾人は師道の頹廢を憂ふるの點に於ては人後に落ちずと雖も、寧ろ先づ自ら作り、自ら成す活力ある青年の少きを更に大に憂へんと欲す。

要するに、優秀なる品性を具へ、充實せる活力を有する高尚偉大なる人物を養成する、教育の根本方法は、青年の自發的動力を開發培養し、其の効果を實地に生ずべき生活法を自得せしむるに在り。是れ即ち吾人の所謂自學自動主義の教育なりとす。

然るに人の根本動力は、是れ實に人格的生命たる、自具内發的の、微妙なる靈性にして、外よりして注入し、傳授し得るものに非ず。唯刺戟を與へて之を觸發せしめ、機會を與へて之を開展せしめ、又境遇を與へて之を活動せしむることを得るのみ。其の涵養とは、即ち是の如き外的條件を適當に具備供給して、以て自力に依る其の開現を、爲し得る限り多量ならしむるの謂ひなり。自學自動主義的教育の由來する所の原義は蓋し是處に存す。既に述べたる教育の境遇論は即ち此に對する用意にして、以下述ぶる所は、即ち教育上直接指導の大綱なり。

第二 先天能力の開發

吾人が自ら省察し、又一切人類行藏の跡に就きて觀察するに、人の精神には自ら外に發現せんと欲して止まざる先

天的の衝動的活力あり、外物の刺戟に應じて、無限に發展し來る。其の狀恰も水の滾々として無盡の源泉より湧き、流れて萬里の大江を爲すが如く、斯の人類歴史を爲し、斯の文明教化を産めり。或は原素の細微より宇宙の無限大なるに互りて、其の真相を窮めずんば止まざらんとし、或は無線電信、飛行機を作りて造化の功を奪はんとし、或は社會國家を組織して、人類的生活の美を極めんとし、或は眞善美の理想を追求して生命をも犠牲とせんとし、知識となり、感情となり、意志と爲り、宗教を作り、道徳を作り、法律制度を作り、文學美術を作り、更に生命其のものをも作らんとし、個人に現はれては、個人的事業を爲し、國家に現はれては國家的事業を爲し、又世界に現はれては、世界的事業を爲さんとしつゝあり。此の不可思議なる活動は、皆人間自具の先天的活力の、外界に發展する形式にあらざるなし。而して更に將來の發展に至つては、果して如何に靈妙なる文明的産出を見るべきか、固より得て料り知るべからざるなり。此の活力、之を根本的衝動といふべきか、根本本能といふべきか、根本要求といふべきか、はた先天的意志といふべきか、先天的興味といふべきか。其の名目は或は孰れにても可ならん。兎に角、吾人は人類に於て、此の不可思議なる萬能を自具せる先天の活力ありて、永遠に生動しつゝあることを發見せざるを得ず、是れ實に一切の生活の動力なり、一切の教化の母胎なり。

是故に、人生の事業は、此の先天の活力を涵養し、其の發動開展をして自由に且つ十分ならしむるより急なるはなし。是れ實に教育の目的にして又方法の根本なり。以下に擧ぐる所の數項は、即ち此の人間自具の先天能力を、生活上に實にする教育の主要の方法なりとす。

第三 信念涵養の必要

信念は人の生活の基準に關する確信にして、一切行動努力の理由と爲る所の精神力なり。人の信念の有無及び其の

内容如何は主として、其自他に對する態度に於て現はる。此の態度を客觀的に見るときは、即ち人の行動の間に伴ふ所の統一的習慣にして、此を道德と爲す。故に信念は道德の根本たり、其の實踐の動力たるものとす。

信念は人の生活を統一する基準、道德實踐の動力たるものなるが故に、凡そ健全なる人格には、必ず何等か究竟の信念なかるべからず。是れなければ生活は矛盾撞着に充ち、道德は唯形式的習慣のみとなり、忽ち人格の健全性を失ふに至る。

學生の信念を養はんが爲には、之が教師たる者、先づ自ら信念を有せざるべからず。即ち教師は必ず生活の基準に關する確乎たる理想を把持し、此に向つて常に精進止むことなき態度を持し、之を以て、一面學生の理性に訴へて、其の自覺を促すと共に、一面日常接觸の間に、自ら感奮せしむる所あるを要す。之が爲には、特に修身教授の際に於て、或は直接に人生々活の根本理想なかるべからざることを教説し、之が追求實現の、人生第一の善美なる事業たり、又生活上の興味の根元たることを鼓吹するに力め、或は熱烈なる信念を把持し、之が追求の爲に一切を犠牲にし、又其の實現に依つて、偉大なる功業を立てたる聖賢偉人の傳記事跡を引き、以て信念生活の善美偉麗なる風光に對し、欽仰嘆美の心情を誘起するが如き、極て有効なる方法なるべし。

諸種の機會に於て、敬虔なる宗教的感情を養ふことに注意し、殊に學生が行動の全體に互りて、常に究竟根本の理由に訴へて判斷し、事件の大小高下を通じて必ず一貫せる態度を持するの習慣を養ふの注意を必要なりとす。而して學校の校風は此の努力に對し、最も有力なる背景を爲すものにして、向上精進の興味を養ふものは、教師の人格と、及び此の校風との激勵に依るもの最も多し。

信念は絶對至上の精神的根據なるが故に、主觀的には唯一なれども、客觀的に之を見れば、其の内容に無數の段階あるを免れず。是れ蓋し宗教に於て、多種の宗旨宗派の分れ存する所以にして、人の知識と性向との一ならざる所に

出で、洵に止むことを得ざるなり。又是れ人の信念の内發的たるべき所以、猥りに外より一箇の定想を注入すべからざる所以なり。然れども皆等く至上善に従つて行動し、向上精進止まざる態度を以て生活する點に於て、萬人悉く相尊敬し、相信頼し、相同情するを得べく、即ち調和協同することを得べし。是故に、信念の涵養に伴ひ、必ず同時に同情心を養ひ、理解力を練り、他の信念生活に對し、汎く敬愛の情を捧げしむると共に、自己の信念の内容に對して、追求止まず、次第に進歩發達して、遂に萬人に共通して、動かすべからざる事實に於て眞理を捉へ、以て究竟の確信且つ一致點に到着せしむるに力むるを要す。

但し是の如きの一致點たるべき究竟的確信は容易に到達し難し。唯眼前何人も疑ふ能はざることは、實に吾人が存在の事實、此の存在に依りて現はるる靈妙なる生命の事實是れなり。是れ苟も意識ある者の疑はんと欲して疑ふ能はざる所にして、従つて、以て吾人が信念の初步的内容たらしむるに足るものあるべきなり。

第四 人格的生命的自覺

凡そ人たる者は、悉く靈妙なる人格的生命的を有す。人の始めて生れて自ら皆な生長し、感覺し、感動し、觀察し、思考し、判斷し、意志し、實行し、而して以て此の複雑なる生活を營み、此の悠久なる歴史を遺し、此の廣大なる文明教化を作る。若し人にして、自具内發の、靈妙深遠測るべからざる生命力を有せざらんか、此等の偉績は何處より生じ來れりと爲すか。吾人にして、若し此の人格的生命的の自具内在を信ぜざらんか。吾人は何によりて明日を期し、將來を信じ、何によりて希望を繋ぎ、向上發展の生活を爲すか。人自ら生きんと欲するの意志更に善く、更に美しく生きんと欲するの意志、更に眞に、更に新に又新に生きんと欲するの意志は、即ち人格的生命的の發動に外ならず。而して是が自覺は實に吾人が人たる自信の根本を爲すものといふべきなり。

自ら生きんと欲するの意志、之を別言するば、則ち吾人が斯く生活し國家社會の斯く發達し、文明教化の斯く進歩する所以の根本要求なり、根本本能なり、根本衝動なり。吾人に此の根本要求あり、故に其の對象を限るを欲せず、境遇を劃するを欲せず、進んで止まず、展びて滯らず、價値の上に價値を積み、無窮に到つて休息せざらんとす。之れ即ち活動の自由と希望との由來する所、又生活の興味と努力との由來する所、即ち向上精神の動いて止まざる所なり。

吾人に此の根本本能あり。故に吾人が生命の要求に向つて動くに當りては、其の動くに従つて、涸るゝことなき慧智となりて現はれ、要求をして満足せしむべき、一切の方法を備へ、萬般の手段を設け、滾々として盡くるの期なし。今日吾人が見る所の人類の生活に關する精神的物質的一切の方式調度、制度文物、文明教化は即ち此の根本本能の發展する過程たり、又結果たるに外ならざるなり。

吾人に此の根本衝動あり。故に外界の事象に會ふ毎に、外界の刺戟を受くる毎に、其の何物たるを問はず、又自ら意識するとせざるとを問はず、直に之に發動し、反應し、以て要求を充たすべき資料と爲し、本能的方法手段の運用を實にすること活潑々地、捷速機敏、一秒の躊躇なく、一寸の弛怠なし。吾人が寢食起臥、談笑、吟咏、交際往來、悲喜哀樂、勤勞休息、その他一切の生活々動は、皆此の根本衝動より發し來る。

但し此の三の作用は必しも、差別的に存するに非ず、渾然一體となりて人の内より發動するものにして、是れ即ち根本の動力、人格的生命の眞相なり。人を教へ、人を育つるは、他なし、唯此の微妙なる人格的生命を養ふにあるのみ。故に人を活かすの大なるは、此の人格的生命を活かすより大なるはなく、人を殺すの大なるは、此の根本動力を遮蔽するより大なるはなし。

人若し一度此の人格的生命、根本の動力を自己に於て自覺せば、前途の希望の大なること、洋々として海の如く、

心身の劣弱なるが如き、境遇の拂戻の如き、必ずしも意に介せずして可なるものあるを信すべく、又人類の前途、文明の將來の如き、假令如何に紛亂荒廢あるも、窮餘、道必ず轉じ、妙樂の別天地の開くるものあるを知るべし、而して又從來眼前見る所の如き小功名小富貴の如きは、到底吾人衷心の要求を満足せしめ、貴重なる人格を飾るに足るものに非ず、満足は唯自家の眞要求に聽いて、切々自ら創造建設する所に於てのみ、始て發見せらるゝものなることを、思はざるを得ざるべし。故に又其の生活には根本の興味あり。自己の生命を養ひ、人格を實現する意味に於て、一切の事に興味を感じずべく、假令外物の一切に興味を有せざる時も、猶自己の中心よりして、其の興味を湧かし來ることを得べく、之によりて、追求尋索して止むことなきを得べく、斯くて到る處に自己の力を以て自己の天地を開拓し、毫も萎靡逡巡することなきを得べし。是の如き人の道徳は自律の道徳なり。他に強ひらるゝを待たず、機械的に習慣に従ふに非ずして、道徳は自ら其の行動の中に存せざるを得ず。人の在ると否と、境遇の如何とに關せず、尊貴なる人格の要求の存る所、自ら良心となり、自ら警め、獨を慎まざるを得ざるなり。其の一擧手一投足は必ずしも他の感情と習慣とに合せざるの止むを得ざることあらん。而も其の心術態度に至りては、白日十字街頭俯仰天地に愧ぢざるものあるべし。蓋し衷心止むこと能はざる自覺自信に出づればなり。

自己の人格的生命に生くるの人は、又自ら運命を作るの人なり。彼は其の根本の要求に聞いて生活し、根本本能の内發力よりして自己の幸福を生み、自己の功業を成就す。彼が時勢境遇に適應して、自己を社會實地に活かす力は外より來らずして、内より湧く。故に彼が運命も亦外に存せずして、内に具存し彼が作り出すがまゝに、彼が生活と共に努力と共に作らるゝものといふべきなり。

人若し此の根本の自覺自信を得ざらんか、自己人格の價値の如何に尊貴崇高なるかを知らず、自己の生命力の如何に強大偉麗なるかを解せず、唯營々として満足を外物に需め他人に求め、而も實は其の到底満足を得べからざるもの

なるが爲に、萬古癒すべからざる寂寥の感、怨嗟の情に驅られ永く其の神聖なる人格の意義を埋没に附し終るべきなり。豈に惜まざるべけんや。而して、是の如きもの、焉ぞ教育を受けたりといふを得んや。故に教育は此の根本の自覺自信を得しむるより急なるはなし。

是の如き根本の自覺自信を得しむるは、百般の學科、及び學校生活に於て、其の機會なきはなけれど、特に修身倫理の一科は、之が中心綜合的の時間にして、其の講説の歸着點は必ず、是處に存せざるべからずと信ずるなり。

第五 宇宙精神の理解

吾人が人格的價値は是の如くに尊貴にして、崇嚴なり。然るに吾人は偶然孤立して、是處に獨在する者に非ず。吾人の生るゝや、前に父母あり、又其の前に祖父母あり。而して更に其の前に遡りて之を尋ねれば連綿として幾千萬代を重ねるを知らず、幾千萬年を経るを知らず。之を尋ねれども、茫漠として遂に尋める能はず、唯無限悠久なる天地の間より湧き來れりと謂ふべきのみ。又吾人が今斯くて生存するや、之を養ひ生命を活かすものに食物あり、衣服あり、空氣あり、光線あり。更に此等の物の由來する所を考ふるに、其の循環して窮まる所は、無數無限の物質と精力とに歸す。而して此の物質と精力とは抑も何處より生じ來れるや。是れ亦淵玄として到底其の原本を捕捉すべからず。唯絶大廣汎なる宇宙に存在すといふべきのみ。果して然らば、吾人が人格的生命は、素と是れ實に宇宙に充盈して存する實在にして、宇宙の内容は實に靈妙極りなき精神的生命なることを信ぜざるを得ず。唯現在の吾人よりして之を指せば潜在的にして顯在的に非ず、結んで而して吾人の心身機關をなし、流れて而して吾人の意識に入り茲に始めて吾人の感知し、且つ推量するが如き人格的生命を爲すのみ。吾人の精神は、實に宇宙の靈性の分化發現に外ならざるなり。

過去より今日に至る生物進化史、及び之に接續する人類歴史を顧るに、其の進歩の跡の著大なる、眞に人をして驚嘆せしむるに足るものあり。此の經過の跡を以て、更に將來を推すに、其の進歩は果して奈邊に到達すべきや、今日の人智を以てしては、遂に得て料り知るべからざるなり。而して又此の料り知るべからざる所を以て、宇宙の存在的原力を想ふに、其の果して如何に微妙幽玄高靈深遠の趣旨を具せるや。是れ亦遂に得て吾人の意識に上、ほすべからざるなり。古人が宇宙に於て、全智全能の人格的精神を認めんとしたるもの、決して偶然に非ず、又必ずしも迷信に非ず。

吾人暫く一切の塵事を放下し、純粹靜穩の境裏一度眼を轉して、此無限無窮、微妙幽玄、高靈深遠の趣旨を具せる宇宙の原力に對する時は、忽ち敬虔謙虛嚴肅愛切の氣に打たれ、畏懼崇拜嘆美欽仰の情に充ち、慄然として覺えず震戦し、涕淚自ら下るに至る。其の感たる、悲愴悅樂相混淆して充溢し、到底之を名狀し得べきに非ず。唯一種微妙の風光高く塵事俗情を超脱し、一箇の清淨溫煖の靈氣の、念頭に往來して、懷向歸入自ら止み難きものあるのみ。是れ即ち人々自具の宗教的感情にして、宇宙の原靈と、人間の靈心との、相呼應交感して、觸發せる生動融合の感覺に外ならず。其の高調に達する所に於て、感謝祈禱の念の、不知不識の間に湧き出づるは、蓋し人性の自然にして、其の對象に人格的實在を設定し來るものは、止みがたき内心の要求なりといふべし。

是の如き經驗は決して稀有特殊なるものに非ず。其の發現の對象、機會は固より萬殊にして一ならずと雖も、兎に角、總の人に通ずる常住必具の人性たることは、其の注入的知識に依らずして、内發的感情に由ることを以て、之を推すを得べく、又古來の歴史は之を證明せり。未開の野蠻人も此に驚き、高尚なる詩人も此を歌ふ。佛教は人々皆佛性ありと説き基督教亦胸中方寸の間に神を見るを得べしと教ふ。是れ即ち宗教の内發的なることを指示するものなりといふべし。内發的なる以上は、其の或る人には之れ有り、或る人には絶えて之れ無しといふが如き差別あることを

信ずる能はず。宗教心は元來何人にも之れ有り、唯其の衝動の強弱と、發現の刺戟機會の多少とあるにより、外に有無の差別觀を爲すものとせざる能はざるなり。

宗教心にして、萬人共通の性質なる以上は、此を開發養成するは、又教育の一任務なりといはざるべからず。是が爲には學生に對して定想を注入するを要せず。唯此の森嚴なる宇宙の精神的趣旨に向つて開眼し、緊切なる此の人格經驗を自得するを待ちて可なり。強ひて學生を抑壓して、此の尊貴なる經驗を得しめず、人性自然の内發的精神活動を沮止するが如き事あらば、其の人の子を賊するの罪たる決して輕からず。

今少しく此の宗教的感情の道德的效果を考ふるに、此の崇嚴の感情氣分に充つる者は、人に對し、事物に對し、自ら常に眞摯敬虔にして、輕佻浮薄なるを得ざるべく、猥りに塵俗瑣事の爲に動搖せずして、平靜純穩、唯自己の爲すべき緊要事に向つて勤勞せざるを得ざるべし。此の向上的態度は、是れ即ち學校に在りても、亦社會に在りても、共に個人の道德上最も緊要なる事に屬す。

人若し各人の人格的生命の源流の宇宙に在ることを認め、各人の精神は即ち宇宙精神の分流たることを認めば、各人は自ら無上の尊貴なる存在なると共に、他も亦等しく無上の尊貴なる存在なるを知り、更に又宇宙精神に於て、萬人一體なることを解し、自ら尊敬すると共に他を尊敬し、自ら愛護すると共に他を愛護し、自他悉く同胞同行の親情なきを得ず。是れ實に社會共同生活の基礎にして、互助犠牲の精神の由來する根本なり。人は多く直感的に他の生命を認め、意識せずして、自ら互に同情同感す。然れども、若し明に人々皆同胞一體の親情あることを認識し、同情同感に、其然らざるべからざる所以の合理的根據を與へば、其の道德的勢力たる、更に幾層の強きを増さん。

即ち宗教心の存在は、個人の進歩向上と、團體共同生活の健全とを刺戟する根本動力として、最も強烈なるものなるが故に、其の之を涵養すべき教育的價値十分なるものありといふべきなり。教師の人格、及び學校の精神的空氣は

云ふに及ばず、修身科、歴史、博物等の學科は、之に對して、各々重要なる機會と資料とを提供すべく、而して其の意識的基礎は宇宙精神の理解にあるべし。

第六 使命天職の觀念

人は既に貴重なる人格的生命を有し、地球上、最も英靈の精神を以て、此の社會に生活せり。其の存在たる、唯漫然として生活を展べんが爲に、呼吸し寢食する者と爲すを得ず。必ずや當に成就すべきの使命を負へるものと考へざるべからず。人格的生命の人格的生命たる所以は、其の實地に發動する所に於て、始て之を自覺することを得べし。若し木石と等しく醉生夢死せんか、是れ生命を有する人格に非ずして、又唯木石のみ。故に人にして人格的生命に於て生き、人格的生命に於て活動し、人格的生命に於て産生成就する所なければ、則ち人の人たる價値を暴殄するものといふべきなり。故に人は必ず其の人格的生命を活かし、其の尊貴なる意義を實にする所以の事業を成就せざるべからず。

人は皆其の性格、能力、地位、境遇を異にせり。従つて、其の人格的生命の發動を實地に示す所以の道に至つては、必然各人特殊の要求を有せざるを得ず、又其の特殊の要求に基きて特殊の事業を選択せざることを得ず。此の要求選擇たる、其の人格的生命の開展に對しては、其の人に在つて、實に最善の道たらざるべからず。而して此の要求選擇は實に其の人格の自然に發し、惹いて、宇宙の靈性に繋る。故に此の最善なる特殊の要求は、即ち其の人の使命にして、其の要求に應じて、選擇せらるる最善の事業は即ち其の人の天職なり。

人は此の使命天職を自覺するによつて、始て其の精力を集中し、努力を集中する標的を得、統一渾全の生活、精進不息の勤勉を爲す動機を得、而して以て貴重なる生涯を作り、貴重なる功業を成し、自己人格の價値を實現し、社會

文明に貢献する所あるを得べし。故に教育に於ては、學生を指導して、各自の使命天職を發見せしめ、之を實現する方法を自得せしむるを以て、重大事と爲す。

第七 個性を發達せしむる事

各人特殊の要求を自覺し、其の要求に従つて事業を選択し、以て生涯を捧ぐべき使命天職を發見するの必要なる以上は、教育に於て、其の特殊の要求選擇を實にする所の各人の稟賦傾向を尊重し、其の發達をして自由に且つ十分ならしめざるべからず。是れ即ち個性の培養なり。學生の惡癖を矯正し誤謬を芟除するは固より必要なることなれども、之が爲に、其の特殊の稟賦を害し、先天の傾向を曲げ、遂に特得の趣味を荒らし、衷心の欲求を沮むに至るが如きは甚だ不可なり。教育の主とする所は、矯正よりも開展にあり。矯正芟除の消極的手段は、個性の特色を削去し、一般的類型に適合せしむるが爲に施されずして、却つて各自の傾向特色をして著明ならしめ、天賦の能力發揮をして遺憾なからしめんが爲に施さるゝを要す。

是故に、教育機關の組織運用の方針に於て、なるべく學生の自發活動を獎勵し、其の個性稟賦の發揮をして遺憾なからしむるを要し、殊に教師たる者は、其の學生に接觸するの間、常に彼等を觀察して、其の個性特色の果して孰れにあるかを發見し、以て之に適當なる教育を施し、且つ將來其の向ふべき進路の決定に就いて、有力なる助言を與ふるを怠るべからず。

普通教育機關は唯法令に定められたる普通學科を教授すれず則ち可なりしと、唯形式的に雜多の學科を注入したるのみにして學生を學校より放ち出すが如きは、實に不深切を極むるものといふべく、此等卒業生が毫も自己の特長資質如何を顧ず、甲乙丙丁悉く社會的需要多く、地位俸給を得るに便利なる専門學校を指して集り、而も其の大多數は

選抜試験を通過するが爲に、兩三年間を費さざるを得ざる結果を生ず。是れ實に甚しき青年の精力浪費にして、個人と社會との損失たる極て重大なるものあり。終世自己の使命を知らず、天職を覺らず唯社會の流行に連れて東奔西馳し、漂々として定まる所なきもの多く新教育の普及と共に、却つて輕佻浮薄の風潮を増加し來るの歎あるもの、洵に是處に其の一因を構成するなきを得んや。是の如くに見來れば、學生の個性を發見して之によりて確乎たる處世の方針を指導するの、實に精力經濟の爲のみに非ず、實に社會道德上甚だ急務なるを見るなり。

個性教育に於ては、次の三項に對する注意は、特に重要な要素なりとす。

(イ) 能力型式

是れ個性發達の方角を示し、直接に人の専門事業を決定する理由となるものにして、學生に於ける此が觀察は最も大切なり。或は多種の能力の總て優秀なるものあり、或は一箇の能力のみ過度に發達し、他の精神力の極て劣弱なるものあり、或は精神力總て劣弱にして、能力型式といふべきものなく、所謂低能なるものあり。其の排列次第極て複雑にして、而も極て重要なものなるが故に、之が觀察に當りては、綿密に注意し、誤謬若くは遺漏なきを要す。若し彼の大體の分類的名目として、心理學書等に擧げらるゝ型式のみを記憶し、豫め之を當て、以て觀察せんすれば、或は過誤なきを保し難し。蓋し實際は極て複雑なるものなればなり。宜しく唯、一々の兒童に付き、精細に其の所有する特質を拾ふを便なりとすべし。而して或る程度までは、一般の諸能力を平等に發達せしむる必要あるは勿論なれども、之が爲に特長とする能力涵養の機會を失はしむるは不可なり。是れ特に普通教育に於て注意を要する所とす。

(ロ) 氣質

氣質も亦個性を決定する重要な事項にして、其の態度乃至色彩を爲す原因なりといふべし。従つて又職業を選抜するに當り、重要な與件を爲す。而して分類の爲には、古來の四氣質最も普通に用ゐらるれども、實際に於ては、

固より無限に複雑にして、一個人に於ても、單純なる一氣質を有するが如き者なきが故に、實際の觀察に當りては、なか／＼困難を感ずべし。氣質の偏向の甚しきものは、個人にとりても、亦社會にとりても、不幸なる結果を生ずることあるが故に之が矯正の必要なることあり。然れども亦なるべく其の氣質を利用し、之によりて其の能力の効果を多くし、人格的價値を發揮するが如き生活々動の方針を採らしむる注意は、學生各個に對し、極て緊要なり。

(八) 體 質

體質は氣質と關係すること深く、時としては、體質の變化の爲に、氣質及び能力型式まで變化するが如き場合あり。従つて、體質の如何も亦個性を決定し、職業を選択するが爲に重要な與件を爲す。但し此が觀察には醫師の手を俟つこと多し。又此の體質は心身の必要上、屢々矯正を要することあり。是れ亦醫師の協力を要する所なり。

第八 創造的能力の涵養

人格的生命自具の自發的活動性を、實地具體の功績に於て發揮し、特殊獨得の事業を成就する者を創造的能力と爲す。即ち又創造的能力は、自家の天職を實地の事業に於て完成する能力といふべし。是故に天職を事實上に行ひ、以て人格的生命の發動を具體的にせんとするものは、必ず此の創造的能力を具へざるべからず。

創造的能力は、空前未曾有の新事業を造り出すを本義とすれども、之を消極的に擴めて言へば、摸倣踏襲を事とせずして、常に自己の創意を重んずることを指して可なるべく、又之を主觀的に翻していへば、事毎に自己内心の要求と興味と睿智と自力に依りてする計畫及實行なりとすべし。此の能力は、個性的人格の意義を實にし、自己が生命を充す方法なると同時に、又社會文明に對して、新内容を貢獻し、之を改善し、之を豊富にする所以にして、自他兩成、一舉兩得の生活々動なるが故に、教育に於て此を重んずべきは多言するを要せず。

之を社會的に觀るに、文明教化の進歩は、巧なる摸倣踏襲に依らずして、寧ろ粗なるも新なる創造發明に依る。今日世界に於ける總ての文明的機械器具、科學藝術、孰れか能才の發明創造の力に出でざる。只管古を師とし、新なる發明發明を爲すことを爲さざりし支那の文明の、幾千年間如何に停滯せるかを見よ。創意の自由を重んじ、各自に特得の研究工夫を争へる歐米の文明の、幾百年間、如何に進歩せるかを見よ。我が國民の摸倣に巧にして、發明發見に短なるは、既に自他の定評あり。歐米各國と相對立し、世界の文明に新貢獻を爲さんとする帝國の國是を實行せんが爲には、今後の國民教育に於て、特に此の創造的能力を涵養するの、實に喫緊事ならざるべからず。

是故に、小學校の幼童より、大學の青年學生に至るまで、通じて、創意工夫を重んじ、技能實驗の科目に於ては勿論、あらゆる學科、及び學校生活の全面に於て、常に創始性を開發する注意を怠るべからざるなり。

創造的能力の涵養に就きては、次の三要綱に注意することを要すべし。

(イ) 徹底的研究心の養成

一切を知り盡くし、絶対に達せんとする人の根本要求に發するものにして、事實の眞相に徹底し、究竟の眞理に到達せざんば止むこと能はざる科學的良心、追求的興味、自發的執意は之が要素たり、論理的推理思索と共に、其の爲し得る限り、事物に就きて、實驗觀察を施し、確實なる具體的根據を捕捉せざれば措かざるは、其の方法なり。未だ會て知られざりし新事實、新眞理、新價值、新意義の發見は、全く此の徹底的研究の成果にして、學術上の偉大なる發見史は、總て之を證明しつゝあり。而して此の能力と興味とは、最も我が國民に缺けたるものなるが故に、教育に於ては、好奇心を利用して、常に此が鼓舞獎勵を怠らず、殊に學科其の他の實際に於て、實驗によりて其の方法を指導し、且つ殊に發見の興味と推理力とを養ふことを要す。

(ロ) 構成の能力の養成

此の能力は完全に對する要求及び適應性の刺戟の爲に活動するものにして、想像作用を以て其の心理的要素とす。受容せる知識的材料につき分析綜合排列組織を巧緻捷速にし、以て新事物を構成する能力なり。或は事物に秩序を立て、系統を作り、散亂せる材料を統一し、零細なる事物を集約して、以て一完全體を作り出す所の、案出工夫の能力なり。事物の弊害を去り、缺點を補充し、以て状態を改善し、價値を増加する統制の能力なり。此の能力は即ち發明の母にして、而して事物の功率をして増大せしむる動力なりとす。學び得たる所の理論を應用し、實地に効果を生ぜしむるも、亦此の能力に外ならず。即ち學理の有効なる新應用も、亦一種の創造的作業なりとす。更に又生活に於て、事實に於て、困難障害に際會するや、靜に熟慮工夫し、其の困難障害の事實を研究し其の原因を除き、且つ足らざる處を補ふの法を講じ、以て新境遇を拓き、新運命を作るも、亦此の構成力の應用なり。是れ實に人生重大の能力ならざるべからず。

要するに、此の構成力は個人よりするも、亦社會よりするも、實地生活上極めて重要な能力にして、家庭及び學校の教育を通じ、極めて幼時より努力して養成するを要す。但し此の能力も亦精神作用に就き、實地の仕事に就き、學生自ら實驗實行するによつて養成せらるゝものにして、注入説明の能く爲し得ざる所なり。

(八) 發表の技能の養成

發表は完成の興味に發す。而して發表と構成能力とは、極めて親密なる關係を有す。構成は發表を豫定し、發表は構成を豫定し、又發表するに非れば、構成の事業は完成せず。構成を俟つに非れば、發表は其意義を爲さず。兩々相俟つて互に其の價値を相成す。且つ夫れ創造といふは、之を別言すれば、空前の新發表に外ならず。故に構成的能力の涵養、將た又創造的能力の涵養には、發表の技能の養成を缺くべからざるなり。

發表を廣義に解すれば、則ち總ての實行にして、狹義に解すれば、則ち所謂藝術なり。然れども其の要素に在りて

は兩者相同じく、孰れも抽象的思想を具體的事業に轉移表現する動作を基礎と爲す。故に發表の技能の養成は全く一事を思考し、而して之を直に外界に發表する實行によりて爲さる。蓋し此の技能の根柢は神經筋肉の運動に存するが故に、特に實行を重んぜざるべからざるなり。而して此が養成修練の、精神活動に、又實地生活に極めて切要なる所以なりとす。

此の能力の養成の機會も亦あらゆる學科に互りて存せり。唯十分なる構成的發表に至りては、學校及寮舎生活、家庭に於ける實地活動の間に存するものなるが故に、教育に於ては、此の機會を捉ふるに機敏なるを要す。

第九 自動的意志の修練

學生の自發活動性を自由に發揮せしむる教育の用意は、更に進みて、自ら判斷し、自ら決定し、自ら實行する所の、斷乎たり又確乎たる自發的活動を爲すに習熟せしめざるべからず。是れ蓋し獨立人格主要の資格なればなり。之を別言すれば、活動の自然的狀態より進みて、意識的人格狀態を具ふるに至らしむるものにして、自ら自己の個性を開展し往く力、創造的能力が其の結果を實現しゆく方法は、實に自發的意志活動の確乎として爲さるゝに至り、始めて是處に完成するを得るなり。是故に、啻に適當に與へられたる境遇に於て自發的活動を自由にするに止まらず、更に進みて、構成力を用ゐ、如何にして前途の障害を突破して自己の能力を發揮し、自己の使命を遂行すべきやを考量し、而して樹立し得たる方針に従つて、堂々として自ら奮進し、自ら適當なる境遇を開拓する實行力を養成することは、實生活上第一の要件にして、従つて、教育上の緊要事ならざるべからず。否教育が其の効果を奏し得るは、全く學生各個に此の自發意志活動の十分なるものあるに依らざるを得ず。即ち此の自動意志の涵養は、教育の目的上必要なるのみならず、教育上の方法上缺くべからざるなり。是故に、學校の教科其の他に於ては、學生をして常に自己の

力を以て實行し、完成せしむる機會を、多くする用意を怠るべからず。

此の自動的意志の修練に就いて、左の諸項の如きは、殊に注意すべき要目なり。

(イ)自己の能力を信ぜしむる事。人は自己が心核たる人格的生命は自ら意識して動く力にして、自ら爲さざるを得ざる要求を有し、自ら爲さんと欲する所の事を爲し得る機能を具ふるものなることを自信せしむるを要す。

(ロ)自發自力の實行の興味を覺えしむる事。即ち自己の感ずる満足の中、自ら計畫、實行、完成し得る興味の大なるものなることを知らしむべし。此の興味は殊に幼時より養ふを必要とし、又養ふことを得るものなり。故に之を基礎として、漸次自發研究心、構成の能力、發表の技能を、あらゆる實行に於て常に修練するを怠らざることを要す。自發自力の實行の興味は、即ち創造的興味に外ならざるなり。

(ハ)冒険の氣風を養ふ事。冒険の氣風は、其の根本、自發的活動性より發し、好奇心、即ち發見發明の興味、自己の個性的價値を著大ならしめんと欲を加へ、而して果敢勇往、執着忍耐の實行的勇氣によりて成るもの、自動的意志活動の著しき方式にして、同時に此の意志を發達せしむる著しき方法なり。然れども、此の冒険的氣風の價値は、教育上よりも、寧ろ實生活上に於て存す。世上の萬事は、危険を冒し、斷然として實行する果敢勇往の態度によりて成功すること多し。是れ實に自己が運命轉開の要諦にして帝國民の如き、世界に向つて四方に新境遇を開拓せざるべからざる使命を有する者に於ては特に重要な氣風なり。

(ニ)勤勞の興味習慣を養ふ事。此の勤勞の習慣の必要なることは、人皆之を知る。唯此の習慣を養ふ方法に至りては、機械的にして、他律的に強制するの外、多く別段の用意はななきが如し。勤勞も亦興味によりて刺戟せらるゝものにして、苦痛に對する忍耐も、何等か之を償ふに足るべき自我満足なければ、到底持續せらるゝものに非ず。而して満足の主なるものは、實に生命の充實、自發活動性の満足をして最となす。故に個性に従ひ、創造實行の興味を

本とし、個性に従ひ適當の規律秩序を用ゐて、内發的に努力する方法を自得せしめ、漸次喜びて献身的努力を爲す境地に導かざるべからず。人の勤勞を厭ふもの多きは、決して人の本性の然らしむるに非ず。教育の方法宜しきを得ずして、向上的精神、内心の要求と、自發的活動性とを萎縮せしめ、且つ常に心身の傾向に對し、不適當なる勤勞、過度勤勞を強ひらるゝ結果に出づるものを多しとす。今後の教育に於ては、最も此の勤勞の教育法に注意せざるべからずと信ず。但し現在社會の組織統制の不完全なるが爲に、生活の壓迫によりて、不適當且つ過度の勤勞を強制せらるゝ結果、個人をして厭倦の心を發せしむるのみならず、社會に一種不愉快不満足の空氣を作り、青年の元氣をして銷沈せしめ、頹廢の氣分を養ふもの少からず。是れ經世家の大問題なり。

第十 社會性の涵養

社會的生活を好むは殆ど生類の本能といふべく、同類相認識し、更に進んで互に意志を疏通し、感情を交換し、遂に調和一致の境に達せんとする傾向は、早く幽に動物に現はれ、人類に至つて殊に此の傾向の強烈なるを見る。人は特殊の事情境遇に在らざる限り、全く孤獨生活を營むに堪へず、必ず意志感情を交換すべき對手を求む。而して少數特殊の人に對する特殊の友情を欲すると同時に、之を以て満足せず、社會全體の關係の中に自己を確立し、社會全體をして之を認識せしめんことを求む。是れ人が社會的生活を營爲する原因にして、實に團體生活は人性的根本要求に出づるなり。

蓋し此の宇宙の組織は森羅萬象の關係活動にして、人の社會に於ける生活亦之に相應し、緊密なる關係の組織の中に、相互相呼應し、相感化し、相援助し、相養護し、以て各自の人格的獨立活動を保つ。人の生命は物質によりてのみ養はるゝものに非ず、必ず物質と共に、一種の精神的感應によりて養はる。善美なる物、更に言へば、最も人の要

求に好適にして、最もよく衷心の生命の活動昂張を刺戟する感動は、實に人をして發達生長せしむる要素にして、是れ即ち精神的食糧なり。而して此の精神的食糧は、直接に人の善美なる精神より受くるを以て、最も有効なるものとす。是故に人が交際を求め、社會的生活を好むは、實に生命必然の要求なりといふべく、教育の作用亦固より此の要求の豫定の上に成り立つ。且つ悠久なる祖先以來の遺傳は、殆ど吾人の性格を社會的となし終り、更に又、文明の進歩と共に、人の社會的關係は益々緊密となり、社會を離れて、精神的生活を全うするの不可能なる状態となれり。即ち社會生活は外的要件としても亦必至の價値を有す。

故に、教育に於て此の根本要求たる社會性の發達を十分ならしむることは、一は個人の發達、其の性格の完備の爲に必要なり。一は社會の團結を堅固にし、其の組織を健全にするが爲に必要なり。但し社會生活は理論に非ずして實際なるが故に、之が涵養の一面に於ては、固より其の必要と價値とを自覺せしめ、其の方法様式の見解を得しむることを要すれども、主としては、實生活上に於て、之が方法と興味とを會得せしむるを要す。而して特に計畫して修練發達せしむることを得る機會は、家庭にあり、殊に學校にあり。教師は實地の機會に於て各個人間の友誼を進め、全體の關係生活を緊密ならしむるが爲に適當なる指導を怠るべからざるなり。

社會性涵養法の精神的根據は、固より宇宙精神、人格的生命の意義を體し、人々相互に理解と同情とを保つにあれば、其の主要なることは、社會全體を一團として、其の關係の中に自ら發展する實地上の方法を知るにあり。即ち

(イ) 境遇に對する適應力の養成

是れなり。適應力とは、境遇の性質を理解し、其の價値を理解し、之を利用して、以て自己の個性を發達せしむる能力にして、構成的能力の外境界境遇に對して發動せるものなりとす。學生にして若し此の境遇に對する適應力を缺かんなか、如何に完全なる教育的境遇を準備するも、其の効果を發揮する能はざるべく、社會に立ちては、自己の立脚地

を作り、自己の事業を成就し、自己の生活をして、安定ならしむること能はざるべし。是故に、其の境遇たる社會の組織、制度、習慣、道德、文明等を理解し、之を自己の使命性格能力と對照し、其の間に起るべき無用の衝突を避け、適當なる所に於て相調和し、以て關係活動を圓滑にする修練は、將來社會生活の準備の爲のみならず、學校生活の爲に必要な教育なり。而して是れ又解説講義に依らず、學校の實地生活上に於て指導せらるるを要す。

更に又此の適應力を、事務的社會生活に用ふる方法の重要なことは、

(ロ)分業と協同

の理法を知らしむることは是れなりとす。生活上個人と社會との關係は、此の分業と協同との理法に於て成立す。即ち各個人は其の特殊の、性格、能力により、特殊の使命を行ひ、此を以て社會に貢獻し、社會は此の各個人の貢獻を綜合し、之によりて發達進歩を續く。是れ分業と協同の現象なり。各人の職業生活に於て仔細に之を觀察すれば、關係的活動の各部各個間到的分業と協同の理法の存せざるなし。

近世の事業の進歩は、此の分業と協同の理法の巧に行はるるに基くこと極て多し。彼のミルの分業法の始めて世に行はれたる頃、英國の一製針工場が、始め職工一人に付き、一日四千本の針を製造したりしもの、分業法の結果一人一日十萬本を製造し得るに至れりとは、屢々引用せらるゝ例話なり。

故に境遇適應力を社會に於て現はす方法は、自己と周圍との間に、此の分業と協同の理法を最も善く適用するに在りといふべし。是れ亦學校生活に於て學生をして學科の共同研究、運動會其の他團體活動を爲す場合に於て、實地上に習熟せしむべき一要項なり。

境遇を理解せしむる趣意を擴張して、特に是處に擧ぐべき必要を感じるものは、

(ハ)現代世界狀態の理解

是れなり。吾人が境遇中最も重大なるものとしては國家あり。家庭、社會と共に、自己の國家に就いて十分に理解を有するの必要あるは論を俟たず。然るに今や吾人の生活は國家を以て限られず。社會的に、個人的に、はた國際的に、世界は頗る緊密なる關係を以て吾人の生活に關係し來れるものと共に、一面我が國家として、又國民として、將來大に世界的に發展し、世界的に活動せざるべからざる時勢となり來れるは、第一篇に於て詳論したる所なり。之に對して準備的教育を與ふることの、國民の境遇教育として、必至の要求なるべきは多言を要せず。

第十一 自治生活の訓練

自ら爲し、自ら治むる生活法は、自動的意志の社會生活上に於ける發表にして、人生のあらゆる場合に於て必要なり。家庭に於て、學校に於て必要なると共に、社會に於ては殊に必要なりとす。

自ら爲し、自ら治むといふ一面に於ては、必ず他人あることを豫想す。即ち自治の意は孤立に非ずして、共同生活の方法なり。共同生活を圓滿にし、且つ共同關係の中に獨自の生活を保持し行く方法なり。是故に自治生活は、個性と社會とを調和し、個人主義と國家主義とを調和し、各個人の生活と全體の活動とを調和する方法なり。又個人に於て主觀的に言へば、自動的意志と社會性とを調和する方法なり。故に分業と協同との事務的理法を人格的に應用したるものといふも不可なし。

我が國民は特に此の自治の觀念習慣に乏しきが爲に、實業其他私的事業の發達進歩を沮害し、地方自治制の運用甚だ拙劣なりとは、識者の屢々痛歎せる所なり。故に自治的訓練を與ふことは、國民教育上極めて急務なりといふべし。國民教育上急務なるにも拘はらず、從來の學校教育に於ては、頗る自治的訓練を忽にしたるが如し。蓋し一は學校組織の之に不適當なるにもよるべしと雖も、教師が之に對して、注意を拂はざるに依るもの少からざらん。今後

に於て、必ず改善を要する所なり。

學校に於ける自治的訓練の方法は、一、學生各個をして、自己の一身に關する事はなるべく自ら處理し、自己の力によりて、獨立的に生活を統制せしむる事、二、學校乃至教師の干涉を避け、なるべく、學生をして種々の事務を負擔せしむる方針を採る事、三、學校全體を一箇の自治體と見做し、學生自己の力に依りて其の生活を統制しゆく方針を採る事の三項に分るべし。

更に其の方法の内容二三を例擧すれば

一、教授に於て自學自習主義を採り、練習題の如きは必ず自ら解釋せしむるは勿論、時々問題を設けて自ら研究せしめ、進んでは、學科全體に就いて、自ら研究して、教師の指導是正を待つ態度をとらしむ。

二、學生の關係すべき諸會合に於ては、なるべく學生をして其の事務を處理せしむ。

三、學校の規律風紀衛生其の他の事項、即ち學校行政とも稱すべき事項に就いては學校全體の事業とし、校長以下教師學生悉く相會して、一箇の機關を組織し、各自皆其の一部の責任を分擔する事とす。

四、寄宿舎の組織を自治的とす。家庭に於ても、亦此の學校の方針を實行せしむ。

其の他、是の如きの方法を、學校の實地に於て設くる機會は猶少からざるべしと信ず。

此の自治的修練を十分にするに就きて、特に注意努力を要する事項は左の數箇なるべし。

(イ)責任の觀念を養ふ事

自己の責任を自覺し、苟も自己の爲すべしと決定したる事は、其の事の何たるに拘はらず、又其の境遇事情の如何に拘はらず、確實に之を完成する氣風を養成することは、一般獨立人格の必至の資格にして、自治生活に於ては殊に必要なり。是れ人格の意義を解し、使命天職の意義を解し、又社會生活の意義を解する者の、必然執るべき態度なり

と雖も、邦人には此の觀念薄弱にして、自治制度の結果の擧がらざるは之が爲なりとの評あり、特に注意して涵養するを要す。

(ロ) 權利義務の觀念を養ふ事

自己の責任を確實に盡さんとする以上は、必ず權利義務に關する明確なる觀念なきを得ず。確實に權利を主張し、且つ義務を盡すは、實に社會に於て獨立人格の資格なり。權利と義務とは表裏兩面の關係あり、自己の職務上斷じて必ず爲さざるべからざるの事は、是れ權利にして且つ義務なりといふべく、其の兩面に分るゝは全く自他關係の兩面より見るに依る。故に社會に於ける責任を明にせんと欲せば、之に伴ひて必ず權利義務の觀念を明にせざるを得ず。人或は權利の觀念を教ふれば、人をして主我的態度を増長せしむべしと憂ふるものあり。然れども、是の如きは、誤れる教育の結果にして、正當なる判斷を缺けるに依る。權利の觀念の爲に非ず。主張すべき權利を主張せず、盡すべき義務を盡さざる邦人の態度は、確實なる社會生活を爲す方法に非るなり。

(ハ) 獨立心の養成

人格、使命、責任等の觀念にして明かならば、人は自ら獨立自恃の態度を採るに至り、苟も他に依頼して安を偷まんとするが如き劣弱卑屈の心を蓄ふることを得ざるべし。蓋し依頼心は自己を没し、體面を傷くるものなればなり。然れども、我が國從來の社會制、家族制等の爲に、獨立心弱く、依頼心強き國民性を馴致したるものならず。自治の成績の擧らざる、産業の發達せざるは、又之に依るといふ評あり。是れ國民の教育に於て、特に注意して矯正を要する弱點にして、學生をして、獨立自營は自他相共に立つ方法なり、依頼心は自他相共に倒るゝ原因なることを、深く感銘せしむるに力むべきなり。

(ニ) 立憲自治制の教授

自治生活の意義を國家生活に擴張したるものは、即ち立憲代議政體、地方自治制度なり。我が國に此の政體制度の採用せられてより既に二十餘年、成績未だ十分ならざるは、國民に元來自治的訓練なかりしと共に、之に關する教育の行はれざりしに依る。此の政體制度たる、實に帝國永遠の政治にして、將來國家の發達、國民の福祉は、此の政體と制度との運用如何によりて、決定せらるるものなるを思へば、此に對する準備教育の必要なるは言を待たず。殊に從來此の能力に乏しき國民たるに於て然り。故に學校に於ては、一面自治的性格、自治的能力を養ふと同時に、憲政自治制の意義運用法及び之に關する道德に就いて十分に教授するを要すべし。是れ亦國民をして其の境遇に適應し、又之を利用して、以て最大の國民的價値を發揮せしむる一法なり。

第十二 體育の獎勵

從來體育は重視せられざりしに非ず。然れども多くは唯漫然として一般的に、健康の増進、筋肉の發育及び鍛練といふが如き目的の下に、形式的に體操法を課せるに過ぎざりしやの感あり。吾人の見る所に依れば、體育には更に重要なる意義あるものゝ如し。

思ふに、吾人の身體は吾人が人格的生命の外界に發現する様式乃至機關にして、高尚偉大なる信念も理想も能力も、皆此の身體の中に宿り、身體によりて養はれ、身體によつて現はる。今日の文明教化は實に悉くこの吾人が身體を用ゐてなせる實地活動の形蹟に非るなし。吾人の身體は實に此の宇宙の靈力の宿る所、寧ろ靈力の顯はるゝ所、寧ろ靈力其物なりといはざるべからず。此の身體の健康如何は、實に重大なる問題ならざるを得ず。従つて又體育法の意義は決して體操科の課業に於て盡くべきものに非ず。吾人の生活全體に關する重大なる問題なりとす。

體育法の直接主要目的とする所は、左の四項に在らんか。

一、筋肉の發育を計り、身體をして健全整美ならしめ、以て現在の生活を快適ならしめ、且つ將來發達の基礎となす事。

二、生活の三大機關たる神經系統内臓及び諸筋肉を訓練して、容易に圓滑に意志の統制に従はしめ、以て精神の自由にして十分なる外界發表に適應する身體たるに至らしむる事。

三、各人をして此の狀態を將來の生活に於て持續し、且つ進歩せしむる方法を會得せしむる事。

四、各個人の心身を健全ならしめ、以て民族改善の要件たらしむる事。

體育にして、唯學生の學校在籍中、他律的に健康を維持せしむるに止り、將來自ら其の健康を増進し、其の身體を支配し得る方法を會得せしめざらんか、是れ機械的體育なりといふべく、教育的價値は頗る劣弱なるものといふべし。我が新教育の普及せること現今の如く、各學校多くは體操を課しつゝあるにも拘はらず、青年の體質體格は寧ろ退歩の傾向ありといふが如き、是れ實に現今の體育の缺點を語るものに非るなきか。

吾人の信ずるが如き體育の目的を達せんが爲には、從來の如く、唯一週數時間、形式的に體操を課するのみにては固より極て不完全なりとせざるべからず。之が改善の方法としては、

(イ)體操科の教師をして、唯學科としての體操教師たらしむるに止めず、體育の教師、更に言はゞ學生の健康法に關する指導教師たらしめ、學生各個の健康法を指導せしむると共に、學校全體の設備、作業、學生の勉學生活法に就き、健康増進法に對する注意を爲さしむるを要す。

(ロ)學校に於ては、一般的體育法を行ふと共に、學生各個の體質に適應する特殊の方法を行ひ、更に將來の境遇職業等を顧慮して、適當なる方針を與へ、之に習熟せしむる用意あるを要す。

(ハ)教室の構造設備に適當の注意を加へ、採光換氣等には特に注意し、戶外運動を奨励し、郊外休養等の方法を設

くるを要す。而して此等は健康法の示す所に依り、一定の方針組織に於て統一せられざるべからず。

(二) 體育には大に醫師の協力を要す。即今の應急策としても、特に學生各個に對する注意の爲に、醫師の力を借るを要すべし。

(ホ) 生理衛生の科目と協同し、健康維持増進法を教授し、且つ遺傳、健康障害事項等に關する知識を授くべし。

(ヘ) 従つて、體育法を更に科學的教育的且つ系統的に組織することを要す。

(ト) 之が爲には、體育研究所を設け、體育に關する研究を爲すと共に、體育教師を養成する事を要す。

第十二 學風改善に關する總收

吾人が學風を改善せんと欲する直接喫緊の目的は、蓋し國家社會に於て、最も有効なる活動を爲すべき眞人物を養成せんとするに外ならず。而して有効なる活動を爲す眞人物とは要するに、其の靜的方面より言へば、則ち人格優秀なる人物にして動的方面より言へば、則ち實力の充實せる人物に外ならず。而して之が養成法の眼目は實に人格的生命本具の自發活動性を十分に發達せしめ、且つ之をして現代社會に適應せしむるに在り。前來述べたる所は、皆この趣意に基かざるはなし。乃ち吾人が學生教育の方法を一目瞭然たらしめんが爲に、既述各項の中より、其主要の項目を取り、之を學風改善人物養成の一題目の下に、系統的に排列して、以て之を表と爲し、是處に掲ぐ。

(一) 國民精神の美點を了得發達せしむる事

從來是に對し採り來れる方法により更に精神的に努力する事

(二) 信念(德行の根本動力)を涵養する事

一、教師たる者は總て生活の基準に關する理想を把持し絶えず精進する態度を執る事

二、修身科に於て人生々活の根本理想を追求し之が實現に努力する興味を養ふ事
殊に熱烈なる信念を把持せる聖賢偉人の傳記事跡によりて信念生活に對する欽仰嘆美の心情を鼓吹し且つ生活及び思想の全體を統一するに必要な哲學的思考力を養ふ事

三、總て學科に於て事物の究竟原理に到達せずんば止まざる追求的興味を養ふ事
四、歴史自然研究其他の諸學科及び種々の儀式會合等其の他の機會に於て敬虔にして嚴肅なる宗教的感情を養ふを怠らざる事
五、學生をして生活の全體を通じて常に理想信念に顧慮せしめ之が爲に適切なる境遇を興ふる事

六、學校に於ては教員及び生徒の信教の自由を尊重する事

七、當局は教育界に宗教尊重の風を興す方法を採る事

イ、特に教員をして信念涵養の必要を了知せしむる方法を採る事

ロ、合理的思考自由討論の精神を沮害するが如き宗教的教條儀禮獨斷的定想迷信等を學生に強ふる弊を防ぐ事

八、宗教家をして總て高潔なる信念を把持し民衆の尊敬の標的となるが如き生活を営ましむる方法を講ずる事

(三) 自己修養の精神を養ふ事

一、人格の觀念を明瞭にし各個人の地位境遇以外總て平等に尊貴なる所以を了知せしむべき事

二、各個人は總て其精神の根柢に微妙なる靈的生命を有するものにして従つて無限に向上進歩し得る所以又無限に向上進歩せざるべからず所以を覺知せしめ自動的修養に努めしむる事

三、人は各自の人格靈性の涵養に力むると共に又他人の人格靈性の涵養に助力するの神聖なる徳義なる事を了知せしむる事

四、従つて自尊の念と共に犧牲の精神を涵養するに力むべき事

(四) 學校に於て各自を温保し其人格靈性をして不知不識の間に發動進達せしむるが如き怡和温煖深切の雰圍氣を作り之によりて全體を融合調和せしむる努力を怠らざる事

(五) 教師は生徒に對し常に人格尊重の態度を持し修身科は勿論其の他の諸學科に於て人格の觀念を明瞭ならしむるに力むる事

(六) 特に精神修養に關する會合を組織し適當なる指導の下に學生相互に啓發感化せしむると共に精神的融和一致を得るに力むる事

(七) 適宜自治的組織を作り自治及び協同の生活に慣れしむる事

(八) 責任を重んじ權利義務に對して嚴肅なる態度を持つる習慣を養ふ事

(九) なるべく寄宿舎を設け人格的脩養生活に習熟せしむる事

(一〇) 教員の選任監督に於ては人格の權威を尊重し機械的方法を避け殊に事務上の都合地位俸給等の爲に容易に異動するが如き風習を矯むる事

(一一) 人格優秀なる教員に對しては特に優待獎勵の方法を執る事

(一二) 當局は學生の教育に關し家庭及び社會をして學校に協力せしむる方策を講じ教育を妨害するが如き社會的事象に對しては之を戒飾規正する手段を採る事

實力養成
現代社會に有効なる活動を爲し文明の進歩に貢献するに足る能力の養成

- (一) 人生の眞義は自己生命の發現にあることを知了せしむる事
- (二) 獨創的實行力を養成する事
 - 一、學生各自をして自己の能力を信ぜしむる事
 - 二、自發的研究發見發明工夫の興味を養ふ事
 - 三、獨立の判斷力を養ふ事
 - 四、構成的能力を養ふ事
 - 五、果敢勇往忍耐の意志を養ふ事
 - 六、特に依頼心を打破し獨立自營の氣風を養ふ事
 - 七、教師は常に學生の個性に注意し固有の才能を發見して其の發達に助力し是に適當なる將來の進路を指示するに怠らざる事
 - 八、學校の設備學科時間方法を改善し個性の發達に適せしむる事
- (三) 如何なる地位職業にありても常に自己の責務を果す氣風を養ふ事
- (四) 尙武冒險の氣風を養ふ事
- (五) 教授の際に於て學理と實際との調和に留意し特に應用の能力を養ふ事
- (六) 勤勞を喜ぶ氣風を養ふ事
- (七) 分業と協力との方法に慣れしむる事
- (八) 現代社會に於て特に必要なる知能を啓發する事
 - 一、立憲國民たるに必要な知識性格を養ふ事
 - 二、世界的活動を爲すに必要な知識性格を養ふ事
- (九) 體育を獎勵し學生をして心身を強健ならしむると共に各自の技能職業に應じ容易に意志的活動を爲すに適する筋肉肢體を有せしむる事
 - 一、體育法を更に科學的に且つ教育的に組織する事
 - 二、之が爲に體育研究所を設け特に體育教師を養成する事
 - 三、學生をして各々自己の體育保健法を會得習熟せしむる事
 - 四、體操場の設備教室寄宿舎等に於ける採光換氣に注意し戶外運動を獎勵する事
- (一〇) 官私學校の差別を除去する方法を講ずる事

第四章 教育の機關

第一節 學制の教育的意義

第一 國家より見たる學制

學制は教育作用に對する國家の統制組織にして、即ち國家の意志により、教育作用の系統的進行、統一的發動を計る所の組織なり。

之を其の内容乃至効果よりして見る時は、學制の目的は、一定の計畫組織を以て、教育作用の理想的系統的進行を運ぶことにより、實力充實せる優秀なる人格を具へ、國家社會に對して、偉大なる價値を貢獻すべき有爲の人物を作るに在り。又國家社會が善美にして強大なる進歩發達を爲さんが爲に國家社會を組織する成員をして、其の最大價値を發揮せしめ、又最大價値を發揮すべき成員を産出増加せんとするに在り。是故に、學制は教育の功率の發揮増大に對する、具體的計畫案たるに外ならざるなり。而して、有爲なる人物とは、其の功業により社會の改善進歩に資することの著大なる人格を意味し、又社會の改善進歩は、即ち各個人の發達の外に是れなきが故に、乃ち一個の學制は同時に、個人と社會との兩者に對して教育的効果を生ずるなり。

第二 個人的及び社會的要求と學制

前述の故に、國家は一面に於て、個人の要求を顧み、他面に於て社會的要求を顧み、此の兩者をして、同時に満足

を得しむべき調節の上に、學制々定の立脚地を置く。

然れども、學制は個人と社會と、兩者の要求を無關係に併立せしめ、漫然其の折衷調和を計るべきものに非ずして、個人の要求をして、同時に社會的效果たらしむる組織たるを要す。個人よりして學制を見れば、唯自己の發達を合理的に、且つ十分に導き、生活の價值を社會的に有効に發揮する方法を自得する最良境遇の條件たるに過ぎざるなり。即ち個人よりして社會の要求を見れば、生活上有効なる活動法を自得する與件たるに過ぎざるなり。齟つて之を社會よりして見る時は、社會の進歩と充實とを善美且つ十分ならしむる、人格的要素、精神的能力を發揮せしむる機關の組織計畫たるに過ぎざるなり。即ち社會よりして個人の要求を見れば、其の發達上必要なる要素を産出する機会たるのみ。是故に、學制は、個人の要求と社會の要求とが、互に目的と爲り、手段と爲る所の一箇教育作用を運ぶ組織なりとす。

第三 廣義の教育作用に對する學制の位置

個人の見地に於て、教育は人々本具の先天的素質を培養し、發展して、之を個人化社會化人格化する事業なるが故に、教育の作用は、人の生涯、人の生活の全體に亘りて連續し汎布す。而して其の廣大なる教育作用の一部に於て、特に合理的具案的方法により、社會國家の力によりて指導を受くるものあり。即ちこれ狹義の教育にして、又個人の生涯中に於て、自己能力の發展、人格實現、生活の方法を學習する具案的境遇に全身を投ずる時期は、即ち狹義の教育期なり。學制は此の狹義の教育の系統的機關を組織する計畫案なりとす。

社會の見地よりすれば、社會の到る處に個人あり。従つて社會到る處に教育あり。其の教育作用の一部に於て、特に各個人の生活を社會の教育意志の統制の下に置くべき組織を作り、各個人をして必ず之を通過せしむるもの、是れ

即ち狹義に謂ふ教育にして、社會自家の教育力を之に集中して、合理的組織の中に活動せしむるもの、社會の教育の一部なり。學制は、即ち此の狹義の教育を系統的に導く所の計畫案なりとす。

此の兩箇の見地を合せて言へば、國家の定むる所の學制は國家意志によりて、社會の全體に遍漫せる教育力を集中し、之を合理的系統的方法に於て活動せしめ、而して各個人生活の一部を此の中に收容し、以て各個人をして、最大價値を發揮する方法を學ばしむる組織なり。即ち學制は社會の教育作用の一部にして、而も其の全體的模範的活動を運ぶ組織たり。又個人の修養活動の一部を爲すものにして、其の理想的發達生活を運ぶ組織たるなり。

第二節 學制の要義

前述したる學制の教育的意義により、學制の制定上の要旨を摘記すれば左の數項に歸すべし。

一、學制は社會の教育意識の表現形式たり、又其の教育力集中の組織にして、社會の教育力の理想的模範的活動を導くを要す。

二、國家び人類生活の理想、個人之要求、社會の狀況、世界の趨勢に適應し、教育の功率をして十分ならしむる組織を要す。

三、合理的系統的にして、秩序聯絡統一の確實なると共に、社會の事情、時勢の變轉に應じ、分化發展の自由なる餘地あるを要す。

四、各種の文化、各種の階級、各種の職業の要求に對し、總て理想的教育を與へ得る組織たるを要す。

五、全體に對して妥當なると共に、各個人各性能に對し、發達の機會を均等に與ふることを要す。

六、學生の學資、時間、學習力を最も有効に用ゐしめ、其の才能、性質、趣味をして、十分に發達せしむるを要す。

即ち學生をして、理想的の進歩發達生活を営ましむるを要す。

七、教師をして、十分に其の人格の權威價値を發揮せしめ、且つ常に安定に其の職務に献身せしむる組織なるを要す。

八、教師をして常に向上進歩せしむる組織なるを要す。

九、國民を教育する學校は、皆等しく帝國の教育機關なるが故に、之が統一的方法なかるべからざると同時に、設立經營者の相違(例へば政府と私人の如き)によりて、其待遇を二三にせざらんことを要す。

十、政府は自家の學校經營の方式を以て絶對至上なるものとして他の一切の學校に臨むことなく、各學校をして、各其の特色とする所によりて、最大の價値を發揮せしむるを要す。

十一、文部省のみにて、完全なる國家教育の全系統を組織し、支持するは、實際に不便なるものあるべきが故に、寧ろ自ら唯統一中心となり、社會私人一切の協力によりて、複雑なる教育の大系統を組織する方針を執るを要す。

十二、總て、制度の爲に、人格或は要求を壓迫沮止することなきを要す。

第三節 教育機關の組織

第一 學校の職能と組織

古へ組織的學校の是れなかりし時代に在りては、教師たる人格直ちに教育力發動の單位なりしかども、現今の如き學校にありては、基礎單位は學校にして、教師個人に非ず。今日の學校に在りても、教育の授與は主として教師個人によりて行はると雖も、然れども決して教師個人の教育に非ずして學校の教育なり。教師が日々學生と相對する教室

は學校の教室にして、教師の教室に非ず。學校は教師の有に非ずして、教師は學校の有なり。學校は機關の主要部として教師を具ふ。教師よりいへば、教師は其の學生を教へんが爲に、其の學校に在るに非ずして、其の學校の事業を行はんが爲に職務を執る。學生も亦其の教師に就いて學ばんが爲に學校に入りたるに非ずして、其の學校に於て學ばんが爲に入りたるなり。即ち教師と學生とは、互に學校なる一機關を通じて、間接に相對向しつゝあるに過ぎず。故に理論上より言はゞ、古への師道を以て、今日の教師と學生との關係を律せんとするが如きは、全く今日の學校の性質を解せざる者なり。古への師道を以て論ずべきは、教師個人と、學生個人との關係に非ずして、學校と學生との間の關係ならざるべからず。即ち今日の學校は、教育上人格的一箇體たることを要す。是れ學校の理想、精神、校風等の非常に重大なる所以なり。但し今日の學校が古への所謂師に代りて、教育の基礎單位となり、一全體として學生を教育するも、其の關係たる、決して古への師弟とは同じからず、全く其關係を異にせり。

第二 學校の構成及び其の要素

今日の學校は、人格一箇體として教育の職能を行ふべき地位にあるものなるが故に、其の組織の内容方法は、亦之に一致することを要す。即ち各要素は悉く有機的關係に於て相結合し、而して且つ一箇の精神に依つて統一せらるゝことを要するなり。

學校の構成要素の主なるものは、教育精神と、教師と、學生と、教科及び設備となり。教育精神とは學校の目的、主義、信念、識見、方針、態度等及び此等を掩ひ此等を融合する校風を指すものにして、本體上より言へば、最も重大なる位地を占む。又目的上よりいへば、學生は最も主要の地位を占め、方法上より言へば教師最も重要な地位を占む。故に教育精神と、教師と學生との三者は、學校を構成する主要素にして、教科と設備との二者は之を助くるもの

なり。

學校の構成上より見れば、教師と學生とは等しく學校を組織する人格的要素にして、其の間に何等の軒輊なし。兩者は學校精神に於て相融和し、人格の愛に於て、相尊敬し、相親睦し、教育生活を共にする朋友、修養向上の道程に於ける同行として、相携へて人格的生命の充實に精進すべきなり。唯發達の程度上先輩後輩の關係あり。教育の方法上、指導者、被指導者の差別あるのみ。

但し此の差別は最も嚴格なる秩序を爲す。同行の後輩は最も敬虔謙虚以て先輩を尊ばざるべからず、最も恭順眞摯以て其の指導を受けざるべからず。先輩亦最も嚴肅に且つ懇篤に、後輩を愛養誘掖せざるべからず。是の如きは皆人格的生命の欲求に對する熱情より、自ら生じ來る所にして、教育精神の要諦なり。而して學校をして人格的教育體たらしむるものは、實に此の精神の充溢にあり。

此の教育精神をして充溢せしむる主動者たる點に於ては、教師は學校に在りて最も重大なる要素たり。而も亦是の如き教師をして學校に在らしむる者は、即ち學校の教育精神なるが故に、教育精神と教師とは、兩者互に因を爲し果を爲して相互作用するものとす。

若し夫れ、學生及び社會の要求よりして見來れば、教科は極て重大なる價值を生ず。殊に専門教育機關は全く此の教科の爲に存在すといふも過言に非ず。而して教科の目的を達するが爲には、設備の之れに適當するものなかるべからざるが故に、設備も亦缺くを得ざる要素たるは勿論なり。

第三 學習と學科

組織的に行はるゝ所の狹義の教育が、既に人の生活全體を包含せざる以上は、人の性能乃至生活々動に關する諸要

素を、總て悉く包含するものに非るは論なし。教育に於ては、性能乃至生活々動の諸要素中、最も重要な事項を選び、之を所縁として、發達的方法の暗示及び手引を與へ、學生をして、之によりて、人格全體の發達を爲すべき各自の方法を其の實行上に於て、發見學習せしむれば則ち可なり。是れ即ち狹義の教育が、修養、發達、研究、實行の生活に對し、理想的模型たる所以なり。

教育が修養、發達、研究、實行の理想的模型たるが故に、又從つて學校生活の全體を以て學習法と爲すを當然とし、學科は其の一方面たるに過ぎず。普通教育に於て特に然りとし、通じて學生の年齢の進むに従ひ、職業的要求に接近するを以て、從つて他の生活よりも學科に對する要求増大す。教育機關は、此の要求をして圓滿に満足せしむる爲に、適當に工夫せられざるべからず。

若し夫れ、知識の種類より見れば、普通教育に於ては、あらゆる性能の開發に應ずるが爲に、單純廣汎なるを要し、専門教育に至りては社會の職業的需要に應ずるが爲に、自ら複雑狹小となる。此の間の調節も亦注意を要す。

第四 學校の獨立と學科

學校が一個の人格的體制を有し、以て教育の單位たらざるべからざる以上は、其の實際に於て、此に伴ふ所の權威なかるべからず。實際の權威とは、學校が獨立の判斷を以て、適當とする所の教育を行ふの自由を有することは是れなり。教授訓練、殊に學科及び其の取扱方に關し、學校の目的主義、傾向能力、學生、社會事情等の特殊の關係要素より打算し來りたる、學校特殊の見解と方法とを用ふる自由は、學校が其の本然の職能を行ふが爲に必要なり。若し全く此等の自由なく、唯他の規定のまゝに動かされ、他の規定の執行媒介傳達の任務を爲すに止まらば、是れ既に事務的一機關となり了りたるものにして、到底完全なる人格的教育を行ふこと能はざるなり。

學校系統全體は博一大教育機關たるが故に、箇々の學校は固より、其の關係位地に適當なる全體の規定を受けざるべからず。又某程度某種類の教育に於ては、到底動かすべからざる共通的基本科なきに非ず。更に又學生の能力發達の程度様式、地方の事情要求も、一致の範圍を有するものなきに非ず。動かすべからざる規定を作り、一様に施行するも可なる部分あるべきは言を俟たざれども、此の確定の共通基本學科は、何人の之を研究するも、眞に動かすべからざる最少數に止めざるべからず。彼の教授細目の順序進程まで法令を以て一樣ならしむるが如きは、獨立したる學校の教育職能を認めざる方法といふべきなり。又學校の人格的意義を奪取し、事務的機械を強うるものといふべきなり。

同一の論法は各個教師に對しても亦之を用ふるを得べし。教師の個性技能、其の學生特殊の傾向、其他其の場合特殊の事情を斟酌して、教育上差支なき限り、廣く自由裁量の範圍を許容せざるべからず。之が爲に多少の弊害を醸すことあるにせよ、人格尊貴の空氣を作るは、弊を償うて餘りあるものあらん。但し此の時に於ては、熟練にして深切なる視學官あるを要す。

學科其の他の設定が假に學生のあらゆる性能を顧慮したりとするも、猶且つ一般的模型的となり、特殊の實際に過不及あるもの少からず。况や學制の性質上、社會の要求に基きて設定せらるゝ學科多き時に於て、設定せられたるまゝに傳授して、何等斟酌をも加へざるは、教育として、極て不深切なる方法たるを免れざるなり。

第四節 普通教育と専門教育との關係

第一 便宜上の二区分

教育は連續して分つべからざる作用なりと雖も、年齢に應ずる精神發達の狀態と、及び境遇に應ずる職業選擇の要求により、一切の生活及び性能に對する一般的教育より次第に特殊の性能及び職業に對する分化的教育に進む。而して一般的教育は、主として年齢の少き時代に於て行はれ、分化的教育は主として、年齢多き時代に至りて行はる。依りて、取扱上の便宜より、大體に於て之を分ちて、一般的教育を主とするを普通教育と名け、分化的教育を主とするを専門教育と名く。若し夫れ之を學生の性能上より兩者の特色を言はゞ、普通教育に於ては特殊性能の個性的發見を主とし専門教育に於ては、其の性能の職業的完成に力むるにあり。

第二 普通教育と専門教育との方法的連絡

普通教育専門教育の区分は、便宜上より出でくる大體の区分たるに過ぎざるが故に、其の内容に於ては、此の名稱に従つて、截然たる區別を爲すべしに非ず。強ひて之を形式的に區別する時は、教育上有害なる結果を生ず。即ち普通教育に於ても、多少の分化教育を施さざるべからず、又専門教育に於ても多少の一般的教育を施さざるべからず。此の双方の内容的交錯は、常に被教育者の性向の發達上必要なるのみならず、教育方法上の聯絡をして圓滑ならしむるが爲に、必然の要求なりとす。然るに、從來の學制に於ては、此の間の關係は全く離隔して、普通教育に於ては、其の最後まで全然一般的教育を施し、専門教育に於ては、其の最初より分化的教育を施す傾向を有したり。是れ極め

て形式的、且つ不深切なる教育なりと言はざるべからず。以後必ず改善を加ふべき一要点なり。

改善の要点を詳言すれば、(一) 學制全體の方針として、將來に於ては、從來よりも更に分化教育の自由を許し、被教育の特能の發達、及び社會の職業的要求に對する適應をして容易ならしむることを要す。(二) 普通教育と専門教育とに於て、其の名目に關せず、其の内容に於て、一般教育と分化教育との交錯の自由を許し、以て教育方針の系統的進行、及び被教育者の進歩をして自然ならしむることを要す。(三) 普通教育期の各階級各年齢に於て、教育上支障を生ぜざる限り、學生の専門教育に轉移する自由を多からしむることを要す。是れ教育をして境遇に適應せしむる爲に特に必要なり。

第三 被教育者と一般教育及び分化教育

理想的の性能を有し、理想的の境遇を有し、十分なる普通教育を受けて後専門教育に移るを得る者のみを標準とし而して以て截然として區別ある學制を定むるは實際に適切なるを得る所以に非ず。蓋し被教育者の資質には無數の差別あり、又其の境遇にも無數の差別あり、従つて種々の年齢段階に於て分化教育を要求すべきが故に、なるべく此の要求をして満足せしめざるべからず。

營にしかのみならず。精密に言へば、分化教育は教育のあらゆる時期を通じて存するを見る。蓋し各個人は皆それぞれ特殊の個性を有せるが故に、其の各人特殊の個性をして十分に發達せしめんと欲すれば、則ち必ず分化的教育を行はざるべからざればなり。是れ分化教育の根本にして、決して専門教育のみの問題に非ず。同時に又一般的教育の趣旨も亦教育のあらゆる時期を通じて存するを見る。蓋し人はその何人たるを問はず、人として必ず具へざるべからず、涵養せざるべからざる性格あり、精神技能身體あり。之に應ずるものは即ち一般的教育にして、而して決して普

通教育期間のみの問題に非ざるなり。乃ち分化教育の趣旨を廣く擴張し、以て各人各種の特能の發達をしてなるべく容易ならしめ、且つ社會の實地職業に對する準備を爲し得る機會を多からしむるを要し、從つて又普通教育にも分化教育を採用し、専門教育にも一般教育を採用するの必要なるは、極めて見易き道理なりといふべし。

但し教育機關は其の數量に於ても、亦其の能力に於ても、共に有限なるが故に、到底各個人各年齢各特能及び社會の職業的需要に應ずることを得ず。大體に於て規定を立て、以て輕便なる畫一教育を行ふの止み難きものあり。唯爲し得る限り制度及び方法に於て、個性教育の工夫努力を爲すべきのみ。

第四 特殊教育

普通教育及び専門教育の外に特殊教育の一部分あり。是れ心身乃至境遇に著しき特質を有し、普通の學生に施す所の教育法を用ゐて教育する能はざる者に對する部門にして、是れ亦甚だ必要なる教育なり。心身乃至境遇上著しき特質を有するものとは、低能兒、低格兒、病弱兒、不良兒、聾啞、子守等は是れなり。此等は、之を放任すれば、元來健全なる性能を有する者をして、發達の機會なからしめ、或は不良なる習慣に縛られたるが爲に、心身に先天的缺陷あるが爲に、社會の進歩の妨害となるべきものを教育し矯正して、或は有用の人物となし、少くも社會の妨害を減少するものにして、子守の外は大體に於て、生理病理的要素と、消極的矯正法とを多く用うるものなり。子守教育は之と異り、唯其の境遇上、普通學級教授を施すを得ざるのみ。方法に至りては、全然普通の兒童に對するものと同じ。都會の勞働者及び地方の小農は、全家舉りて工場或は戸外の勞働に従事する者多きを以て、學齡時代の子女をして嬰兒を守らしむるは、蓋し止むことを得ざるなり。此等の子女に對する教育法は、託兒所の設備と共に、地方自治體に於て講究する責任あり。

特殊教育も、一般兒童に對する分化的教育と其の内容の意義に於ては、相異なるものに非ず。唯特殊性能の分化の著しきものあるのみ。故に學制上に適當の位置を與へて、之を獎勵する必要ありといふべし。普通以上の才能を有する穎才兒に對しても亦特に其の教育を考慮するを要す。

第五 普通教育と専門教育との職能に關する從來の誤謬

人格教育と職業教育との分離の弊は既に論じたる所なるが、その原因たる一は職業教育の機關は、社會の需用に接觸するが爲に、功利的要求に動かされ、功利的俗習に薰染すること多きにありと雖も、他の一は又教育當事者の往々普通及び専門教育の職能を、誤解せるにあるが如し。而して此の誤解には二の方面あり。

其の一は人格と職業との分離觀にして、人格と職業とは相對照せしめて考ふべき性質のものに非ることを知らず、二箇の部門なりとせること是れなり。此の見地に依れば、職業には一般道德を要せざるものなりといふ結論を生ずべし。此の觀念の由來する所は是れなきに非ず。即ち封建時代に於て、武士は只管節義を磨きて職業を卑み、之に反して、商人は道義を顧みずして唯射利に走りたる傾向あり。此の謬想の猶社會に残留せるものあるべきなり。然れども、是れ全く誤解なるが故に斷然矯正することを要す。誤解の二は、普通教育を以て、毫も分化的教育要素を有せざる絶對一般的教育なりとすると共に一般的教育を以て全く人格教育、或は道德教育なりと解し、専門教育を以て毫も一般的教育要素を有せざる絶對分化的教育なりと解すると共に、此の分化的教育を以て、全く人格又は道德より獨立せる職業技能の教育なりと解するものは是れなり。一般的教育は心身諸要素に對し總て發達の機會を與ふる教育にして、必ずしも全然所謂人格教育に非ず。又専門教育は特殊性能の涵養を計る教育にして、必ずしも非人格教育に非ず。兩者の異なる所は唯性能の一般に對すると特殊なるに對するとに在るのみ。所謂人格的教育は其の兩者に通じて同

様に存するなり。普通教育は一般的性能の涵養の中に於て、人格教育を行ふべく、専門教育は、人格教育の上に於て、職業的堪能を養ふべし。人格主義が人の一生を通じて缺くべからざるものなる以上は、教育も亦終始人格主義を以て一貫せざるべからざること、是れ蓋し動かすべからざる制度上の方針なり。

第五節 普通教育

第一 普通教育の職能

普通教育は各人に對し、一般的教育を施すことを主とする教育なり。一般的教育は、特殊の性向趣味才能等を對象とせず、一切の性向趣味才能の全般を對象とし、之をして總て平等に發達せしむる作業にして、其の間に於て、教師は各學生特殊の性向趣味才能を發見して、各自に適當なる發展法を指示し、且つ學生をして、現在發達學習の經驗によりて、將來如何に自ら發達學習すべきかを理解せしめ、自己の使命天職を自覺せしめ、社會生活に於て實効を現はす方法を自得せしむることを以て目的とする所の教育をいふ。

普通教育の特質を細説すれば略左の如し。

一、普通健全なる人の性能の分化は、幼年期に在りては、混沌として明かならず、長ずるに従つて次第に分化し、人々特殊の性格を生じ、趣味才能を現はす。故に特殊の性能を豫定せずして、一般的に教育を施すは、主として幼年少年の期にあるを至當の順序とす。乃ち普通教育は主として幼年少年期に行はる。

二、普通教育に於ては凡そ人類の、人類として現在の境遇に處し、生命の實現を爲すに必要な性能發達の機會を與ふ。即ち自然の一員として、社會の一員として、又國民として當に具ふべき共通の資格、家庭生活を爲すに必要

なる智徳體の涵養を計り、學生をして此等の境遇に處して、各自ら永く有効に發達するを得る方法に通ぜしむ。故に何人と雖も、凡そ人類たる以上、必ず要求し、通過すべき教育なり。

三、普通教育は各個人の有する個性に對し、悉く其の發達の機會を與ふ。即ち各個人の個性を完くするに必要な精神的身體的諸要素をして、遺漏なく發達せしめ、以て各個人をして、各特殊の人格として特立する方法を自得せしめ、各自の使命天職を自覺せしむ。

四、普通教育は一切の人類に於て現はるゝ一切の個性、趣味才能體質の、以て一個の人格的生命を實現するに必要なものに對しては、悉く其の發見及び發達の機會を與ふ。

五、普通教育は社會一切の生活の要求に對し、之に適應する人格的要素を提供し、其の進歩改善の動力たらしむ。之を要するに、普通教育は一切の人に對し、又一切の性能に對し、均等に其の發達の機會を與へ、之を社會的に有効ならしむる方法を教ふるを職能とす。従つて此の職能を行ふに適當なる組織と方法とを準備することを要す。

第二 普通教育と畫一主義

人或は普通教育、即ち共通教育なるが故に、何人にも一定の形式を以て、畫一的に施すを本旨とするが如くに解するものあり。然れども、是の如き畫一的の教育は、決して普通教育たる本務を盡すに適せざることは、前段の説明によりて明瞭なるべし。即ち畫一的の形式は、恰も適當に之に反應することを得る程度及び境遇にある所の性能に對してのみは有効なれども、其の以外の者に對しては、過不及の缺陷あり、爲に發達を沮害せられ、又は遺却せらるゝことを免れず。是れ即ち發達の機會均等の趣意に反き、不平等の教育を施すものに外ならざるなり。現今の如く、畫一教育の極端に行はるゝは、蓋し教師及び設備の不十分なる場合に於て、比較的確實且つ多大の効果を收めんが爲に、

止むことを得ずして許容したるものにして、是れ決して普通教育の本旨に非るなり。

普通教育に於ては、全然畫一的趣旨を要せざるに非ず。即ち涵養發達を要する人の諸性能の中には、一齊教育、即ち共同勤勞、共同娛樂及び一全體としての反動を待つて、始て發達するを得べきものなきに非ず。然れども、此れとても、大體上或は外形上の事にして、内實細密の部分に於ては、何程か分化的趣旨なきはなし。要する所は、各人各性能に對し、均等に發達の機會を與ふることにして、此が爲に、一齊的要素と個別的要素とを適當に採用し、教師の技能、設備其の他の事情の許容する範圍に於て、最大効果を發揮するを得べき案配を爲せば可なり。中に就き、機會均等の意義の實現は、教師の技能に關係すること最も大にして、之を制限するものは、經濟より來る物質的要素を主とす。故に今日の教育作用は、教師の技能と外的要素との戰爭の上に行はるといふも過言にあらず。吾人は優秀なる教師の技能が外的制限に打ち勝ち、更に進みて、外的要件が適當に充實して、教師の技能を助け、而して學生が先天本具の發達力學習力の自由に活動するに至ることを望まざるを得ざるなり。

第三 普通教育の教科

普通教育の職能は前述の如く、一切の性能に對する發達の機會を均等に提供するにあれども、之に應じて百般の學科及び作業を特に設定するの、不可能にして、且つ不必要なることは、教育機關の性質上、既に明かなる所なり。普通教育の機關に在りては、其の學校の内容全體を教育的に組織し、學科を以て其の一要素として、基本的の數課目を課し、他は其の學科中に含蓄せしめ、又は生活の實際に於て、必要に應じて之を指示し、自ら收得せしむれば足れりとす。而して、學校全體の教育的組織に關しては、教育的境遇論に於て、既に其の概要を陳述したるが故に、是處には唯學科及び教師に就て、所見の一端を記すべし。

今一般學校に於ける學習課程を検するに、兒童は其の現在經驗より出發して學習課程に入り、受容と發表との二作用によりて、知識を構成し、能力を修鍊す。而して外觀上受容作用を主とする教科は、其の材料の性質により、多く自然に關するものと、及び多く人事に關するものとの二部門に分つべく、外觀上發表作用を主とする教科は感官要素を多く有する者と、筋肉要素を多く有するものとの二部門に分つべし。而して更に自然現象より分化し來る知識は生理、博物、物理、天文、數學等となり、人事現象より分化し來る知識は地理、歴史、經濟、社會學、心理學、倫理學、哲學、宗教、語學、等となり、感官要素を多く有するものは、分れて文學(作文)音樂美術となり、筋肉運動の要素を多く有するものは、分化して手工(手藝裁縫等を含む)實業(實習)體操(實習)衛生法等となる。

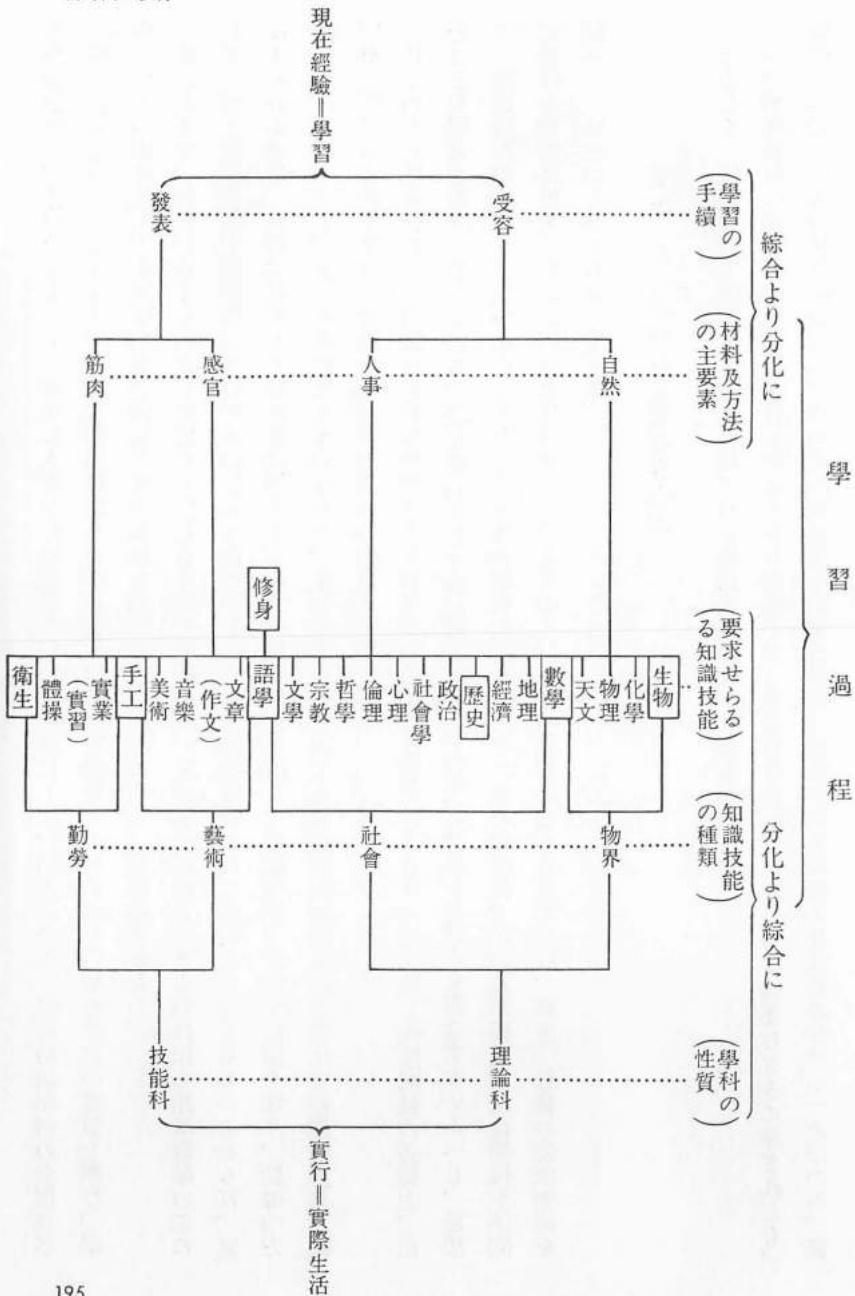
此等の知識は凡そ普通教育を受けて、獨立人格の一般的基礎を作り、更に分化的専門生活に入らんとする者にとりて、必要なるもの、必ず其一斑を知るを要するものなり。之を知識技能の形式的種類によりて概括するときは、自然現象より分化して生じたる知識は即ち物質に關する自然科学的知識にして、人事現象より分化して成れる知識は、社會的知識、感官作用を主とする技能は藝術的技能にして、筋肉運動を主とする教科は勤勞的技能なりとす。然るに、自然科学的知識社會學的知識は即ち理論を主とするものなるが故に總括して理論科といふべく、藝術的教科と勤勞的教科とは知識よりも技能を要するものなるが故に、之を技能科に總括すべし。理論に技能を合すれば則ち外界に發表せられて、一の實行或は事業となり、遂に再び實際生活に綜合せらる。

學習上に於ける受容發表の方法は、吾人の必ず採るべきものにして、自然界人事界の材料は必ず之を受容せざるを得ず。又感官練習、筋肉運動の方法も用ひざるべからざること勿論なり。物質界に關する知識、人類社會に關する知識共に吾人に必要にして、藝術及び勤勞即ち廣義の實業の方法、理論、技能共に人格要素として並び必要なり。乃ち此等學習及び知能上の要素は、學習過程上必ず具備せらるゝを要す。

理論科中、數學科は科學的知識と社會的知識とを結合して、其の移行の中心たり。又技能科中の手工は藝術科と勤勞科とを結合して、其の分化の基礎たり。衛生科は健康法として體操科に連り又生理の知識を以て生物の知識に連り、以て受容と發表との再作用を綜合す。又修身科は受容及び發表の兩作用を要し、全學科の知識を統一する位置に居り、語學亦受容發表の兩教科に必要にして、多數の學科に必要な要素たり、此の二者は共に學習の中心を爲す。此の學習過程に於ける綜合分化の關係は、蓋し知識技能及び生活の大體に就いて言へるものにして、各個人の學習する知識技能よりして客觀的に之を見れば、進むに従ひて分化的となるは勿論なり。

以上を表示すれば則ち左の如し。但し此の知識學科の分類、命名は固より科學的精確を保てるものに非ず。唯學習上の材料方法、及び人格性能上實生活上に於て要求せらるゝ知識として、便宜上之を分ちたるのみ。

右の學科中、修身は道德意識を整理し、全生活の統一理想を與ふる學科にして、其の中に宗教、哲學、倫理學的知識を含蓄せしむるを得べく、性質上最も大なる價值を有す。但し實生活の間に、又讀書歴史等に於て、教授し得ざるに非ず。語學は受容にも發表にも共に有用にして、讀書作文科の中には理論科技能科中多數の學科を含蓄せしめ、又は價值代價を爲すことを得るが故に、又最大の價值を有す。數學は理論科中の中心にして、思考力を練り、智力發展の形式を教へ、科學的研究上及び實生活上共に必要なるが故に、是れ亦缺くを得ず。手工(手藝裁縫を含む)は發表技能科の中心にして、藝術科と勤勞科との分化の基礎たるが故に、是れ亦重要なり。衛生は人々各自の肉體を健全に發達せしむる所の體育法を教へ、健康生活法を教ふるものにして、吾人の缺くべからざる知識且つ一種の技能とす。而して又體操と生物とに連なり、實質を以て自然と人間とを結合し、從つて受容教科と發表教科とを結合し、反對の位地より修身科と相照應せり。實際に於て、衛生科は一種の修身科なり、修身科は一種の衛生科なりと言ひ得ざるに非ず。然れども、衛生科も亦修身科と同じく、實生活上に於て之を教示する機會を捕へ難きに非ず。其の他、重要なる



學科を拾へば、歴史を學ぐべし。歴史は人類生活の記録文明發達の跡にして、殆ど修身以下社會的諸學科の全部及び文學美術に涉る教材を網羅す。其の含蓄の豊富なる點に於ては最も重要なりといふべし。生物亦其の實質を學び、環象を學ぶの間に於て、生理衛生及び理化天文の知識を同時に學び難きに非ず。是れ亦重要なり。

是によりて、今若し基本學科として最も重要な學科を選択せば、其の第一に採るべきものは即ち語學數學の二にして、以て社會生活と智能啓發との根本の需要に應ずべし。古より讀書算術を以て教科の主要なるものとせるは、宜なりといふべし。其の次に來るものは修身衛生手工なり。以て信念を作り、道德生活、健康生活法を知り、勤勞の方法及興味を學ぶべし。又其の次に來るものは歴史、生物の二なり。以て人類及び生物の生活と進化との理法成果、國家社會隆替の形跡を知り、境遇と及び我が現生の由來とを解すべし。

是の如くに見來れば、普通教育に於て學習するを要する知識技能は甚だ夥多なり。是れ蓋し性能開發の必要上、止むことを得ざるなり。然りと雖も、之を學科として特に設定するものは、必ずしも多きを要せずといふべし。是故に、普通教育に於ては、先づ止むことを得ざる基本學科を設定し、その他の學科は、此の基本學科、又は學校生活間に於ける機會に於て、是が收得法を指導することとすべく、たとへ之を設定するも、學校、學生、社會の要求如何を顧みて、隨意的ならしむるべきなり。

第四 現行教科の主要なる改善

今少しく、現行教育を顧るに、吾人の見て以て缺點と見做すべき者少からず。

一、本邦教育に於ては、總じて體育を輕視するを通弊とす。普通教育に於ては體育の聲盛ならざるに非ざれども、實際には殆ど何等の施設研究なく、唯形式的に體操を課するのみ。體操の如きは僅に身體的教育中の一方法のみ。健

康生活法の教育に至りては、決して體操の練習を以て完全せりと爲す能はざるなり。現在の體操科の如きは必須科とするを要せず。隨意科目とし、農村漁村等の學校に於ては、全く之を缺くを得ることゝして可なり。其の代り、體育法に至りては、大に之を奨勵し、學生をして自己の健康保全及發達の方法を會得せしめざるべからず。吾人は信ず。普通教育初期に在りては、體質氣質の改善を含む所の、體育法の、寧ろ從來所謂德育法よりも重大なる價值あることを。普通教育を終了したる者にして、自己の健康維持法、身體發育法、健康生活法に就いて何等知る所なきは、道德を解せざると同様に恥づべきことなり。本邦人の如き、體格體質の劣弱なる民族に在りては殊に然り。

二、次に、本邦學制に於ては、手工を以て全然、職業準備上の價值あるものと認むるが如し。是れ土地の狀況により課するを得しむるによりて察すべし。然れども、吾人の見る所は之に反す。普通教育殊に小學校の手工科の如きは、職業準備として多大の效果あるものに非ず。唯教育上に於ては種々の效果あり。殊に日本人の特長たる手指の敏捷を保存發達せしむるに於て、民族的要求あるに非るか。故に吾人は之を必須科たらしめんと欲す。

三、普通教育に於ては、異常兒に對する特別教育の設備なき場合に於て、學科目を増減する自由を許すことを要す。例せば數學的才能に秀でたる學生には、普通教科以外、數學的才能を練習すべき他の學科を自動的に補習せしむるが如き、稍遲鈍なる兒童には、地理理科等を缺き、國語算術を復習せしむる方法を講ずるが如きは是れなり。

第五 學習力の浪費救濟

學習力の異なる者の多數に對して一齊教授を施す際に於ては、過不及の爲に、或る者には難に失し、或る者には易に失し、兩者の學習力をして、共に浪費に陥らしむ。此の浪費は、その學生個人にとりても、亦學習力の總計より見て、共に多大ならざるを得ず。況や之が爲に道德上惡影響を生ずる憂も是れなきを於てむや。之が救濟法は種々

あるべし。左の如きは、現在内外に於て行はれつゝある方法なり。

一、智能の劣等なるが爲に、理解不十分なるまゝ、不愉快なる一年を過し、更に復一年間同様の學習を繰り返へすは、固より甚しき浪費たるを免れず。此の浪費を機械的方法にて軽減せんが爲に、一學級期を半年或は一學期間とし、一年に二回乃至三回入學及び進級せしむる制度と爲す。

二、優秀兒と劣等兒の爲に特別學級を組織し、特別教授を爲す方法にして、本邦に於ても多少行はると雖も、尙大に奨勵すべきなり。

三、教課外に於て、劣等兒の爲に、特に補習教授を行ふ。是れ亦本邦に行はる。

四、教授時間中、優等兒をして劣等兒を指導せしむ。是れ亦本邦に於て行はる。優等兒に取りても、全然無益なる方法に非ず。

五、優等兒をして不時進級を爲さしむ。適當の方法にて行へば、必ずしも悪弊なきが如し。本邦に於て夙に之を行へり。

六、學級中能力の程度によりて、組み分けを爲し、教材及び教法に稍差異あらしむ。是れ著しく教師の技能を要する方法なり。本邦に於て多少行はれ好成绩を呈しつゝありといふ。

七、能力の偏向程度に應じ學科に増減あらしむ。此は小學校の上級以上に至りて行はるべきものなり。

此等は其の一斑なるが、或は制度の許さざるが爲に、或は經濟の許さざるが爲に、或は教師の技能及び精力の及ばざるが爲に、他の弊害を起し易き憂ひあるが爲に、何れも廣く行はれず。然れども、大なる浪費を救ふが爲には、多少の不便を忍びて改善の方法を講ずるを要す。

第六 普通教育の教師

普通教育に關する教師は極て重大にして、且つ煩瑣なる任務を有す。蓋し普通教育に於ては、學校を人格的に組織し、教育的校風を充溢せしめ、理想的生活境遇たらしむる必要特に多大にして、又學生に對しては壹に四五の學科のみに限らず、生活法全般に就いて指導するを要し、身體精神の兩面に互りて、開發すべきの能力は、なるべく早く開發せざるべからず、矯正すべき偏向はなるべく早く矯正せざるべからず。此の能力偏向の發見は重大にして、將來に關すること甚大なるが故に、精確にして誤ることなきを要す。而も此の事たる極て困難なり。況や之が矯正指導の方法を行ふに於てをや。

故に普通教育に従事する教師は、特に、第一に、人生々活の全般に對する知識を有せざるべからず。第二、心理的及び生理的觀察診斷に關する知識技能を有するを要す。第三、心理的生理的開發矯弊治療の方法に通ぜざるべからず。第四、社會に於ける才能の需用狀態、各種職業の狀態、是と性向境遇との關係に關する知識なかるべからず。第五、廣く普通の學科に關する知識なかるべからず。

然るに、此等の事たる、皆甚だ困難にして、教師全體をして悉く必要なる知識技能を具へしむるは、決して容易なることに非ず。是に於て、次の如き方法を採るを要すべし。

第一、校長の學識技能をして極て優秀にして、教師全體の教師たり、顧問たるに足るものたらしめ、以て部下教師を指導して、必要の處理を爲さしむべし。

之が爲には、大に校長の待遇を高め、其の養成選任の方法を普通教師と異らしむる必要あり。

第二、校内の全教員をして、各皆何等か一二専門的知識技能を具へしめ、此を綜合して、以て完全なる一校の教育

力を作る方法を採るべし。

第三、醫師の協力を得る方法を講ずるを要す。今日の學校醫制を更に擴張し、醫師をして更に教育法に通ぜしめ、又教師をして必要なる醫學の知識を補習せしむる方法を採るべし。

第四、家庭との教育的協力を更に緊密にし、父母と共同して兒童の教育を完全ならしむる方法を講ずべし。

第七 普通教育機關の區分と連絡

本邦規制の如く、普通教育を小學校と中學校及び高等女學校等とに分ち、或る年齢を以て、學生の學習課程を中斷し、其の年齢以下の普通教育は、全然小學校にて施し、その以上の普通教育は中學校高等女學校にて行ふ方法は、教育の本質上格段の意義あることに非ず。教育普及の便宜上、義務教育の設定上、學生取扱の便宜上、中等程度に於ては男女生の學校を異にせざるべからざる等の事情より來れり。故に其の教育内容に至りては、年齢に伴ふ自然の分化發展あるの外、何等特異の差別あるべきに非るなり。

唯一旦區分を設け、且つ小學校教育を義務となしたると、實際上小學校卒業と共に教育を終るもの多數なるとの爲に、自ら小學校教育を完結的のものとなさんとする傾向あり。是れ固より當然の事なり。然れども、唯小學校を終りて直に中學校、高等女學校に進む者より見れば、連續せる學習過程を無意義に中斷せられ、學科の重複、入學の煩累不便等の不利益を被るものなるを以て、此が救濟法を考慮するは無用に非ず。其の方法の一は

小學校と中等學校との關係を親密にし、兩校教員が相協力して、各其の教育の効果を大ならしむる方法を講ずるにあり。元來同一普通教育の従事者にして、且つ年齢教科の全く相連接せるものなるが故に兩者の共同は、自然の順序なるにも拘はらず、現今の如く、兩者全く相疎隔し、互に風馬牛相及ばざる状態にあるは、教育に對し、學生に對

し、深切なるものといふべからず。

第二は、中等以上の教育に進む者を、學齡時より直ちに收容し、以て全普通教育を同一様に施す所の長期中學校を設くることを許すにあり。此の方法は教育力學習力の經濟上甚有効なるべし。

第八 高等普通教育の改善

一、吾人が既に論じたる學風改善の趣意は、小學校より大學に至る教育系統の全體に互るものなれども、殊に中等學校に於て、之が準備或は完成の努力を爲すべきもの最も多し。中等教育時代は一生中最大の危機にして、又心身發育の最大なる時なることは、人の多くいふところなるにも拘はらず、中等教育は其の割合に研究せられず。依然として唯一様の畫一的形式教育の施さるるのみなるは、國家の爲に青年の爲に、慨歎するに堪へたり。

苟も中學校を出で、高等普通教育を終りたるものなる以上は、人生の理想信念を得、一般生活の方針、殊に家庭生活、社會生活、立憲自治國民としての生活、世界文明の潮流に棹せる一員としての生活法を解し、其の間に於て、自ら自己の心身を健全に發達せしむる方法に通じ、且つ自己の使命天職、採るべき職業の何たるかを自覺し、此の信念と理解と自覺と、及び之が實行に堪ふる健全なる心身を以て出で來り、堂々として確乎たる歩武を進め、或は専門學校に、或は社會の實地に就くものならざるべからず。彼の生活に就いて、又自己に就いて、何等知る所なく、信ずる所なく、唯社會の流行風潮に従つて、或は西し、或は東し、只管安逸の門に向つて菌集して、入學試験難、就職難を唱ふるが如き無自覺なる態度は、之を教育ありといふも、無教育者と何ぞ擇ばん。是れ實に現今中等教育の缺點を實地に表白しつゝあるものに非ずや。此の情態を瞥見すれば、改善の要點は果して孰れにあるか、歴々指點するに足るといふべきなり。

一、上級に於ては分科制を採り、卒業後直に社會に出づるもの、大學文科方面、理科方面に向ふもの等に對し、多少學科の區別を爲し、各適當の準備を爲さしむることゝす。

一、各學生に對し、多少學科増減法を採用す。即ち優等生には多少其の才能の發達に資する餘分の學科を課し、劣等生には緊要ならざる課目を缺かしむる等は是れなり。

一、中等學校に於ては自動、自學、自習、自治の氣風を興すこと最も必要なるが故に、特に是處に努力するを要す。
一、特に中等學校に於ては個性の發見に努め、職業専門の選擇を誤らざらしむべし。此點に就ては、小學校と連絡するの必要あり。

第六節 専門教育

第一 専門教育の職能

専門教育は既に普通一般の教育を終り、一般生活に通じ、精神的に言へば、自己の使命天職を自覺し、社會的にいへば、自己の事業を發見決定し得たる者が、其の天職を果すべき方法、事業を營むべき方法を學習せんが爲に、受くる所の教育なり。

即ち専門教育は一面に於て、個人の社會化を全くし、一面に於て、職業の人格化を行ひ、かくて、個人と社會とを結合する手段となる。

故に、専門教育は全く分化的教育を主として、一般的教育を行ふこと少し。此の點に於て普通教育と反對なり。然れども専門職業に向ふ者は、其の専門職業を營爲する、生ける機械たらんとする者に非ずして、一の専門職業に於て

自己の使命を行ひ自己の人格的生命を實現せんと欲するに外ならざるが故に、此の意味に於て、内容的含蓄的意義に於て、將來再び綜合生活を豫定するもの、従つて専門教育も亦何等か一般的教育の趣旨なかるべからざるなり。専門教育に於て、所謂人格教育と職業教育との調和の行はるゝ契機は、即ち此の點に存す。而して人格的要求は實に普通教育より専門教育を貫きて、之を一にする者たる要點も是處に存す。

故に普通教育は顯勢的に一般教育たると同時に、潜勢的には専門特殊教育たり、専門教育は、顯勢的には専門教育にして、潜勢的には普通教育なりともいふことを得べし。専門教育の職能は略之によりて明かなり。

故に又専門教育は年齢の比較的長じたる特殊傾向者を收容し、特殊の才能に對し、特殊の教育を與ふ。然れども、是れ唯専門教育の個々の機關の性質にして、若し専門教育の全系統を見るときは、あらゆる才能あらゆる職業の要求に對し、之に應ずべき組織を有するを理想とす。

第二 専門教育の三要義

前條の如き専門教育の性質より抽きて、其の缺くべからざる要義を擧ぐれば、則ち左の三點に歸すべきか。

一、専門教育は人の特能に對し、其十分なる發達を爲すべき理想的條件を與へ、以て人の天職の自覺に確信と興味とを得しめ、將來其の特能自具の要求に従ひ、自具の力の存する限り發展せしむる教育を行ふ。

二、専門教育は社會的職業の需要に對し、其の欲するが如き人格的動力を與へ、以て其の職業をして、最も有効に人格化せしむ。人格的動力とは、優秀にして且つ社會的有效に發展する特能を具へたる個人なり。

三、専門教育は人の特能を發展せしむることにより、人格的生命を充實し、之を具體化、社會化する方法に習熟せしむ。

但し右の三要素は固より別箇の事業に非ず、人の特能に對して専門職業的教育を行ふ所の一活動に含まる、價值たるに過ぎざるなり。

第三 重要な構成要素

是故に専門教育は、専門教育として必要な設備組織を先づ備へざるべからざるは勿論なれども、更に其の背景的要素としては、眞摯、嚴肅、敬虔、謙虛、而も進歩向上止まざるが如き、一種高尚なる教育精神、人格的空氣の充滿することを要す。

又其の教師は其の専門とする所に練熟し、優秀なる技倆を有つの必要なると共に、其の専門の人生的價值を解し、又其の職業の、生活上に於ける位地職能を解し、且つ専門職業に於て、進歩止まざる向上精神を有し、此を以て學生を導くを得るを要す。又殊に學生の個性特能を觀察して、その現在の學習、將來の方向等に就いては、その過誤を訂正し、改善を指導する深切を有するを要す。

専門學校の卒業者は、社會に立ちては、其の専門とする所に於て模範たり、指導者たる地位に立つべきものなるが故に、其の技能知識の優秀なるは勿論、思想識見、向上精神に於て、造詣あるを要す。従つて其の教師に於て此の資格の要求せらるべきは勿論の事なりとす。

第四 専門教育の機關

専門教育の機關は極めて複雑なるを要し、又極めて複雑なるを常とす。大別すれば、實業學校、専門學校及び大學となれども、其中の學校の種類は極めて多きを要す。蓋し専門教育を要求する特能の種類、及び個人の境遇志望は甚だ複

雜なるに、社會の要求する職業的準備及び程度亦多種多樣なるに應ずればなり。是故に、將來は多々益々複雑に分化發達し、個人と社會との専門職業的要求に應ずると同時に、愈々社會に密着して、若し爲し得れば、社會の各個人をして、常に必要に會ふ毎に其の専門知識を補習するを得しめば、則ち更に極て可なるべし。其の普通學校の各程度よりの學生の轉移をして、容易ならしむるは殊に可なり。

其の教科の内容は、趣旨に於て、總て同一なれども、唯下級學校及下級學級に至るに従ひ、綜合的技能的應用的にして、上級學校及上級學級に至るに従ひ、分化的、理論的、研究的要素の加はるあるのみ。是れ亦自然の秩序なりとす。是によりて、下級學校に於ては、多數の直接従事員を作り、上級學校に於て、少數の指導改良研究の任に當る専門家を作ること、實地職業上甚必要なり。

第五 専門教育に對する非難と改善

専門職業教育は實業社會に接觸すること密なるを以て、功利思想に支配せられ、人格道德の觀念を失ひ易き弊あり。人格教育と職業教育の分離の非難の起る所以なり。是れ専門教育に於て、特に人格教育に努力を要する所に於て、教師の態度、指導法、教科等に於ても、此の弊を救ふべき注意を要す。功利上の見地よりいふも、實地の成績に於て、人格優秀なる者は、技能のみ優秀なるものに比して、優ることあるも、決して劣ることあらざるなり。況やその社會生活上の影響の多大なるものあるに於てをや。

次に専門教育に對する非難は、其の卒業生の實地の職業に従事せる者に研究心なしといふことは是れなり。此の非難は専門學校の卒業者に於て、惹いて専門教育に取りて、甚だ重大なる批判なりと言はざるべからず。専門知識技能に關する修養は、唯其の改善進歩して倦まざる研究心の盛なるにあり。然るに研究心なしといふ非難を聞くに至りて

は、専門教育失敗の批判に外ならず。即ち専門教育が其の主題たる知識技能に關して、其の研究法を教へず、研究の興味を養はずといふ宣告に外ならず。是れ豈に失敗の批判に非ずして何ぞや。而して専門教育の方法に一大改善を加ふる必要ある所以に非ずや。研究心の養成は、普通教育に於て既に多大の努力を拂ふ所のものにして、専門教育に於ては、特殊の知識技能に就き、具體的に、且つ完全精密に其の研究法と興味とを養ふべく、又養ふを得るものたるは言を俟たず。

第三の非難は、その教ふる所實際に添はず、社會の需用に應ぜずといふことは是れなり。是れ亦職業教育によりて、社會の需用に應ずべき普通の専門教育に對し、甚だ重大なる非難なり。此の非難若し中れるものありとせば、それは第一第二の非難の由て以て起る所と、或は同一の原因より來るものあらん。即ち専門教育が一は社會に注意を拂はず、實地に關係なき理論のみを教授し、之を實地に應用する方法を教ふることを怠れると、一は實地の練習を疎にし、其の方法に通ぜざると、他の一は一般に注意疎漫にして、觀察研究適應の方法を知らず、不適合なる點を調整することに苦心する、職務上の深切熱心を有せざるに原因することなからんや。是れ亦固より速に改善すべきは論を俟たず。蓋し應用力の養成は眞理研究を目的とする學者養成以外の、一切の専門教育に於て、生命的要素たるべきなり。

第六 大學

一 大學特殊の職能

大學も亦等しく専門教育の一機關なり。而も大學が他の總ての専門學校に對立して、特殊の機關たる所以は、一、學科及び方法上研究要素の多大なるに在り。他の専門學校と雖も、研究を重んずるは勿論なれども、是れ全く應用の爲の研究にして目的主とする處は應用にあるなり。然れども大學に在りては、研究と應用とを併立せしめ、

一面眞理を研究し、且つ眞理研究法を學び、一面此を實生活に應用すべき工夫を爲す。

二、従つて、教科編制、設備組織の一切が、研究に便宜を與ふるを主とす。普通の専門學校が應用實習の方面を主とすると同じからず。

三、従つて又入學資格を高め、修業年限を延長す。

四、夫れ大學は最高教育機關たるが故に、其の成績如何は、直ちに一般教育に影響す。而して成績は卒業生の行動に於て度らるゝなり。大學卒業生は、

一、生活法を知ること最も確實なり。従つて生活法に關し、社會民衆の指導者改善者たるを要す。

一、生命、理想、信念の追求法を知ること最も深し。従つて、此の點に於て、民衆の指導者たるを要す。

一、研究法に通ずること最も精し。故に民衆に對し、研究生活法の指導者たることを要す。

一、最も長く理想的發達の境遇を経過せる者、即ち學校生活を爲したるものなるが故に、最も善く發達進歩したる心身を有し、且つ心身發達進歩に關する民衆の指導者たるを要す。

一、最も長く功率増大の理法の下に生活し來りたるものなるが故に、此の點に就いて民衆の指導者たることを要す。

大學は此等の資格を具へたる國民を養成せんが爲に、學術以外に努力するところあるを要す。是の如き資格を具ふることは、決して大學獨得の任務に非ず。凡そ教育を受けたる者なる以上は、大小高低、皆何程か此の趣旨を有せざるはなし。唯大學は最高教育機關なるが故に最も發達進歩したる成績を示し、社會の進歩、民族の改善に對し、根本動力たる人格となることを要するなり。

二 學科分類選擇制度其の他

大學に於ける學習法は、主として自動的研究ならざるべからず。聽講筆記にのみ三四年の日月を費すが如きは、時間と勞力と、及び能力發達沮害との損失甚しきものといふべし。自動的研究の風を興すは、指導者の任務に在りと雖も、學科編制法により、必須科目を少くし、隨意選擇科目を多くして、以て精力を集中し、且つ研究及び研究指導の時間を多くするが如きは甚だ必要なり。

必須科を少くする方法は、學科分類選擇制を採るを最良と爲す。同一部門の科目中の緊密なる關係を有する學科を集めて、各一科團となし、學生は各其の志望の學科の屬する一科團を選びて之を必須科或は受験科とし、或は猶他の一二科を他の屬團より採りて、之を加へて必須科とし、其餘は最大限の規定時間を超えざる範圍に於て、隨意に教科目を選択することは是れなり。學科數を限り、其の數に充つる範圍に於て學科を選択し、學生自ら所要の研究に關する知識を配合するも亦可なり。(後掲教育機關の學科内容表參照)

其の他競争講座制の如き、教授及び學生の研究心を刺戟するものあるべし。

教授の待遇を十分にし、研究に支障なからしむると共に、總ての問題に對して、自由討究、自由批評を許すは、學者の態度と活氣とを持せしむるに必要なり。

又入學者便宜の爲には講義の方法工夫を加へ、一年二期乃至三期に入學せしむること米國の有力なる數大學に於けるが如くすれば、志望者過多の場合に、入學し得ざる者の時間浪費を減少するを得べし。

第七 大學院

大學院は他の教育機關と大に趣を異にし、大學卒業生及び之と同等の學力を有し、獨立研究の能力ある者が、何等か研究問題を携へて入院し、教授指導の下に、其の問題に關する究竟眞理を攻究する所と爲す。勿論年限を定むる

も、研究上の必要上繼續することを許し、其の研究は全く自由なり。且つ一箇の常設學術研究機關として、教授をして絶えず研究に従事せしめ、院内に於ける研究の結果は、或る期間毎に、必ず社會に發表せしむることゝす。

大学院は、最も神聖にして自由なる最高研究所にして、且つ唯一の純粹研究機關なり。一國知識の源泉となり、學界の權威となり、文明の產出者、眞理の供給所となり、以て學界に最大の貢獻を爲すべきものなり。故に現在の帝國大學大学院の如く、唯學位を欲する者の入學所とせず。眞に人類生活及び宇宙現象に關する眞理の研究所と爲さざるべからず。従つて其の研究員に對しては研究上十分の自由と尊敬と待遇との與へらるゝを要す。

第七節 女子教育

女子教育は學制の形式上に於て、男子教育と略々等しく、唯女子の稍早熟なると、帝國の社會狀態とに顧み、卒業年限を短縮するのみ。即ち高等女學校卒業年齢を一年短縮し、大學卒業年齢を二年短縮することゝし、其の他、女子實業學校、専門學校等をも設くるを得るの制度と爲さんとす。

抑も今後の女子は、假令全く家庭生活を爲すものと雖も、到底從來の如く、低度の教育を以て満足する能はず。諸種の生活物資の次第に複雑精密に赴きつゝある、周圍社會の刺戟の益々強烈に赴きつゝある、子女の教育の益々高尚に赴きつゝある、夫たる男子の教育の益々進みつゝある、皆是れ女子の教育亦共に進歩せざるべからざるを指示しつゝあるものに非ずや。

世態人情の今日の如く複雑なるに當りては、家族の心身を健全に保護し、其の發達を爲さしむる健康生活法の知識は最も婦人に必要なり。而して今日の高等女學校卒業生は果して善く之に應ずるを得るか。兒童が小學校以前の教育を完全にせば、大學卒業年齢を三年短縮するを得べしといへる學者あり。兒童の體質、氣質、性向、能力、趣味を發

見し、其の伸ばすべきは適當に之を伸ばし、矯むべきは適當に之を矯め、強ひて干涉せず、又全く放任せず、其の宜しきに中して健全なる發達を得しめ、兒童の學校に入學したる後は教師と協力し、内外相應じて、從來の發達を繼續せしむるものは、實に母たる者の任なり。而も是の如きは、果して高等女學校程度の教育の能く十分に爲し得る所なるか。吾人は到底此を以て満足する能はざるを信するものなり。高等女學校程度の教育を以て十分なりといふ者は、今日の家庭生活、子女教育等に就いて、深切に考慮せざる輕卒者なりとせざる能はざるなり。

生存競争の劇烈なるに應じ、社會民族の文明發展進歩の原動力を作らんが爲に、先づ優良なる國民を作らざるべからずと主張する民族改善の研究及び運動は、汎く歐米諸國に起り、遺傳の理法を基礎とせる其の研究も實行も、着々歩を進めつゝあり。其の結果胎教も、結婚も、家庭生活も、亦更に新なる意義方針を以て説かるゝに至り、殊に女子の教育に大なる影響を與へんとしつゝあり。是の如き切實にして實際的なる主張に反應して之を實生活に應用し、以て強健なる國民を作るの任に當るべき女子は、何故に高等なる教育を要せずといふか。

女子の天職とする所の家庭經營、子女教養の方法材料に關し、十分の研究を以て、日進月歩の時勢に應じ、相當の功績を擧げんが爲には、之に對する研究教育の機關なかるべからず。而して是が研究教育の事に當る者は女子ならざるべからず。蓋し男子には男子の劇務あり、且つ女子の事務は女子自ら最も善く其の要求と効果とのある所を知ればなり。此に對して相當の設備を制度の上に規定するは、蓋し當然の事ならざるか。

且つ夫れ、家庭の事情自己の性向、社會の需要等は益々女子の専門教育を希望する者をして増加せしめんとす。此等の者に向つて相當の設備を規定するは、蓋し學制當然の事ならざるか。

從來女子の高等教育の機關は之れなかりしに非ず。日本女子大學校の如き、高等師範學校の如き、其の他幾多の私設學校之れなきに非ず。是れ既に高等教育の女子に必要にして、且つ其の有利なるを社會に證明しつゝあるものとい

ふべきなり。今之を公認し、國家の學制の上に系統的規定を設くるは、蓋し至當の措置に非るなきか。

吾人は女子の教育を以て男子の爲さざる處を爲さんとする者に非ず。唯其の知識品質の著しく男子と懸隔なき女子を作り、以て幸福なる家庭を組織し、社會を組織せんと欲するのみ。國民を作る者は到底母にあり、母をして優良ならしめずして、如何にして國民を優良ならしむることを得るか。從來の國民性の缺點を矯正し、其の美點を長じ、更に不足を補ひ、眞に高潔なる信念品藻を持し、偉大有爲の才能を抱き、立憲治下の國民として、善く國家を進歩せしめ、萬里の波濤を踏んで、帝國の爲に郷土を世界に拓き、眞理を發見し、利器を發明し、以て文明を進め、社會を富ますが如き青年を生むものは、實に精神と肉體と共に十分の教養を経たる女子其の人ならざるべからず、國家の制度が特に女子教育を輕視せず、其の發達進歩を沮止せざる所以の公平の意志を、先づ制度上に表はすが如きは、自ら其の責任の重大なるを知る所の女子の希望にして、又女子の責任の重大なることを認むる國民の希望たり。而して其の百利あつて一害なきを信ずるなり。

是を以て、吾人は、男子のそれと等しく、女子の高等教育機關を設置することを得る制度を設けて、先づ其の道を開かんとし、又現在盛に要求せられつゝある女子實業教育の制度をも認めんと欲するなり。

第八節 教員養成制度

教員たる者を養成せんには相當の學識品性を具へたる者に對し、必要なる教育上の知識技能を得しめば則ち足るものなるを以て、従前の師範學校制度は之を廢止し、大學並に大學以下相當學校に教員養成科を設け、該學校中の志望者に對し、一二年の教育練習を課し、以て教員たらしむるを正當と爲すべし。試験を以て適良を採る現制は存して可ならんか。

人或は教員たる品性を十分に養はんが爲には、四五年の特別教育を必要とすといふ者あり。然れども教員の品性は、特別の者に非ず。又一般人の要求する品性たるのみ。而して優秀なる品性は、師範學校に於てのみ養成せられ、他の學校に於ては然らずといふが如き相違は、今日までの成績の示さざる處、又理論の證明し得ざる處なり。且つ夫れ四五年間全然人に教へんことを念頭に置きて學習するが如きは、一方に教法上の注意を練ることを得る利益はあるべきも、到底傳習的、説明的學風を養成せざるを得ず。是れ實に恐るべき弊害なり。吾人は自動的、研究的、進歩的ならずして、傳習的、説明的、模倣的なる今日の一般學風を以て、一は習慣的國民性の缺點に出づるなるべけれど、一は傳習的師範學風の助長したるもの果して是れ無きかを疑ふなり。果して然らば、此の學風を一新して以て、現在の時勢と將來の文明とに應ぜしむるが爲に、斷然師範學校を廢止するも亦一策なりと爲さざるべからず。殊に府縣師範學校に於て、思想未だ定まらず、自ら信じて、自己の職能を決定する能はざる少年を集め、之に向つて教育を以て其の天職とすべきを強ふるが如きは、人格的意義に於て缺けたる所なしとせず。

教員の重大なることは、教育的境遇を爲す最大要素として、既に論じたる所にして、實に如何なる理想も、學說も、はた制度も方法も、之が體認實行の衝に當る教員の識見、技能、態度、心術の如何によりて、或は豫期に倍蓰する効果を生ぜしめ、一切を擧げて忽ち無効に歸せしむ。且つ全國八百萬の少年兒童は日々此の教員の薰陶を受けつゝある事實を見れば、教師の社會的效果の偉大なるべきを思はざるを得ず。故に之が待遇法と、及び學識技能の補習法とは、制度上の重大要件たるべきなり。

第九節 教育研究所

教育の事は國家の發達上、民族改善上、個人の發展上、其の繋る所實に重大にして且つ複雑なり。國民に對する眞

正妥當の教育果して如何の問題は、實に國家事業として之れを調査研究する價值あるなり。然るに、從來に於ては、帝國に殆ど此の研究機關なし。帝國大學及び高等師範學校の如き、僅に其の地位に在る者と爲すべきも、外國の學說の紹介、又は局部の方法上の問題に關する者の外未だ成績の見るべきなし。蓋し教育作用の關係する處は頗る廣汎にして、一般生活上より、諸種の科學、哲學、宗教、藝術に涉り、又人の個性、趣味、才能、體質に關し、之が調査研究の事項材料は無數なり。少數教師が教授の傍、任意に研究するが如きを以て、成績を擧げ難きは、蓋し當然なりとす。故に吾人は國家事業として、特に一の教育研究所を興し、以て民族改善國家發展の一大教育法を建設するに力むるの急務なるを信ず。其の方法は、現東京高等師範學校を改造して、文部省直轄機關とするも可なり。吾人の希望するが如き、専ら學術研究を以て職能とする大學院の一科とするも可なるべく、又現在東京帝國大學の特殊なる一機關とするも可ならん。而して教員養成を以て是の如き教育研究所の附屬事業とするは甚だ便宜多かるべし。

第十節 學校系統案

甲 改善第一案

以上述べ來りたる旨意によりて教育を行ふべき機關の系統を定むること左の如し。

第一部 普通教育

一、小學校以前

小學校以前には多く家庭に在るを普通とし、又なるべく、家庭に在りて、懇篤なる母の教養を受くるを可とすれども、亦家庭の事情に依りては起居、飲食、遊戲等に當を得ざる場合少しとせず。此等の爲には、なるべく幼稚園を

設備するを要す。但し、一面に於て、家庭教育に關する科學的知識を採用するを要すると共に、他面に於て、幼稚園が家庭教育の補助機關にして、小學校の豫備教育機關に非ることに注意し、その組織方法に適當の工夫を施すことを要するは勿論なり。

又都會及び農村に在りては父母其の他一家を擧げて工場若くは野外の勞働に従事する場合少からざるが故に、此等の爲に託兒所を設け、彼等の幼兒を預かることは、教育上よりするも亦勞働經濟上よりするも、其の利益多かるべし。

一、小學校

修業年限は六年とし、男女兒分離合併隨意とす。但し貧寒なる農村漁村の小學校は學科目時間教授法等に於て、多く實力を減ぜざる工夫を施し、以て半日學校、或は五年終了制とし、兒童をして父母の家業を助けしむると共に、教育費の負擔を減少せしむることを得るが如き便宜を許すこととす。

一、高等小學校

種々の事情の爲に中學校高等女學校に進む能はずして、猶普通教育を受けんとする者を收容し、低度の中等教育を施す。此等の爲には地方に適切なる實業科を加ふるを可とすべし。年限は二年乃至三年とす、學科等の準備を爲し得る場合には、中學校高等女學校志望者をも收容し、卒業の後中學校高等女學校の三四年級に入學せしむるを可とし、猶ほ途中より中學高等女學校の相當學級に移轉するの自由をも許可することとすべし。是れ、なるべく、少年者をして早く家庭を離れざらしめんが爲なり。

本校は小學校に附設し、又は獨立とす。

一、小學校補習科

小學校卒業後更に上級學校に入學せざるものを收容し、一二年乃至其の以上小學校の教科を補習せしむ。學科の實業的なると普通のなると、授業の期間時間等は土地の狀況に従ひ、總て學校の任意とし、上級學校に入學せざる兒童をして、なるべく皆補習科を通過せしむる方針とす。

此の旨意を擴張し、家業に従事しつゝある年長卒業者にも時々講習を受けしめ、或は共同學習を爲さしむる組織を設くるを可とす。

一、補助學級

普通兒童と共に一齊學習を爲さしむる能はざる遲鈍兒、低能兒、病弱兒、不良兒等の爲には、特別學級を置く必要あり。又獨立學校を置くを可とする場合あり。不良兒の如きは獨立なるを可とす。

又家庭に在りて子守を爲せるが爲に普通に登校する能はざる女兒の爲にも特別學級を置く必要あり。此の如き女兒は地方農村に少からず。此等の不便を救ふにも託兒所の設置あるを可とす。

一、盲啞學校

入學年齢、修學期間は適宜とす。普通科と技藝科とを共設すべきは、勿論なり。

一、中學校

修業年限六年の中學をもつて本體とし、猶五年修業の中學をも設け、小學校の教科を終りたる男兒を收容す。第四學年級までは教科を全部同一として、唯學生の性能によつて多少の加減を許し、第五學年級以上を分科的とす。即ち卒業後直に社會に出づる者と、更に専門の學習を續くる者、又其の趣味性向の文科的なる者と、理科的なる者の爲に、學科の變更加減、或は其の程度分量に加減を施すこととす。六年程度中學校には、修業年限一年の教員養成科を附設することを得しめ、卒業生及同程度の知識を有する者に、教育法を講習せしむ。卒業者は小學校本科正

教員たる資格を得。

一、高等女學校

は四年乃至五年とし、五年度程度高學女學校の第四五學年級は將來の境遇と、性向とにより、分科的とし、各二三學科を増減するを許す。殊に卒業後家庭に入る者の爲には道德的修養、國語、家事、社會的常識の補習に重きを置かしむ。

教員養成科を附設し、修業年限一個年とし、五年度程度卒業者中の志望者に教育法の講習を施し、之を終りたる者は小學教員たる資格を得ることとす。

第二部 専門教育

一、實業學校

小學校卒業生をして入學せしむ。男子實業學校は男子の職業的需用に應ずる各種の教育を施し、修業年限五年以下各種。女子實業學校は女子の職業的需用に應ずる教育を施し、殊に各種實業家の家庭の主婦たるに適する教育を施す。修業年限は四年以下各種とす。孰れも其の編制教科教育法は複雑且つ自由にして、實地に適するを主とす。

一、専門學校

男子専門學校は中學校五年の課程を終りたる者を入學せしめ、修業年限四個年とす。

女子専門學校は修業年限三個年にして四年度程度高等女學校卒業生を入學せしむ。男女子専門學校共に必要に應じ、豫科を置くを得しむ。

卒業生の爲に二年の研究科、一年の教員養成科を置くことを得しめ、同程度の他校の卒業生をも收容せしむ。教員養成科を終りたる者は中等諸學校教員たる資格を得。

一、大學

男子大學は、六學年中學卒業者及び此と同等の學力ある者を入學せしめ、修業年限四個年とす。

女子大學は五學年高等女學校卒業者及び之と同等の學力ある者を入學せしめ、修業年限三個年とす。

男子大學は第四學年に教員養成科を置き、第四學年生に教員講習を施すを得。女子大學には教員養成科を附設し、卒業者に、一年間教育講習を施すを得。男女共之を終りたる者は中等學校教員たる資格を得。

大學は綜合、單科兩制を採る。

綜合大學には大學院を置くことを得。大學院は教育を主とする機關に非ず、研究を主とする機關にして、其の研究は男女混合とす。男子大學卒業生、女子大學院に在りて二年間研究を繼續したる者、専門學校研究科二年を終りたる者、及び大學卒業と同程度の學力を有する者にして、未だ研究せられざる特定問題に就きて研究し、其の眞理を發見せんと欲する者は研究生たることを得。年限を規定せず。或は二年乃至三年の年限を定め、志望によりて、更に之を繰り返へし繼續せしむ。

女子大學には女子のみの大學院を置くことを得。

一、教育研究所

國立の一箇を置き、或は獨立とし、又は國立大學院附屬とし、學校教育の原理方法のみならず廣義の教育、民族改善諸問題に就いて研究し、適切なる教育法を發見する所とす。現在東京高等師範學校の組織を改め、もつて、これに充つるも可なり。猶私立大學院にも教育研究所の設立を許可すべし。

一、現東京帝國大學及び京都帝國大學

此の二大學を國立の眞理研究所、獨立の模範的大學院となし、教育即ち學生養成よりも學理の研究事業に主力を注

がしむ。各種大學を其の下に置き、又殊に専門學者を養成する特殊大學を置き、全然學理研究の準備教育を施すを得ることゝす。

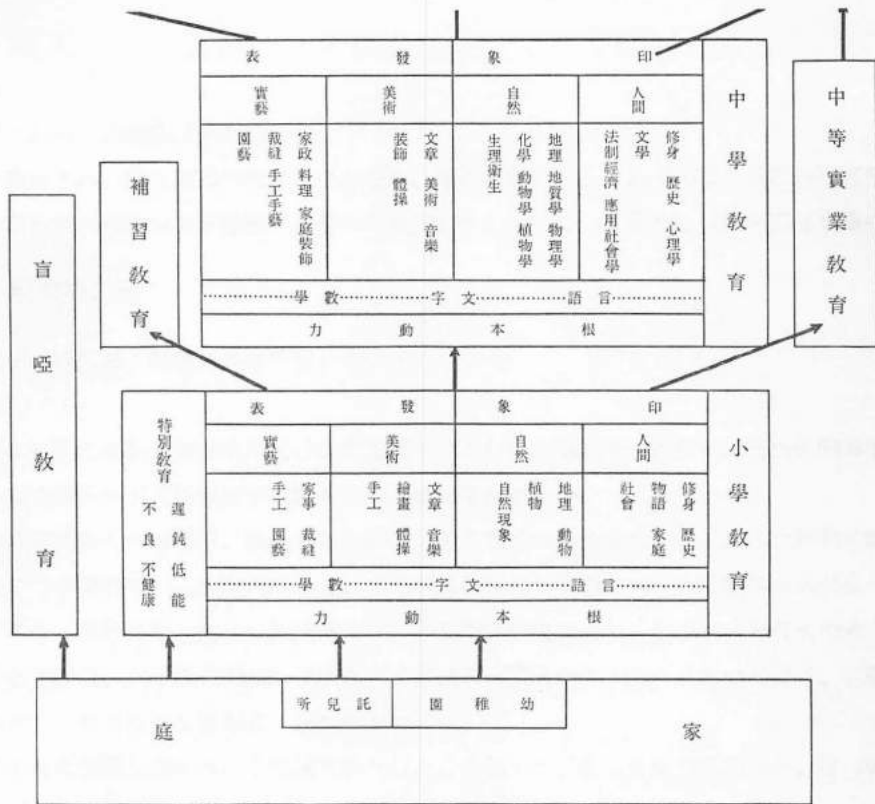
一、現高等學校

一部は之を改造して、大學となし、一部は全然之を廢止す。但し其の校舍を利用して専門學校に充つるも可なりとす。

一、第一改善案の要點

本案の要旨は、修業年限を短縮すると同時に、學力の低減を來たさざらんとするにあり。修業年限短縮論の唱道せらるゝに當り、六年中學制を主張するは一見矛盾の觀あるも、その實これ全く修業年限短縮の前提たり。修業年限は孰れの點に於て斷行すべきやは一の難問なり。著者は高等學校を全廢し、その一年を中學に加へて六年中學となし、その一年を大學に加へ、四年大學となし、大學卒業迄、小學六年、中學六年、大學四年都合十六年の修業年限とし、二十二歳をもつて大學卒業とし、從來に比すれば法令上一年の短縮を來たすを最善の改善案と信ず。併し設令教育法令上に於て、修業年限を短縮するも、現今の如く、高等教育機關の供給不足なる場合には、依然として大學競爭試験の爲めに、修業年限の短縮を事實上に於て見る能はざるが故に、高等學校の代りに、官私大學を増設し卒業者には同一の待遇を與へ、需要供給の調節を謀らば、必らず事實上の修業年限も法令上の修業年限も大差なきに至るべし。果して然らば、法令上に於ては、僅に一年の短縮なれども、事實上に於ては、現狀に比し平均約三年の短縮を來たすに至るべし。

法令上一年の短縮を來たす以上は、多少大學卒業者の知識の分量上に於て低減を來たすやも計られずと雖も、教育法に改善を加へ、注入法、形式主義を排して自己教育を奨勵し、試験學問を廢して、興味的學風を喚起せば、學力、



例一 內容科教及係關の關機育教

研究力、獨立の判斷力等の方面に於て、少からざる發展を來たし、知識に失ふ處は智力に得る處によつて補ふて餘りあるのみならず、却つて教育の眞目的を達し、實力ある人物を輩出せしむるに至るべし。

學問研究の道具たる外國語の如きも、一國語制をもつて、本則とし、學力の進むに従つて、第二第三外國語をも取らしむるの制となさば、これ亦學力増進の一法たるべし。

大學卒業者の學力如何は、又中學の制度及び教育法の如何に大關係を有するものなるが故に、大學と中學との聯絡を講究せざるべからず。本案に於て五六の兩學年に於て分科制度を執りしは、進んで大學に入る者の爲めに、適切なる豫備教育ともならんが爲めなり。中學に於ても、自己教育の學風を喚起して、その教育法を改善すべきは論なきことなれども、猶特に注意すべき要點は、學生の個性發見とその發達を謀る事なりとす。若し個性の發見と發展とにして之れなき時は、分科制度も大に其効力を減殺せらるゝを免れざるべし。

右に述べたる教育機關の系統一覽表及び其の學科組織を例示する一覽表を左に掲ぐ。但し赤色は普通教育、青色は専門教育を示す。

比較研究の便宜上、現行案一覽表をも後に附せり。

乙 改善第二案

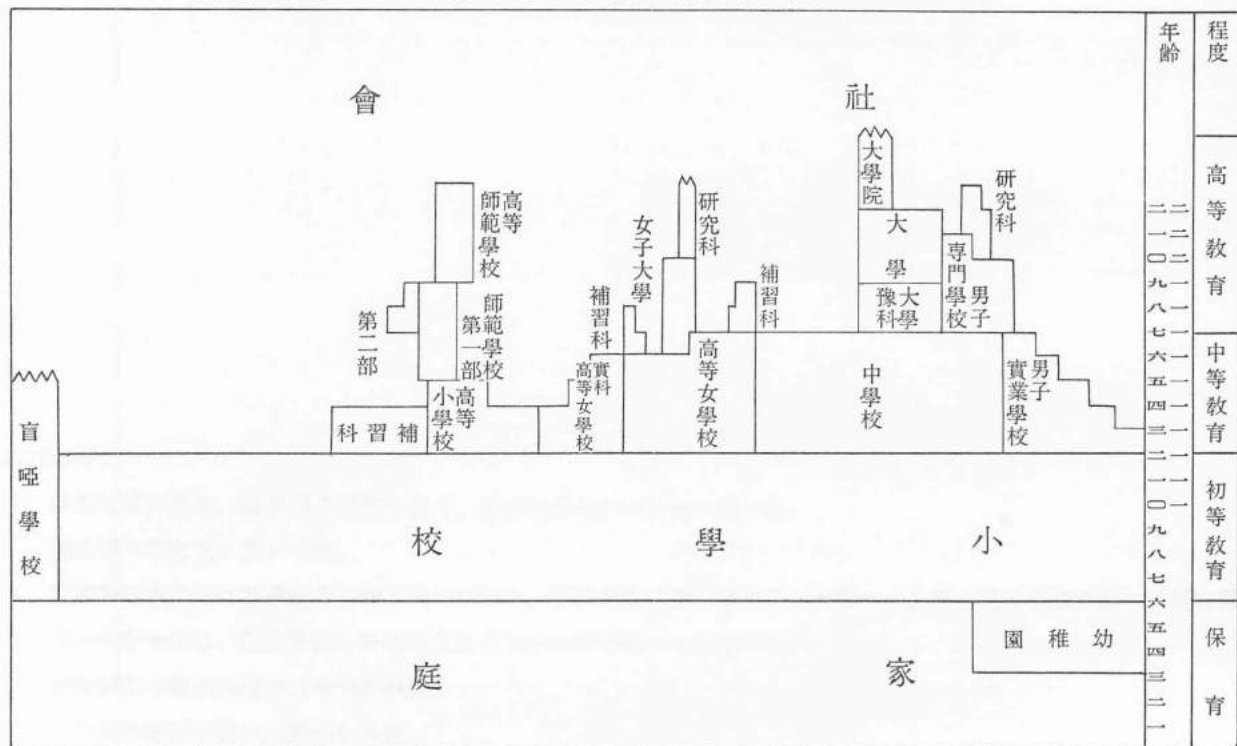
吾人は第一案を以て最も適切なる學制案とするものなれども、今一舉して根本的改革を行ふの頗る困難なる場合を慮り、先づ最も必要にして、且つ實行し易き所より始め、漸次改善して、以て近き將來に於て吾人の案の如くならんことを希望す。依りて左に改善第二案を提示す。

其の改善の要點は

- 一、大學修業年限を總て三年とする事。
 - 一、大學豫科の修業年限を二年とする事。
 - 一、女子大學を定め、修業年限三年乃至四年の女子大學を設くるを得る事。
 - 一、師範學校及び高等師範學校は當分之を存置し、師範學校は第二部を以て本體とし、第一部の給費を廢し、高等師範學校も給費制を廢する事。
 - 一、學校の内容組織、教育法に改善を加へ、効果を増大する工夫を施す事。
- 等

(二其案善改)

統系之關機育教



第十一節 學制運用上の補遺事項

第一 學校以前の教育

學校生活に於て現はれ來る先天的後天的各種の偏向性癖は勿論、各種の能力の萌芽は大抵學校以前の生活に於て之を發見するを得るものなり。而して學校生活を始むるまでには、既にそれぞれ習慣を固定し、其の後の教育に於て其の美點缺點を發見して之を開發し、或は矯正せんとするも最早不可能なるに至るものあり。不可能ならざるも、頗る困難なるものあり。之が爲に、兒童自身の不快、教師の煩累を來し、而も宜しく其の發育すべき善美なる性能にして、遂に全く發育せず、宜しく之を芟除すべき惡癖にして、永久の痼疾となりて殘留するが如き不幸を見ること決して少からざるなり。之に反し、學校以前の教育にして完全ならんか。學校教育多少の過不及も、其の弊を見るに至らずして止むことあるべし。即ち、學校以前の教育は、學校教育の功率を決定すといふも過言に非ず。人の生命に自具せる自發活動性を本とする所の、吾人の所謂自學自動主義教育も、家庭に於て之が基礎を爲さざれば、以後の指導は極て困難なりとす。是故に、學校以前の教育は、其の價値の大なること、敢て學校教育に譲らずといはざるべからず。而して此の重大なる學校以前の教育の行はるゝ所は言ふまでもなく家庭なるが故に、家庭の組織、生活法をして、兒童の教養に適せしむる工夫を爲すの必要あり。即ち家屋の位置構造、生活の規律習慣等に於て、教育學の要求する所に従ひ、以て必要なる與件を選択し、兒童の心身諸機能の發達、改善矯正に適する境遇を構成する工夫を爲さざるべからず。家庭は固より所謂狹義の教育の機關に非ず、他に家庭本然の任務あるが故に、獨り兒童の教育上の便宜のみを主とする能はざるは當然の事なれども、兒童の教養が家庭に於ける最重大任務の一たる以上は、

之が爲に多大の努力を費さざるべからず。今我が國一般の家庭生活に關する考慮を見るに、生活上或は社交上の便利のみを主とし、兒童教養上の必要に就いては、無頓着に過ぐるものがあるが如し。是れ大に改善を要求せざるべからざる所とす。而して此の兒童教養上に關する工夫の責任は、父母の双肩に繋れり。

然るに世の父母たる者、此の貴重なる幼年期に於て、其の子女の教養に關して、深切綿密なる注意を拂はず、其の子女の學校に入り形式上に、或は他兒童との比較の上に何等か成績を示すに至りて、則ち始めて狼狽し、焦躁し或は妄に子女を鞭撻して、却つて子女の活氣を減ぼし健康を害し、或は頻りに教師に訴へ、不公平なる處置を強ひて、唯表面一時を飾らんとするが如き者あり。誤れりといはざるべからず。

抑も、家庭の教育の直接指導者は母なり。從來に在りては、母の本能的愛情と傳習的常識とは、以て子女を教養するに十分なりとして、別に其の方法を研究せずして止むを得たりしかども、今日の如く外圍の刺戟複雑となり、從つて兒童心身の反應頗る多忙にして、神經過敏疲労を招き易き時にありては、外界刺戟の性質を理解して、之が調節法を講じ兒童心身の傾向を觀察し、之が培養矯正の方法を定め、更に個性と境遇との關係的價値を教育的に發揮する仕事たる、決して容易なるものに非ず。從つて其の效果たる又淺小なるものに非ず。幼時に於ける教育の當不當は大學の卒業年齢を三年間伸長する結果を生ずといふ人あるもの、決して過言に非るべきなり。況や又更に家庭教育以前の素質を決する胎教の原理、遺傳の原則の、甚だ又重大なる價値を子女の心身上に有するものなるに於てをや。

吾人は學校教育の重大なるを見るが爲に、學校以前の教育の重大なるを見て、母たる女子が教育修養の、實に重大なるを見るなり。此の意味より言はゞ、女子教育の如何は教育の功率を決定す。吾人が制度上に、明瞭に女子教育重視の意義を現はんとするは、蓋し之が爲なり。

第二 學科及び時間

學習力を集中し、教育の効率をして大ならしめんと欲せば、勢ひ學科目を少くして、内容を豊富にし時間數を少くして、努力の價値を大ならしむる工夫を爲さざるべからず。學科目を少くすとは、收得する知識の量と質とを徒らに簡少にすることに非ず。時間數を少くすとは、自己の勉學時間を少くする謂に非ず。外より散漫に學生を刺戟する形式を減じ、却つて學生自ら收得し、自ら發達する時と事とを多くせんとするなり。基本學科と關係學科との調節配合によりて、學科目を減ずるも、生活上必要な知識を缺くに至らざることには既に述べたる所、又各學生の個性に對する教育の効果を增大するが爲には、適當なる方法により、知識材料の増減を爲す必要あることも既に述べたる所、此等の方針より、必須教課科の數と時間とを減じ、以て自學の時間を多くするは、吾人が教育の効率増大の目的を達する要件の最も卑近なるものなり。

第三 試驗法の改善

試験は學生の知識を知る便法なりと雖も、往々唯記憶力の強弱を知るに止まることなしとせず。試験は學生をして奮勵せしむれども、目前一時の糊塗に止まり、却つて學習の興味を萎縮せしむることなきに非ず。試験は進歩の元氣を刺戟すれども、主我的競争心を惹き起し、友人の失敗を希ふに至るが如きことなきに非ず。而して學生の進程を知り、彼等をして奮勵せしめ、其の元氣を刺戟するが如きは、他に更に根本的の良法なきに非ず。果して然らば、餘弊の徒に大なる従來の形式的試験を以て學生觀察評決の全法と爲す方針を廢するを至當とす。形式的試験は、蓋し學生の勉學に對し、機械的他律を以て壓迫するものにして、啻に實際の弊の大なるのみならず、自學自動の趣旨に反する

の大なるものなればなり。唯學生數の非常に多く、教師の力及ばざるが爲に、機械的試験によりて、學生の知識學力を知らざるを得ざる場合少からず。蓋し現時の如く、教育費不足して、過多の學生を一校一學級内に收容する時には、教師の日々の觀察實驗は到底學生全體に及ぶこと能はざればなり。然れども亦學生の數甚多ければ、此の機械的試験法も到底用を爲さず。教師は答案數の多きに恐れて、之を繕讀せず唯文字の美醜によりて甲乙の點數を附することありといふ評を聞くが如き是れなり。

若し夫れ、教育の必要上學生の現狀を理解するを要する方面に至りては各種智力、各種意力、各種感情、性格、道徳、體質等極めて多く、一形式的試験法の到底能くする所に非ず。而も其の觀察法に於ても或は論文、研究報告等を課する實地實驗を觀、言語發表をきき、坐作進退、共同生活の態度を觀る等、苟も學生に接觸する所に於て、其の機會を發見するに苦まざるべし。學力のみも試験も、講義の反復を強ふるが如き方法を避け、講義又は書籍を參考して評釋し得る應用問題を課するが如きも亦その一法なり。

抑も眞正なる試験の本義は、是をして、なるべく多大なる教育的價值を生ぜしむるに在り。而して試験をして、多大なる教育的價值を生ぜしむるは、試験を以て單に教師の仕事の爲の便法とせずして、學生其の人の進歩の機會、寧ろ自己教育の一法たらしむるに在るなり。即ち試験は教師が學生の性向、能力進歩の程度を知り、以て學生が向後の勉學方針を定むる相談相手となり、有益なる助言を與ふる機會を作り、材料を得る方法として、之を行ふを要す。學生より言へば、試験を受くることによりて、自ら能力の如何を檢し、知識の精粗を解し、從來の勉學法、學科の選擇等に於ける得失を明にし、以て、或は學習學科を修正し、勉學法を改善し、或は進級と否とを自ら決定する方法として、之を受くるを要す。従つて、試験は學校或は教師より強ひて課せらるゝに非ずして、學生自ら自己を省察檢視する方法なり、又教師より有益なる助言を與へらるゝ機會なりと解すべきなり。

若し此の方針により試験の方法を適當に工夫せば、試験亦決して悪しからず。從來の如き形式的方法による試験と雖も、猶ほ良好にして、且つ必要な場合は是れ無きに非るべし。而して、從つて又、學風荒廢の一與件たりし試験は、却つて學風の濃厚健全を來す一助たるに至るべく、殊に學生に取りて、寧ろ災厄の觀を爲し、試験も、此によつて、却つて學生に對し有益なる親友となるに至らん。是故に、教育界に於ける試験の觀念を其の根柢より一變して、全然之を教育的ならしむることは、試験法改善の根本問題なりとす。

要するに、吾人の試験改善の意見は、成るべく從來の試験法を廢止するのみならず、試験てふ語をも改廢し、之に代ふるに寧ろ學力査定等の語を用ひ、その方法としては前段論じたる如く、學生平素の行動、性向、能力及び自己省察等の進歩の度合を觀察注目し、又學科の選擇、天職に關する相談に預る等のことにより、直接に學生を觀察せば從來の形式的試験の弊を除去すると同時に、學生の進歩の程度を判定するを得べしといふに在り。

第四 教授法

教授法の要義は、現在爲し得る限り多量の知識を授くるに非ずして、學生の欲するに従ひ、無限に自ら知識を收得することを得る方法を教ふるに在り。同時に知識と、其の收得法との要求の動力たる必要と、興味とを發見せしむるに在り。而して必要と興味とを發見せしむる根本は、既述自發活動性を培養するに在り。次には、興味の中に必要を見、遊戯により勤勞を、娛樂によりて努力を爲さしむる境遇を設くるに在り。英語教授によりて例せば、文藝的に仕組みたる英語會を設け、之によりて、知らず識らず英語的空氣英語使用の氣分を作り、使用の結果快感を覺えしむるが如き、是れなり。

人は自ら何事をか發見する時に於て、非常なる興味を感じ、更に深く追求することを止むる能はざるものなり。故

に確實精密なる指導により、學生自身をして、着々新發見を經驗せしめ、彼等をして踊躍して學習に努力するに至らしむることは優秀なる教授法の根本的要義なりといふべし。

第五 一外國語制

全教育機關系統通過の年限を短縮せんが爲には、一外國語制を採ること必要なり。蓋し現高等學校に於て、最も時間勞力を要するものは即ち獨逸語なればなり。然るに、其の非常なる努力の結果、英獨二語共に完きを得ず、十分の用を爲さざる有様なり。是れ甚しき浪費といふべく、一外國語とするの止むべからざる所以なり。而かも、一國語に熟達堪能なるを得たる曉には他の國語を學ぶに當りて、容易に之れを習熟するを得るは、經驗上明白なる事實にして、語學を修むるに却て有効なる結果を見るべし。而して一外國語制とすれば、一般には英語を選ぶに至ること、是れ亦自然なるべし。然れども、學習力に餘分あるものは、固より一語以上を學ぶを妨げざるべく、大學に於ては、必要に應じて他の國語を選修することを得しむべし。又醫家の爲には、特に獨逸語中學を設くるが如き方法を採らざるを得ざるべきなり。

第六 教科書採用の自由

教科書は、教授細目と共に、支障なき限り選擇採用の自由を許容せらるゝを要す。限定的に過ぐるは教師の識力、學校の特色を發揮する所以に非ず。又教育の實効を發揮する所以にも非るなり。

第七 試験的實行

文部省は支障なき限り、學校に新工夫、新着眼の試験的實行を許容して、其の結果を報告せしめ、或は自ら觀察し斯の如き場合を利用して、協力して、共に教育改善の功を成すを要す。監督者は賢明なり常に至善至正なりといふ態度を以て、肯定否定の命令を用ふる外、積極的に協力改善の深切を示さざるは、教育界に活氣を添へ、良空氣を作る所以に非ざるべし。

第八 男女共學問題

外國に於て、男女共學制を採る學校の多數あるは、素と教育上の理由より之を必要としたる結果に非ずして、社會事情の必要より、自然に發達したるものなるは多く説明するを要せず。而して今日に於て、共學制に關する是非の批評は、區々にして一定せず。共學の殊に盛なる米國に在りても、家庭の多數は之を希望せずといへり。殊に歐米と風俗習慣を異にする我が國に於ては、共學制を以て本體と爲すべきに非ず。而も亦全然分離主義を取ることも、事情上不可能にして、且つ其の必要なからん。故に性的差別の著しからざる小學校に於ては、共學を許し、又學理研究を主とする大學院に於ては、其の本旨上性的差別を顧慮する必要なきのみならず、既に理性の發達したる男女に對し、強ひて區別を設くる必要も是れなきが故に、大學院に在りては、特に女子の爲に必要な設備を具へ、男女混合研究を以て本體と爲して可なるべきなり。

我が國に於ける性的道德は、猶甚だ不完全にして、男女互に嚴肅なる友人として、有益なる伴侶として、赤心を披きて相交はること能はず。女子は男子を嫌惡し、忌避し、男子は女子を愚弄し、輕蔑し、之が爲に、社會に健全なる風儀を作る能はざるのみならず、裏面に於て却つて風儀を紊すが如き結果を生ずるもの少からず。是の如き男女關係の改善も亦、必ず畫策せらるべき一問題なり。

第九 卒業後の修養

學校以前の教育の、學校教育の効果を支配するが如く、卒業後の修養も、亦學校教育の効果を左右す。學校に於て、如何に完全なる教育を施すとも、學生にして、若し卒業後忽ち之を忘れ、之を棄てなば、其の效果の過半は滅殺せらるべきなり。方今の學校出身者は、概ね皆然る者に非るなきか。果して是の如くならば、教育者の努力は、洪水前の河洲に家を作るが如きものに異ならず。徒勞徒費、豈に是れより大なるものあらんや。

卒業後猶在校同様の効果を得る方法を教ふるの、教育法の本義なるは勿論なり。然れども、學校を去りて社會に出で、境遇の變ずるに従ひ、氣分も、興味も亦變じ、遂に從前の教育を棄て去るに至ること、必ずしも不自然といふべからず。是故に、卒業生の新境遇に於ても、常に引續き教育的刺戟を與へ、修養的空氣を送り、其の全然たる精神的變化を沮止するを要す。否益々進修的に、發達的に、變動せしむる援助を爲すを要す。従つて學校は之が爲に種々の機會を利用し、あらゆる方法を盡すを要す。而して、既に學校を出でて大人となりたる彼等に對しては、常に其の思想風潮を解し、此を包括統制して餘りある程の、高大なる識見を以て、靜に適當の交際を續くるを要すべし。幾分づつ利益と快感とを與ふるを得る方法あらば更に可なり。卒業生にして實務に當る者を、時に學校に招き、簡易に且つ娛樂的に知識を補習せしむるが如きは、其の一なるべし。其の最も佳にして根本的なるは、學校自體が常に青年の元氣を持して、教育の精神も進み、實績も進み、躍々として前進するを止めざることなり。是の如くならば其の教育的影響感化は求めざるも、自ら流れて永く卒業生を浸さん。

卒業生の修養保護に就いては、社會も政府も亦何等か方法を工夫する責任を有すべし。

第十 補習教育制度

教育制度の要義は、總ての國民に對し、なるべく平等に教育を受ける機會を與ふるに在り。或る者は滿二十三歳まで十分なる教育を受けることを得るに際し、或る者は僅に義務教育を受けるのみにて、一生全く教育と絶縁するが如きは、個人の境遇才能上より止むことを得ざることなりとするも、國家社會の教育政策上よりして之を見れば、決して抛棄し去るべき問題に非ず。國民品性の發達、能力の進歩が、教育の多少に關係するものある以上は、一切國民をして、なるべく長く教育を受けしむるを可とするは勿論、教育の機會を平等ならしむるを要する趣意よりするも、大學以下の學校卒業者をして、少くも大學卒業年齢に至る間は、絶えず或る機關によりて、其の學識技能を補習せしむるを以て原則となすべきなり。獨米等に於て補習教育を重視し、強制的に之を施行せんとするものあるは、誠に當然の事なりとす。

學校が常に其の卒業生の修養に顧慮するが如き、通俗教育によりて、一般民衆と共に、低度學校出身者をも臨時に教育するが如き、固より補習教育の一端なれども、然れども更に緊切なる方法を設け、學校出身者をして、絶えず教育機關に接觸せしむるを要す。之が爲には小學校補習科制度を、なるべく各學校に擴張するを得る道を開くは勿論、諸學校はなるべく講習制度、聽講制度、通俗講習制度等によりて、下級學校卒業者に對し、簡易にして必要なる學識技能の補演を爲さしめ、而して彼等をして順次に進みて、上級學校の講習を受けるを得しむるが如くするを可とすべし。要するに補習教育制度を以て一の傍系的學制とし、以て義務教育終了者をして、大學卒業年齢たる二十二歳に至る間、或は少くも兵役服務年齢に至る間の補習教育を行ふ方法を講ずべきなり。

第十一 通俗教育

學校が、其の本務に差支なき限り、傍系的教育を行ふは、是れ社會の教育機關たる精神に適へるものなり。例せば、教室の餘裕ある限り聽講生を許すが如き、常設又は臨時の講習會、講話會を開き、簡易に修養を助けしむるが如き、差支なき時に圖書館を公開するが如き、その他公衆教育、通俗教育（ユニヴァーシティ・エクステンション）の方法は種々あるべきなり。殊に實業學校が實業家に實業的知識を補習せしむるが如き、女學校が學生の母姉に對し、或は家事科或は育兒、或は衛生、或は料理等、望むがまゝの部分的聽講を容すが如き、種々修養上の援助を與ふる工夫を爲すは、決して趣味利益なき事に非るべし。但し此等傍系事業の爲に教師を過用し、此をして過勞に陥らしむるが如きに至りては不可なり。是れ却つて教師を驅りて不眞摯ならしむる原因なればなり。彼の屢々地方にて聞くが如く、社會教育青年教育等の爲に小學校教師を用ゐ、彼等をして疲勞せしむるの極、晝間の授業を半ば假睡の中に送らしむるものありといふが如きは、固より甚しき誤謬なりとす。

第十二 教育界の社會教化運動

教育と實務家と、學校と社會と相融和せず、寧ろ互に孤立の状態にあるの弊、及び其の調和の必要なることは既述せる所なるが、教育界として一般社會民衆を教育的に教化する努力を爲すも亦必要なる事なり。其の根本は勿論良卒業生を社會に送り、其の實績によりて、中より改善せしむる事に存すれども、亦教育講演會、教育展覽會等を開き、なるべく學校に民衆を招待し、儀式に參列せしむる等の事により、教育に興味を起さしむることも有効なり。兎に角社會民衆をして、更に教育を理解せしめ、其の輿論風潮をして、更に教育に向つて傾かしむる必要あり。雜誌新聞紙

の多くが教育界の出来事を報道し、評論を掲ぐるが如きは、民衆の教育化に大に有効なるべし。今日箇々の父兄が子女の學校にゆくことあるも、それは多く其の子女に關する利害觀念より出づるもの、一般に教育事業に同情せる結果に出づるは少し。此の狀態を改變して、民衆の輿論を教育に傾くるの運動は、教育振興上切要なる時務なりといふべし。

第五章 總括

一

文明は進みて窮まらず、時勢亦動きて止まず。國民固有の精神と元氣とを勵發して、國家的大飛躍を遂げたる、明治新興の奔勢を承け、今や一步を進めて世界的飛躍を試み、以て光榮ある國運を更に新に開拓すべき時代は茲に回りに來れり。凡そ國民たる者は、廣く眼を放ちて此の大勢を看取せざるべからず、深く思を潜めて此の大望を自覺せざるべからず。而して自己の努力により、内より發して自ら動き、以て此の大勢を驅らざるべからず、此の大望を遂げざるべからず。吾人が尊崇し、親愛して措かざる、美なる斯の國をして、更に一段の發達を遂げしめよ。進みて其の美なる使命を世界に行はしめよ。而して以て、無限永遠の國民的向上發展史の中に大正維新の一大文字を加へしめよ。是れ豈に何人も且暮其の心頭に切々たる國民的念願に非ずや。吾人が此の論述を試みたる動機も亦實に此に外ならざるなり。

吾人は信ず、國家進達の動力を培養するものは、即ち國民的教育なり。故に此の國民的念願を成就せんと欲せば、則ち教育を改善して國家の發達に適切にし、使命の遂行に有効にするより急務なるは無しと。然るに、教育をして適切有效ならしむる道は、第一、根本の眞目的を發見し、原則と爲すべき大方針を確立するに在り。第二、此の目的方針を實現すべき方法を研究し、殊に努力を徒費せずして、其の功率を倍徙する工夫を爲すに在り。凡そ事業を成す方は、目的原因と、期成原因とを併せ完備するを以て原則と爲す。教育事業をして成功せしむる方法も、亦固より之を以て原則と爲さざるべからず。

是故に吾人は先づ國家究竟の到着點は果して何處に在るかを見、而して、齟つて帝國在來の精神如何、能力如何、境遇如何、歴史は如何、時勢は如何、將來は如何の問題を檢して、帝國が依つて以て其の本來の發達を完全にすべき進路を發見し、刻下の努力を集中すべき方針を定めんと試みぬ。

然るに、自ら獨立して完美なる發達を遂げ、更に進みて國家の使命を行はんと欲せば、則ち彼我文明の交渉、世界に於ける我が位置關係を顧み來らざるべからず。世界の國家は一に非ず。幾多の邦國民族は、洋の東西に相對立して、互に相拮抗し、相連盟し、相刺戟し、相影響し、而して其の學術、産業、文藝、美術、宗教は悉く皆混交錯綜して、縱奔橫流せり。此の間に在りて、獨り一國のみ能く孤立して發達し得べきに非ず。況や其の使命天職を行ふに於てをや。健全なる發達は唯外に向つて、關係的活動を爲す所に於て得らるゝなり。而して外に向ふ所の發達的活動の要義は、則ち唯使命、天職の信念に外ならず。即ち自ら發達する努力と、使命の遂行とは、其の實際に於て、決して二致なるものに非ず。是故に、帝國は、第一、進みて他の文明と握手し、第二、他の文明を受容し消化し吸收して以て我が發達の滋養素となし、第三、斯くて發揮し得たる我が特得の長所を世界に提供して、文明の進達醇化を促し、第四、遂に世界を擧げて渾然たる一大文明的生活團を形成する動力と爲らざるべからず。是れ即ち帝國が自ら立ち、自ら發達すると共に、世界に特得の一國たる使命天職を行ふ所以にして、刻下の教育方策を決定すべき國家的活動の原則なり。

是の如きは、決して吾人の新發明に非ず、燦として明治中興の初頭を飾れる彼の五條御誓文の主旨に基けるに過ぎざるなり。是の主旨たる、實に永遠の國是にして、帝國將來の教育方針も亦必ずや、此に基いて畫策せられざるべからず。吾人も亦是に従ひ、所見の概要を述たるもの、是を第一篇の内容と爲す。

吾人は是に於て、更に進みて、此の方針を實地の教育に於て實現する方法、又實地の教育をして此の方針に策應せ

しむる方法を講じ、以て努力を國民の品性修養に集中し、帝國の使命天職を盡すを得る所以の動力を養はざるべからず。是れ即ち第二篇に於ける考察の目的なり。

此の目的に依り、第二篇第一章に於て、先づ往々にして教育縮小を唱ふる者の誤謬を駁して、其の正鵠を得たるものに非ることを明にし、第二章に於て、教育の動機興味を薄弱にし、作用を妨害し、又其の効果を不十分ならしむる所の、思想上、社會上、教育方法上に存する諸多の弊原を指摘し、進みて第三章に入りては、先づ此等教育に對する障害を除去すべき着眼の要點を指摘し更に教育の効力をして理想的ならしむべき所以の根本又之を助けて、其の實現を完全ならしむべき、學校、家庭、社會の諸要件を研究せり。而して最後に第四章に於て、以上の根本と要件とを以て、教育作用を直に社會に行ふべき機關の系統的計畫、即ち學制の改善方式の大概を定め、附するに、此の學制によりて行ふべき教育の効果を以て確實ならしむる諸要項を以てす。是れ即ち此の一篇の論述の順序大要なり。

二

吾人の見る所に依れば、國家發展の原動力は國民各個の發達に在り。而して各個人發達の原動力は各個人本具の精神に在り。偉大なる國家は偉大なる國民によりて造られざるべからず。偉大なる國民は偉大なる精神より生まれざるべからず。然るに、各個人の精神は即ち中に在る所の人格的生命にして自具自發の活動性を有し、外界境遇の刺戟に應じて、發動止まず。其の發動の勢の、時と共に流れては、東西幾千年の歴史を成し、個人を活かしては、古今幾多の聖人賢哲帝王將軍を作り、其の社會的效果を累積しては、今日の文明教化産業を成す。生命自發の力や眞に恐るべく、其の靈妙なること、到底測り知る能はざるなり。教育とは此の生命の發動を助け、實功を成す傾向を附與する方に外ならず。故に教育の効果を擧ぐる要諦は、此の生命を養ひ、其の活動性をして完全ならしむる刺戟境遇を具ふ

るより大なるはなし。

教育上の浪費とは、第一に、方法の案配其の當を得ざるが爲に、幾多の教育的努力をして、此の生命の滋養たる能はざらしめ、此の活動性を援くる要件たらしむる能はざるに在り。第二、外界諸要件の矛盾、撞着、錯雜紊亂より來る弊害の爲に、生命力を萎縮せしめ、其の活動性を奪ふに在り。而して教育の功率を倍蓰する方法とは、此の如き教育的努力及び外界諸要件を、生命發動の規律秩序に従ひて、調整し、其の適應を全くする工夫を指す。

個人の生長發達に關係する境遇を數ふれば、則ち家庭、學校、社會の三者にして、而して其の効果たる殆ど軒輕し易からず。家庭は單純にして狭小なりと雖も子女の初生を享くるの處にして、其の自然の人情に發する愛養溫保の深厚なる、到底學校の比に非ず、其の暗々裡に影響すること最も深刻なるを察すべきなり。社會は甚だ散漫にして疎隔せるが如しと雖も亦極て廣大にして、且つ複雑なり。人の右する所必ず社會あり、左する所必ず社會あり。凡そ人の視聽を衝き情感を動かす所の萬般の物は、善惡美醜、宏大玄微、皆悉く皆社會に在りて備はり、而して人の一生を之に託す。其の人の心身に影響する所、豈に尠少と爲さんや。若し夫れ學校に至りては、家庭の愛養溫保の自然に深厚なる者ある能はず、又社會の複雑廣大にして、刺戟物の無限なるを有せず。此の點に於て、學校の個人に及ぼす勢力は到底家庭と社會とに及ぶこと能はざるなり。學校教育が往々無能の評を被ることあるは、寧ろ當然の事理と言はざるを得ず。社會の事象の複雑にして刺戟的となること益々甚しく、種々の勢力を以て個人に迫り來ること緊密なる現代に於ては最も然りとなす。

唯學校には、教育の意識あり、教育的計畫あり、教育的努力あり。人の生命發動に最も有効なる材料を選択し、且つ之を最も有効に排列して、一個の理想的境遇環象を作り、以て其の發育力の、是より益々烈しからんとする少年を待ち、彼等をして理想的活動の生活を営ましむ。彼等は此の發達の生活を營むこと數年なるによりて、理想的の發達

を爲し、之に依つて又將來理想的の發達を爲すべき生活の方式を自得するなり。此の點は、是れ一般の家庭及び社會の到底及び難き所にして、學校の學校たる所以の價値は、此の理想的發達の生活によりて、各自が理想的發達の方式を自得するの一點に在り。然るに、學校には、此の理想的方式ありと雖も、其の多數學生を同時に教育するを以て、方式は勢ひ普遍的抽象的なるものと爲り、各個學生に適切を缺かざるを得ず。次に、家庭と社會とに存するが如き有力なる要素、複雑なる要素を缺くを以て、方式は勢ひ空虚薄弱なるものと爲らざるを得ず。是故に、又従つて、學校は、第一、其の教育法をして各學生個人に適當該切ならしむるが爲に、爲し得る限りの深切なる工夫を凝らさざるべからず。但し一齊教育の可能なる範圍を發見し、其の範圍に於て、一齊教育を行ふは、教育力を經濟的ならしむる所以にして、且つ必要なる學校の一特色なり。各個教育の工夫のみに偏するは、必ずしも學校教育をして價値あらしむる所以に非ず。第二、學校に於ては、爲し得る限り、其の生活内容を豊富にし、多様にし、複雑にし、以て家庭社會に比して、刺戟的勢力の貧弱なるが爲に被る外勢の壓迫を免るゝ工夫を爲さざるべからず。但し生活の規律秩序の齊整明白にして、家庭社會の曖昧模稜、錯雜混亂を極むるに似ず、幼者が容易く之を會得順應するを得るは又學校の一特色なり。故に家庭社會に模倣し、妄に其の生活内容を多様ならしむることにのみ力むるは、學校の特色を没却するに至る恐れあるなり。

是の如く、學校の教育は必ずしも個人的ならず、又必ずしも家庭的社會的ならず。其の以外に於て、別に一箇の乾坤を拓く。此の別乾坤、即ち是れ學校の長所にして、而して又同時に短所なり。然り、此の長所たる、他の家庭社會の到底奪ひ去る能はざる學校特得固有の長所にして、此の短所たる、家庭及び社會に依るに非れば學校の自力の到底補ふ能はざる短所なり。學校は必ずしも今日の如き組織的集團機關たるに限らずと雖も、今日の學校は正に、是の如き長所と短所とを有する組織的集團機關たるなり。

是に於て、學校の教育は必ずしも個人的ならず、又家庭社會と等しからざる所に於て、學校固有の使命を行ひ、人と獨自家庭と社會との有する能はざる一大功績を貢獻すると同時に、又其の自ら充すこと能はざる缺點をば、他の力に依つて之を補ふの道を求むるを要す。他の力に依つて之を補ふとは何ぞや。第一は、學生各個をして學校の規律秩序に従ふと同時に、自動自治自學自習の方法を採り、自己の力を以て自己の要求を處理せしむるに在り。第二は、家庭社會をして、學校の教育を尊敬すると同時に、子女の發達に必要な秩序方式に従つて、其の組織内容を調整し、以て自家の教育的任務を行ひ、且つ學校教育を助けしむるに在り。是れ決して學校が學校として不完全なるが爲に非ず、學校が學校として理想的なれば、理想的なるほど、益々内に學生各個の自奮自拔を要求し、外に家庭社會の協力調和を要求すべきなり。故に學生の自奮自拔を要求すること、家庭社會に協力調和を要求することの多少は、即ち其の學校の教育的價値の大小を示すといふも過言に非ず。

之を要するに、學校は學校としての特色に向つて、極力發達進歩するを期すると同時に、他面に於て、其の全然個性的なることを得ず、又家庭的社會的なるを得ざる缺點を補ふを要す。而して、之を補ふの道は、左の四項に注意するに在り。第一、其の教育をして個性的ならしむるに力む、第二、學校生活内容をして豊富多様ならしむるに力む、第三、學生をして自學自習を爲さしむるに力む、第四、家庭社會の協力を求むる工夫を爲す。

然るに、人事は總て其の特色に向つて偏傾し易し。學校も亦固より其の偏傾を免れずして、知らず、識らず、形式的一齊教育を行ふに過ぐるを常とす。本邦の教育は殊に個性を尊重せず、又家庭社會に適應せず、唯所謂畫一的、規則的、他律的、固定的に成就したるものなること、世既に定評あり。然り而して、更に同時に、學生に自奮自拔自學自習の元氣なく、家庭社會に之を補ふの同情なし。果して是の如くならば本來存せざるを得ざる學校教育の缺點短所の上に、更に又他の幾多の障害を重ね、以て其の弊をして三倍五倍せざるを得ざらしむるものあること、寧ろ極めて

當然に非ずや。況んや、學校の特色を一方に向つて過度に偏傾せしむるの熱心だも存せず、不備散漫を極むることも亦有り易きに於てをや。吾人が教育上の浪費を指摘して、學風の改善を論じ、前の四要項に就いて力説したる所以、實に是處に存す。而して學生の自奮自拔自動自治自習の意味に就いて、特に屢々反覆したるものは、彼の缺點短所弊害の、概ね皆人の自發活動性を壓抑し、惹いて、人格的生命をして萎縮涸渴せしむるに至るものなればなり。

三

學校をして、緊密に學生各箇を抱懷せしめ、又圓滑に家庭社會と、及び更に學校相互協調せしめ、以て自由に其の教育力を振はしむる所以の統制は、即ち學制に依る。故に又學制は教育努力の功率を増減する大勢力たり。實に學制は社會國家の教育力を集中結束する所以の襟帶なり。若し學制にして適當剗切を缺かば、學校は忽ち其の能力を失墜し、教育の作用は總て局處に停滯し、而して教育的諸境遇諸要件は、遂に散亂し去らざるを得ず。是故に學校の教育に深切なるものは、又必ず此の學制に就いて考察する所なきを得ざるなり。吾人が前來の研究を總括し、最後に學制改善案を提出したるは、蓋し止むこと能はざる當然の順序に出づ。

從來の學制は完備せざるに非ず、過去の時代に於ては、極めて有効にして、其の功績亦巨大なるものありしなり。然れども、之を現在に於て固守せんとせば既に幾多の破綻あるを免れず。況や之を將來の新時代に充當するに於てをや。學制は國是とする所に従つて、社會の教育力を結束し、之をして時代に有効ならしむる畫策たるに過ぎず。其の時代と共に進むは、誠に當然のことなりとす。故に、吾人は時代の要求に従つて、學校の内容改善の方法を講じ、而して更に此の方法を實行するに適當なる學制を要求せり。吾人の要求せる學制改善の要項は、第一、學校及び教科の複雜多樣自由を許し、選擇制度と相待ちて、以て各個性に適切なる教育力を發揮する餘地を與ふるに在り。第二、大

學を擴張し、修業年限を短縮し、且つ同時に、學術及び教育の研究を主とする機關を特設し、學術教育の進歩を計るに在り。第三、女子教育を特に輕視又は抑壓せざることを制度上に示し、以て女子の發達を獎勵するに在り。第四、從來の教員養成法を一變し、以て學風改善の根本を新にするに在り。

學制は國是に従つて定めたる教育の方針を實行する計畫にして、其の目的たる、刻下有爲の國民を養成するに在り。然るに刻下有爲の國民たる資格は多しと雖も、特に目下の國民として要求する所は第一、確乎たる信念理想を有し、自己の使命天職に就いて自覺し、之れを遂行する實力を具ふるを要す。第二、自動自治、獨立自營、責任の觀念を有し、如何なる地位職業に在るも、最善の努力を捧げて吝まざるを要す。第三、立憲自治制の本義を解し、能く之を運用する識見技能を有することを要す。第四、現在國家の世界的關係地位と要求とを明にし、廣く外に向つて進取的活動を爲すの氣宇を有するを要す。此の四項は、從來の國民の短所としたる所にして、而して將來の國民的發展の爲に、必ず缺くことを得ざる、最も重要な資格なるが故に、學制の運用は、此の重大なる教育を國民に施すを以て、其の要點と爲さざるべからず。帝國民の能力は之を他に比して劣等なるものに非ず却つて幾多の長所を有せり。國民道德に無比の美點を有するは勿論、外國の文明を理解し應用するに敏なるが如き、美術工藝に秀でたるが如き、皆以て將來益々發達せしむるを要する長所とす。然れども、獨立の判斷、事實上の研究、飽くまで眞理を追求して、努力を止めず、發見發明の上に、獨創の價値を發揮することに至りては、是れ實に一般國民性の短所とせざるべからざる所にして、帝國文明に獨創の要素少く、學術上殆ど誇るに足るべき新見なきは、之に基く。是れ獨立文明國として立ち、且つ世界に向つて文明的貢獻を爲すが爲に、極めて憂ふべき缺點なるが故に、將來の教育は、特に此の缺點を補ふに努力することを要す。而して此の缺點を補ふの道は他なし。唯自學自習の方針によりて、自發活動性を涵養するに在るなり。

學制完全にして、學校の教育力十分なるも、猶社會的要素の重大なる障害を爲し、學制學校をして、其の効果を十分ならしめざるものなきに非ず。故に吾人は種々の社會的事象に就いて要求を呈出せり。而して中に就いて、文字の改善を以て其の主たるものと爲す。蓋し文字は思想の發達、日常の事務の上に緊密なる關係を有すること空氣の如く、水の如く、其の便否の影響は、實に思想の外に出づ。我が教育の障害中、文字の困難なるは、蓋し最も重大なる者の一なり。故に吾人は之に就いて又屢々言を費せり。蓋し文字の問題は啻に教育上の問題たるのみに止まらず、實に國民生活上の一大問題ならざらばならず。吾人はこれに就いて朝野舉りて考慮を煩はさんことを望まざるを得ずなり。

四

帝國の教育、改善すべきもの決して以上に限るに非ず。吾人の所思亦以上に盡きたるに非ず。加ふるに、究めて到らず、述べて精しからず、遺漏甚だ多しと雖も、唯刻下の喫緊事とする所に就き、略々其の概要を挙げ得たりと信ず。

右に述ぶるの要旨所は是れ實に吾人が三十年來懷抱し來れる所にして、爾來之を實地の教育上に驗し、又之を世の識者學者の意見に徴し又之を歐米實地の教育に觀て、略々其の誤なきを確め得たるものに繋る。而して今遽に平生所見の概要を摘んで、以て之を鉛槧に附するものは、時勢の進轉に際會し、帝國前途の使命に顧み、教育改善の機甚だ急迫せるものあるを信ずるが故なり。吾人は此を以て必ずしも完全無缺の改善案として、強ひて人に勸むるものに非ず。唯帝國の發達、國民の教育に關し同憂の士に呈して其の研究を請ひ、又自ら事實の上に實驗研究を重ね、共に力を協せて、更に完璧の教育法を得るの一參考案件となさんと欲するのみ。教育は私事に非ず、實に一國の公事なり。

要する所は、斯國を興し、文明に貢獻し、人類の福祉を進めんが爲に、最善の道を發見するに在るなり。

(大正三年一月出版)